松江市文化財調査報告書　第121集

岩汐窯跡発掘調査報告書

平成21(2009)年3月

松江市教育委員会

財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書　第121集

岩汐窯跡発掘調査報告書

平成21(2009)年3月

松江市教育委員会

財団法人松江市教育文化振興事業団

中海大橋から岩汐窯跡を望む（南東から）

岩汐ため池　調査前（東から）

岩汐窯跡　調査前　水が抜けて現れたSX01（南東から）

SX01近景　須恵器の破片と窯壁片の山（西から）

例　言

1．本書は、島根県松江農林振興センター（現島根県松江県土整備事務所）の依頼を受けて、松江市教育委員会と財団法人松江市教育文化振興事業団が平成18年度に実施した、ため池整備事業（岩汐池）に伴う岩汐窯跡発掘調査の報告書である。

2．本発掘調査地は、島根県松江市大井町75、128、128-1、129-2に所在する。

3．調査は、平成18年10月20日～平成19年3月23日にかけて行った。調査面積は2,536㎡を測る。

4．調査組織は次のとおりである。

依頼者　　島根県松江農林振興センター（現島根県松江県土整備事務所）

主体者　　松江市教育委員会

［平成18年度］（発掘調査）

事務局	松江市教育委員会		
	〃	教育長	福島　律子
	〃　文化財課	参　事	岡崎雄二郎
	〃　〃　調査係	係　長	飯塚　康行
	〃　〃　〃	主　任	後藤　哲男
調査機関	財団法人松江市教育文化振興事業団		
	〃	理事長	松浦　正敬
	〃	専務理事	長野　正夫
	〃	事務局長	松浦　克司
	〃　埋蔵文化財課	課　長	廣江　眞二
	〃　〃　調査係	係　長	瀬古　諒子
	〃　〃　〃	調査員	落合　昭久（調査担当者）
	〃　〃　〃	調査補助員	秦　愛子

［平成20年度］（報告書作成）

事務局	松江市教育委員会		
	〃	教育長	福島　律子
	〃	理　事	友森　勉
	〃　文化財課	課　長	吉岡　弘行
	〃　〃　調査係	係　長	飯塚　康行
	〃　〃　〃	主　任	後藤　哲男
調査機関	財団法人松江市教育文化振興事業団		
	〃	理事長	松浦　正敬
	〃	専務理事	中島　秀夫（平成20年10月15日まで）
	〃	事務局長	松浦　克司
			（10月16日から専務理事事務代行）

調査機関　財団法人松江市教育文化振興事業団

埋蔵文化財課			課　長	廣江　眞二
〃	〃		課長補佐	錦織　慶樹
〃	〃		主　幹	中尾　秀信
〃	〃	調査係	調査員	落合　昭久
〃	〃	〃	調査補助員	秦　愛子

5．現地調査および報告書の刊行に当たっては、以下の方々に有益なご指導、ご教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略、順不同）

大橋泰夫（島根大学法文学部）、白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）、大谷晃二（島根県立矢上高等学校）、勝部智明（島根県教育庁文化財課）、池淵俊一（島根県教育庁文化財課）、角田徳幸（島根県立古代出雲歴史博物館）、内田律雄（島根県埋蔵文化財調査センター）

6．本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海抜標高を示す。

7．本書で使用した遺構番号は以下のとおりである。

ＳＸ … その他遺構（性格不明遺構）

8．本書の土器区分は、須恵器を出雲編年[1]、高広編年[2]に従って区分した。

9．本文、挿図、図版の遺物番号はそれぞれ対応する。

10．本書に記載した遺物の実測、浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。

（実測）　秦　愛子　松尾澄美　善家幸子

（浄書）　松尾澄美　小原明美　飯野正子　秦　愛子

11．本書に記載した現場写真は秦、落合が撮影し、遺物写真は落合が撮影した。

12．本書の執筆は、第１章 調査に至る経緯を松江市教育委員会（後藤哲男）、第３章 調査の経過と方法を落合、その他を秦が行なった。

なお、第５章 自然科学分析は、白石 純 氏（岡山理科大学自然科学研究所）にお願いして執筆頂いた。

13．本書の編集は、秦が行なった。

14．出土遺物、実測図面、写真等は松江市教育委員会で保管している。

註

1）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会（1994）

2）島根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」『和田団地造成工事に伴う発掘調査』（1984）

目　次

巻頭図版

例言

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2

第３章　調査の経過と方法 …… 5

第４章　発掘調査の成果 …… 7

　第１節　確認調査…… 7

　第２節　岩汐１号窯・２号窯…… 14

　第３節　その他の遺構…… 22

第５章　自然科学分析…… 99

　岩汐窯跡ほか出土須恵器の胎土分析（岡山理科大学自然科学研究所　白石 純） …… 99

第６章 まとめ …… 111

　第１節　器台形土器…… 111

　第２節　出土須恵器の年代観について…… 112

　第３節　大井窯跡群内における岩汐窯跡の位置付け…… 112

遺物観察表 …… 117

図版

抄録

挿図目次

第１章

第１図　島根県・松江市位置図

第２章

第２図　岩汐窯跡位置図

第３図　周辺の遺跡分布図

第３章

第４図　ため池整備事業工事範囲図

第５図　調査グリッド図

第４章

第６図　岩汐窯跡調査区全体図

第７図　Ｔ－１平面図・土層断面図

第８図　Ｔ－１出土遺物

第９図　Ｔ－２平面図・土層断面図

第10図　Ｔ－２出土遺物

第11図　Ｔ－４土層断面図

第12図　Ｔ－４池堆積土出土遺物

第13図　１号窯窯体断面図

第14図　１号窯断面出土遺物

第15図　１号窯下崩落窯壁片平面図・土層断面図

第16図　１号窯下崩落土内出土遺物

第17図　２号窯窯体断面図

第18図　２号窯下出土遺物

第19図　SX01平面図・土層断面図

第20図　SX01調査前採集遺物①

第21図　SX01調査前採集遺物②

第22図　SX01池堆積土出土遺物

第23図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物①

第24図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物②

第25図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物③

第26図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物④

第27図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物⑤

第28図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物⑥

第29図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物⑦

第30図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物⑧

第31図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物①

第32図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物②

第33図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物③

第34図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物④

第35図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物⑤

第36図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物⑥

第37図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物⑦

第38図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物⑧

第39図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物⑨

第40図　SX01Ⅱ暗茶褐色土出土遺物①

第41図　SX01Ⅱ暗茶褐色土出土遺物②

第42図　SX01Ⅲ黒褐色土出土遺物

第43図　SX01Ⅳ灰色粘質土出土遺物

第44図　SX01Ⅴ黒灰色土出土遺物

第45図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物①

第46図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物②

第47図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物③

第48図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物④

第49図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物⑤

第50図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物⑥

第51図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物⑦

第52図　SX02平面図

第53図　SX03平面図・土層断面図

第54図　SX03出土遺物

第55図　SX04平面図・土層断面図

第56図　SX04出土遺物

第57図　１号窯下～SX01間土層断面図

第58図　Ａ－11～14各土層断面図

第59図　Ａ－11～14褐色土出土遺物①

第60図　Ａ－11～14褐色土出土遺物②

第61図　Ａ－11～14黒色土出土遺物

第62図　Ｃ・Ｄ区黒色土出土遺物①

第63図　Ｃ・Ｄ区黒色土出土遺物②

第64図　Ｅ区出土遺物

第65図　堤体掘削時黒色土出土遺物

第５章
第66図　胎土分析試料遺跡位置図
第67図　窯跡別の胎土比較
第68図　窯跡別の胎土比較
第69図　消費地遺跡出土須恵器の産地推定(1)
第70図　消費地遺跡出土須恵器の産地推定(1)
第71図　消費地遺跡出土須恵器の産地推定(2)
第72図　消費地遺跡出土須恵器の産地推定(2)
第73図　実体顕微鏡写真(1)
第74図　実体顕微鏡写真(2)
第75図　胎土分析試料遺物(1)
第76図　胎土分析試料遺物(2)
第６章
第77図　出雲2期に該当する遺物①
第78図　出雲2期に該当する遺物②
第79図　器台形土器

写真図版目次

巻頭図版１　中海大橋から岩汐窯跡を望む
　　岩汐ため池　調査前
巻頭図版２　岩汐窯跡　調査前　水が抜けて現れたSX01
　　SX01近景　須恵器の破片と窯壁片の山

図版１　中海大橋から岩汐窯跡を望む
　　岩汐窯跡調査前全景［１］
　　岩汐窯跡調査前全景［２］
図版２　西側谷奥（T－１・２）調査前
　　T－１調査前
　　T－１調査後
図版３　T－１土層断面
　　T－１黒灰色土検出状況
　　T－２調査前
図版４　T－２調査後
　　T－２土層断面
　　T－３調査前
図版５　T－３調査後
　　T－４北側土層断面
　　T－４調査後
図版６　１号・２号窯遠景
　　１号・２号窯
図版７　１号窯と崩落した窯壁塊
　　１号窯［1］
図版８　１号窯［2］
　　１号窯近景
図版９　１号窯床面接写［1］
　　１号窯床面接写［2］
　　１号窯床面接写［3］
図版10　１号窯下崩落窯壁検出状況
　　１号窯下崩落窯壁畦除去後
　　１号窯下崩落窯壁接写
図版11　２号窯［1］
　　２号窯［2］
図版12　２号窯西半分
　　２号窯東半分
図版13　SX01調査前
　　SX01須恵器散乱状況
　　SX01土層断面a－a'・b－b'Ⅰ黒色土
図版14　SX01土層断面a－a'・c－c'Ⅱ暗茶褐色土
　　SX01土層断面a－a'・b－b'
　　Ⅰ黒色土・Ⅳ灰色粘質土
　　SX01土層断面b－b'Ⅰ黒色土・Ⅳ灰色粘質土

図版15　SX01区画溝完掘後
SX01完掘後
SX01完掘後
図版16　SX02遠景
SX02
SX03黒色土検出状況
図版17　SX04検出状況
SX04完掘後
１号窯～SX01土層断面
図版18　北東側調査前
Ａ－４、Ｂ－４・５、Ｃ－３～５完掘後
Ｄ－３・Ｅ－３完掘後
図版19　Ｃ－４・５、Ｄ－４・５完掘後
Ｃ－６・７完掘後
Ｅ－１完掘後
図版20　Ｅ－２・Ｄ－２完掘後
東側調査後遠景
Ａ－11～14調査前
図版21　Ａ－11～12土層断面
Ａ－12～13土層断面
Ａ－11完掘後
図版22　Ａ－12・13完掘後
Ａ－14完掘後
調査区完掘後
図版23　Ｔ－１・２出土遺物
Ｔ－４池堆積土出土遺物
１号窯断面出土遺物
１号窯下崩落土内出土遺物
図版24　１号窯下崩落土内出土遺物
２号窯下出土遺物
図版25　SX01調査前採集遺物
図版26　SX01調査前採集遺物
SX01池堆積土出土遺物
図版27　SX01池堆積土出土遺物
SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物
図版28　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物
図版29　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物
図版30　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物
図版31　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物
図版32　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物
図版33　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物
図版34　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物
図版35　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物
図版36　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物
図版37　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物
図版38　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物
図版39　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物
図版40　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物
図版41　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物
図版42　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物
図版43　SX01Ⅱ暗茶褐色土出土遺物
図版44　SX01Ⅲ黒褐色土出土遺物
SX01Ⅳ灰色粘質土出土遺物
図版45　SX01Ⅴ黒灰色土出土遺物
図版46　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物
図版47　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物
図版48　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物
図版49　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物
図版50　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物
図版51　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物
SX03出土遺物
SX04出土遺物
図版52　SX04出土遺物
Ａ－11～14褐色土出土遺物
図版53　Ａ－11～14褐色土出土遺物
Ａ－11～14黒色土出土遺物
図版54　Ａ－11～14黒色土出土遺物
Ｃ・Ｄ区黒色土出土遺物
図版55　Ｃ・Ｄ区黒色土出土遺物
Ｅ区出土遺物
図版56　Ｅ区出土遺物
堤体掘削時黒色土出土遺物

第１章　調査に至る経緯

島根県松江農林振興センター（現島根県松江県土整備事務所）により計画された、ため池等整備事業岩汐地区（岩汐池）は、既存するため池の堤体を改修する工事及びため池の浚渫を行ない、貯水量の増大を図るものである。

この計画に伴い、島根県松江農林振興センターから松江市教育委員会文化財課に対して分布試掘調査依頼書が提出された。

これを受けて文化財課では、堤体改修予定地の試掘調査を平成18年２月16日に実施した。

試掘調査の結果、遺跡は確認されず、堤体改修工事には問題ないものとしたが、ため池の浚渫工事については周知の遺跡、岩汐窯跡の範囲内であり、文化財保護法上協議が必要との回答を行なった。

協議の結果、ため池改修事業による貯水量の増大は近隣の農業振興にとって必要な事業であり、また、既存のため池を改修するものであるため、計画変更は困難であるとの結論に達し、事前に発掘調査を行なうこととなった。

発掘調査の実施期間は平成18年10月20日から平成19年３月23日である。

第１図　島根県・松江市位置図

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

岩汐窯跡（1）は松江市大井町に所在する。遺跡の東側一面には中海が広がり、南側には西から大橋川が流れ込んでいる。この中海の水際から700ｍほど西に入り込んだ山の谷間に本遺跡は存在している。現在は、遺跡の裾に広がる水田の農地水源のため池として整備されているが、遺跡が機能していた当時は、東側の中海に向かって開口する大きな谷になっていたようである。

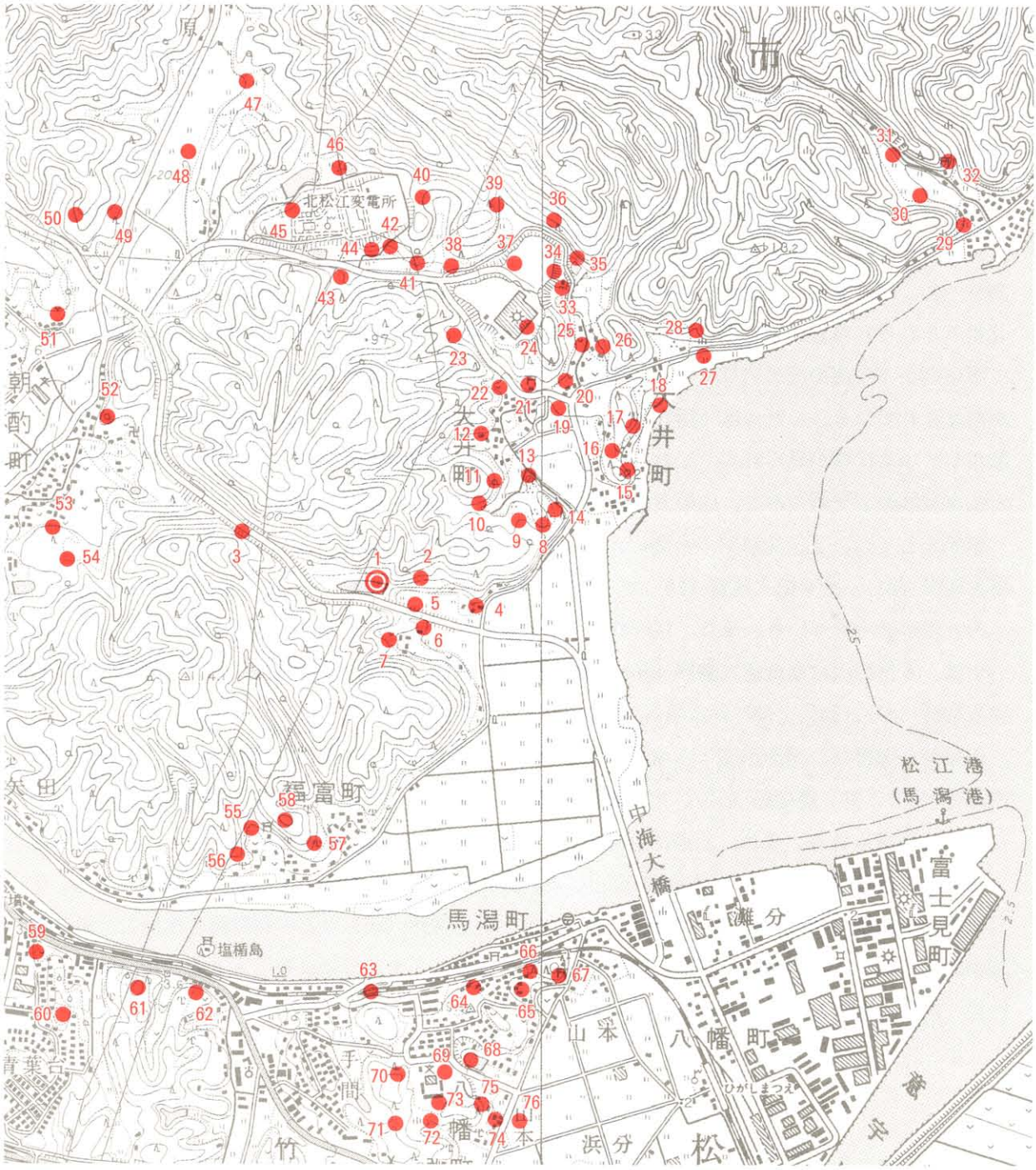
本遺跡周辺には数多くの遺跡が確認されているが、中でも古墳時代の遺跡が最も多く存在する。この大井町という土地は、古墳時代を主とし、奈良時代にかけての須恵器の一大生産地として名を馳せ、当時の須恵器窯の痕跡は現代にも残っている。このような立地を背景に当時の須恵器窯の一角を担う遺跡として本遺跡は存在していたものである。

縄文時代　近辺で確認されている遺跡は少ないが、縄文土器が出土した朝酌荒神谷遺跡（47）、イガラビ遺跡や、大井町集落の北側にある九日田遺跡（19）などが知られる。九日田遺跡は、どんぐりの貯蔵穴が検出されており、この地域の縄文時代を知る上で貴重な遺跡となっている。大橋川以南では、縄文土器が散布し集落跡の可能性が考えられる、さっぺい遺跡（76）などが知られている。

弥生時代　大井から馬潟にかけて中海周辺に広がる弥生時代の遺跡は、弥生土器、鉄製品、石斧などが出土している角森遺跡（66）などが知られる。

古墳時代　岩汐窯跡の東側近辺には、後廻田遺跡（2）、岩汐遺跡（5）、岩汐南遺跡（6）、蛇貫谷遺跡（7）など、須恵器散布地として知られている遺跡が集中する。実際にこの辺りを歩いているだけでも須恵器片を容易に見つけ出せるような状態で、至る所に無造作に破片が落ちている。これらは岩汐窯跡の影響も少なからずあると思うが、いかにこの辺り一帯に須恵器生産が浸透していたかを物語るものである。また、須恵器片だけではなく土師器等も出土しており、人々の生活の痕跡を

第２図　岩汐窯跡位置図（Ｓ＝１：80,000）



1 岩汐窯跡
2 後廻田遺跡
3 岩汐峠遺跡
4 ババタケ窯跡
5 岩汐遺跡
6 岩汐南遺跡
7 蛇貫谷遺跡
8 山巻Ｂ遺跡
9 廻谷窯跡
10 後平横穴墓群
11 前平古墳群
12 寺尾窯跡
13 山巻古墳
14 山巻Ａ遺跡
15 イズキ山古墳群
16 大井向山古墳
17 伊崎遺跡
18 ジャバミ遺跡
19 九日田遺跡
20 大井神社境内遺跡
21 大井の池遺跡
22 井ノ奥遺跡
23 山ノ奥遺跡
24 岩崎遺跡
25 赤坂遺跡
26 大谷遺跡
27 山津窯跡
28 山津遺跡
29 唐干窯跡
30 木ノ谷遺跡
31 古屋敷遺跡
32 十二所神社境内遺跡
33 池ノ奥Ｃ遺跡
34 池ノ奥古墳群
35 池ノ奥窯跡群
36 池ノ奥Ａ遺跡
37 イガラビ古墳群
38 焼山遺跡
39 明曽窯跡
40 勝田谷窯跡
41 岩穴平遺跡
42 薦沢Ｂ遺跡
43 薦沢野山遺跡
44 別所古墳
45 薦沢Ａ遺跡
46 別所遺跡
47 朝酌荒神谷遺跡
48 鈩田遺跡
49 九日宮古墳群
50 遅倉横穴墓群
51 廻原古墳群
52 朝酌上神社跡古墳群
53 朝酌岩屋古墳
54 天井遺跡
55 福富神社境内遺跡
56 明事山古墳
57 阿弥陀寺古墳
58 阿弥陀寺裏山古墳群
59 荒神畑古墳
60 井ノ奥古墳群
61 手間古墳
62 岩舟古墳
63 灘山古墳
64 高橋遺跡
65 Ａ25遺跡
66 角森遺跡
67 高良後古墳
68 観音寺遺跡
69 観音寺古墳群
70 若宮山古墳
71 菩提寺古墳
72 其神遺跡
73 其神古墳
74 屋敷山遺跡
75 Ａ23遺跡
76 さっぺい遺跡

第３図　周辺の遺跡分布図（Ｓ＝１：25,000）

も見出すことが出来る。

岩汐窯跡の谷から見て北東側には、南に突出する尾根があり、その西側においては大井町の集落が広がる。この集落を取り囲むようにして須恵器窯跡、古墳が造られ、その合間を縫うような形で、至る所に須恵器散布地が確認されている。この流れは尾根を伝って北西方向にも波及しており、この辺り一帯は古墳時代に須恵器窯が造られ始める時期と併行して、古墳も急増する傾向にある。

まず須恵器窯から見ていくと、岩汐窯跡からほぼ真東に約300m向かった所に存在するババタケ窯跡（4)、尾根を挟んだ北側の大井集落西側に存在する廻谷窯跡（9)、寺尾窯跡（12)、大井集落北側のそれぞれ単独の谷に存在する池ノ奥窯跡群（35)、明曽窯跡（39)、勝田谷窯跡（40)、そして東に向かう中海沿線に位置する山津窯跡（27)、唐干窯跡（29）と、岩汐窯跡を含め９つの窯跡が確認されている。これらは一括して大井窯跡群と呼称され、窯体、灰原や須恵器の破片が相当数散布している状態が見られる。なお、この中で本格的な発掘調査が実施されたのは、池ノ奥窯跡群と山津窯跡の２ケ所のみで、他の窯跡は分布調査や踏査のみによって確認されたものである。

墓域としては、上記窯跡群の合間に点在するような形で、６世紀代に大井向山古墳（16)、池ノ奥古墳群（34)、後平横穴墓群（10）が、７世紀代にイガラビ古墳群（37)、別所古墳（44）など多くの古墳が造られている。また、窯跡群からやや離れた、尾根を越えた西側（現在の朝酌町）においては、６世紀代に遅倉横穴墓群（50)、廻原古墳群（51)、朝酌岩屋古墳（53）、７世紀代に九日宮古墳群（49)、朝酌上神社跡古墳群（52)、などが造られる。

その他の遺跡は、須恵器窯と古墳群に囲まれるような形状で、ジャバミ遺跡（18)、大井神社境内遺跡（20)、井ノ奥遺跡（22)、大谷遺跡（26)、山津遺跡（28）などの須恵器散布地が平地部分に集中して見られる。また、北西部分に位置する明曽窯跡（39)、勝田谷窯跡（40）の南側にも池ノ奥Ａ・Ｃ遺跡（36・33)、焼山遺跡（38)、薦沢野山遺跡（43）などいくつもの須恵器散布地、そして岩穴平遺跡（41)、薦沢Ａ・Ｂ遺跡（45・42)、別所遺跡（46）などの建物跡を検出した集落遺跡が存在する。これらは須恵器窯と併行して存続しており、大井の須恵器工人との密接な関わりが色濃く映し出された遺跡である。

参考文献

岡崎雄二郎「原始・古代」『朝酌郷土誌』朝酌郷土誌編集委員会（2001）

島根県教育委員会『島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編)』(2003)

松江市教育委員会『松江市遺跡地図』(1991)

松江市教育委員会『池ノ奥A遺跡・池ノ奥窯跡群』(1990)

松江市教育委員会／財団法人松江市教育文化振興事業団『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』(2006)

松江市教育委員会『九日田遺跡発掘調査報告書』(2000)

松江市教育委員会『薦沢Ａ遺跡 薦沢Ｂ遺跡 別所遺跡』(1988)

第３章　調査の経過と方法

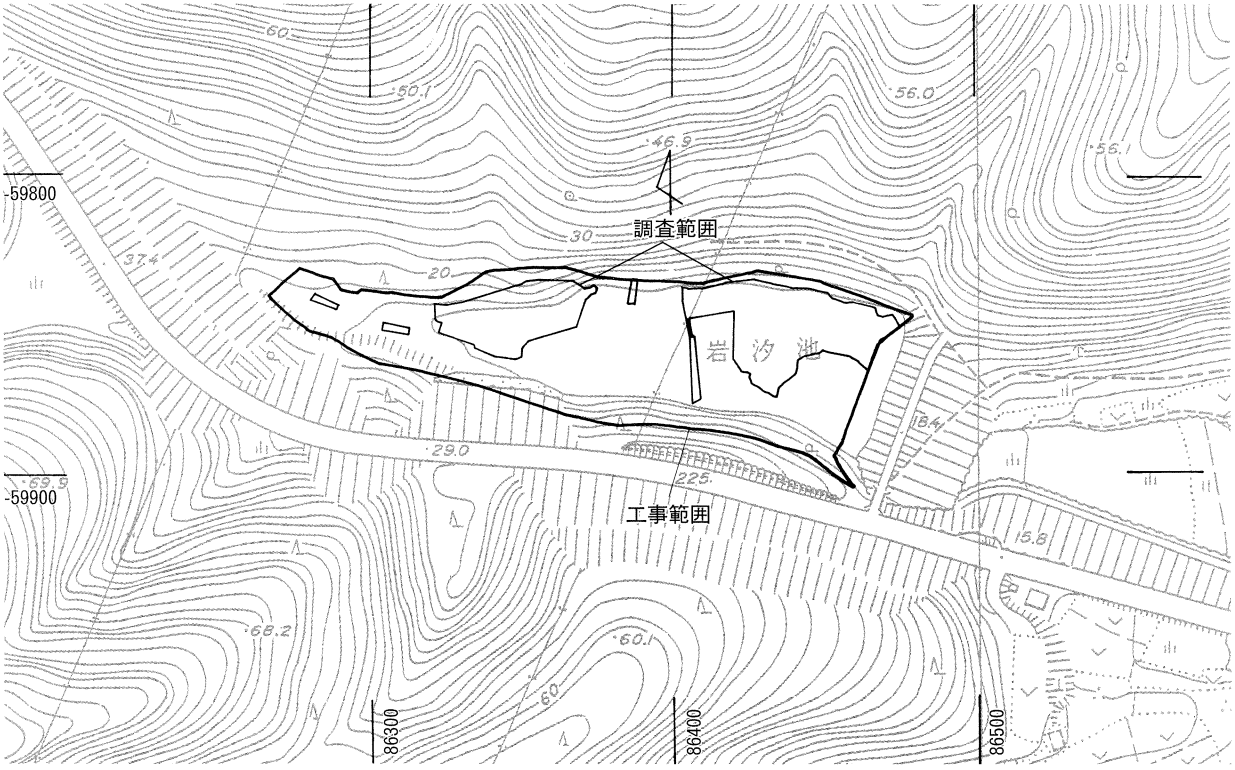
本調査は島根県松江農林振興センター（現島根県松江県土整備事務所）発注のため池整備事業に伴い行なったものである。ため池工事によって影響を受ける範囲は、堤体（堰）部分だけでなく、ため池底部及び縁部にも広がるものであった。工事で影響を受ける平面積は、約7,000㎡を測る。

発掘調査は、最初にトレンチ（Ｔ－１～Ｔ－４）を設定し、遺構及び遺物の有無を確認した上で、本発掘調査の範囲を確定することとした。この調査の結果、北西の谷奥のトレンチ（Ｔ－１・Ｔ－２）において、須恵器窯の一部痕跡と須恵器の遺物包含層を確認した。この場所は発注者との協議の結果、新設後のため池水位がここまでに及ばないよう、設計変更することとなった。このことから、北西の谷奥付近は本発掘調査を行なわない運びとなった。その他、Ｔ－３、Ｔ－４トレンチからは、遺構、遺物共に検出されなかったことより、これら付近の本発掘調査は行なっていない。なお、Ｔ－４トレンチの南端においては、地山の上にヘドロ状の堆積層が見られたことから、これから南の調査は取りやめることとなった。このヘドロ状の堆積層は遺物を包含していない。

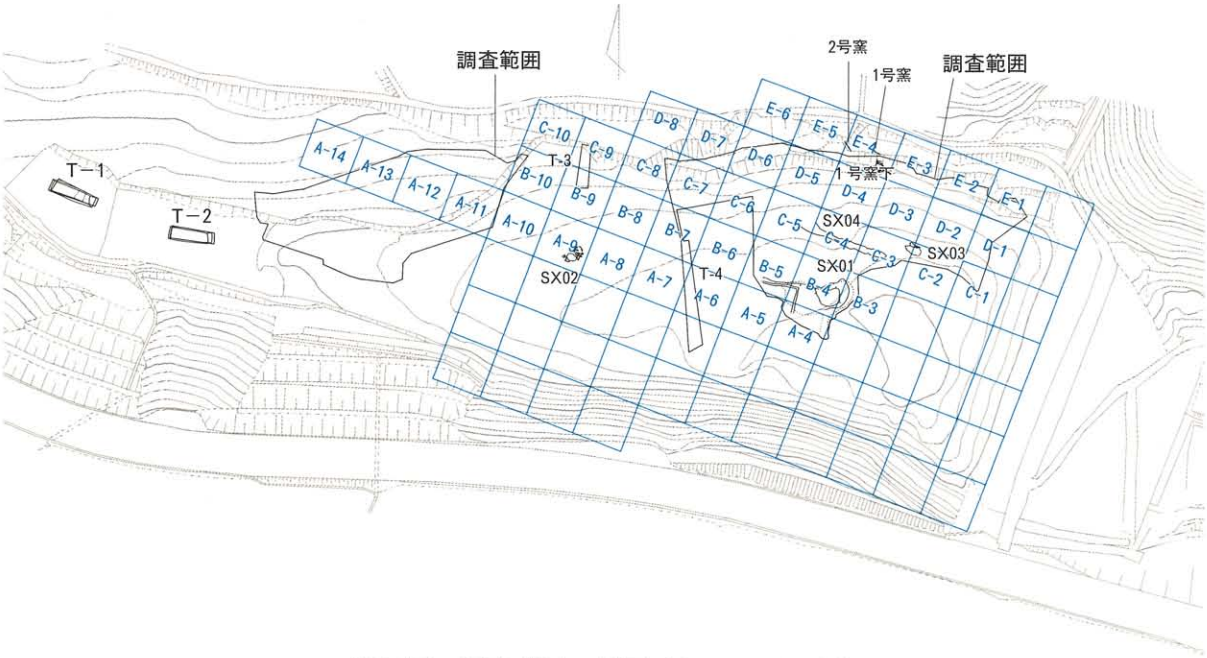
以上、確認調査の結果を踏まえ、本発掘調査の範囲を確定した。本発掘調査範囲は2,536㎡を測る。

なお、周知の遺跡である岩汐１号窯、岩汐２号窯は、新設後のため池の常時貯水レベル17.57ｍより高い位置に存在することから、発掘調査範囲外となっているが、露出する断面図の作成を行なっている。

調査における遺物の取り上げは、各遺構別の土層と調査区内に設定した10ｍ画のグリッドに従って行なった。グリッドの軸方向は国土座標系に準じない任意のものである。また、各土層、グリッ



第４図　ため池整備事業工事範囲図（Ｓ＝１：2,500）



第５図　調査グリッド図（Ｓ＝１：1,500）

ド内の遺物は、一部をトータルステーションで出土地点を記録し、遺構に伴わないものは一括して取り上げている。

記録写真は、遺構写真に６×７判一眼レフを主に、35㎜判一眼レフを補助に用い行なった。各判共にカラーリバーサル、モノクロフィルムで、35㎜判にはカラーネガフィルムを入れ、撮影を行なった。また、遺物写真は、35㎜デジタル一眼レフに、６×７判一眼レフを併用し、デジタルデータ（JPEG）とカラーリバーサル、モノクロフィルムで保存している。

第４章　発掘調査の成果

岩汐窯跡は、須恵器窯が断面露出という状態で発見された、周知の遺跡である。本遺跡周辺は昭和17年に農地用水確保のため池が造られ、そのための大幅な工事が行なわれた。これにより、谷の北側斜面に存在していたであろう須恵器窯の大半は消滅したと思われ、現在では、本稿で触れる岩汐１号窯・岩汐２号窯の断面露出を確認出来るのみである。

本調査は、残存する須恵器窯の断面観察と、ため池内の須恵器窯に関連する遺物の採取を目的に行なった。

調査の結果、明確な遺構を見つけることは出来なかったが、須恵器窯に関する黒色土の灰原層を確認した。後述するが、この黒色灰原層の全ては、ため池造成時の掘削によって人為的に動かされたものである。よって、本報告の大部分は遺物を中心に行なうものであることを理解して頂きたい。掲載遺物は703点を数えるが、これは本調査出土遺物の中でもほんの一部である。可能な限り持ち帰った遺物総数はコンテナ370箱、点数にして約５万２千点に上り、この中から器種ごとの代表的なもの、特筆すべきものを掲載しているが、全てを網羅出来なかったことをここに明記しておく。

以下、各遺構、遺物について順に記す。

第１節　確認調査

トレンチＴ－１・２を設定したのは調査区最西部、谷の奥まった部分である。周辺は竹を主とした雑木で覆われており、長い年月、水が溜まっていた状況が感じ取られた。

調査は、この谷奥の遺構有無を確認するために行なった。

１．Ｔ－１（第６・７図）

Ｔ－１は、東西方向に長い10×2.5ｍの範囲に設定したトレンチである。現地表面から約90㎝掘り下げた位置から、須恵器窯の一部と地山を確認した。以下、土層順に詳細を記す。

１～５層までは粘質土の層が続き、その下に、幅約1.5ｍの７層（黒灰色土）を検出した。７層は非常に硬く、黒さが際立つもので、須恵器窯の還元層の一部として認識している。断面は両端がわずかに上がり、レンズ状を呈する。また、平面でも同位置に黒灰色面が見られたことから、７層は平面的に広がりを持つものと考えられる。７層からは須恵器片・窯壁片が出土している。

７層は、硬く焼き締められたような状態であった。窯のどの部分に当たるか正確なことは言えないが、窯体の一部分を検出した可能性は高いと考える。元位置を留める窯であるかなどの詳細は分からないが、現時点では窯の一部分と考え、この７層の痕跡を、岩汐５号窯と呼称しておく[1]。

Ｔ－１　出土遺物（第８図）

【須恵器】

坏蓋（第８図１）

８－１の天井部は大きく歪んでいるが、器高は高かったであろうと推測する。回転ヘラ削りは丁寧で、単位も均一に施されている。全体的に厚手の作りで、肩部は緩やかに屈曲し、明確な沈線を

2条廻らす。口縁端部内面には、やや高い位置に薄い段が付く。出雲3～4期[2]のものと考える。

坏身（第8図2・3）

8－2・3は立ち上がりが低く、強めに内傾する。坏部は丸みを持ち、平底を呈する。また、回転ヘラ削りが浅く雑なものになってきており、出雲3～4期内、より4期に近づくものと考える。

2．T－2（第6・9図）

T－1から東へ16mの位置に、東西方向に長い9×2.5mのトレンチを設定した。ここでは、T－1のような須恵器窯（岩汐5号窯）の一部を見つけることは出来なかったが、2層（灰褐色土）と5層（黒褐色土）の遺物包含層が見られた。これはT－1と同様、谷奥北側斜面（開発範囲外）などに窯の存在を確定付ける好資料と言える。後述する黒色灰原層（SX01など）ほどの撹乱は受けていない土層の堆積であり、元来この場所にあった黒色灰原層の可能性が高いと考える。

T－2 出土遺物（第10図）

【須恵器】

坏蓋（第10図1）

10－1は口縁部小片の残存で、肩部の沈線1条、端部内面の高い位置に付く段から、出雲4期に位置付ける。

甕（第10図2）

10－2は甕の口縁端部のごくわずかな破片で、外内面に自然釉がかかる。

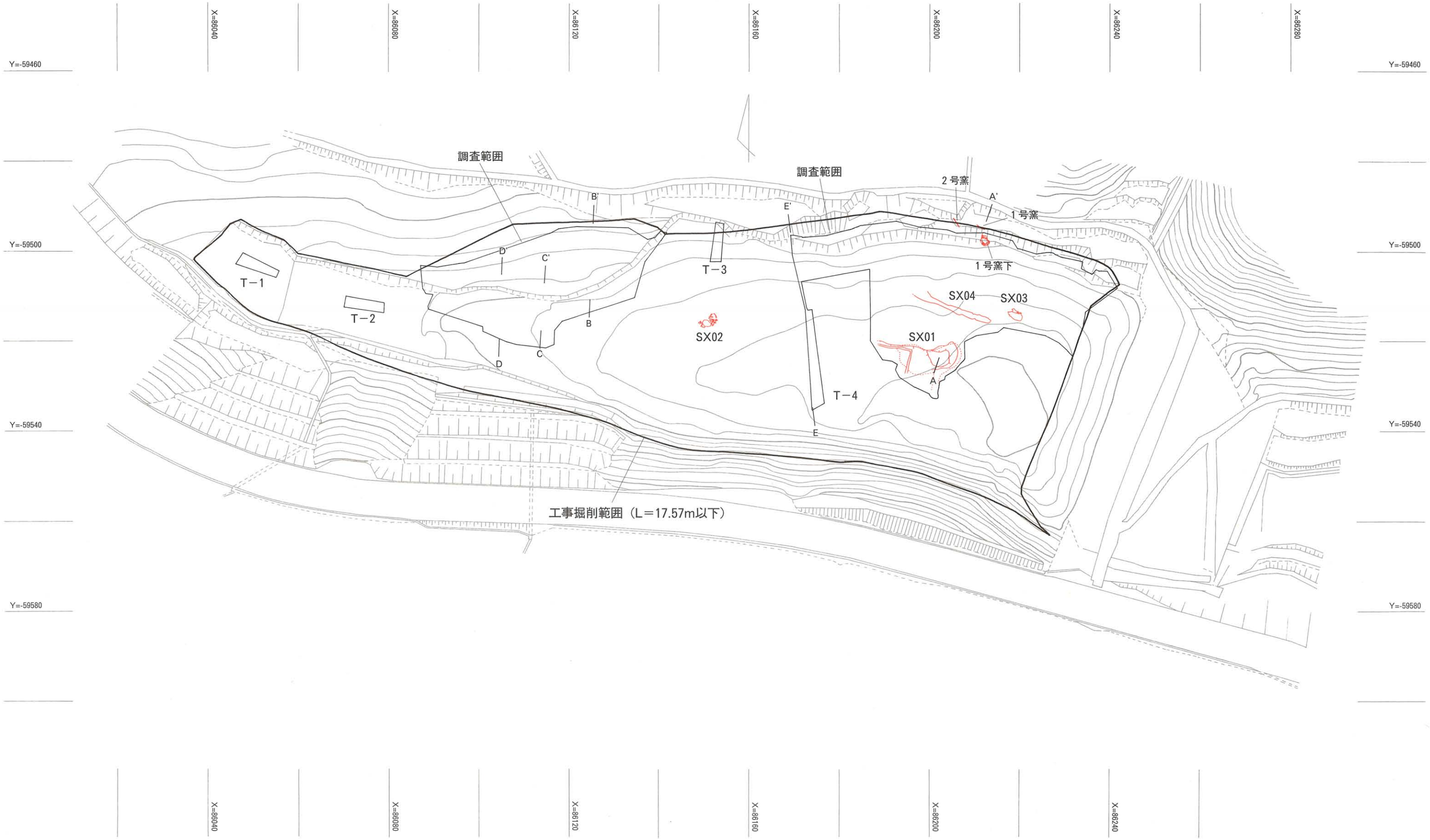
3．T－3（第6図）

T－3は、グリッドA－11区画から約15m東へ向かった北側斜面部分に、南北方向に長い9×2mのトレンチを設定した。T－3の設定場所の意図は、岩汐1・2号窯以西の北側斜面に、須恵器窯が存在しているかどうかを確認するためであったが、調査の結果、窯跡、遺物包含層ともに検出されなかった。よって、実測図等は省略している。

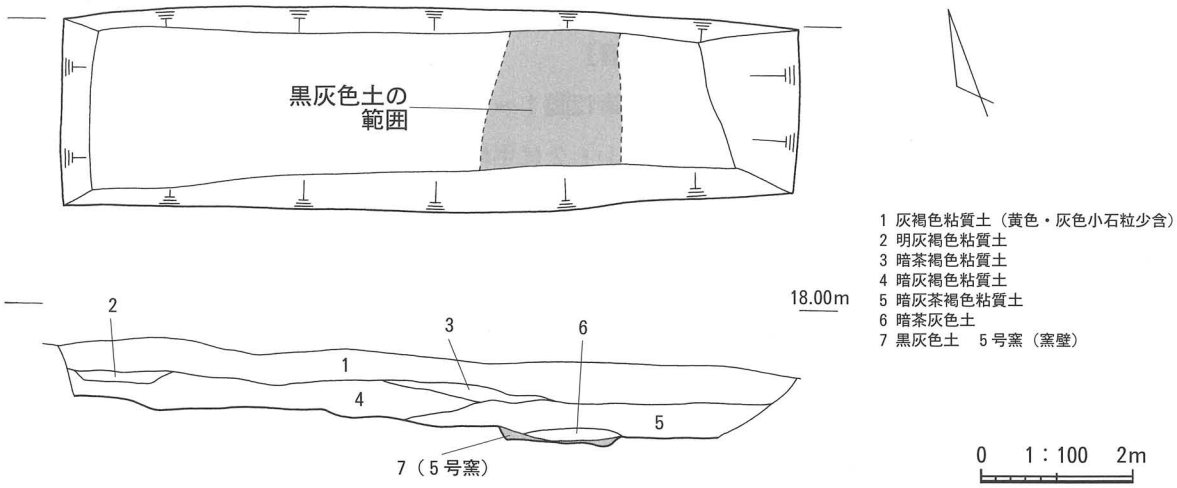
4．T－4（第6・11図）

T－4は、T－3の南東約30mのため池底面中央に、南北方向に長い22×2.5mで設定したトレンチである。後述するSX01・03・04は、ため池底面の東側にかたまって検出した黒色灰原層で、SX02は西寄りの底面上に存在している。この間の底面中央部分は、ヘドロが堆積し、詳細な調査が出来かねる状態だった。そこでトレンチを設定し、遺物包含層の有無を確認する調査を行なった。調査の結果、60～90cm掘り下げた時点で地山面が露出し、堆積土は1層（47層淡灰褐色土Ⅱ）のみであることを確認した。47層はヘドロが硬化したような土層で、須恵器片・窯壁片を包含していた。

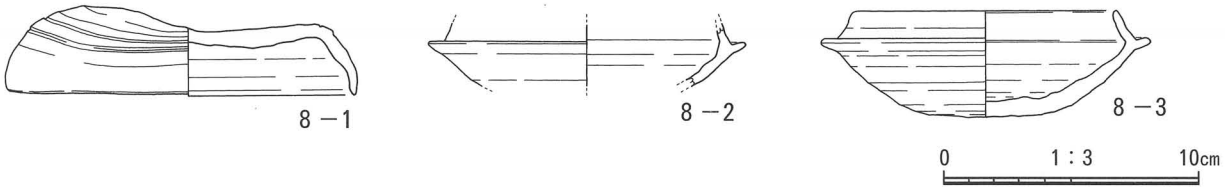
遺物は、須恵器の坏蓋、坏身、高台付坏、椀の把手、土馬、土師器の土製支脚などが出土している。



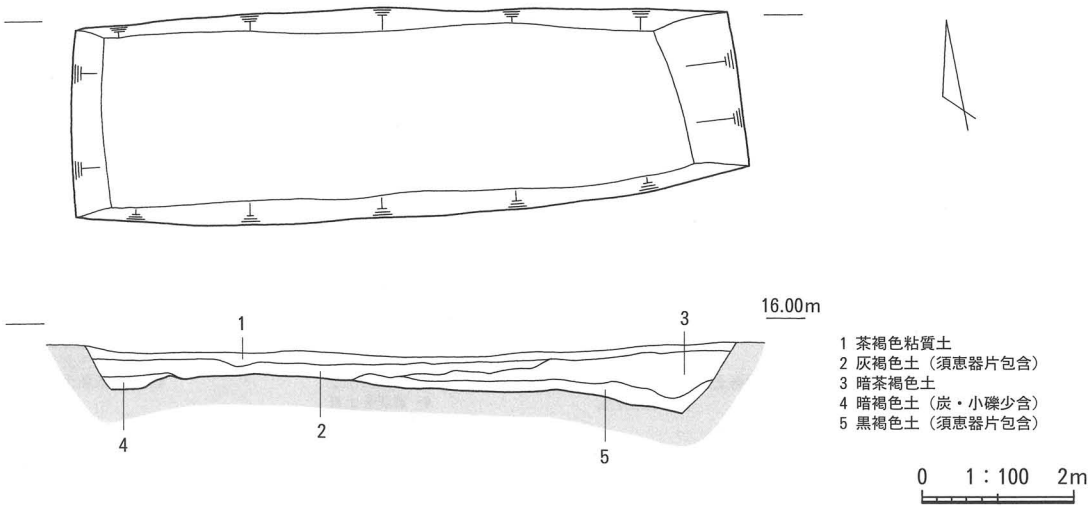
第6図　岩汐窯跡調査区全体図（S＝1：800）



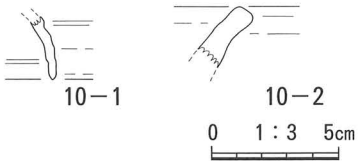
第7図　T－1平面図・土層断面図



第8図　T－1出土遺物



第9図　T－2平面図・土層断面図



第10図　Ｔ－２出土遺物

Ｔ－４池堆積土 出土遺物（第12図）

【須恵器】

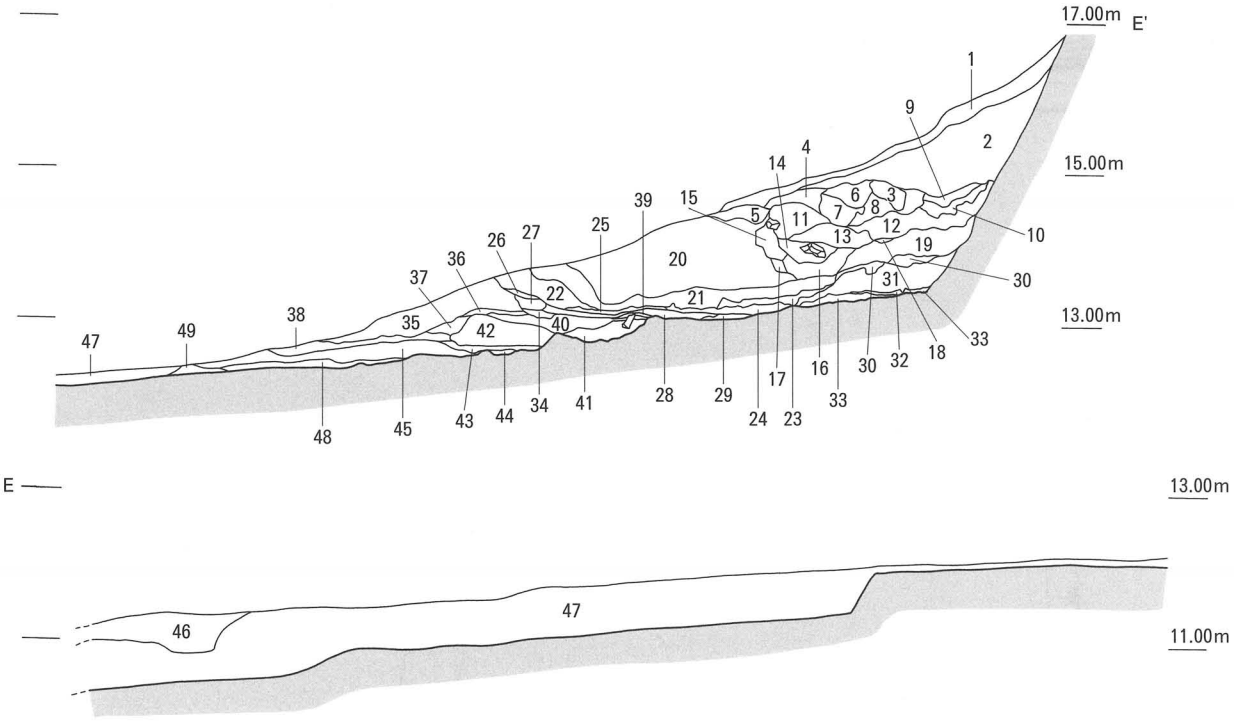
坏蓋（第12図１～４）

12－１・２は平坦な天井部を持ち、肩部で直角気味に屈曲する。12－１は、肩部と端部内面に明確な沈線を１条廻らし、12－２は、肩部に強いナデによる幅広の溝が見られ、口縁部は内湾し、端部は先細る。いずれも出雲３～４期に該当する。

12－３の天井部は4.7㎝と高く、ドーム状を呈する。肩部までは張らずに下り、口縁部は内湾気味で、ほぼ垂直に下りる。回転ヘラ削りがやや雑になってきており、出雲３～４期内、４期寄りのものと考える。12－４は天井部片の残存で、回転ヘラ削りは中心から丁寧に施されている。出雲３～４期に該当するものと考える。外面中央に、並行する２本線を書いたヘラ記号が線刻されている。

坏身（第12図５）

12－５は、立ち上がりが端部まで残存していないが、高くなるものと思われ、わずかに内湾する。坏部は浅いが膨らみを持ち、扁平な形状を呈する。底部の回転ヘラ削りは削りが深く、丁寧に施す。



1 茶褐色土
2 暗黄茶色土Ⅰ
3 黄褐色土
4 暗黄茶色土Ⅱ
5 淡灰茶色土Ⅰ
6 淡黄灰色土Ⅰ
7 褐色土、橙色土の混合土
8 暗黄褐色土
9 暗橙色土
10 明褐色土
11 黒灰色土
12 橙色粘質土Ⅰ
13 淡黄灰色土Ⅱ
14 黄灰色土Ⅰ
15 淡灰茶色土Ⅱ
16 淡黄灰色土Ⅲ
17 淡灰茶色土Ⅲ
18 暗褐色土
19 茶色土、橙色土の混合土Ⅰ
20 黄灰色土Ⅱ
21 茶色土、橙色土の混合土Ⅱ
22 暗茶色土Ⅰ
23 褐色土、茶色土の混合土
24 橙色土、明橙色土の混合土Ⅰ
25 暗茶色土Ⅱ
26 淡橙色土Ⅰ
27 橙色土
28 淡橙色土Ⅱ
29 灰茶色土、橙色土の混合土
30 明茶色土
31 橙色粘質土Ⅱ
32 茶色土、橙色土の混合土Ⅲ
33 橙色土、明橙色土の混合土Ⅱ
34 淡灰茶色土、橙色土の混合土Ⅰ
35 暗茶色土Ⅲ
36 橙色土、黄色土の混合土
37 淡灰茶色土、橙色土の混合土Ⅱ
38 暗灰褐色土
39 淡黒灰色土
40 黄灰色土Ⅲ
41 暗黄灰色土
42 灰茶色土、褐色土の混合土
43 灰茶色土Ⅰ
44 灰茶色土Ⅱ
45 淡灰茶色土Ⅳ
46 淡灰褐色土Ⅰ（池堆積土）
47 淡灰褐色土Ⅱ（池堆積土）
48 明茶灰色土Ⅰ
49 明茶灰色土Ⅱ

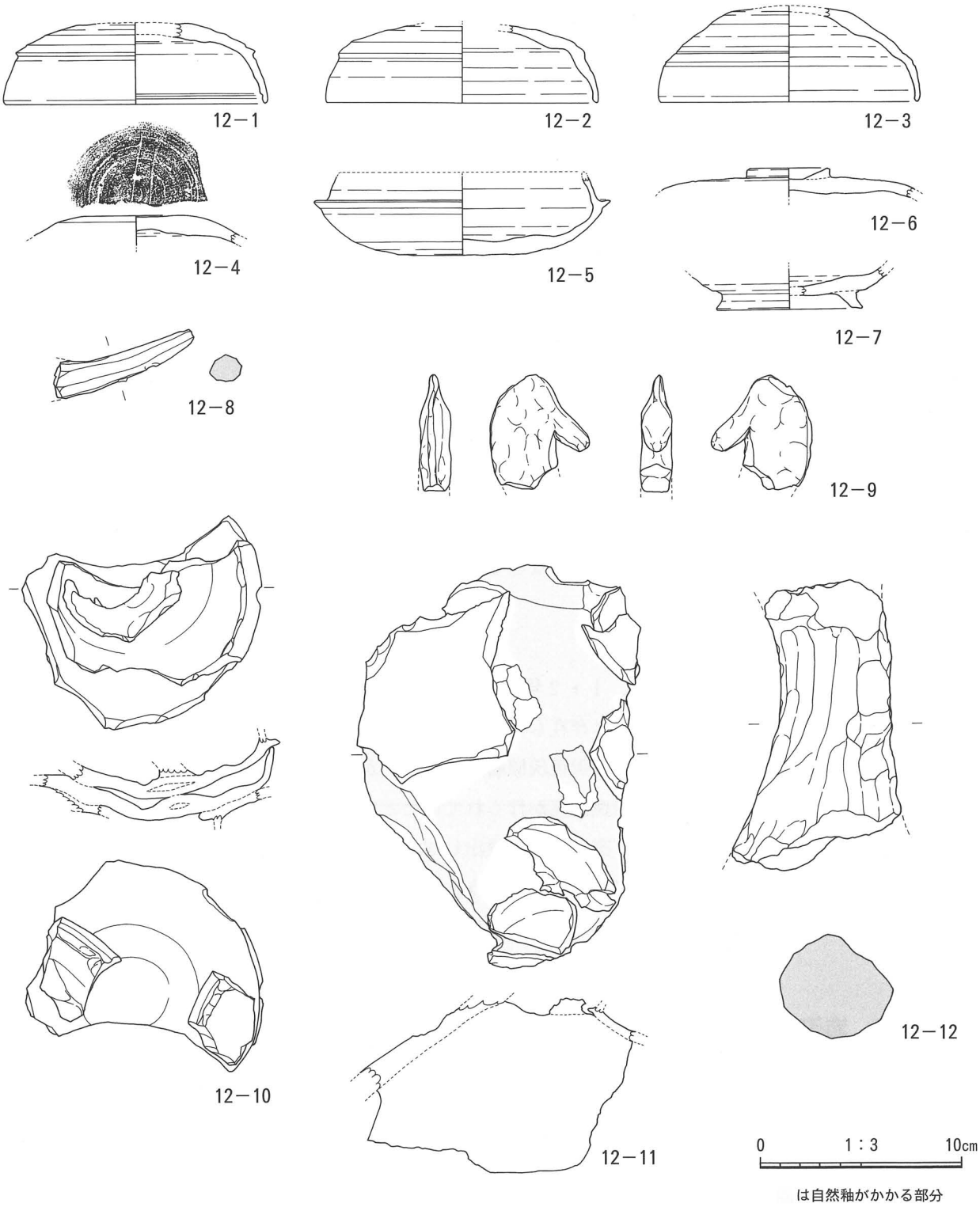
0　1：100　4m

第11図　Ｔ－４土層断面図

出雲２期のものと考える。

輪状つまみ蓋（第12図６）

12－６は、輪状つまみを持つ天井部片の残存である。つまみ径は4.0㎝を測り、低く直立する。出雲７～８期のものである。



第12図　Ｔ－４池堆積土出土遺物

高台付坏（第12図７）

12－７は高台付の底部片の残存で、高台は外側に引き伸ばすように突出し、接地する面は広い。出雲７～８期のものである。

椀（第12図８）

12－８は、長さ7.5㎝、直径1.6㎝を測る椀の把手である。直線状に伸び、均一な幅の面取りが９面に施される、丁寧な作りの把手である。椀が存在するのは出雲２～３期であることから、12－８もそれに準ずるものとする。

［土馬］（第12図９）

12－９は、土馬の頭部の破片である。厚さは1.5㎝を測り、扁平形を呈する。全体を指で押さえて造形、調整し、顔の部分は引き伸ばして強調されているが、目・鼻・口・耳等は完全に省略されている。

［土器溶着資料］（第12図10・11）

12－10は、逆さにした坏蓋内部に坏身を重ねて置き、その状態で溶着したものである。重ね焼きの形態としてはあまり類を見ないものであり、同様の形態のものが他にも出土している（29－12・38－１～３）。蓋坏の形状から、出雲４期に当たると考える。

12－11は、20×15㎝の大形の石に、甕の胴部片や蓋坏片などが溶着しているものである。土器片が溶着していない部分には自然釉がかかる。

【土師器】

土製支脚（第12図12）

12－12は土製支脚の元部分の破片で、指などで調整を行なった痕跡が見られる。

確認調査　小結

Ｔ－１内で見つかった５号窯は、１・２号窯から西に160ｍ以上離れた所に位置する。５号窯が元位置を留めるのか、もしくは近くに存在した窯が何らかの作用によって動き、この場所に在るのかは不明である。しかし、Ｔ－２でも黒色灰原層の堆積・広がりを確認していることから、ため池の北側斜面では、かなり広範囲で須恵器窯が作られていたという推測が導き出される。１・２号窯と５号窯の間（Ｔ－３・４）では、窯の痕跡を検出しなかったが、この斜面を利用して須恵器生産を行なっていた可能性は、飛躍的に高くなるだろう。今回の調査で５号窯を確認したことは、１・２号窯以西に須恵器窯が存在していたことを示す貴重な発見であり、その意義は大きいと考える。

第２節　岩汐１号窯・２号窯

岩汐１・２号窯は調査対象範囲外に存在しており、窯本体の全面調査を行なうのは不可能であったこと、また、両窯とも窯体の途中で分断・崩落しており、断面露出の状態を記録する方法のみを行なったことを書き留めておく。

元来、岩汐池内に存在する窯は、岩汐１・２・３・４号窯という呼称で周知の遺跡として知られている。『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ窯業関係遺跡』（1985）に、当時実測された１号窯の断

面図が掲載されており、２号窯は断面露出を確認したと記載がある。３・４号窯に関しては採集遺物実測図の掲載のみになるが、計４基の窯跡が存在すると明記されている[3]。

今回の調査では、１号窯・２号窯という２基の須恵器窯を再度確認したが、残り２基は確認出来なかった。

調査に入る直前まで、ため池には水が溜まっていた。両窯は常時水に浸かってはいなかったようだが、増水時には水の影響を受けていたものと推測される。そのためか、断面に露出する窯の損傷は激しく、時には崩落や崖崩れのような現象も起こり得たと思われる。実際、窯の断面はオーバーハングして抉り取られている状態であった。

断面を精査すると新鮮な面が現れ、鮮やかな赤色を呈する被熱酸化層（赤色）と、硬く締まった青灰色の還元層（青色）がはっきりと確認出来た。

以下、１号窯・２号窯の断面観察状況を記す。

１．岩汐１号窯（第６・13図）

断面露出部分の１号窯の窯体幅は2.55m、深さ（高さ）は1.15mを測る。窯体は、重心が下にある丸みを帯びた扁平形で、上方に向かって内傾し、内湾気味に立ち上がる。断面観察においては、天井部が崩落した半地下式の窯と推測する。

窯体断面

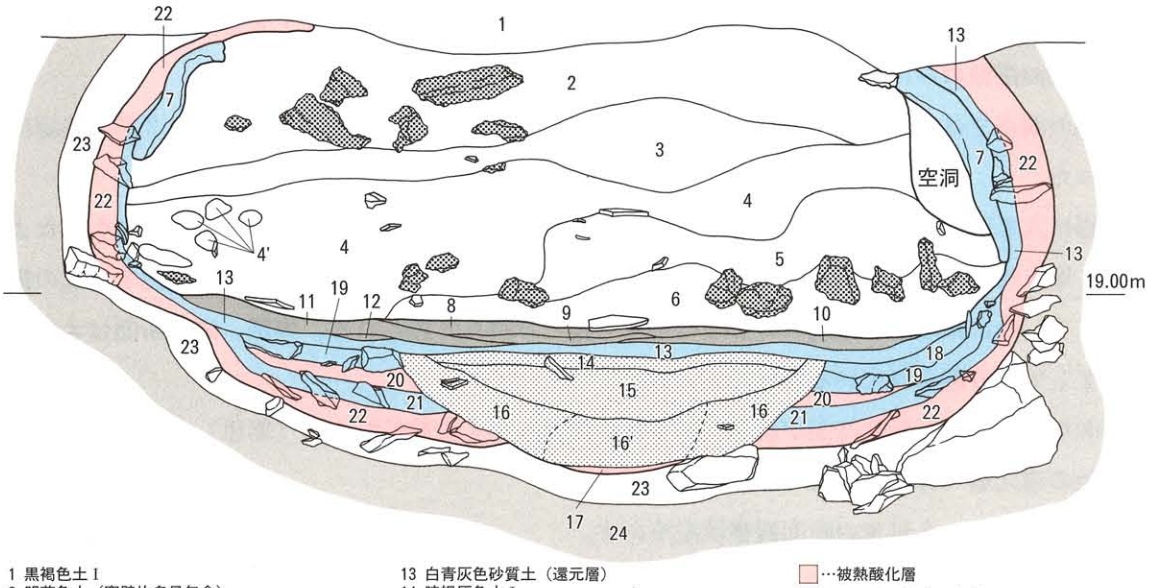
１号窯が掘り込まれているのは、23層（明黄色土Ⅰ）・24層（明黄色土Ⅱ）の地山からである。窯の右下に見える大形の石などからも分かるように、比較的大形の石が混入する地山を掘り込んで、窯を造っている。また、23層は24層と同一の地山であるが、被熱酸化層である22層（赤橙色土Ⅱ）の影響を受け、若干赤みを帯びる。22層は１号窯全体を包み込むように、熱変化によって赤く変色している。

21層（暗灰色土）は最も外側にある還元層（窯壁形成土）で、１号窯の初操業時のものである。５～10㎝大の石を含み、硬く焼き締まった土質を呈する。

これ以後、20層（暗褐色土Ⅱ）、19層（暗灰青色土Ⅱ）、18層（暗褐色土Ⅰ）が積み重なり、いずれも窯の壁（窯壁形成土）として機能していたものと考える。これらは部分的に窯壁小塊が残存しており、顕著な焼き締まり具合も観察出来ている。なお、20層は還元層か酸化層か見分けがつきにくいものであった。この層は19層の下に貼り付く形で残存し、土質は還元層に見えるが、若干の赤みを帯びている。この赤みを酸化層と捉えるならば、19層が２度目の窯壁形成土として使用された時に被熱を受けたものと考えられる。また、18層は東側のみに見られる層で、３回目の還元層と考える。18層の西側は、新たな床面形成土を貼る際に取り除かれたものと思われる。

14層（暗褐灰色土Ⅰ）・15層（暗褐灰色土Ⅱ）・16層（暗灰青色土Ⅰ）は、18～22層を全て切る形状で、窯の中央部を幅1.15m、深さ29㎝で掘り込んでいる。14・15層の土は目の粗い小石状で、窯壁を細かく砕いたものとも考えられる。16層は還元層にも見え、また、中央の最も深い部分に、幅50㎝ほどの違う土質の塊りが入っている（16'層灰褐色土）。いずれも須恵器の小片を包含している。

この掘り込みの上に13層（白青灰色砂質土）が敷いてある。13層はわずか２～３㎝の薄い層で、



第13図　1号窯窯体断面図

非常に硬く、混じりが無く純度の高い砂質を呈する。13層は底面だけではなく側壁にも及んでおり、壁と床が一連で形成された痕跡を残している。

13層の上には、8層（青灰色砂質土Ⅰ）・9層（黄青灰色砂質土）・10層（淡黄青灰色砂質土）・11層（青灰色砂質土Ⅱ）・12層（暗青灰色砂質土）の、還元層（床面形成土）が敷かれている。

8～13層は下方の窯壁形成土とは様相を違え、どれも硬く焼き締まり、混じりが見られない砂質を呈する還元層である。特に8層の表面は、硬化が顕著に見られる。堆積状況も非常に密で、隙間なく積まれている。

側壁（7層）は、両側上方に一部残存している。窯の内部となる内側はガラス状に溶け、硬化が著しい様相である。東側は側壁の脇に空洞が開いており、最終操業時の位置を留めていると思われる。

窯体内の埋土は、2層（明茶色土）・3層（暗茶褐色土Ⅰ）・4層（黒褐色土Ⅱ）・5層（暗茶褐色土Ⅱ）・6層（明茶色土、赤橙色土の混合土）の堆積が確認出来た。いずれも崩れ落ちるような柔らかい土質を呈する。2層と6層は窯壁片の多量包含が顕著で、6層は最終操業時の天井部が崩落した可能性が高いものと考える。その他、各埋土にも窯壁片・須恵器片・小石等が入り込んでいる。

1層（黒褐色土Ⅰ）は窯壁の上方に堆積し、1号窯の真上に生える大木とともに入り込む土層である。木の根は上方部だけでなく、窯体内に及ぶほど伸びており、この根が土を掴むことによって強度を増し、1号窯は現位置を保っている。

考察

14～16層は前項でも述べた通り、18～22層の一部分（中央部）を破壊する形で掘り込まれており、独特な形状を呈するものである。この土層（掘り込み）は何に起因するものであろうか。

まず考えられるのは、3回目の操業後、中央部分が酷く損傷しており、補修せざるを得ない状況であったという推測である。焼成後、失敗した製品や灰、窯壁の破片などを掻き出す作業によって、中央部分は最も影響を受けると思われる。その痕を埋めて床面を再生させ、次回の操業に備えたと考えることが出来る。

もう一つの推測は、中央部分を意図的に掘り込んだ可能性である。掘り込みは窯の中心を捉えており、また、最も外側の被熱酸化層（22層）を抜いて、最下レベルに到達している。この2つの要素が意図的なものであった場合、舟底状土坑という掘り込みの例が考えられる。この土坑の機能については様々な論が唱えられている[4]。また、同じ大井窯跡群内の山津1号窯においても酷似した土坑が確認されている[5]。

次に、8～12層についてであるが、これら還元層（床面形成土）が、一層につきその都度床面を敷き直して操業を行なっていたとは考え難い。8～12層は、わずか3～7㎝の間に隙間なく積まれている。12・11・10層がまず両側に敷かれ、中央に9層、最後に8層を敷き、水平を保つように積み重ねられており、五層分で一回の操業のための床面を造ったと考える。

1号窯の焼成回数を再度確認すると、1～3回目は床部分を大幅に造り直し（1回目21層、2回目19層、3回目18層）、4回目では中心部分を掘り込んで、新たな床を敷き直している（13～16層）。そして、最終操業と考える5回目の窯壁と砂層（7～12層）が残存している。

この操業回数は、1号窯の窯壁・床面形成土を外側から順に考えて提示したものであるが、あくまでも一断面からのみの推察であることを加えておく。

遺物は、1層から坏14－3が、最終操業時の還元層8層には、坏身14－1・2が乗っていた。遺物の形状、年代等は次項で詳しく述べる。

1号窯断面 出土遺物（第14図）

【須恵器】

坏身（第14図1・2）

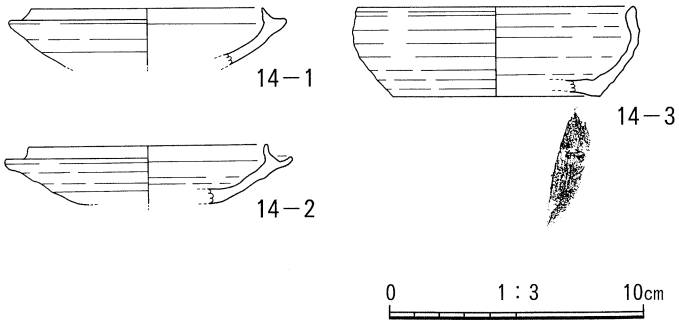
8層直上から採取した14－1・2は、いずれも口径9.5㎝前後、受部径11.5㎝前後という小形の坏身で、出雲5～6期に該当すると考える。14－1の立ち上がりは非常に低く尖り、受部は肥厚し、丸みを保つ。底部は残存していないが、精巧な作りで、丁寧に仕上げられた印象がある。14－2は、立ち上がり・受部の形状から見て、坏蓋である可能性も考えられる。

14－1・2は、1号窯の最終操業時に近い時期のものと捉えることが出来る。いずれも、小形化・形骸化が進む蓋坏と考えるのが妥当であるが、イレギュラーなものとして小形製品が作られる可能性もあり、一概には言えない。

坏（第14図3）

14－3は口縁端部が内湾する坏で、端部は肥厚して内面に面を持つ。坏部は張りを持ち斜めに下りて、底部は回転糸切りを施す。高広ⅣA期[6]のものであり、出雲地方では典型的な形状の坏である。14－3は1号窯上層の1層から出土しており、窯体内埋土からの出土ではない。この土層の堆

積時には、既に１号窯の天井部は崩落していた可能性が高く、崩落とともに上部の土が入り込んだとも考えられる。



第14図　１号窯断面出土遺物

２．１号窯下崩落窯壁片（第６・15図）

１号窯断面から約2.5ｍ下がった崖状の急斜面に、酸化層と還元層が明確に確認出来る窯壁片を多量に検出した。１号窯の真下に当たる地山面の上に、窯壁片が乗った状態で見つかり、ある一定範囲の中で様々な方向、位置に転がっていた状況であった。一見、左右対称にも見えるが、窯壁の向きなどは不規則なものである。１号窯の窯壁が崩落した可能性が高く、長い年月の間に浸食され、崩落を繰り返したものと推測されるが、１号窯の上方に別の窯があったことも否定出来ないことから、その詳細は不明である。

この窯壁片の周囲には、１層（黒褐色土）が堆積しており、須恵器片・窯壁片を多量に包含していた。出土した遺物は、小形化が進む蓋坏類、高台付坏、口縁端部が内湾する坏など、いずれも出雲4期以降の年代を示している。

１号窯下崩落窯壁片 出土遺物（第16図）

【須恵器】

坏蓋（第16図１～５）

16－1の天井部は広い平坦面で、肩部はなだらかに下り丸みを持つ。回転ヘラ削りは中心から丁寧に施し、単位も大きく均一である。天井部外面には細いが明確なヘラ記号「―」が刻まれている。出雲３期に該当する。

16－２～４はいずれも小形のもので、肩部は張らず、端部付近で明確に内傾する。16－２は口径10.8cm、器高3.4cmを測り、天井部は未調整で、強い稜線なども見られない。16－３は、直径４cmほどの円盤状の粘土を天井部の中心に貼り付けており、埋め込んだようにも見える。16－４は、器高4.4cmを測り、天井部と肩部との境にわずかな稜を成すものである。16－２～４は、いずれも出雲５～６期に相当する。

16－５はかえりが付き、天井部にはつまみが付くものと思われる。

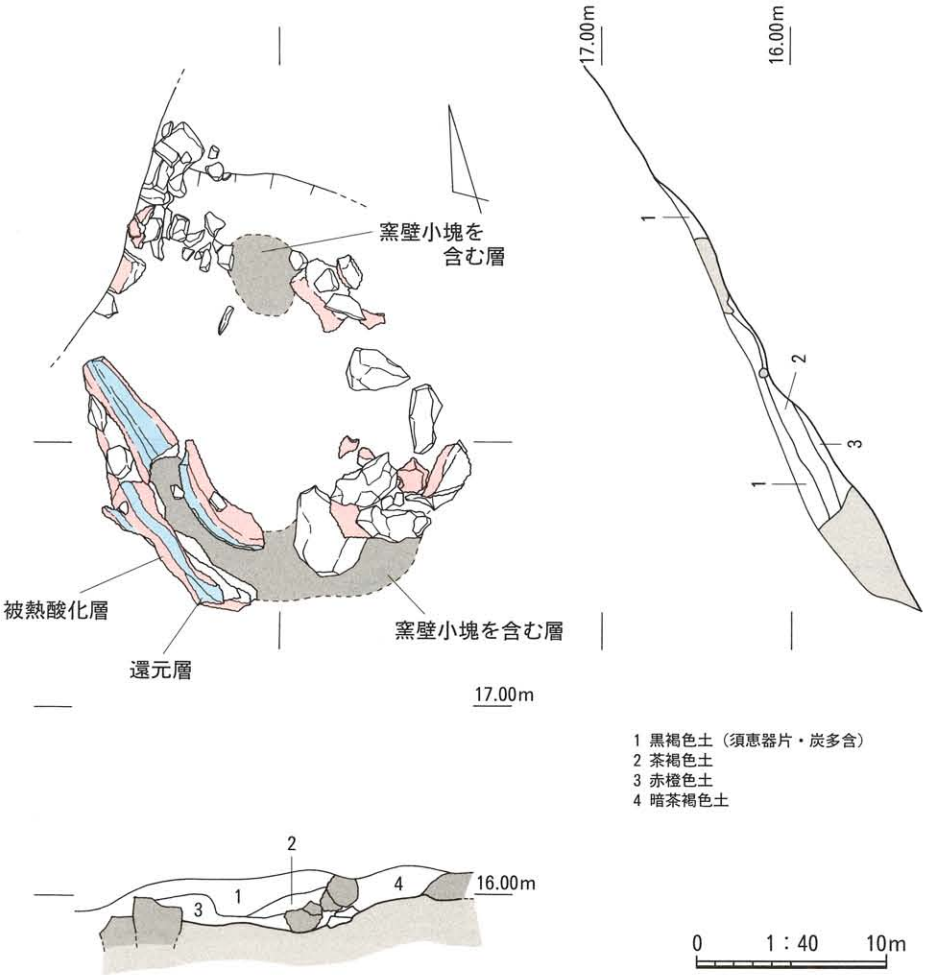
坏身（第16図６～14）

16－６～９は、出雲４期のものである。16－８は全体的に厚手で、立ち上がりは三角形状の断面を持ち、受部は非常に長く、水平に突出する。受部以下は萎むように下り、底部で膨らみ、丸底を呈する。

16－10～14は小形のもので、立ち上がり・受部ともに小さく、底部はヘラ切り後未調整になる。いずれも出雲５～６期の範疇と考える。

高坏（第16図15・16）

16－15は坏部片で、口径11.4cmを測る。口縁部と底部の器壁の落差が激しく、底部は厚さ1.0cm



第15図　1号窯下崩落窯壁片平面図・土層断面図

なのに対して、口縁部はわずか0.3cmである。全体的に丸みを帯びた形状で、端部はわずかに肥厚する。また、壺の蓋の可能性も考えられる。

16－16は脚部片で、脚部高4.0cm前後の短小型である。端部は垂直な側面を持ち、やや厚手である。透かしが入らなくなる出雲5～6期のものである。

壺（第16図17）

16－17は、口頸部が2.5cmの高さを持ち、わずかに内傾して直線的に立ち上がるものである。肩部外面に、被せて焼成した蓋の端部片が溶着しており、その部分より外側は自然釉がかかる。口頸部が短く直立する子持壺である可能性が考えられる[7]。

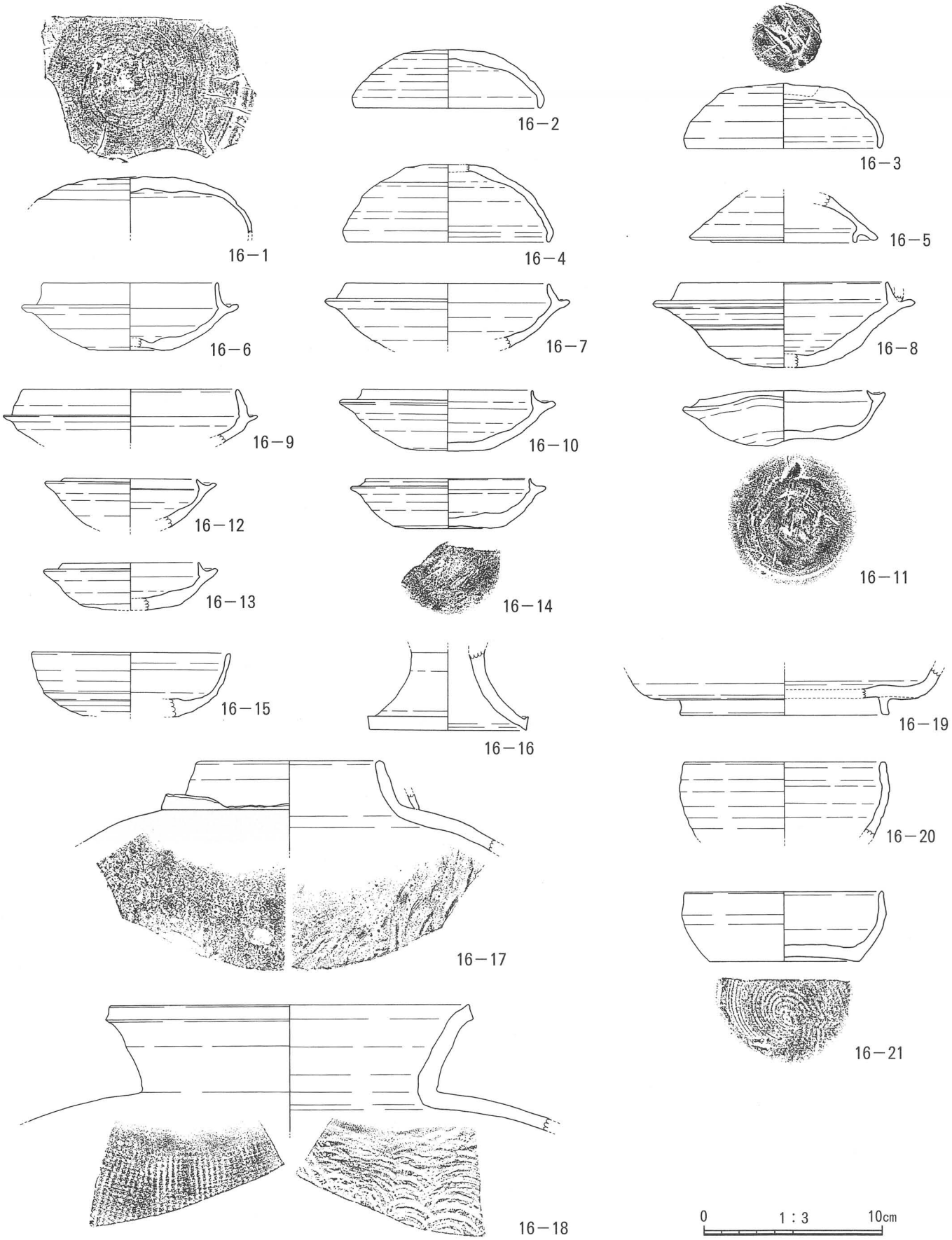
甕（第16図18）

16－18は大形の甕で、口縁部から肩部上方までの破片である。口縁部は外反して開き、端部は内傾する側面を持つ。

高台付皿（第16図19）

16－19の高台はやや高く垂直に下り、接地面がある。高台径は12.0cmを測り、坏部は大きく横に張り出す。高広ⅣA期のものである。

坏（第16図20・21）



は自然釉がかかる部分

第16図　1号窯下崩落土内出土遺物

16－20・21は口縁端部がわずかに内湾する坏で、底部は糸切りを施す。これらも高広ⅣＡ期のものである。

３．岩汐２号窯（第６・17図）

２号窯は、断面露出部分で窯体幅2.85ｍ、深さ（高さ）0.75ｍを測る。１号窯から西側に約２ｍ離れた位置の標高20ｍ前後に並ぶ。１号窯の断面は、南北軸に直交するように分断されていたため観察し易かったが、２号窯は南北軸に対して斜めに切られる形で崩落している。断面観察においては、１号窯同様、天井部が崩落した半地下式の窯と推測する。

窯体断面

２号窯が掘り込まれた地山面も、１号窯と同一の明黄色土である。11層（赤橙色土）は２号窯全体を囲う被熱酸化層、10層（黄灰色砂質土）はやや黄色がかった還元層（窯壁形成土）で、２号窯最初の操業痕である。西側に見られる窯壁の一部は、10層と11層にまたがるような形状で、半分が還元層で青色に、もう半分は被熱酸化層で赤色に変色している（第17図・破線で表示）。

１号窯は、窯底面を何度も造り直している様が確認出来たが、２号窯は、中央部のみに砂層２～９層（床面形成土）を何度も敷いている。土色は幾分相違するが概ね青色に近く、土質は硬く密な堆積である。２～９層においては、１号窯の８～12層と同様で、一層が一度の床面更新を示すとは考えにくい。よって、３～９層は同時期に様々な土色の青砂が敷かれ、最後に２層（暗黄灰色砂質土）が敷かれたものと考える。

考察

２号窯の焼成は３回で、１回目が10層、２回目が３～９層、３回目が２層となる。なお、２層と３～９層は同時期と捉えることも出来る。

窯の埋土については、１号窯は様々な土色・土質の土が入っていたが、２号窯は断面で見る限り１層（暗茶褐色土）のみであった。また、１層に含まれる窯壁片の量は膨大なもので、ほぼ全面を占めている様子が窺えたことから、天井部が崩落したと考えてよいだろう。

露出する断面での最終操業時の残存状況は、側壁は床面から立ち上がって20～30㎝、天井部は全て消失した状態であったが、これより奥（上方）で、２号窯の天井部が残存する場所を確認した。断面露出部分から北方へ１ｍほど行った２号窯真上の表土面に、20㎝ほどの小さい横穴が開口しており、その中にアーチ状の形を保つ天井部窯壁の一部が見られた。穴の下方には土が堆積し、規模等は不明であったが、残存するその表面はガラス状に溶けて硬化していた。この穴は２号窯が崩落した時の衝撃で開いたものと考えられる。

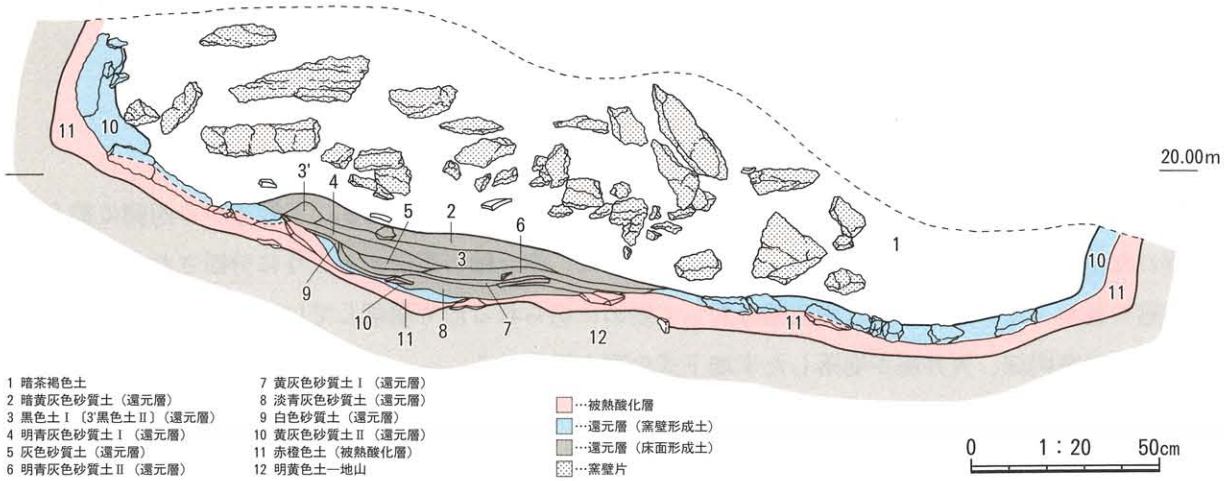
遺物に関しては、掲載する全てが２号窯の直下から採集したものであるが、それが２号窯の内部に存在していたということは言えない。あくまでも窯に近い位置に落ちていた須恵器片であり、２号窯の年代をそのまま示すものではない。

２号窯下 出土遺物（第18図）

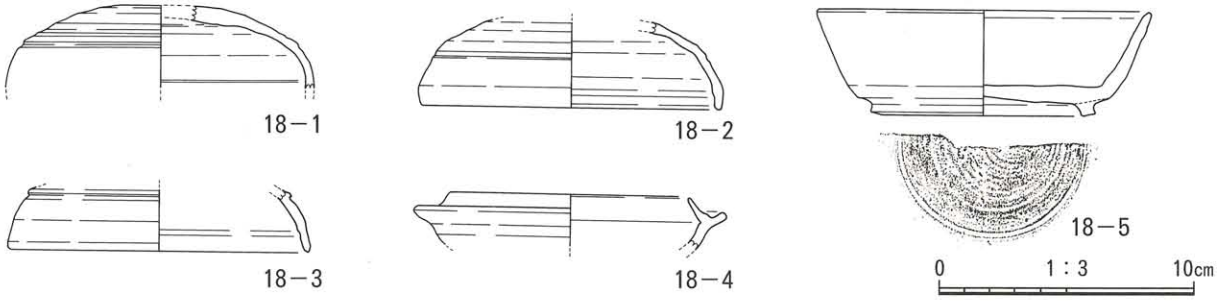
【須恵器】

坏蓋（第18図１～３）

18－１は、回転ヘラ削りがやや雑になる傾向にあり、18－２・３は、端部内面の段の位置が高い



第17図　2号窯窯体断面図



第18図　2号窯下出土遺物

ものである。いずれも出雲4期内に収まるものと考える。

坏身（第18図4）

18－4の立ち上がりは低く直線的で、強く内傾する。受部は肥厚し断面が四角形状を成し、斜め上方に突出する。立ち上がりの低さや形状から見て、出雲4期に相当する。

高台付坏（第18図5）

18－5の坏部は直線的に外傾して開き、端部は若干先細る。高台は低く接地面を作り、重心が低い形状を成す。典型的な高広ⅣB期の高台付坏であろう。

第3節　その他の遺構

1．SX01（第6・19図）

SX01は、ため池の中心部からやや東寄りの池底面に位置する、マウンド状の遺構である。規模は、東西最大長15.1m（東西長10.7～15.1m）、南北最大長10.5m（4.7～6.8m）、高さはため池底面から90cmを測り、中央を頂上部とした山のような形状を成している。

表面は一面、須恵器の破片で覆われており、おびただしい量の須恵器が散乱していた。また、この表面には須恵器だけではなく5～10cm大の小石もかなり含まれ、須恵器と混ざり、重なって積ま

れている状態が窺えた。このような状況から、須恵器窯に伴う灰原集積遺構の可能性を考え、詳細な調査を行なった。

調査は、最初に表面に散布している遺物を採集した後、本体の調査に取り掛かった。東西方向に1本（a－a'）、南北方向に2本（b－b'・c－c'）の畦を設定し、土層の検討に重きを置いて調査を進めた。調査の結果、土層は計52層に細分出来たが、類似する土質・土色の層がまとまって堆積している状況であったことから、以下のように土層を大別し、これに準じ遺物を取り上げることとした。

Ⅰ黒色土上層（4～17層）・黒色土下層（18～28層）　Ⅱ暗茶褐色土（31～33層）
Ⅲ黒褐色土（34～37層）　Ⅳ灰色粘質土（38・39層）　Ⅴ黒灰色土（44・45層）
Ⅵ黒色土最下層（46～48層）　Ⅶ黄色土（49～52層）

なお、Ⅰ層内の黒色土層を上層と下層に分けているが、これは出土遺物量があまりに多く、取り上げ時の混乱を避けるために行なったものである。土質・土色に差異があるわけではない。

以下、大別した各土層の詳細を記す。

土層状況

池堆積土（1～3層）

SX01の上に被るもので、ため池内部の水とともに沈下したヘドロ状の土である。須恵器片・窯壁片を多量に包含していた。

Ⅰ黒色土上層（4～17層）・黒色土下層（18～28層）

Ⅱ暗茶褐色土（31～33層）を斜めに切るようにして西側に堆積する層で、上層・下層を合わせて計25層を成す。Ⅰ層の全土層は炭を多量に含む黒色土であり、灰原層そのものの堆積である。この黒色灰原層の中は、表面の層で見られた小石などは無く、大量の須恵器片と窯壁塊で占められていた。SX01ではこの層が最も出土遺物量が多く、コンテナ100箱以上の須恵器片・窯壁塊が出土した。

Ⅱ暗茶褐色土（31～33層）

SX01の東側に堆積する、須恵器片と小石が混ざった層である。須恵器片を多量に包含しているが、同じくらいの量の小石も入り込む。Ⅰ層と同じく多量の炭を含むことから、灰原層であると考える。

Ⅲ黒褐色土（34～37層）

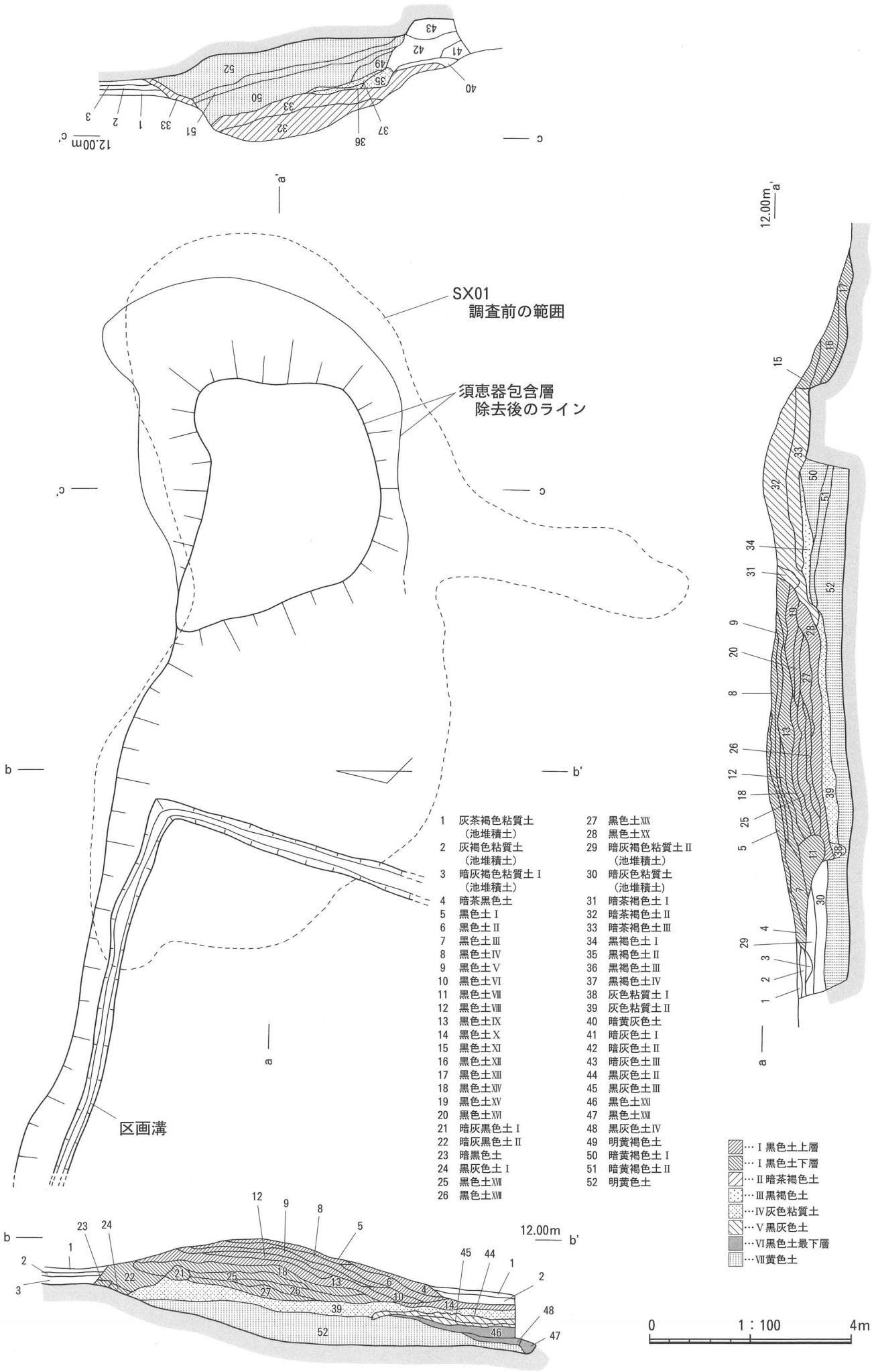
Ⅱ層直下に薄く堆積する層で、Ⅰ・Ⅱ層と大きな差は見られない土質状況、遺物出土状況であった。Ⅲ層も灰原層であると考える。

Ⅳ灰色粘質土（38・39層）

Ⅰ層の下に水平堆積している層である。20～30cmほどの厚みを持ち、灰色で粘質性の強い土質を呈する。Ⅰ～Ⅲ層と比べると遺物包含量は格段に少なく、灰原層のような黒色土は一切見られなかった。

Ⅴ黒灰色土（44・45層）・Ⅵ黒色土最下層（46～48層）

黒色灰原層の堆積で、約40cmの厚みを測る。Ⅰ～Ⅲ層と同様に、須恵器片・窯壁片を多量に包含していた。



第19図　SX01平面図・土層断面図

Ⅶ黄色土（49～52層）

SX01の最下部に水平気味に存在する、非常に固く締まったブロック状の土層である。小礫、石、粘土ブロックが多く入り込み、遺物は一切含まない。上面の形状は、北側が高く南側が低い形を呈している。土層の堆積状況や無遺物層であることなどから、人為的に盛られたものではなく、地山と考える。

Ⅶ黄色土面での遺構（第６図）

この土層面では、区画のような溝を検出した。この区画溝は南から北に向かって伸び、直角に屈曲して西方向に向かい、SX01以西に続いていくものである。この溝の性格については、近世以降の畑、または水田を区画するものか、ため池造成時に使用した作業用の簡易的な溝ではないかと考えている。

SX01 出土遺物（第20～51図）

出土した遺物は圧倒的に須恵器が多く、坏蓋・坏身・高坏・瑕・壺・甕・椀・提瓶・坏・特殊品・不明品と多岐に渡り、また、様々な器種が溶着した資料も多数出土している。土師器はごくわずかで、甕・甑の把手・竈の破片などが見られる。須恵器の年代は、出雲２期～高広ⅣＡ期の範囲内で、その中でも出雲３～４期の遺物が多く見られる傾向にある。

出土遺物は、SX01で合計542点を掲載している。あまりに多いと思われるだろうが、実際にSX01から出土した遺物の総数は、コンテナにして210箱を数える。その中から残存率の良いもの、年代の定点になるもの、特筆すべきものを厳選し、本報告に掲載している。

以下、出土土層別に遺物の詳細を記す。

SX01調査前採集遺物（第20・21図）

【須恵器】

坏蓋（第20図１～４・７）

20－１～３は、器高が低く扁平形を呈し、端部内面に明確な段が付く。形状だけを見ると出雲４期に近いが、回転ヘラ削りの丁寧さと端部内面の段は、出雲３期に当てはまると考える。

20－４の回転ヘラ削りは、丁寧だが削りが浅めである。肩部から口縁部までが低く、端部内面の低い位置に沈線を廻らす。端部の形状を重視すると、出雲４期の範囲に収まると考える。

20－７は天井部の破片で、非常に広い平坦面を持ち、均一で丁寧な回転ヘラ削りを施す。出雲３期のものと考える。外面中央にヘラ記号「×」が刻まれている。

坏身（第20図５・６）

20－５は立ち上がりが1.5㎝を測り、丁寧な回転ヘラ削りが施される。出雲３期に該当すると考える。

20－６の立ち上がりは、外反しながら内傾する。坏部は安定感のある平底だが、回転ヘラ削りは浅く雑なもので、削られていない単位も見られる。出雲４期に当たると考える。

高坏（第20図10～13）

20－10は坏底部から脚部の残存で、脚部は短小で大きく開く。端部は外反し、丸みを保つ。脚部高4.6㎝、底径9.2㎝を測り、筒部の太さも十分ある。椀などの脚部の可能性も考えられ、出雲１～２期の古いものと考える。

20－11は脚部下方の破片で、脚裾で明確に外傾する。残存する透かしは下段の三角形のみだが、2段3方向の千鳥透かしと推測出来る。脚裾部に沈線が入らず、また、端部が面を持たず丸く収まることから、出雲2～3期のものと考える。

20－12は脚裾部の破片で、強く外反して開き、端部は肥厚して段が付く側面を持つ。出雲編年の長脚高坏A4・A5型に当てはまり、出雲3～4期に該当すると考える。

20－13は、全体的に厚手で重量感がある。下方に線刻状の沈線を2条廻らし、2条とも始点と終点がずれている雑な施文である。その直下に1段3方向の円形透かし（直径1.0cm）が穿孔されている。出雲5～7期の間に当てはまると考える。

瓻（第20図14～16）

20－14・15は口縁部片で、大きく開き直線的に伸びる。また、頸部に瓻特有の細かい波状文が施文されている。20－16は胴部片で、肩部から胴部下方にかけて丸く緩やかに張り出し、球状を呈する。肩部以下全面にカキ目調整、最大径部分に連続刺突文を施文し、その上下に明確な沈線を2条廻らす。胴部の円孔は直径1.5cmを測る。20－14～16は、いずれも出雲編年のA5型、出雲3～4期に該当する。

壺（第20図17・18・20～22）

20－17は直口壺の口頸部片で、薄手で垂直に伸びる。外面には粗く雑なカキ目を施し、出雲3～4期の範疇のものと考える。

20－18は肩部片で、強く張り出し明確に折れる。最大径部分に連続刺突文、その下にカキ目調整を施す。

20－20・21は小形の壺で、20－20は口頸部から胴部下方、20－21は底部の残存である。

20－22は短頸壺の口頸部から肩部までの破片で、口頸部は1.0cmの高さで垂直に立ち、わずかに外傾する。

椀（第20図19）

20－19は椀の口縁部片で、口縁部は垂直に立ち、胴部はわずかに膨らんで下りる。外面にはカキ目調整が見られ、出雲1～2期のものであろうかと考える。端部内面に段が付いていることを考慮すると、壺などの蓋である可能性も考えられる。

高台付坏（第20図23）

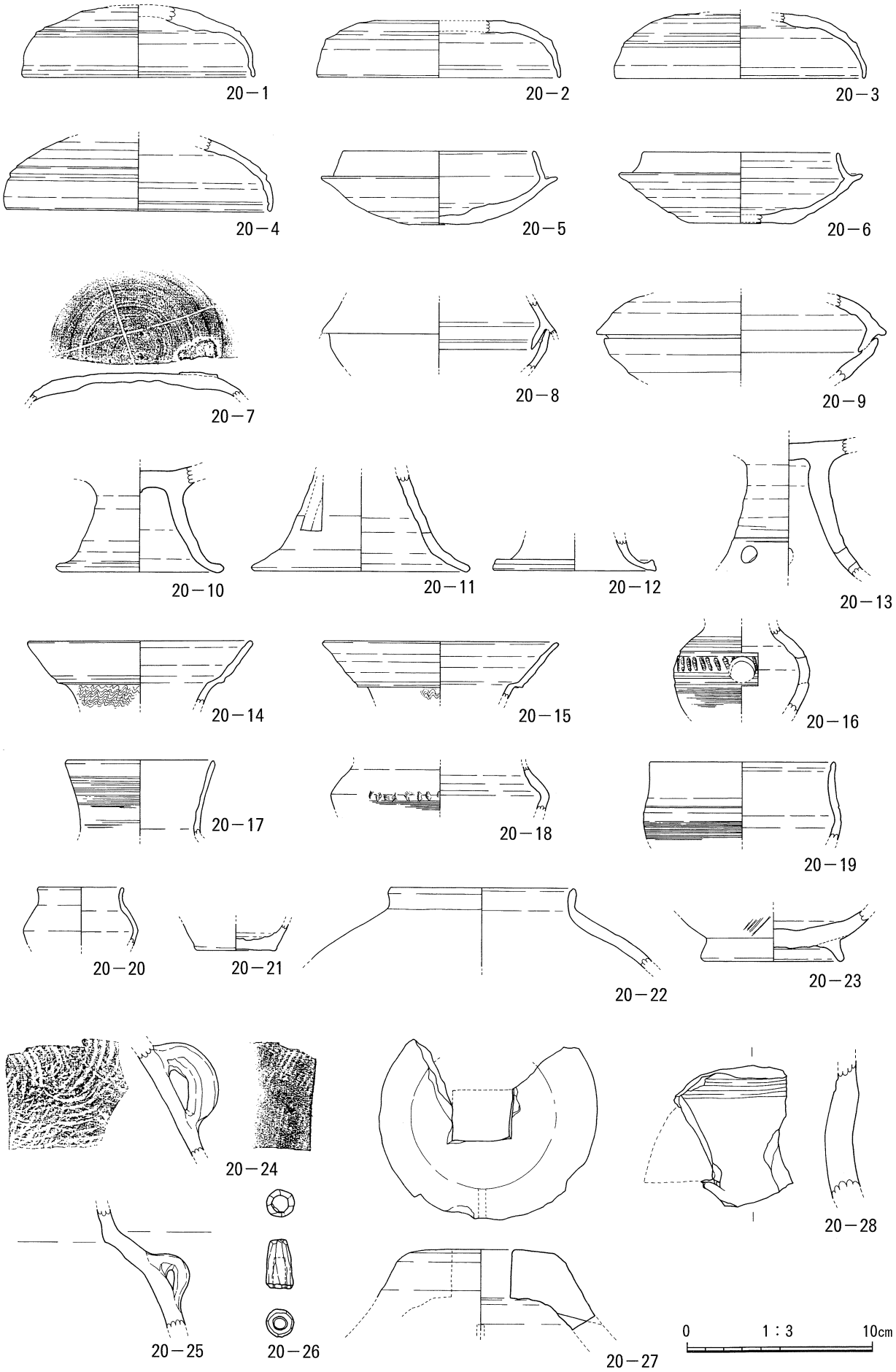
20－23の高台は1.2cmの高さを測り、端部は丸く接地面はわずかである。壺である可能性も考えられる。出雲8期のものと思われる。

提瓶（第20図24・25）

20－24・25は提瓶の把手で、20－24は1.6cmの太さを持ち、上下の付け根は両方に接合が見られる。20－25の下部は貼り付けである。いずれも出雲編年のB1型、出雲3期のものと判断する。

器台形土器（第20図27）

20－27は、器台形土器という特殊な須恵器である。全体の形状は円錐状で、上方部は切り取られたような水平面を持ち、真横から見ると台形状を呈する。上端径は8cmで、下方は残存していない。上端面に2.8×3.3cmの長方形透かしが貫通しており、脚部上方の側面に、3.3cm透かし面に直交する0.4×0.4cmの小さな方形孔が通る。外面は丁寧な回転ヘラ削りを施し、上端面はヘラ削り後ナデ、



第20図　SX01調査前採集遺物①

内面は回転ナデ調整を行なう。この器台形土器は、本調査でもう1点出土している（47－7）。

この特殊須恵器の類例としては、松江市西浜佐陀町の北小原横穴[8]での出土例があり、形態が非常に似ていることから同一器種とした。使用例、用途等詳細については、後述する第6章でまとめている。

子持壺（第20図28）

20－28は、子持壺の脚部の破片である。破片は8×6㎝ほどの小さなものだが、厚みは1.8㎝を測る。正三角形に近い透かし（5×5×4㎝）を持ち、その上に沈線を2条廻らす。透かしの形態から、出雲3期前後に当てはまるものと考える。

［蓋坏セット資料］（第20図8・9）

20－8・9は、坏蓋と坏身をセットの状態で焼成し、溶着したものである。坏身の立ち上がりの低さ、坏蓋の口縁部の形状などから、いずれも出雲4期に該当すると考える。

［不明品］（第20図26）

20－26は長さ2.7㎝、上端幅0.9㎝、下端幅1.5㎝を測る。土錘のような形状を呈するが、中央の穿孔は3分の2を開けた状態で終わっており、貫通していない。形状、使用例、用途、年代などを含めた上で、不明な点が多い遺物である。

［土器溶着資料］（第21図1～10）

21－1・2は甕の胴部片で、外面に他の土器が溶着した痕跡が残る。21－3～8は、蓋坏類・その他の器種が溶着したものである。21－3は、坏蓋片の上に甕か提瓶の口縁部片、21－4は蓋坏片2セット、21－5は窯壁小塊に坏身片、21－6は坏蓋片に蓋坏片1セットと坏身片、21－7は坏蓋片の上に坏身片、21－8は坏蓋片に高坏の脚部と思われる端部片が、それぞれ溶着している。21－9は、甕の胴部片に、蓋坏片2セットが乗っており、大きく歪んでいる。21－10は甕の胴部片が、2枚重なって溶着している。

SX01池堆積土 出土遺物（第22図）

【須恵器】

坏蓋（第22図1～7）

22－1は器高が4.8㎝と高く、全体的に厚手である。また、天井部外面に窯壁の小塊が溶着している。22－1・2は類似しており、口径が14㎝近くを測ること、回転ヘラ削りが中心から始まり、同じ大きさの単位で丁寧に施されていること、端部内面が肥厚した状態で沈線を入れていることなどから、出雲2～3期の範疇に収まり、より2期に近いものと考える。

22－3は、回転ヘラ削りが丁寧で、単位も大きく均一である。形状に視点を置くと、薄手で扁平形を呈し、端部内面は沈線や段を付けることが困難なほど薄手である。出雲3～4期の間、より3期に近いものと考える。

22－4は、器高が高く口径も大きいが、回転ヘラ削りがやや雑になる傾向にある。また、端部内面が薄手の作りで、高い位置に幅広の沈線が廻っている。22－5は、焼き歪みによる若干のひずみが見られる。肩部から口縁部までの残存で、口縁部は直線的に外傾する。回転ヘラ削りは薄く浅いものである。22－6は天井部のみの残存で、中心にはヘラ起こし痕、ヘラ記号「―」の明瞭な線刻が付く。回転ヘラ削りの単位は均一だが、削りが浅く不明瞭である。22－4～6は、いずれも出雲

4期に当たると考える。

22－7は口径11.0cmの小形の坏蓋で、肩部の形状は出雲5期の様相を示すが、天井部にかなり丁寧な回転ヘラ削りを施している。全体的に厚手で、端部は内湾して尖る特徴を持つ。また、天井部外面には重ね焼きによる自然釉の痕跡が見られる。出雲5期と考えるが、古くなる可能性もあるだろう。

坏身（第22図8～12）

22－8は立ち上がりが1.7cmの高さを持ち、端部内面に明確な段が付く。坏部が深く、伴う坏蓋の口径が14cmと推測出来ることを加味すると、出雲2期に該当すると考える。

22－9～11の立ち上がりはいずれもやや厚手で、1.0cm前後の低さを測る。回転ヘラ削りの単位は均一だが、削りが浅く、シャープさに欠けるものが目立つ。22－12は、坏部が浅く扁平形を呈し、立ち上がり・受部ともに薄手で精巧な作りである。回転ヘラ削りは丁寧に施すが、単位が小さく浅い。これらの特徴から、出雲3～4期に当たると考える。また、底部外面に重ね焼きによる自然釉の痕跡が見られる。

高坏（第22図13）

22－13は脚部のみの残存で、全体的に重量感があり、焼成も良好である。脚部中央よりわずか下に明確な沈線を2条廻らし、その下に1段4方向の円形透かし（直径1.1cm）が穿孔されている。端部側面の形状から、出雲5～7期の範疇のものと考える。

子壺（第22図14）

22－14は、子持壺の子壺と思われるものである。頸部が細く、肩部は強く張り出す形状を呈し、最大径以上の部分に、太い沈線2条間に間隔が空いた連続刺突文を施文する。子壺に文様が入るものは出雲4期以降には見られないことから、22－14は、出雲3期代のものであると考える[9]。

提瓶（第22図15）

22－15は提瓶の肩部片の残存で、環状把手が接合されている。上部は接合、下部は貼り付けただけのものであるが、1.5cmの太さを均等に持つ把手である。出雲編年のB1型、出雲3期に当てはまると考える。

壺（第22図16）

22－16は壺の底部片で、丸みを保ち、安定した平底である。

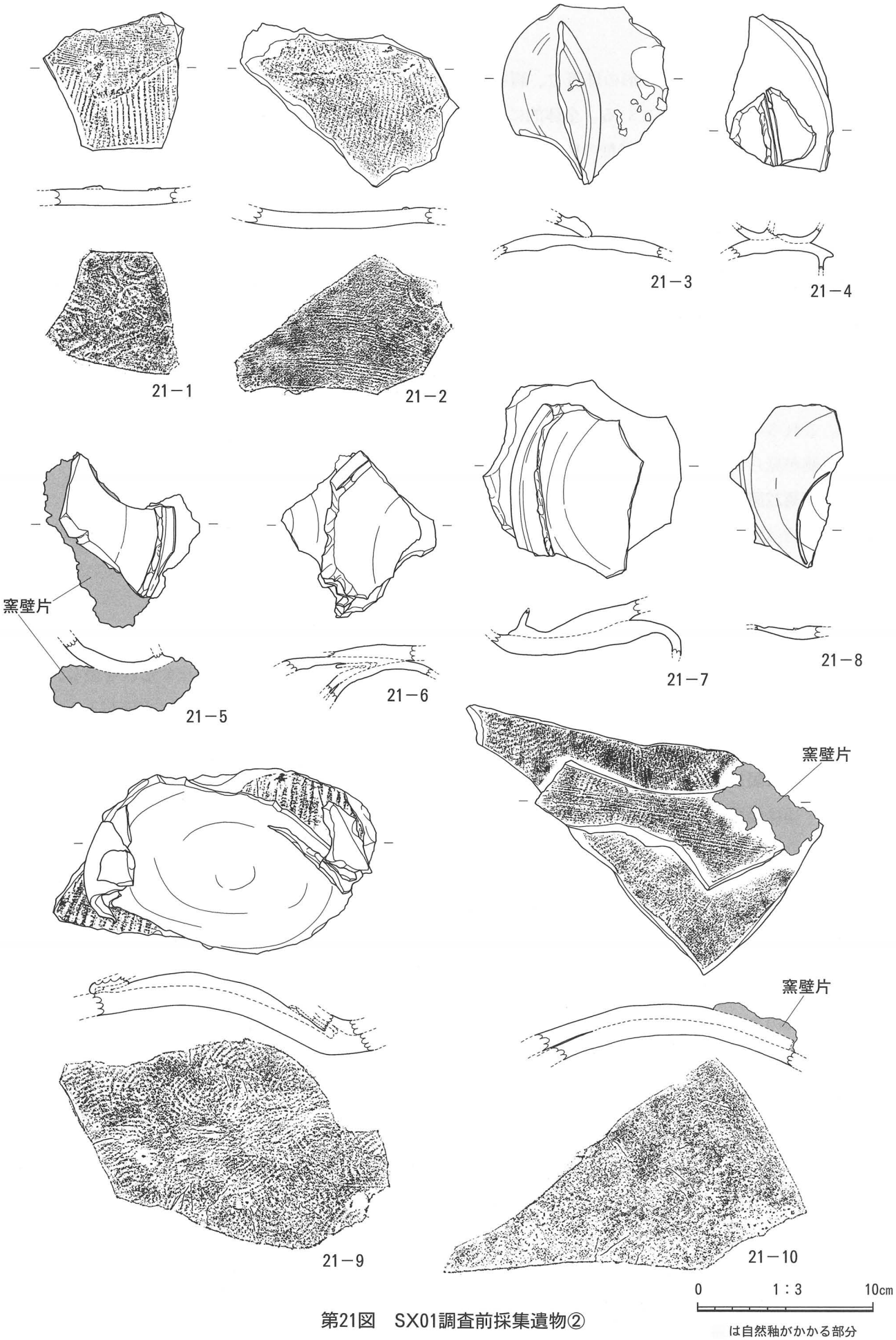
高台付皿（第22図17）

22－17の高台部は1.0cmの高さを測り、わずかに外傾し、端部は丸く接地面はわずかである。高広ⅣA期に該当する。

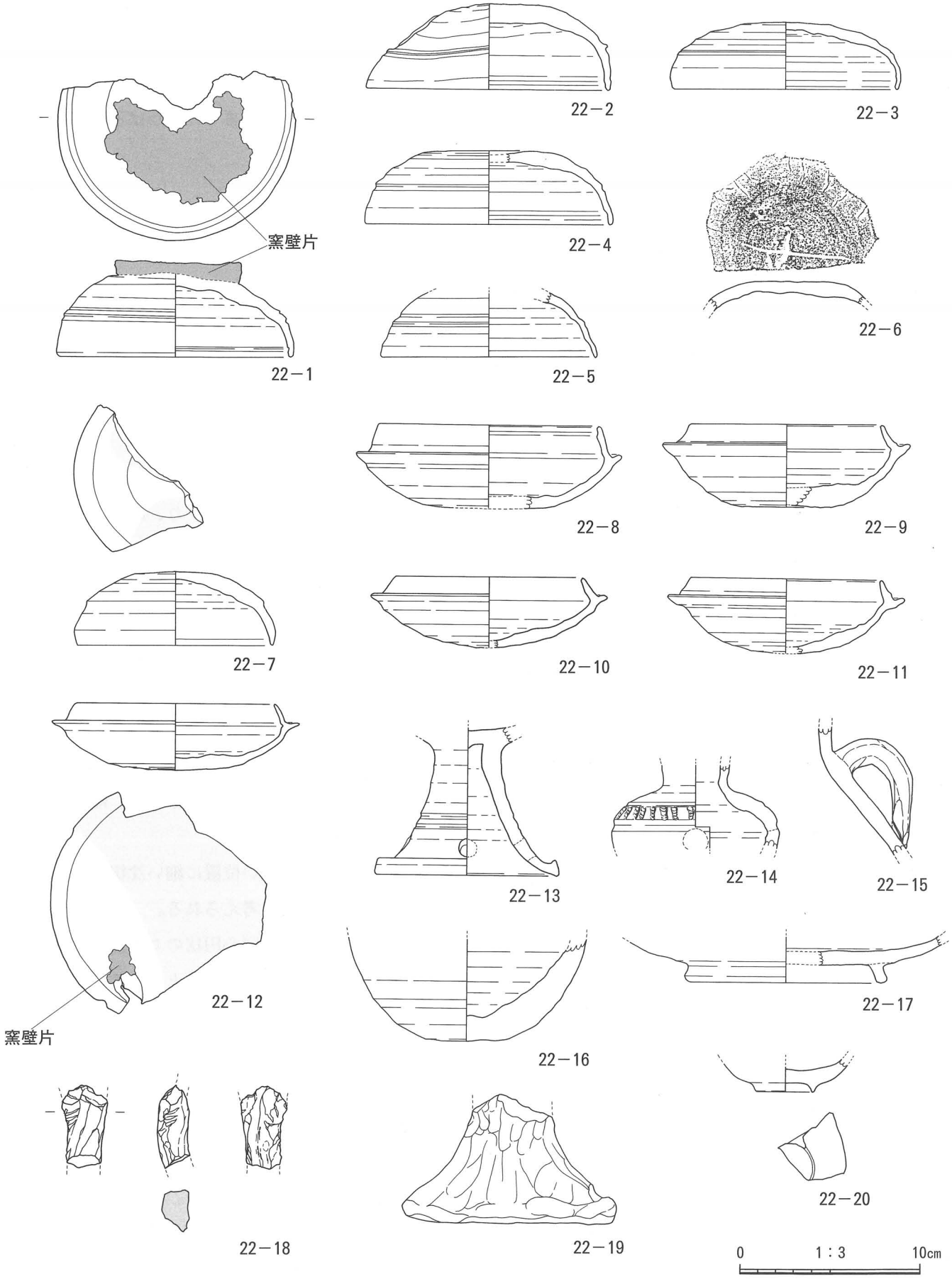
［窯道具］（第22図18）

22－18は、長さ4.5cm、幅2.0cm、厚み1.8cmを測る。外面に調整痕は見られず、厚みを持ち、全体的にわずかな湾曲を示している。単独の製品として焼成されたとは考え難いものであり、甕や壺などの大形製品を成形する段階で排出された、粘土の切り屑ではないかと推測する。

これらの大形製品は、口頸部と肩部以下を別々に作り、最終的に頸部で接合する。2つの部位の接合時に、どちらかの余分な部分を切り取る作業が行なわれる。これは土器が半乾きの状態で行なわれ、ヘラ等の工具で切り取る。



第21図　SX01調査前採集遺物②



は自然釉がかかる部分

第22図　SX01池堆積土出土遺物

本調査では、計10個体（22－18・28－12～16・36－14～16・56－20）が出土しており、そのどれらにも大きさや形状の違いが見られ、同一のものは見られない。また、二次焼成を受けていないことから、切り取り後、他の正規製品と同様、窯入れ・焼成されたものと考えられる。これらが何らかの意味を持って焼成されたのか、もしくは、切り屑として偶然焼かれてしまったのかは不明であるが、前者ならば、窯道具的な役割を担っていたとも考えられている[10]。

【土師器】

土製支脚（第22図19）

22－19は土製支脚の底部の残存である。

【磁器】

碗（第22図20）

22－20は、18世紀代の磁器の碗である。肥前産のものと思われる。

SX01Ⅰ黒色土上層 出土遺物（第23～30図）

【須恵器】

坏蓋（第23図1～29・第24図1～26・第25図1～12）

23－1は肩部以下の破片で、器高は高くなると思われる。口縁部はほぼ垂直に下り、端部内面の明確な段は、出雲2期の形状に近いものである。23－2の天井部は低くやや扁平形を呈し、単位は小さいが均一な回転ヘラ削りを施す。端部内面の段の仕上げは、明らかに出雲2期を示している。

23－3は23－1と同様で器高が高い。肩部の沈線はぼんやりとしたものだが、肩部以下が高く、垂直気味に下りる。端部内面に明確な段が付き、全体的に厚手である。23－4の口縁部は直線的に開き、外傾する。これは短頸壺の口頸部に合わせた形状とも推測でき、短頸壺の蓋の可能性も考えられる。23－3・4は、いずれも回転ヘラ削りが非常に丁寧であり、出雲2～3期の範疇に入るものとする。

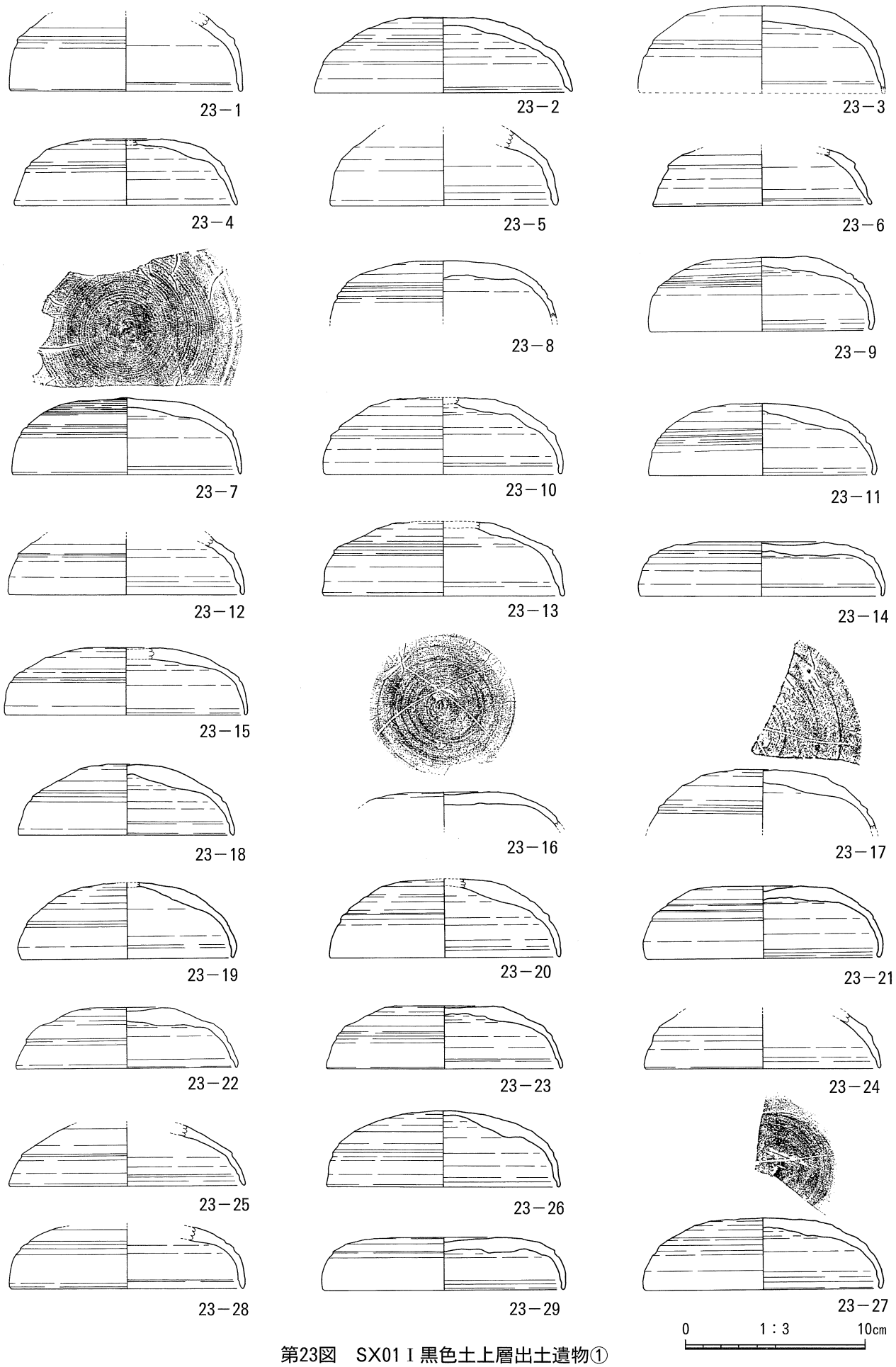
23－5は肩部以下の破片で、器高は高くなると推測する。口縁部は肥厚して丸みを持ち、端部内面の高い位置に幅広の段を付ける。出雲3期に該当すると考える。

23－6は、口縁部が直線的に開き外傾する形状を呈する。端部内面の低い位置に細い沈線を廻らす。出雲3～4期のものであると考える。23－5・6は壺の蓋の可能性も考えられる。

23－7は、全体的に厚手で、器高4㎝以上を測る。また、天井部外面に同心円状のカキ目調整を施している。端部内面の低い位置に明確な沈線を廻らし、出雲3～4期に該当すると考える。23－7は、有蓋高坏の蓋の可能性も考えられる。

23－8～11は、器高が高く若干の丸みを保ち、回転ヘラ削りは丁寧に施されている。23－12～15は、器高は低いが、端部内面の段がより明確に付く。23－16・17は、天井部外面にヘラ記号「×」が強く深めに線刻されている。23－8～17は、いずれも回転ヘラ削りが丁寧なもので、中心から削り、単位が大きく均一で、削りが深い。これらは出雲3期の範疇に収まると考える。

23－18～29・24－1～15は、いずれも出雲3～4期の範疇に収まるものと考える。形状に多種多様なバリエーションが見られるが、基本的に、回転ヘラ削りが丁寧なものから雑なものになっていく傾向が見られること、端部内面の段が若干高い位置に付けられ、段から沈線へ変化する、などは出雲3～4期の特徴であると捉える。24－2・7・13の口縁端部外面には、0.5～1.0㎝の幅で、斜



第23図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物①

めに浅く刻んだ痕跡が見られる。これは成形後、調整段階に入り、ろくろ轆轤（回転）台に土器を固定するために、何らかの処置が成された痕跡ではないかと考えている。

24－16～20は、いずれも端部内面に明瞭な沈線が廻るもので、上方に付くものが多く、より4期に近づくものと考える。24－21～26・25－1・2は天井部外面にヘラ記号が見られ、24－21～24は「—」、24－25・26は「×」が線刻されている。25－1は2本線が交わるように並び、25－2は4本が平行に線刻されている。

25－3～10は、回転ヘラ削りが更に雑になり、削り残しや外周のみを削る傾向にある。また、端部内面には明確に沈線が入るようになり、いずれも高い位置に廻る。この特徴は出雲4期に当てはまると考える。25－10はこの中でも異種的であり、非常に厚手で重量感がある。坏蓋とは限らず、壺の蓋等の可能性も考えられる。25－11・12は天井部外面にヘラ記号が見られ、25－11は「—」、25－12は「×」と刻まれている。これらも天井部の調整から、出雲4期に当たると考える。

坏身（第26図1～34）

26－1の立ち上がりは高さ2.0cmを測り、垂直に立ち、端部内面には明確な段が付く。受部が小さくつまみ出したような形状を呈する。26－2の立ち上がりの内傾斜はやや強く、波打つような形状を成し、高さは1.5cmを測る。26－1・2はいずれも出雲2期に該当すると考える。

26－3・4は立ち上がりの高さが1.6cmで、弱く内傾し、直線的に立ち上がる。出雲2期とは言い切れないが、2～3期の範疇に収まると考える。

26－5～13はいずれも立ち上がりが1.0cm以上、もしくは回転ヘラ削りが非常に丁寧であることなどから、出雲3期に当てはまると考える。26－12は、底部外面に自然釉がかかる。

26－14～25の立ち上がりの形状は前述のものと大差ないが、序々に低く、内傾斜が強くなるものが多い。回転ヘラ削りにも若干の雑さが見え始め、出雲3～4期への移行期のものと考える。

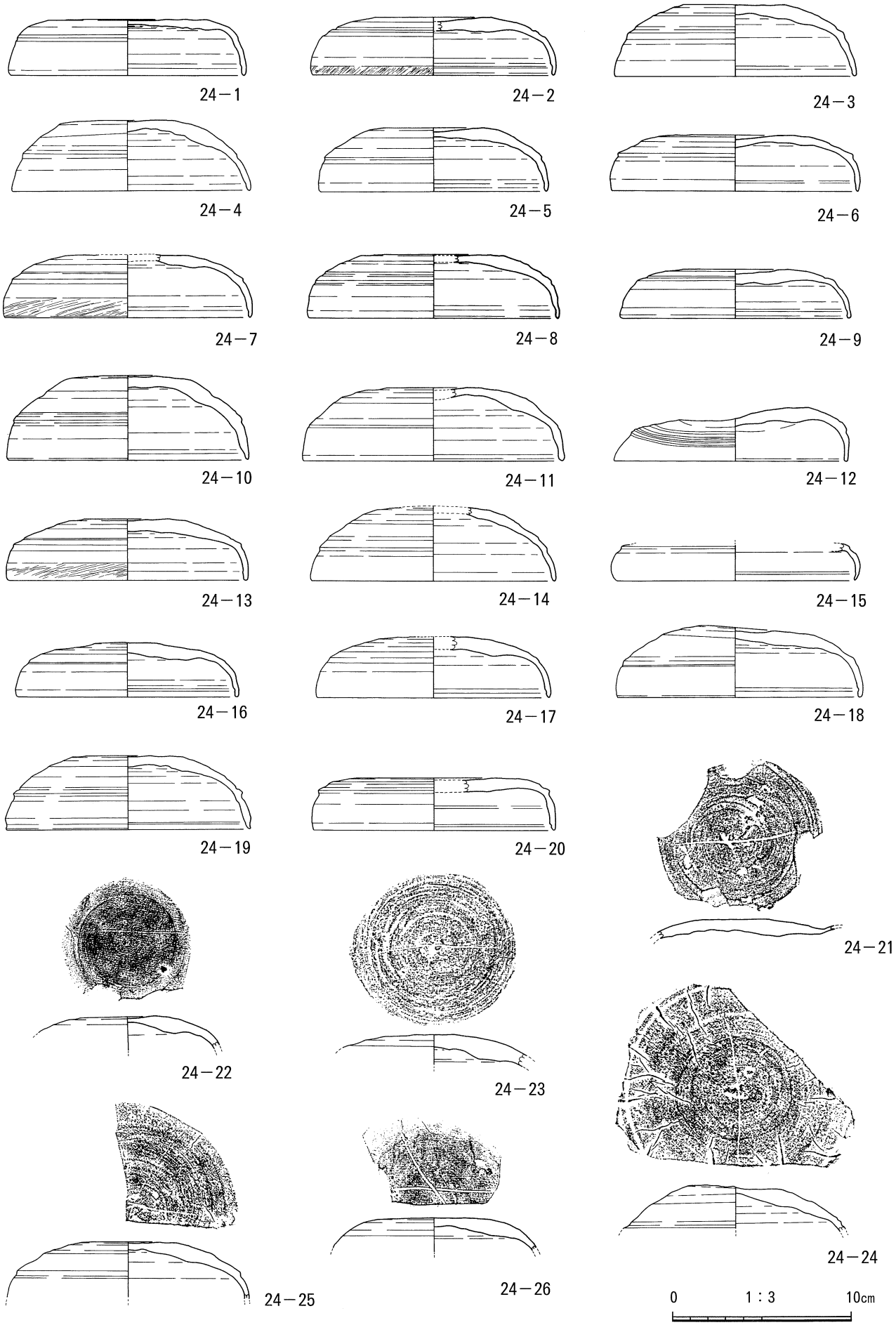
26－26～34は更に立ち上がりが低くなり、よりバリエーションに富む出雲4期のものである。26－26・27の立ち上がりは肥厚し、短く、26－28・29は極薄になり、26－30・31は外反気味に尖り、26－32～34は直線的で強く内傾する。いずれも坏部は浅く、扁平形を呈するものが多い。

高坏（第27図1～9）

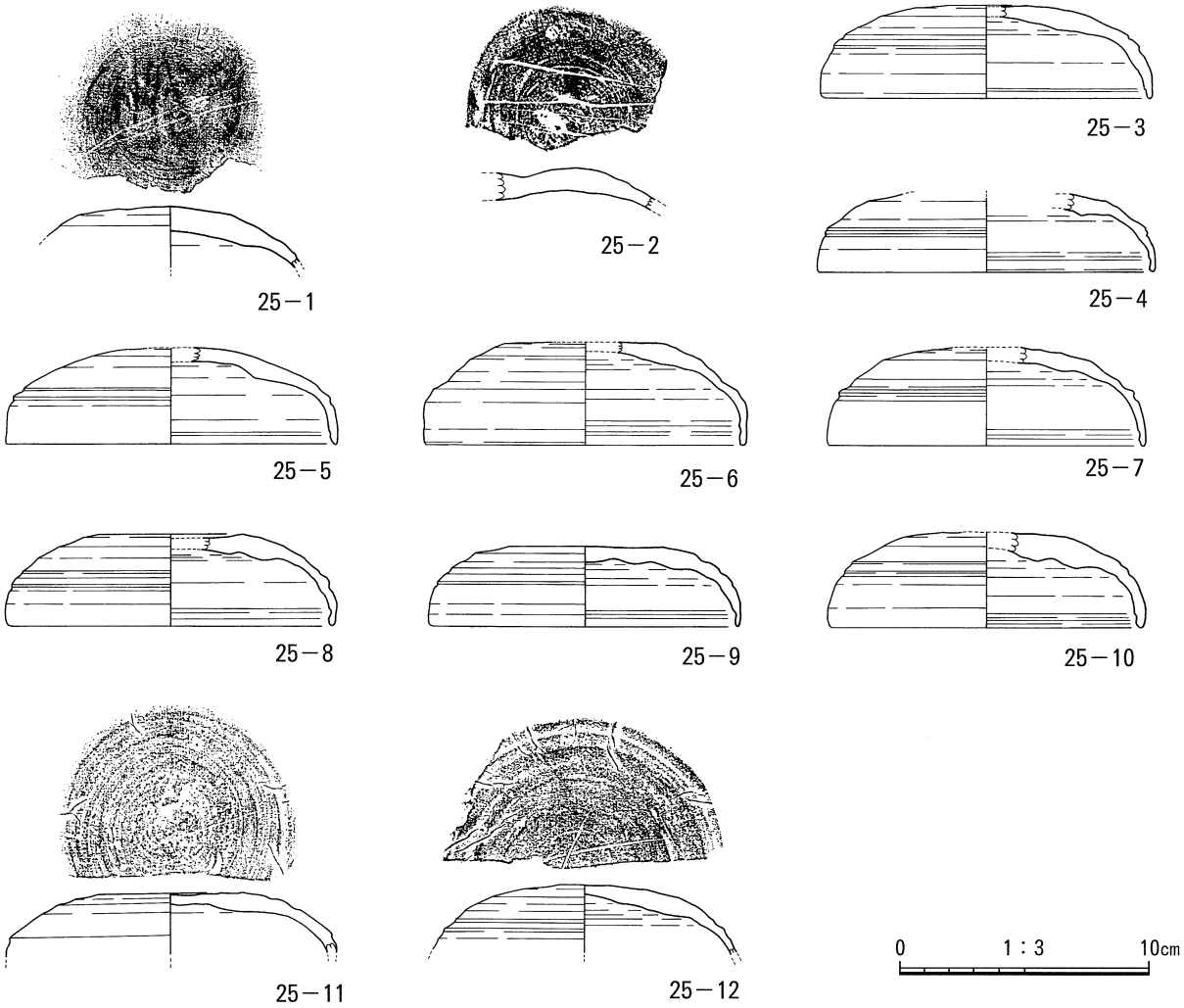
27－1は有蓋高坏で、坏部から脚部付け根の残存である。受部径が15.1cmを測り、通常の坏身より口径が大きいことが特徴的である。また、脚部径が4.7cmの太さを持ち、どっしりとした脚部であったことを推測させる。出雲編年の長脚有蓋高坏B型に当てはまる。付け根に見える透かしの痕跡は3方向に切れ目が入り、おそらく2段の千鳥透かしであろう。また、坏底部に、全周する連続刺突文が丁寧に施文されていることからも、出雲2期末～3期の頃のものである。27－2は脚部片の残存で、筒部の太さと直線的に伸びていく形状が特徴的である。上方には粗いカキ目が引かれ、中央には幅広の沈線を2条廻らす。2段3方向の千鳥透かしが入り、上段は長三角形、下段は長方形を呈する。27－1同様、長脚有蓋高坏のB型にはまり、出雲2～3期のものであろう。

27－3は脚端部片のみの残存だが、特徴的な形状を残している。端部の側面は高さ1.4cmを測り、中央部分が膨らみを持つ。透かしの底辺が2.0cmと大きめである。出雲編年E1型の流れを汲む、出雲1期の高坏である。

27－4は出雲編年A3型に当てはまる長脚無蓋高坏で、出雲3期と考える。坏部に見られる沈線



第24図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物②



第25図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物③

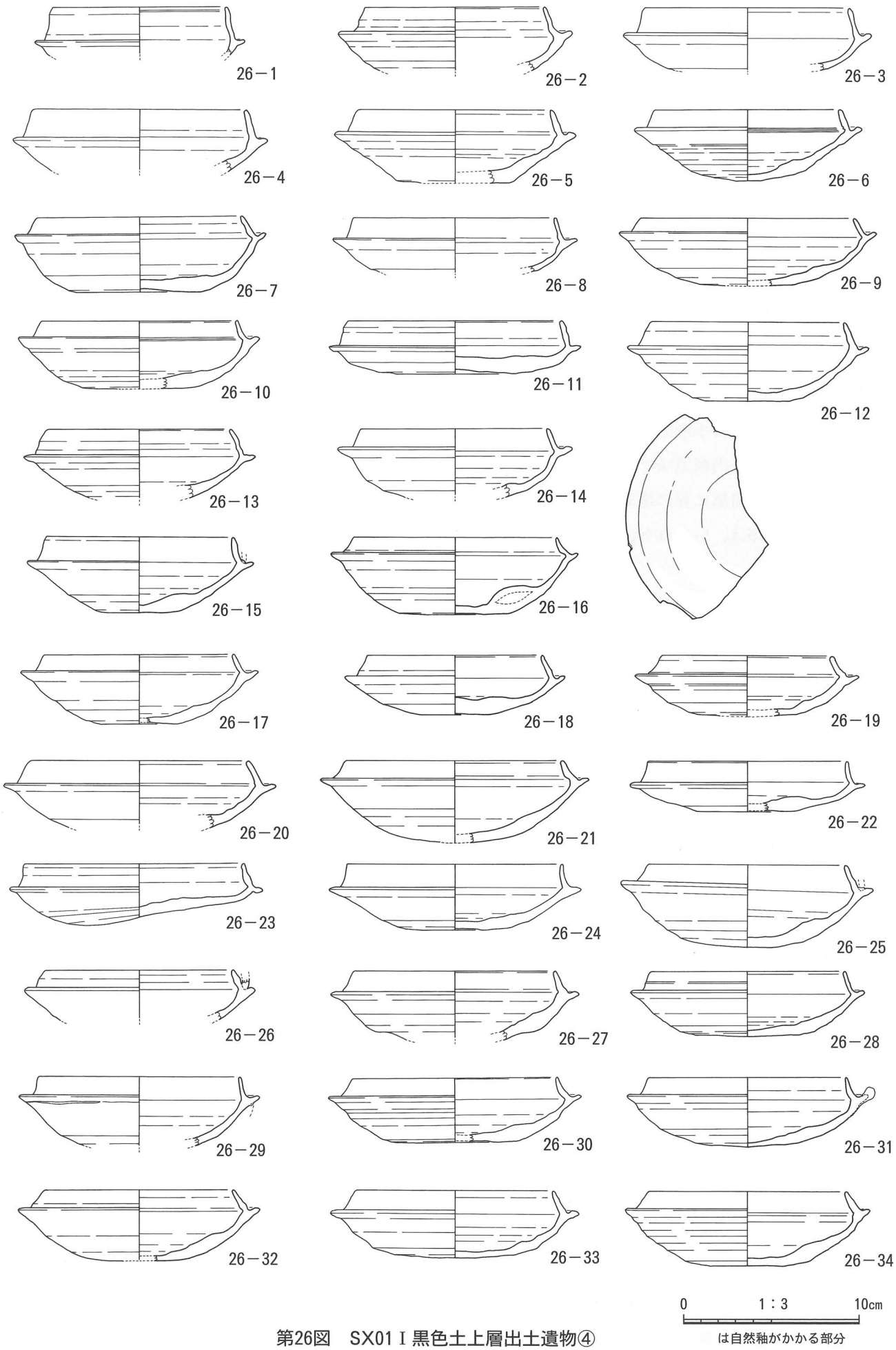
3条は非常に明確で強く、このような沈線はあまり例を見ない。その直下に施文されている連続刺突文も丁寧で、更にその下に沈線1条を廻らす。

27－5は脚端部片のみの残存で、底径が14.4cmとやや大きいが、高坏の脚部であると推測する。端部付近で明確に折れるのは後述する27－7・8と同様だが、出雲2期末～3期に当たるものと考える。

27－6～9は、いずれも出雲3～4期の高坏の脚部片である。27－6は脚裾部が強く外反し、3方向の透かしが入る。27－7・8はかなり薄手の脚端部片で、ともに底径は約10cmを測る。これらは長脚無蓋高坏の脚部で、おそらく2段透かしであろうと推測する。ここまで極薄になるのもバリエーションの一端で、出雲3～4期の範疇に収まると考える。27－9は、底径14.2cmを測り、筒部が太めの様相を呈する。おそらく2段3方向の千鳥透かしであったろうと思われ、下段の三角形透かしが残存している。端部は外傾して開き、どっしりと重量感がある。また、壺の脚部の可能性も考えられる。

高坏の蓋（第27図10・11）

27－10は、つまみが付く有蓋高坏の蓋である。つまみは丸みを持たずに尖り、シャープさが際立



第26図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物④

つ。また、天井部に連続刺突文の施文が見られ、出雲２～４期の間のものと考える。

27－11の波打つような口縁部は特別なものではなく、強めのナデ調整によるものと考える。出雲３～４期のものと考える。

壺の蓋（第27図12・13）

27－12は器高が5.5cmと非常に高く、ドーム型の形状を呈する。肩部は高いが稜線は無く、丸く下りるのみで、口縁端部内面に明確な沈線を廻らす。天井部に、雑な波状文が２段施文されている。壺の蓋と考え、また、天井部にはつまみが付くと推測する。27－13は口径9.8cmと小さく、器高が高く垂直気味に下りる。通常の坏蓋よりも明らかに小形であり、壺の蓋である可能性が高い。焼成状態は悪いが、丁寧に作られている。27－12・13は出雲３～４期のものと考える。

壺（第27図14～19）

27－14・17は、口頸部や胴部にカキ目調整を施す。27－16の底部外面にはヘラ記号「—」が見られる。27－18は小形で、胴部最大径部分が強く横に張り出し、扁平な形状を呈する。口頸部は垂直に立ち、若干内傾気味であることから、有蓋の小形短頸壺であろう。27－19も口頸部がわずかに内傾気味で、肩部に蓋の端部片が溶着している。胴部最大径部分に全周する連続刺突文を施文する。27－14～19は、いずれも出雲３～４期内に収まるものと考える。27－15～19は、外内面に自然釉がかかる。

子持壺（第27図20・21）

27－20は子持壺の子壺である。頸部付け根から胴下部までの残存で、頸部はやや太く、肩部は強く張り出し、最大径以下は膨らまずに下りる。肩部に明確な沈線を１条廻らし、その直下に全周する連続刺突文を施文する。下部外面に、親壺との接合のために粘土を貼って引き伸ばした痕跡が見られ、この部分の色調の違いは顕著である。瑕と大差ない精巧な作りで、文様も明確なものである。出雲３期頃の子持壺であると考える。

27－21は子持壺の肩部片で、子壺の接合状況が見て取れる。子壺の底部内面は、棒状のもので刺したように変形しており、接合時に口頸部から差し込んだものと推測する。肩部の張りが丸く大きいもので、カキ目調整が施されていることから、出雲３期代のものであろう。

椀（第28図１～３）

28－１・２は口縁部片で、若干の湾曲を保ちながら立ち上がる。胴部に強いナデによる突帯状の段と、その下に薄く雑な波状文が施文されている。焼き歪みが大きいため復径は出来なかった。28－３は椀に付くと思われる把手で、0.8cmの細さで丁寧かつ華奢に成形されている。いずれも出雲２～３期のもので、古い様相を示す。また、高坏などに付ける装飾的な把手とも考えられる。

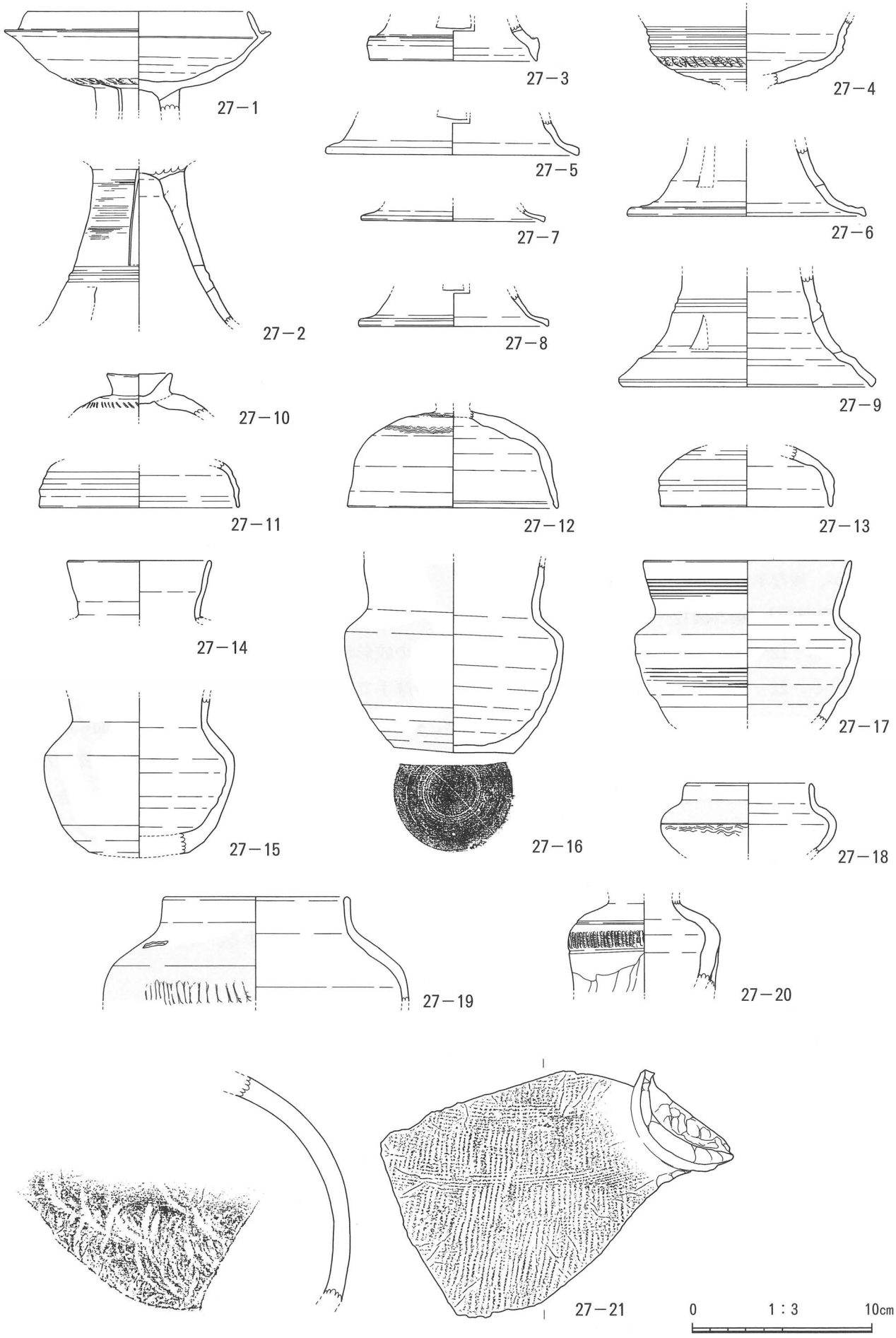
提瓶（第28図６・７・10）

28－６・７は口頸部のみの残存で、直口気味に立ち上がり、端部付近で外反する。壺の口頸部片の可能性も考えられる。出雲３～４期に該当する。

28－10は提瓶の胴部片で、外面に同心円状カキ目調整が施され、その中央にヘラ記号「×」が線刻されている。

捏鉢（こねばち）（第28図８）

28－８は捏鉢と呼称されている鉢の底部片で、円盤状の底部と、斜め上方に伸びて開く口縁部で



は自然釉がかかる部分

第27図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物⑤

成り立つものである[11]。底径は12.4cm、器壁は1.1cmを測る。口縁部は全て欠損しており、底部上面に剥離した痕跡が確認出来る。底部外面は多方向のヘラ削り、側面は回転ヘラ削りを施す。本遺跡ではもう1点出土している（40－17)。

甕（第28図９・11）

28－９は口径21.2cmを測る大形のもので、強く外反して開く。

28－11は大形の甕の頸部片で、頸部の下方に縦５本、横４本が直角に交わるヘラ記号が線刻されている。器種、ヘラ記号が付けられる位置等、あまり類例を見ないものである。

［特殊品］（第28図４・５）

28－４は９×5.5cmほどの破片で、内面が剥離しているため、厚みは不明である。外面には太さ1.0cmの突帯が貼り付けられ、それと交差するように、もう１本突帯が貼り付いていた痕跡が残る。いずれの突帯も湾曲しており、その状態は決められた形ではなく自由に屈曲している。そして、直径0.5cmの竹管文がいたる部分に押されている。しかし、前述した突帯の痕跡が残る部分に竹管文は見られないことから、突帯を貼った後に施文したことが推測出来る。成形・調整の段階での指頭圧痕は明確に残るが、全体的な印象としては雑な作りである。この破片の器種は不確定要素が多く、断定は出来ていない。28－５も突帯が貼り付けられており、通常の製品とは異なるものと推測するが、残存率が悪いため明確なことは言えない。

［窯道具］（第28図12～16）

28－12～16は、22－18と同系統のもので、甕や壺の成形時に削り取った粘土の屑であろうと思われる。22－18と形が似ているものは28－15で、やや厚手で膨らみを持つ。28－12～14はいずれも５cm未満の小形なものである。28－12は長さ3.2cm、幅1.0cm、厚み0.7cmでやや湾曲し、外面に同心円状の線刻が見える。28－13は長さ3.7cm、幅1.5cm、厚み0.8cmで明確に湾曲し、外面に強く深い沈線状のものが２条刻まれている。28－14は長さ4.8cm、幅1.0cm、厚み0.7cmで、外面には平行叩き文の跡が、内面には同心円状当て具の痕跡が残る。28－16は長さ13.1cmを測る大きなもので、ブーメランのような形状をしている。幅は細い所で2.0cm、太い所で4.2cm、厚みは1.8cmを測り、その奇妙な形状からは使用法を特定出来ない。外面は平行叩き文、内面は同心円状当て具痕で調整されていることから、大形の甕の切り屑であろうと考える。36－16もこれと類似する。ここで出土している切り屑はバリエーションに富み、様々な形を見ることが出来る。

［土馬］（第29図１・２）

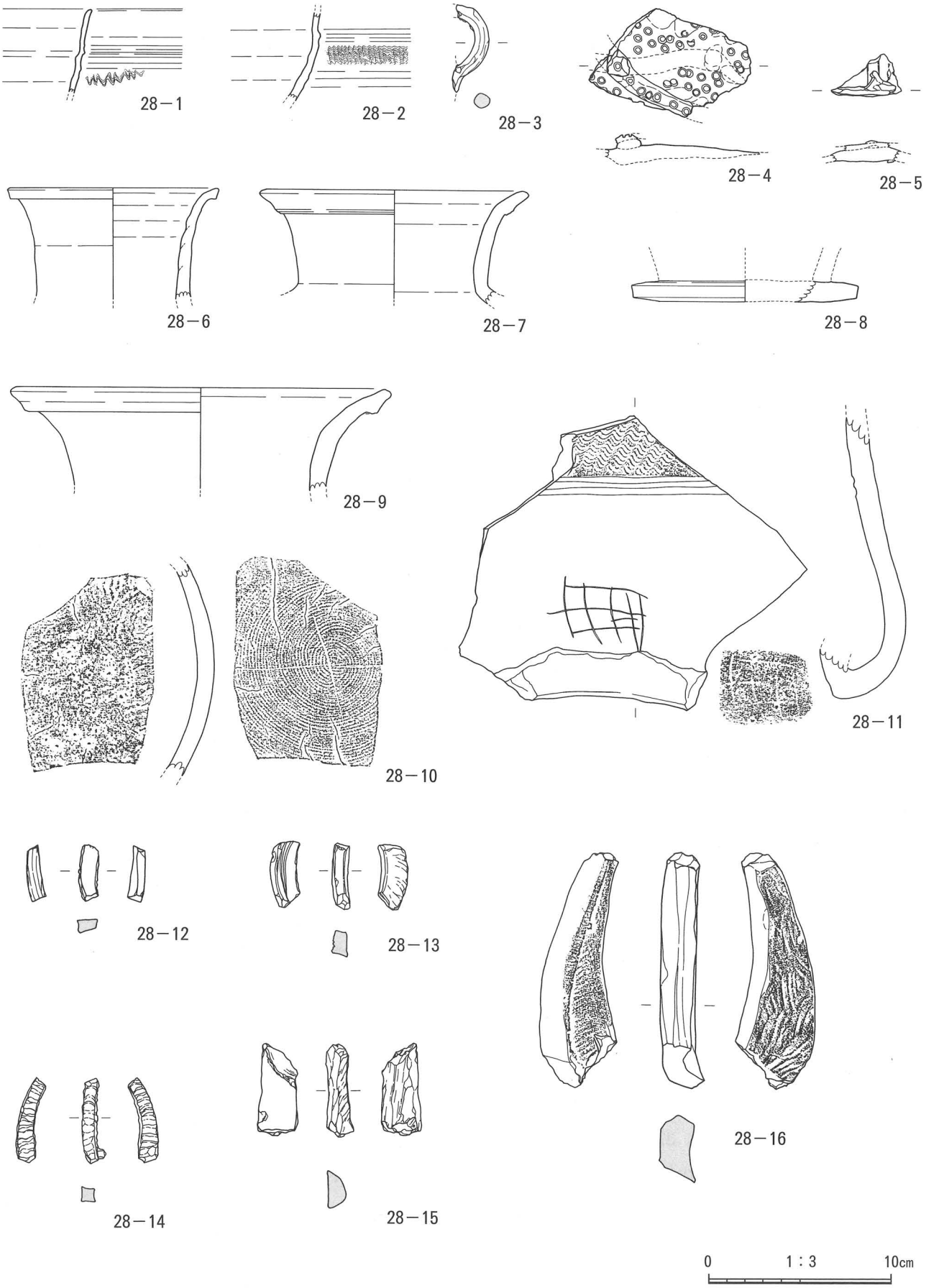
29－１は長さ3.2cmの残存で、土馬の脚端部と見られる。下方に向かって先細り、接地面は0.5cmほどの平坦面を持つ。

29－２は長さ3.2cmの残存で、29－１とは逆で下方が膨らみ、接地面は更に広がって平らな面を形成する。土馬であるかどうかは検討の余地があるが、獣脚の類の可能性が高いものと考える。

［土器溶着資料］（第29図４～12・第30図１～３）

29－４～７は、甕の胴部片に他の土器が溶着した痕跡が残るものである。29－６は坏身片が、29－７は高坏の脚裾端部片が乗って溶着している。

29－８～12は、坏蓋と坏身が様々な形態で溶着しているものである。29－８は坏蓋片の天井部外面に他の土器が乗り、29－９は坏蓋片の上に蓋坏片１セットと坏蓋片が乗る。この坏蓋の天井部外



第28図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物⑥

面には、縦横無尽に描く複数線のヘラ記号が刻まれている。

29－10・11は坏身底部片に蓋坏片が乗る。29－12は、逆さにした坏蓋内部に坏身を重ねて置き、その状態で溶着したものである。同様形態の資料は、他に12－10・38－１～３がある。

30－１は坏蓋片の外面に他の土器片が溶着し、工具のようなものが当てられたことによって大きく歪んだものである。30－２は蓋坏片が３セット溶着しており、大きく歪んでいるのが見て取れる。どちらも出雲３～４期のものである。

30－３は20×20cm以上を測る大きな甕の胴部片に、他の甕胴部片や坏身片、また、窯壁塊などが溶着したものである。

【土師器】

甕（第29図３）

29－３は甕で、口縁端部のみの残存となる。

SX01Ⅰ黒色土下層 出土遺物（第31～39図）

【須恵器】

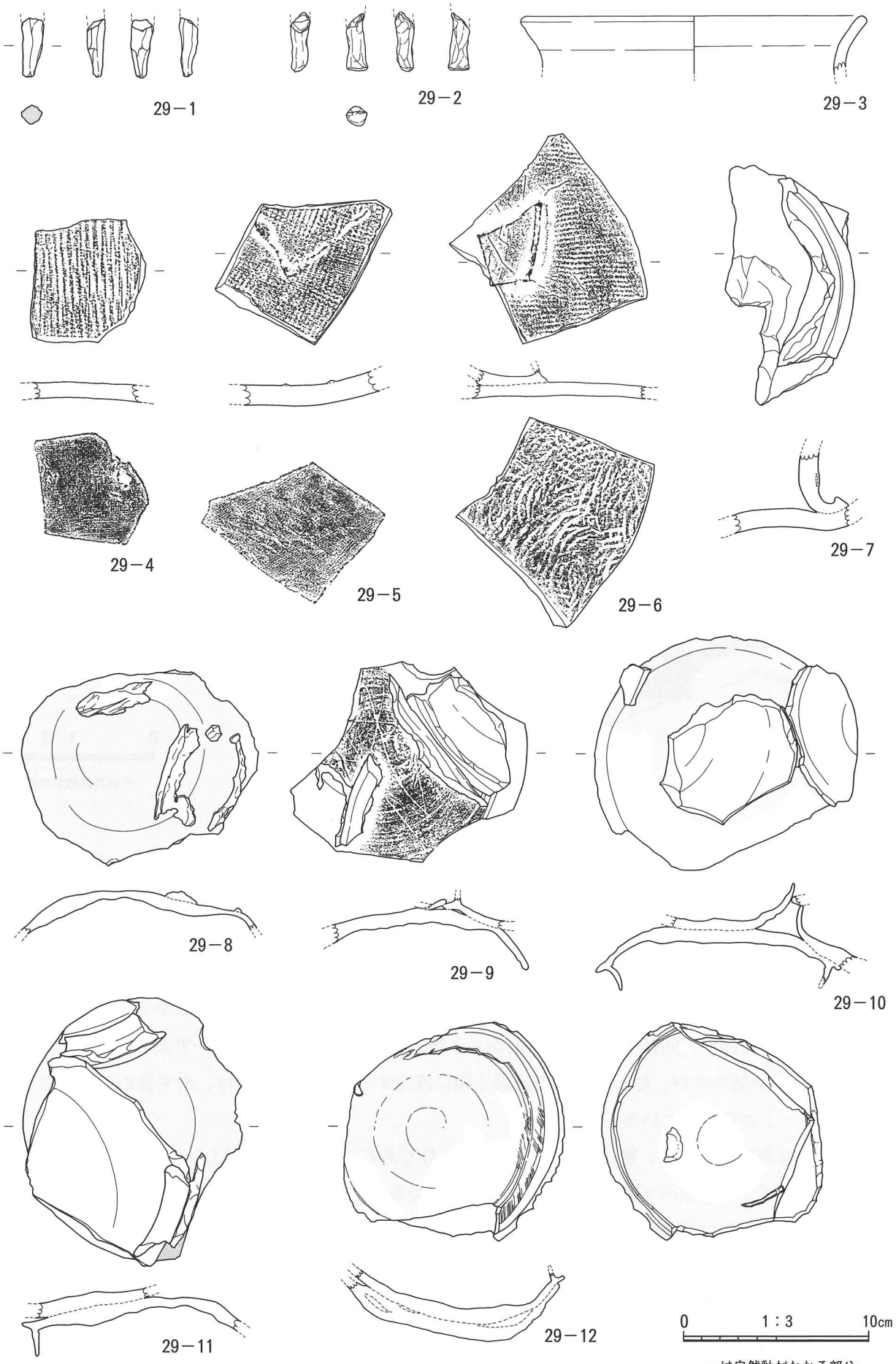
坏蓋（第31図１～28・第32図１～32・第33図１～６）

31－１は器高4.5cmを測り、肩部から口縁部までが高く、垂直に下りる。回転ヘラ削りは丁寧に施され、端部内面の段も明確である。31－２も31－１と同様、器高が高く丸みを保つ天井部である。回転ヘラ削りは丁寧で肩部まで及ぶ。端部内面には明確な沈線を廻らし、先細る。また、天井部外面に重ね焼きの痕跡が残る。31－２は、壺の蓋の可能性も考えられる。31－１・２は、形状と調整を総合的に判断すると、出雲２～３期に当たると考える。

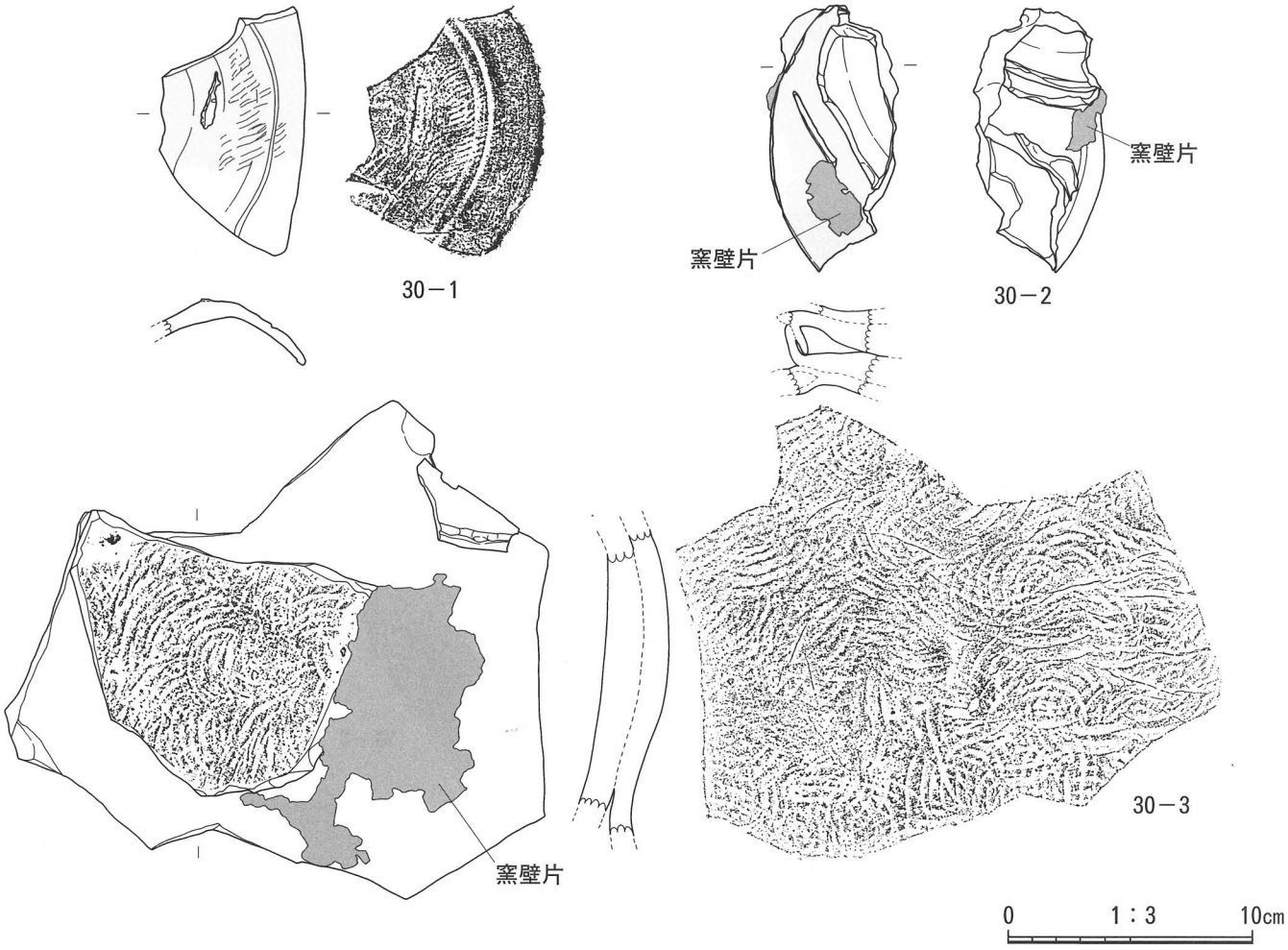
31－３～19は、天井部が低く扁平な形状を呈しているが、回転ヘラ削りは丁寧なものが多く、端部内面に明瞭な段が付くことを共通点とする。31－３の天井部外面には、ヘラ記号「×」が強く太い線刻で刻まれ、31－５の口縁端部外面には、端部から0.9cmほどの幅で、斜めに調整痕が走る。31－20～28・32－１～４は、口縁部が内湾気味に入り込む形状のものが多く、端部内面のやや高い位置に沈線を廻らす。31－３～28・32－１～４は、いずれも出雲3期に収まるものと考える。

32－５～８はやや変則的な形状を呈しており、32－５は肩部が直角に屈曲し、端部は膨らむ。32－６は口径15.2cmと大きく、全体的に薄手である。端部内面の高い位置に明確な沈線を廻らし、天井部外面には強く深いヘラ記号「―」が線刻されている。32－７の天井部はドーム状に丸みを保ち、口縁部は反って外傾する。32－８は、口縁部が直線的に外傾して開く。32－５～８は様々な形状を持つものが含まれるが、同年代内のバリエーションの一端として考えている。よって、出雲３期の範疇に収まるものと考える。

32－９～31は、いずれも端部内面に段が付くものである。ごくわずかに薄く付くもの、明確に付くものなど様々である。32－32は肩部から口縁部のみの残存で、肩部外面に重ね焼きの痕跡とも考えられる、小さな粘土の塊りが付着している。これが意図的に付けられたものかどうかは不明であるが、窯道具としての機能を果たしていた可能性も考えられる。32－９～32の共通点としては、回転ヘラ削りが粗雑になってくることが第一に挙げられる。削りを中心から施さなくなり、回転不測、単位が小さく不均一という痕跡が目立ってくる。形状自体は３期のものと大差ないが、調整段階での変化が見て取れ、出雲３～４期への移行期のものと思われる。



第29図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物⑦



第30図　SX01Ⅰ黒色土上層出土遺物⑧

は自然釉がかかる部分

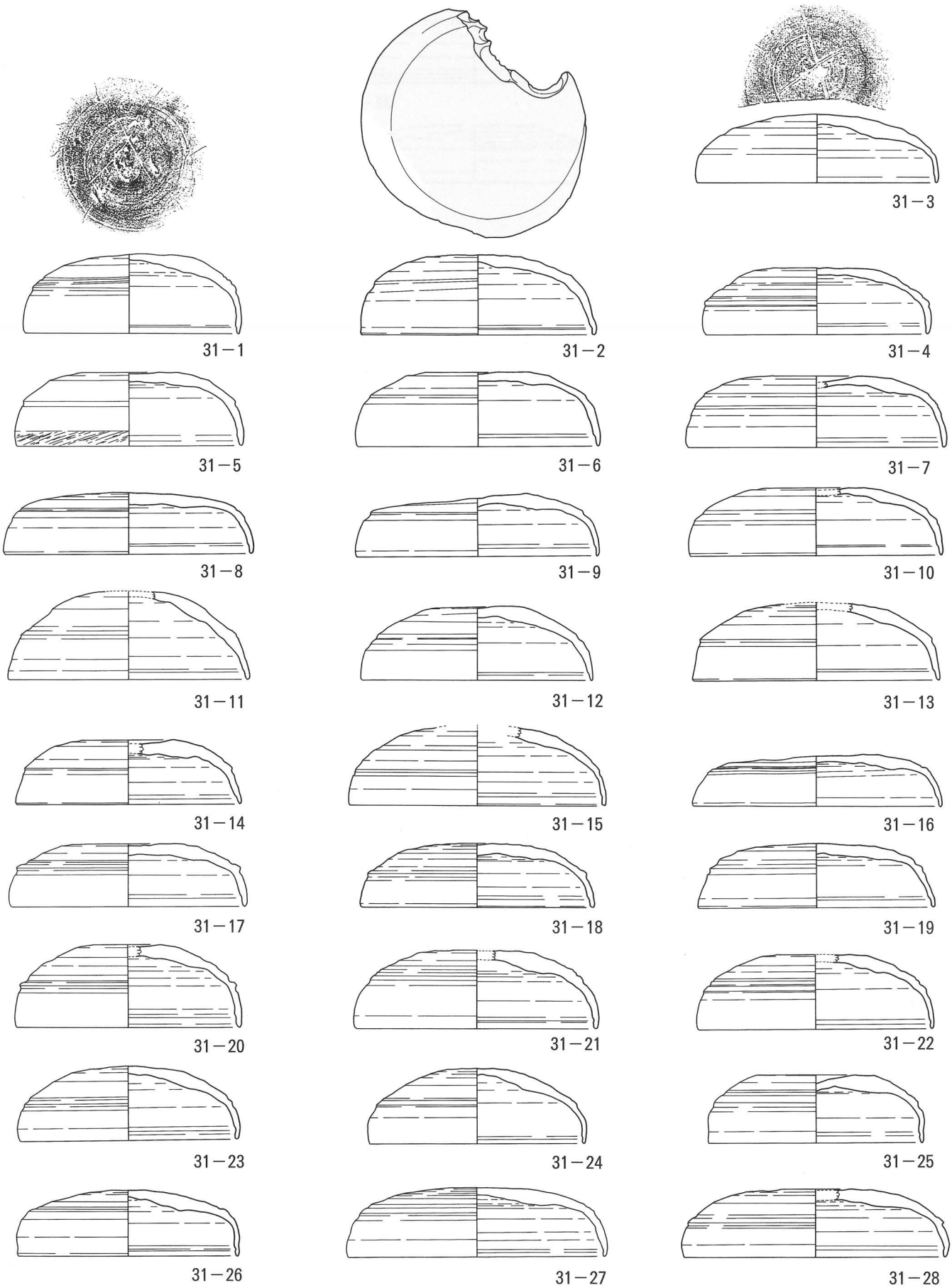
33－1～5は、端部内面に沈線を廻らすものである。33－4・5の天井部外面にはヘラ起こし痕が、33－6には、ヘラ記号「×」が明確に刻まれている。いずれも出雲4期に相当する。

坏身（第33図7～21・第34図1～23）

33－7の立ち上がりはほぼ垂直に立ち、2.0㎝の高さを測る。口縁部のみの残存だが、出雲2期に該当する古めの坏身である。33－8の坏部は、扁平だが若干の膨らみを持ち、やや厚手でどっしりとした印象を持つ。回転ヘラ削りは中心から丁寧に施し、単位も大きく均一である。立ち上がりは1.4㎝とやや低めだが、総して見ると出雲2期に該当する。底部外面には、やや強めの線刻でヘラ記号「―」が刻まれている。

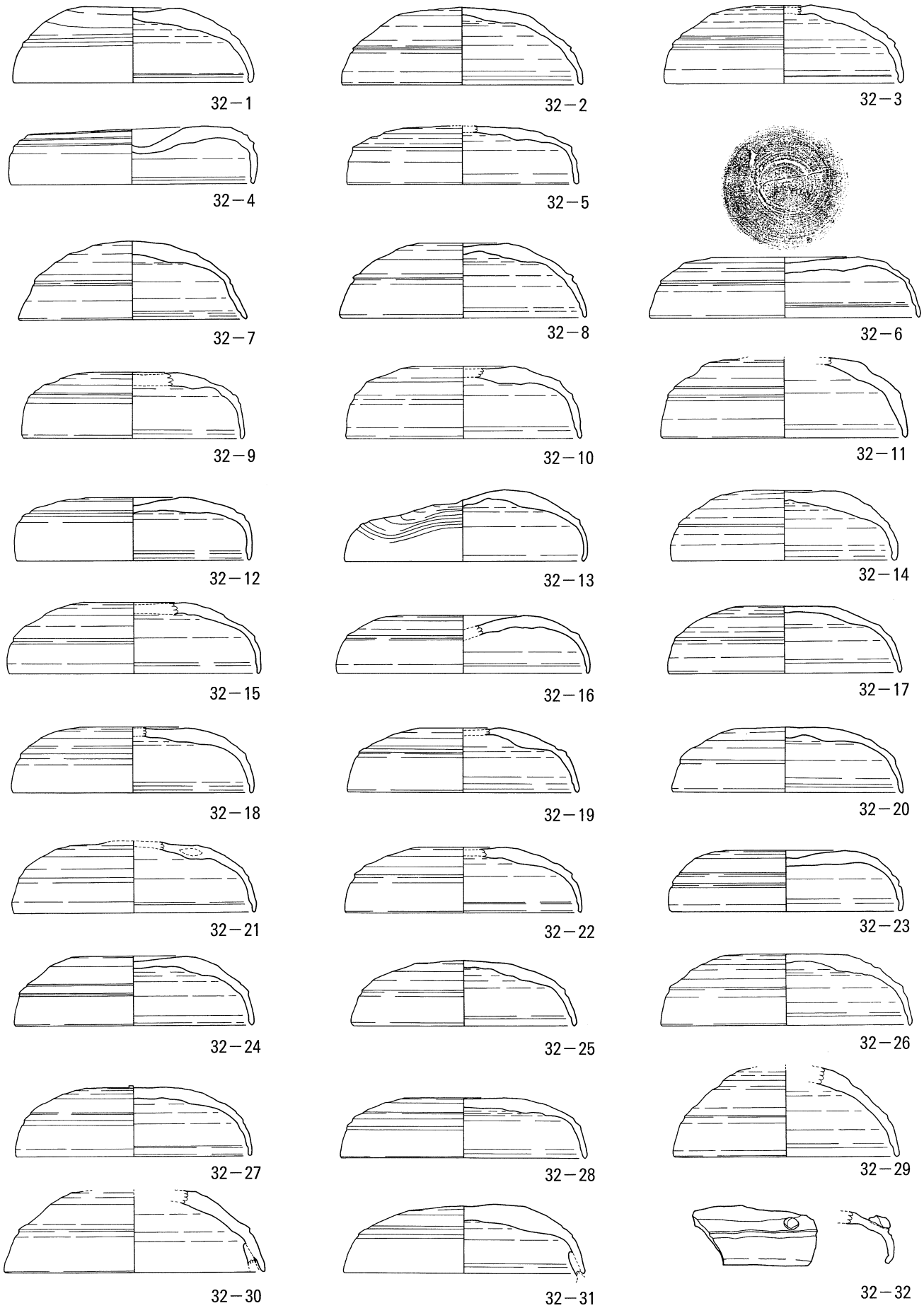
33－9は調整が丁寧で、整った形状を呈する坏身である。立ち上がりは1.5㎝の高さを測り、坏部は浅く扁平で、回転ヘラ削りの単位は大きく均一である。出雲2～3期のものと考える。また、外内面に変則的な自然釉がかかっており、底部外面に残る重ね焼きの痕跡であると思われる。

33－10・11は、口径がやや大きく坏部が深い。33－11の受部は三角形状の断面を呈し、水平に尖って突出する特徴的な形状である。33－12～21は坏部が浅く扁平形を呈し、立ち上がりが短く肥厚して、端部は丸く収める形態である。33－14は端部が内湾気味で、33－19～21は底部外面に自然釉がかかり、重ね焼きの痕跡が顕著に見られる。

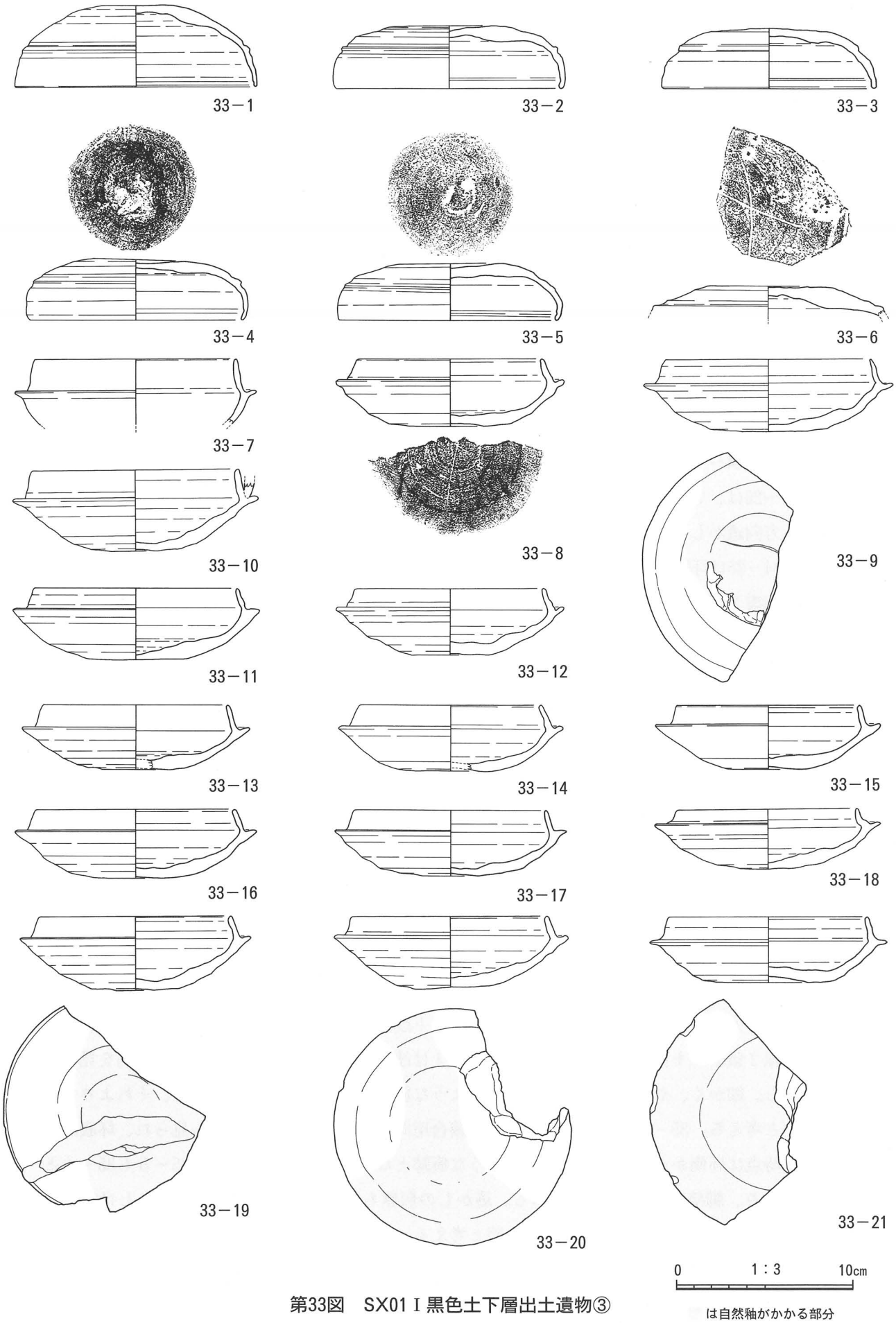


第31図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物①

は自然釉がかかる部分



第32図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物②



第33図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物③

は自然釉がかかる部分

34－１～７は全体的に薄手の作りで、立ち上がりの端部がわずかに肥厚する。34－５・６は、底部外面に重ね焼きによる自然釉の痕跡が見られる。34－８～12は立ち上がり・受部ともに尖り気味である。34－１～12の回転ヘラ削りは、単位が大きく均一で削りも深く、丁寧に施している。調整が全体的に丁寧であることなどから、出雲３期に当たるものと考える。

34－13～15は、立ち上がりと坏部に特徴を持つものである。34－13の立ち上がりは長いが、強く内傾しているため、高さ1.0㎝に留まる。34－14の立ち上がりは1.5㎝で、坏部は深く丸みを保つ形状を呈する。34－15は薄手の作りである。いずれも回転ヘラ削りが雑になる傾向で、出雲３～４期に当たるものとする。

34－16～23の立ち上がりは、多種多様なバリエーションが見られる。34－16～18は、短い端部が肥厚して立ち、34－19は断面が三角形状を呈する。34－20～23は、尖り気味で強く内傾する。いずれも回転ヘラ削りの簡略化が進んでおり、削り残しや単位の不均一さが目立つ。よって、出雲４期に当たるものと考える。

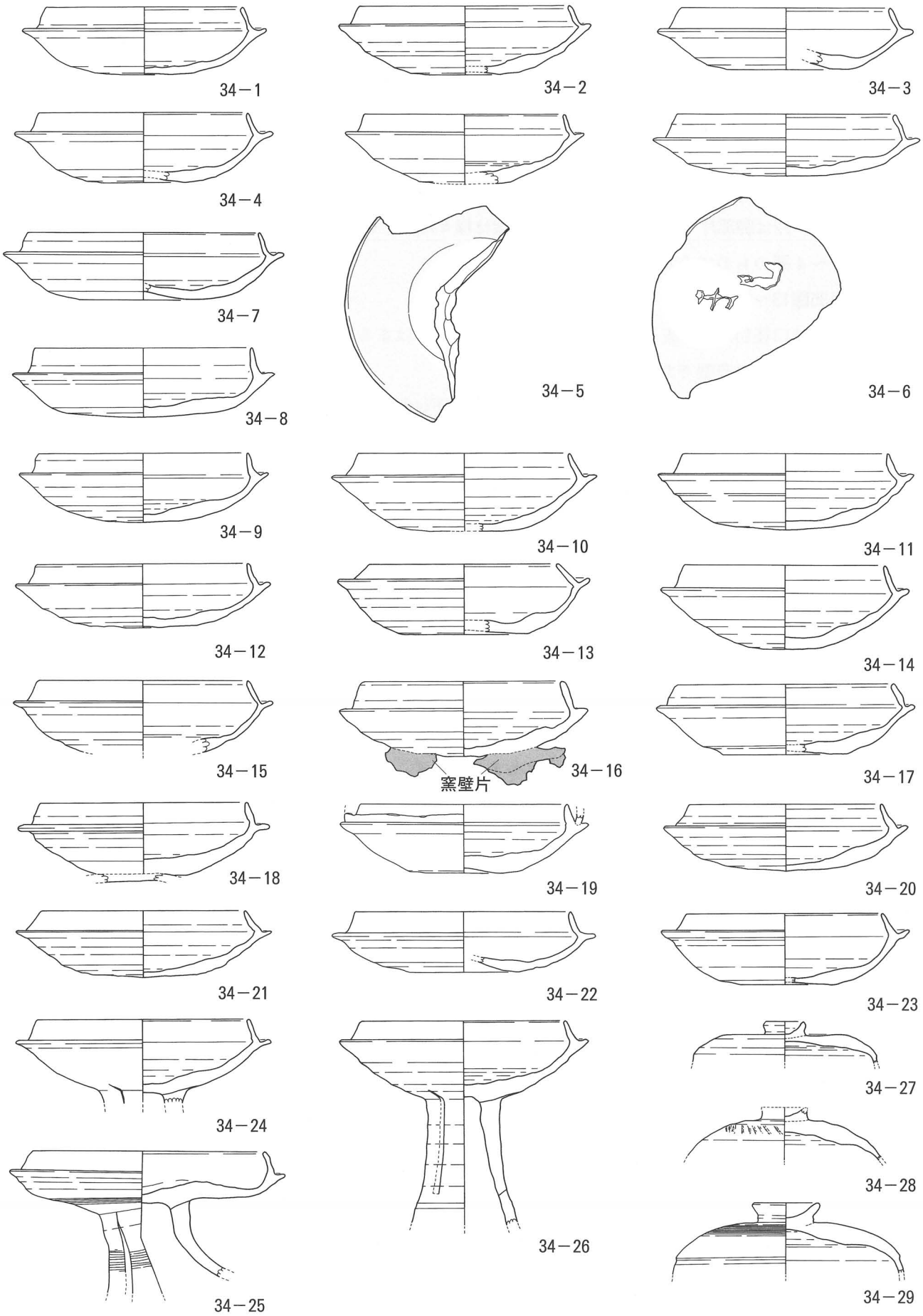
高坏（第34図24～29・第35図１～12）

34－24～26は、いずれも長脚有蓋高坏である。坏部は浅めで立ち上がりは低く、脚部はやや太めで２段３方向透かしを入れる。透かしの上段は切れ目に近いもので、出雲編年の有蓋高坏Ｂ型に該当する。34－25は坏底部と脚部に同心円状のカキ目調整を施し、精密に作られている様子が窺える。これらは出雲２期末～３期のものと考える。

34－27～29は、有蓋高坏の蓋で、つまみが付くものである。34－27は口径が11.0㎝以下で小さく、全体的に角張った形状を呈する。34－28は天井部が丸みを保ち、全周する連続刺突文を施文する。34－27・28のつまみの径は、ともに約2.5㎝を測り、やや尖るが低く、ボタン状を呈する。34－29は天井部が丸みを保ち、緩やかなカーブを描いて肩部に下りる。天井部外面には同心円状のカキ目調整を施している。つまみは高く尖って外傾し、実用的な形状を呈する。いずれも出雲２～３期に該当する。

35－１～５は長脚無蓋高坏で、35－１～３は坏部片、35－４・５は脚部片の残存である。35－１～３はいずれも明確な突帯を２条付け、その下に全周する連続刺突文を施文している。この中でも特に、35－３は底部が全面残るもので、間隔が狭く、詰まった刺突文が非常に丁寧に施文されている。また、脚部との接合面が明確に観察出来る。ここには、脚部が接着しやすいように刻む同心円状の溝がはっきりと残っている。35－４は脚部径2.8㎝という細さで筒状を成し、２段３方向に細長い透かしを入れている。上段は切れ目で貫通し、下段は三角形である。上段と下段の間に、通常ならば沈線２条やカキ目を施文するのだが、35－４は波状文を施文するという、あまり例を見ないものである。細かく、やや雑ではあるが、このような施文は出雲３期には見られず、それよりも以前のものと考える。35－３で見られた坏底部の接合用溝は、35－４の脚部側にも見られ、坏底部と接着した時点に坏側から型が写って、このような痕跡となったものと推測する。35－５も35－４とよく似ており、脚部径2.4㎝の細さである。透かしの形態も同様であるが、上段の透かしは貫通せず、切れ目である。いずれも、出雲２～３期と考える。

35－６は脚裾部のみの残存で、強く外反して横に張り出す。裾部には幅広で深い沈線を３条廻らし、端部は外傾する側面を持つ。角張った脚裾部で、透かしの痕跡も見られ、壺の脚部の可能性も



第34図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物④

は自然釉がかかる部分

考えられる。いずれにしても古めの様相を示し、出雲２～３期に相当する。

35－７は瓹の口頸部のようにも見えるが、高坏の脚端部と考える。出雲編年の長脚無蓋高坏Ｄ２型に当てはまり、出雲３期のものと考える。

35－８・９は、２段３方向の千鳥透かしが入る高坏の脚部で、35－９は太い筒状を呈し、下方の開きは直線的で緩やかである。出雲編年のＢ型に当てはまり、出雲３期に該当する。

35－10～12は脚部片下方の残存である。形状は様々だが、いずれも２段３方向の透かしを入れる。出雲３～４期のものである。

瓹（第35図13～16）

35－13は口径14.0㎝を測り、出雲編年のＡ４型に当てはまる瓹の口縁部片である。大きく開く口縁部は出雲３期の典型である。

35－14の肩部は水平気味に張り出すが、最大径以下は膨らまずに下りる。最大径部分に全周する連続刺突文を施文し、その下から底部にかけてカキ目調整を施す。胴部にカキ目調整が入るものは、より古い年代を示すと思われ、出雲２～３期に該当すると考える。

35－15は、肩部が強く張り出しつつも球状を呈する。最大径付近に、全周する連続刺突文を狭い間隔で施文し、その上下に明確な沈線を２条廻らす。35－16はごつごつした胴部外面全面に、厚い黒色自然釉がかかっており、連続刺突文は薄っすらと確認出来る。子持壺の子壺の可能性も考えられる。

壺（第35図17～22）

35－17～21は、直口壺の口頸部から胴部の破片である。35－17は口径8.8㎝で、ほぼ垂直に立ち上がる。35－18～21は、いずれも口径10㎝前後、口頸部の長さは４㎝未満で収まる。

35－22は小形の短頸壺で、最大径部分はあまり張らず、全体的に厚手で扁平な形状を呈する。口頸部はわずかに内傾しており、有蓋の可能性が考えられる。

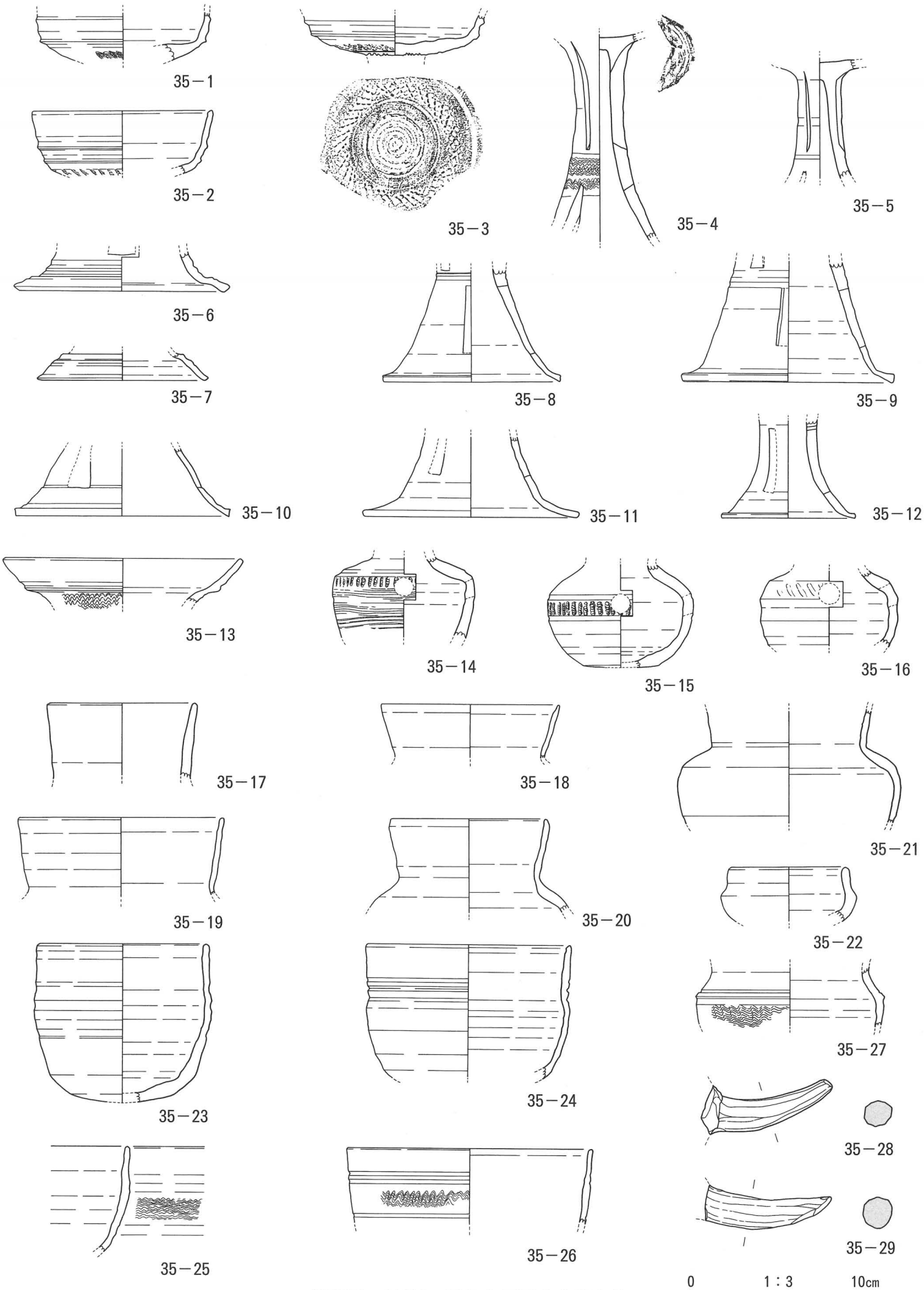
椀（第35図23～29）

35－23～25は、口縁部から胴部下方までほぼ垂直に下り、底部は丸みを保つ平底で、全体的に強く稜線が入る。ジョッキのような形状を呈し、胴部中央付近に把手が付いていた可能性が考えられる。35－26は口径が14.4㎝と大きく、口縁部にやや雑な沈線を２条廻らす。その下の波状文は比較的丁寧な施文で、更にその下に沈線を１条廻らす。残存状況が悪く、復径は推定であることを明記しておく。35－27は胴部途中のみの破片で、最大径部分には明確な沈線２条で挟んだ突帯を廻らし、その下に丁寧な波状文を施文する。35－28・29は、いずれも長さ7.0㎝、直径1.6㎝を測る角状の把手で、端部に向かって尖る。調整は非常に丁寧で、美しい面取りを施す。これらはいずれも古い様相を示し、出雲2期のものと考える。

子持壺（第36図１・２）

36－1は、子持壺の子壺である。頸部はやや太く、肩部の張りは緩く丸みを持つ形状を呈する。肩部に明確な沈線を２条廻らす以外、施文は見られない。下方外面には粘土が付着し、底部内面には棒状のもので突いた痕跡が見られる。いずれも、親壺との接合時の痕跡である。底部中央に穿孔は見られない。

36－２は、子壺が剥離した部分の破片である。丸みを持って張る形状を呈する。外面は平行叩き



第35図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物⑤

文、カキ目調整、内面は同心円状当て具痕が明確に見られるものである。類似する形態のものは他に27－21・43－11がある。

提瓶（第36図３～５）

36－３～５は、いずれも上部を接合し、下部を貼り付けるのみの提瓶の把手である。36－３は細く精巧な作りで独特の形状を呈し、出雲編年の１型にはまると考える。36－５は把手部分が6.0cmと長く、滑らかな調整を施す。

甕（第36図７～11）

36－７は口縁部の破片で、緩やかに外反し、端部はつまみ出すように尖る。36－８・９は大形の甕の口頸部片で、端部は２cm以上の面を持ち、いずれも形骸化した甕の口縁部を呈する。頸部の沈線・波状文は明確で、強めの施文が施されている。36－10は８×5.5cmの胴部片で、外面の色調が暗灰色と赤灰色に線を引いたかのように分かれている。焼成時、この部分に何かが当たり、赤灰色の方が焼成不良に終わったのではないかと推測する。36－11は胴部片で、外面には、ガラス質に溶けた自然釉が上方から垂れ落ちる状態で固まっている。36－10のような資料は、窯跡出土遺物であることを如実に示す好資料である。

高台付坏（第36図13）

36－13は高台が付く底部片で、高台は1.4cmと高く垂直に立ち、端部は肥厚して丸く、接地面はわずかである。高広ⅣＡ期に該当する。

［蓋坏セット資料］（第36図12）

36－12は、坏蓋と坏身がセットの状態で組まれて焼成し、溶着したものである。大きな歪みはなく、それぞれ天井部・底部は欠損している。坏蓋の口縁部は非常に薄手で、直線的に下りる一方、坏身の立ち上がりは非常に厚手で低いものである。坏蓋と坏身の形状の変化は同軸ではなかったという可能性を考えさせられる資料である。

［特殊品］（第36図６）

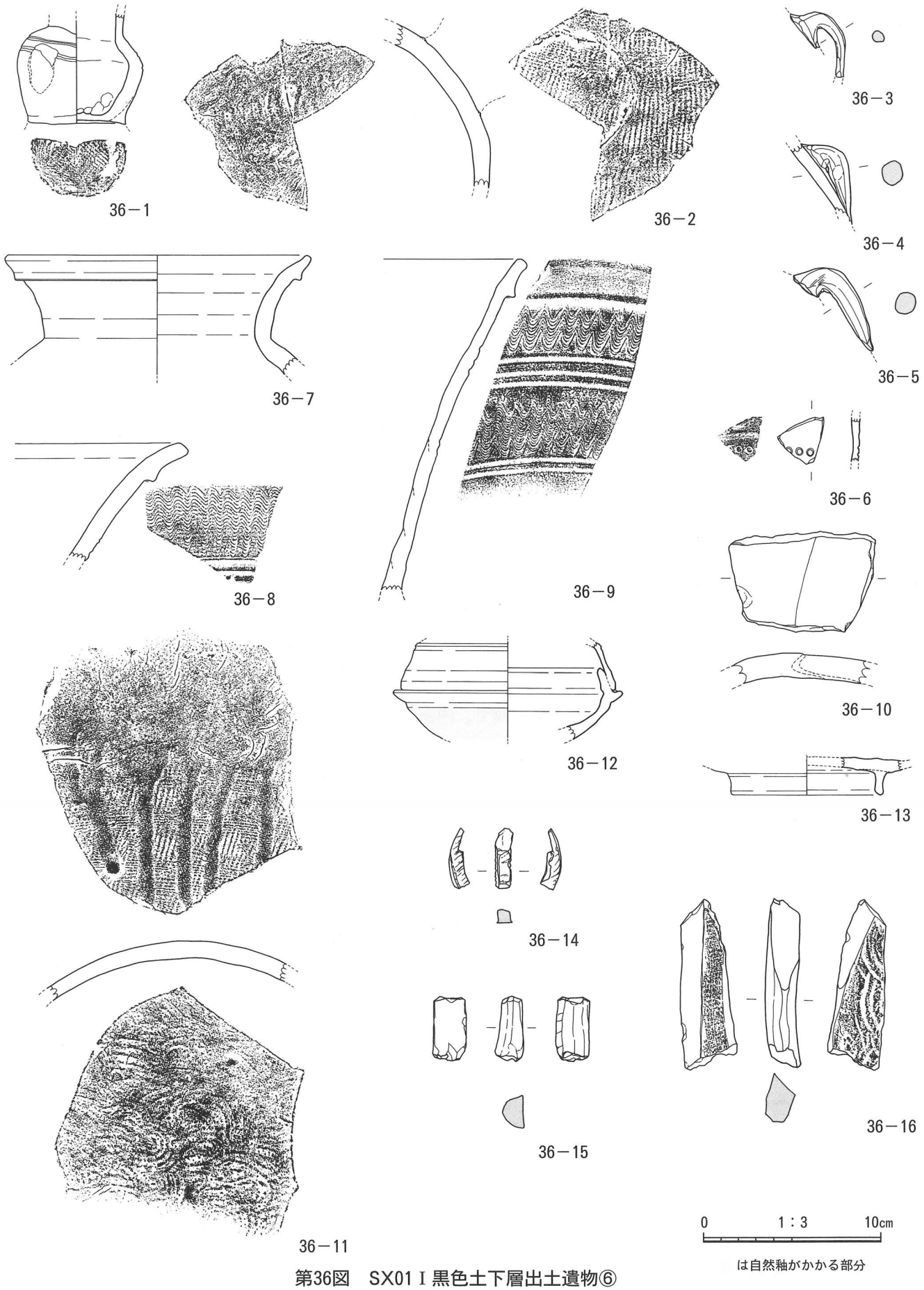
36－６は、残存率が悪いため器種は不明であるが、器壁が0.5cmと薄く、外内面ともに回転ナデ調整で、外面に直径0.5cmの竹管文が３つ並んでいる。この竹管文は前述した28－４のものと酷似しており、同一個体か、または同じ原体を使用した可能性も考えられる。

［窯道具］（第36図14～16）

36－14は長さ3.5cm、幅0.8cm、厚み0.8cmの小形のもので、28－12～14と類似している。36－15は長さ3.7cm、幅1.9cm、厚み1.2cmを測り、22－18・28－15と同形態のものである。36－16は28－16と同形態で、長さは9.7cm、幅は細い所で2.0cm、太い所で3.1cm、厚みは1.5cmを測る。外面に平行叩き文、内面に同心円状当て具痕が見られることから、大形の甕から排出された切り屑であろう。これらは二次焼成を受けておらず、製品になっている他の須恵器と同様の焼き具合である。これは切り屑になった段階で、焼かれていない状態のまま窯に入れられたことを示す。この小さな切り屑は、窯の中で製品が転ばないように噛ませる役割を果たしていた可能性も考えられる。また、池ノ奥窯跡[12]や山津窯跡[13]での出土例も確認されている。

［土器溶着資料］（第37図１～10・第38図１～６・第39図１～３）

37－１は甕の胴部片で、外面に付着した他の土器の端部径は約10.0cmで復元が可能である。この



第36図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物⑥

径から考えると、上に乗っていたのはおそらく高坏の脚部か、もしくは瑳の口頸部ではないかと推測する。37－２は８×６㎝の窯壁小塊の上に坏身片が乗って溶着したものである。

37－３～６は、坏蓋を主とする残存状態の溶着資料で、37－６は、坏蓋の天井部に７㎝大の甕の胴部片が溶着している。坏蓋の形状から出雲３～４期のものと考える。

37－７～10は、坏身を主とする溶着資料で、37－７は蓋坏セットの上に、坏蓋が逆さの状態で溶着している。37－８は坏身小片が、37－９は蓋坏片セットが、37－10は器種不明の須恵器片が、それぞれ底部外面に溶着し、自然釉もかかっている。いずれも、蓋坏の形状から出雲３期のものである。

38－１～３は、逆さにした坏蓋内部に坏身を重ねて置き、その状態で溶着したものである。38－１は蓋坏片３個体、38－２は蓋坏片３個体と甕の胴部片、38－３は蓋坏４個体が折り重なるようにして積まれている。今回の調査では同じような溶着資料が計５点出土している（他に12－10・29－12)。

38－４は蓋坏片４セット、合計８個体が溶着している。最も残存が良い蓋坏片１セットをベースにして、その下に１セット、上に２セットが隣合わせで乗っている。これは、窯の中で満遍なく焼けるように、蓋坏セットを互い違いに重ねて詰めた様子が窺える好資料である。

38－５は15㎝大の大きな甕の胴部片に、坏蓋片が溶着している。

38－６は瑳と瑳、加えて坏身片が溶着するという珍しいものである。

39－１～３は、子持壺の脚部の破片に、蓋坏類等が溶着しているものである。39－１は、外面に蓋坏小片２セットが溶着している。明確な沈線が３条廻り、その沈線に平行する位置で、楕円形透かし（推定４×2.5㎝）が４方に見られる。この透かしは類例がなく、極めて珍しいものと言える。また、外面は平行叩き文、カキ目調整が明確で、内面は比較的丁寧なナデが施されている。39－２は、外面に坏身の底部片が溶着している。上方に２条、下方に３条の沈線が廻り、三角形透かし（推定７×７×4.5㎝の二等辺三角形）が１方に見られる。外面にはうっすらとカキ目調整が残る。39－３は、２枚の子持壺の脚部片が、外面合わせの状態で溶着するものである。大きい方の破片には３条の沈線が廻り、小さい方の破片には長方形透かし（残存で10×２㎝）が２方に見られる。調整はいずれも同一で、外面は薄い平行叩き文、カキ目、内面は粗いナデが施される。

３つの破片はいずれも大きく歪み、他器種片の溶着、自然釉のかかり具合などから、二次焼成を受けたものと考える。破片の状態になった後、焼成時の他器種を支えるための台のような役割を果たしたのではないかと考える。

【土師器】

甕（第39図４～６）

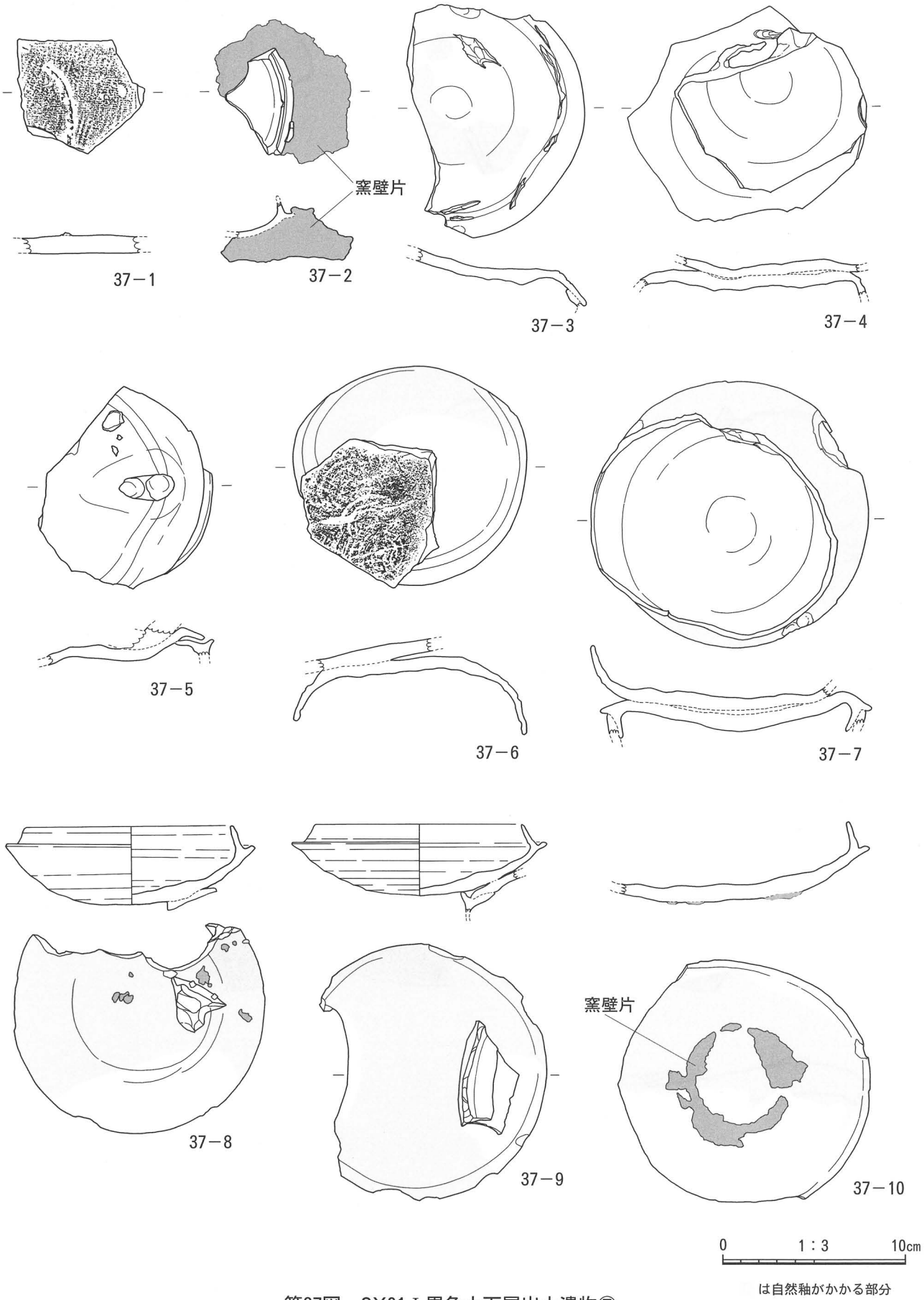
39－４～６は土師器の甕の口縁部片で、39－４・５は頸部が緩やかで外反して開く。39－６はやや直線的に開き、明確に屈曲して下りる。

SX01Ⅱ暗茶褐色土 出土遺物（第40・41図）

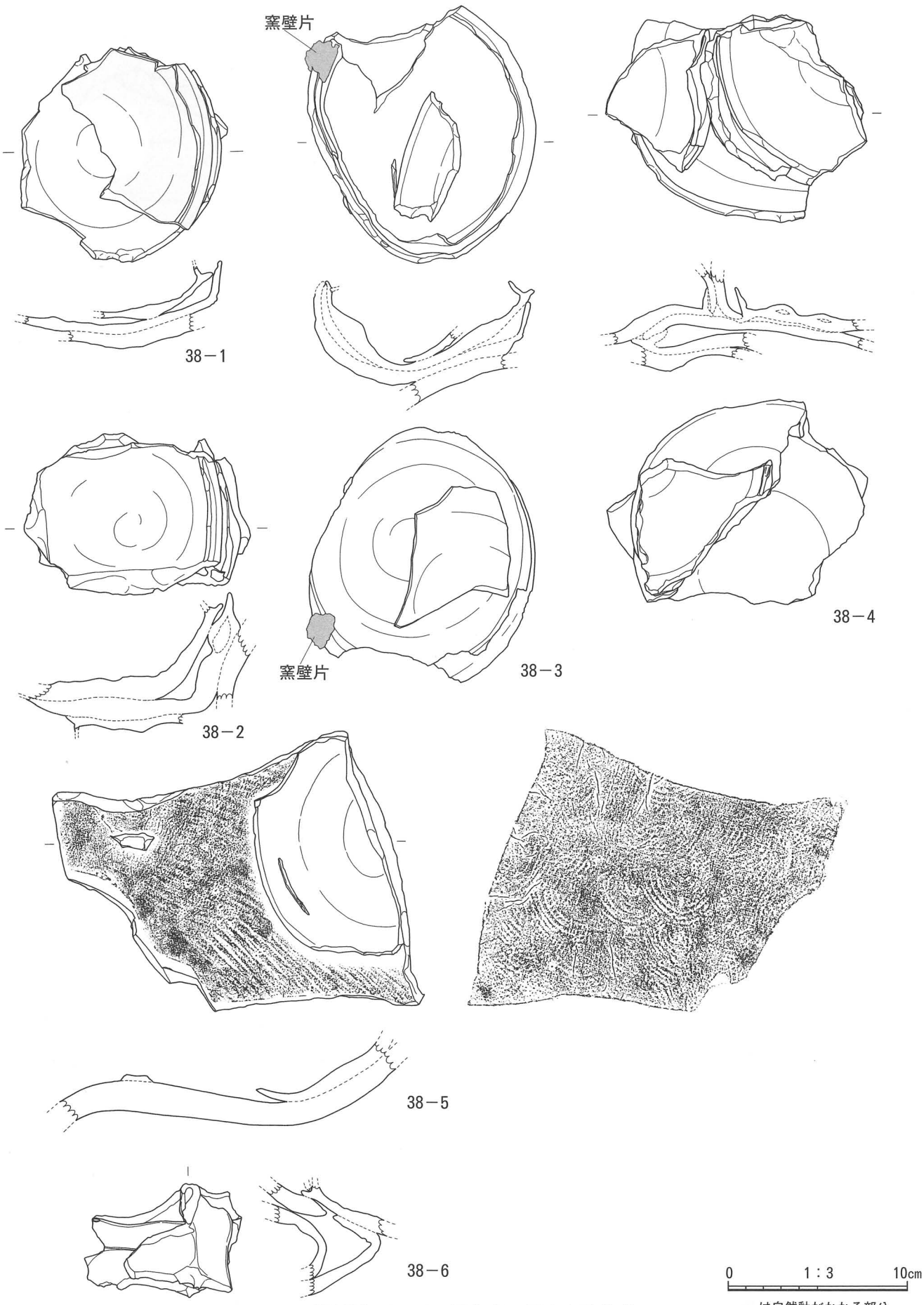
【須恵器】

坏蓋（第40図１～４）

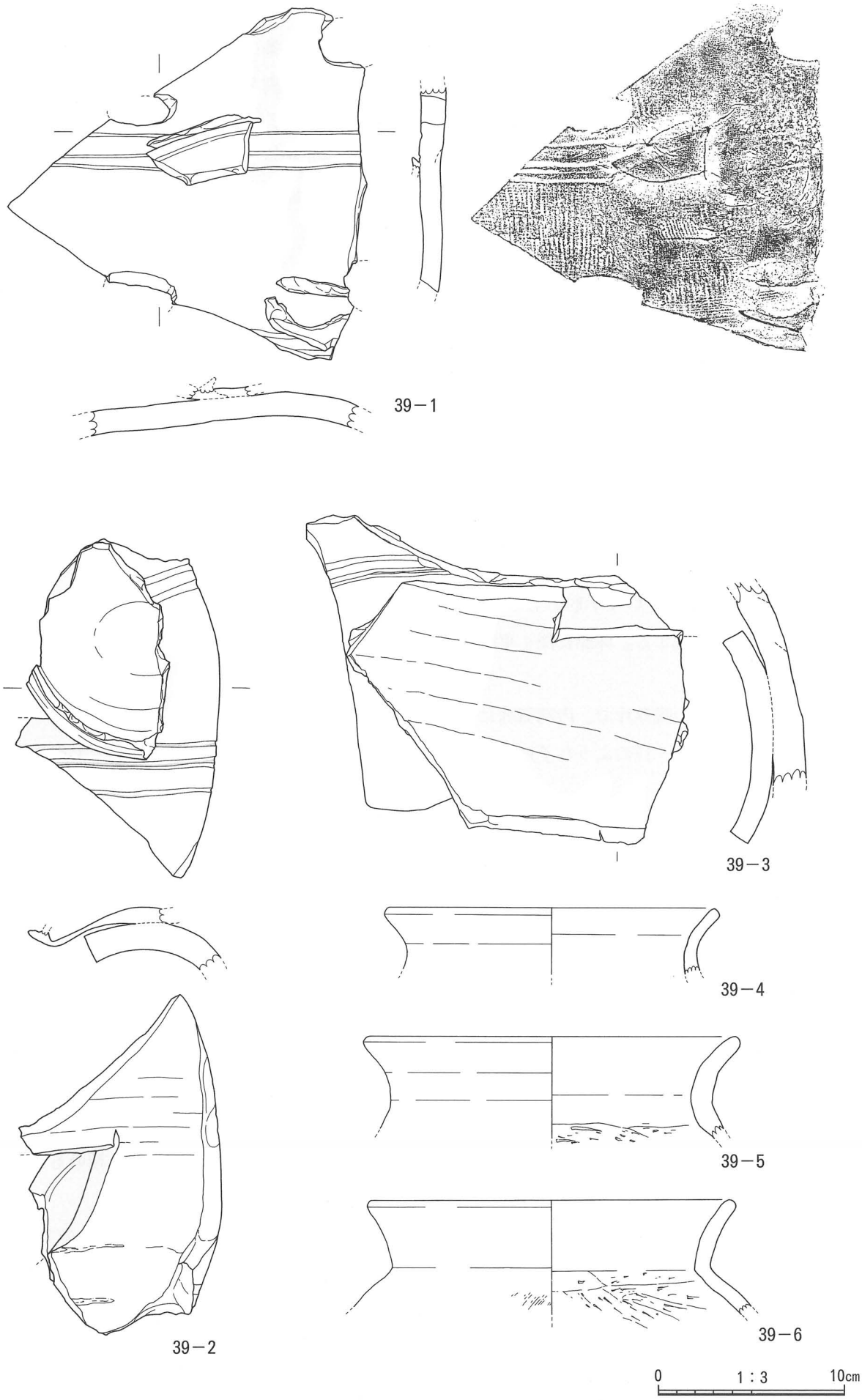
40－１・２は肩部から口縁部までが高く、器高も4.5㎝と高い。単位が大きく均一な回転ヘラ削



第37図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物⑦



第38図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物⑧



第39図　SX01Ⅰ黒色土下層出土遺物⑨

は自然釉がかかる部分

りを施し、肩部には強いナデによる明確な稜線と、極細の沈線１条を廻らす。口縁部は内湾して下り、端部内面には強く明瞭な段を付ける。これらの様相から、出雲２期に該当すると考える。

40－３の器高は4.6cmとやや高いが、肩部は張らず口縁部まで下り、沈線も幅広で浅いものである。端部付近でわずかに内傾し、内面に段や沈線は付かない。40－４は厚手の作りで、天井部は低く扁平形を呈し、口縁部が短く肥厚している。これらはともに回転ヘラ削りが雑になっており、出雲４期に当たる。

坏身（第40図５～11）

40－５は立ち上がりが1.9cmと非常に高く、わずかに波打ちながら直立し、端部内面に明確な段を付ける。坏部は全く張らず、底部の回転ヘラ削りは単位が大きく丁寧なものである。40－６も立ち上がりが1.7cmと高く、端部に段は見られない。どちらも出雲２期に相当するものと考える。

40－７は全体的に薄手の作りで、坏部が浅く扁平な形状を呈する。立ち上がりは1.2cmと低く直線的で、内傾斜はわずかである。40－８・９は坏部が深めで丸みを保つ。40－７～９は、回転ヘラ削りの単位は小さいが丁寧な作りであり、出雲３期に該当すると考える。

40－10は立ち上がり・受部のみの残存で、低く肥厚して、外反気味に強く内傾するという特異な形状を呈する。立ち上がりの低さから、出雲４期のものと推定する。

40－11は口径9.0cmという小形のもので、出雲６期の典型と考える。立ち上がりは非常に低く薄手で尖り、強く内傾する。坏部は深く平底を呈する。

壺の蓋（第40図12）

40－12は口縁部の残存片で、内湾気味に下り、端部は明確に外反する。端部内面に面を持ち、若干の丸みを保つ。16－17のような子持壺に伴う蓋とも考えられるが[14]、残存率が悪いため明確なことは言えない。

高坏（第40図13）

40－13は長脚無蓋高坏で、坏底部から脚部上方の残存である。脚部は2.4cmという細さで筒状を呈する。坏底部外面には全周する連続刺突文を施文し、脚部には２段３方向の透かしを入れている。透かしの形態は、貫通しない切れ目であることが上段のみで確認出来る。この高坏の透かしはやや特殊である。３方向透かしの場合は均等に配置するのが通常であるが、40－13は90度ずつ、４方向位置に切れ目を入れ、そのうち１方向だけが入っていない。意図的なものか、もしくは１方向のみを入れ忘れたかは不明である。出雲４期に該当する。

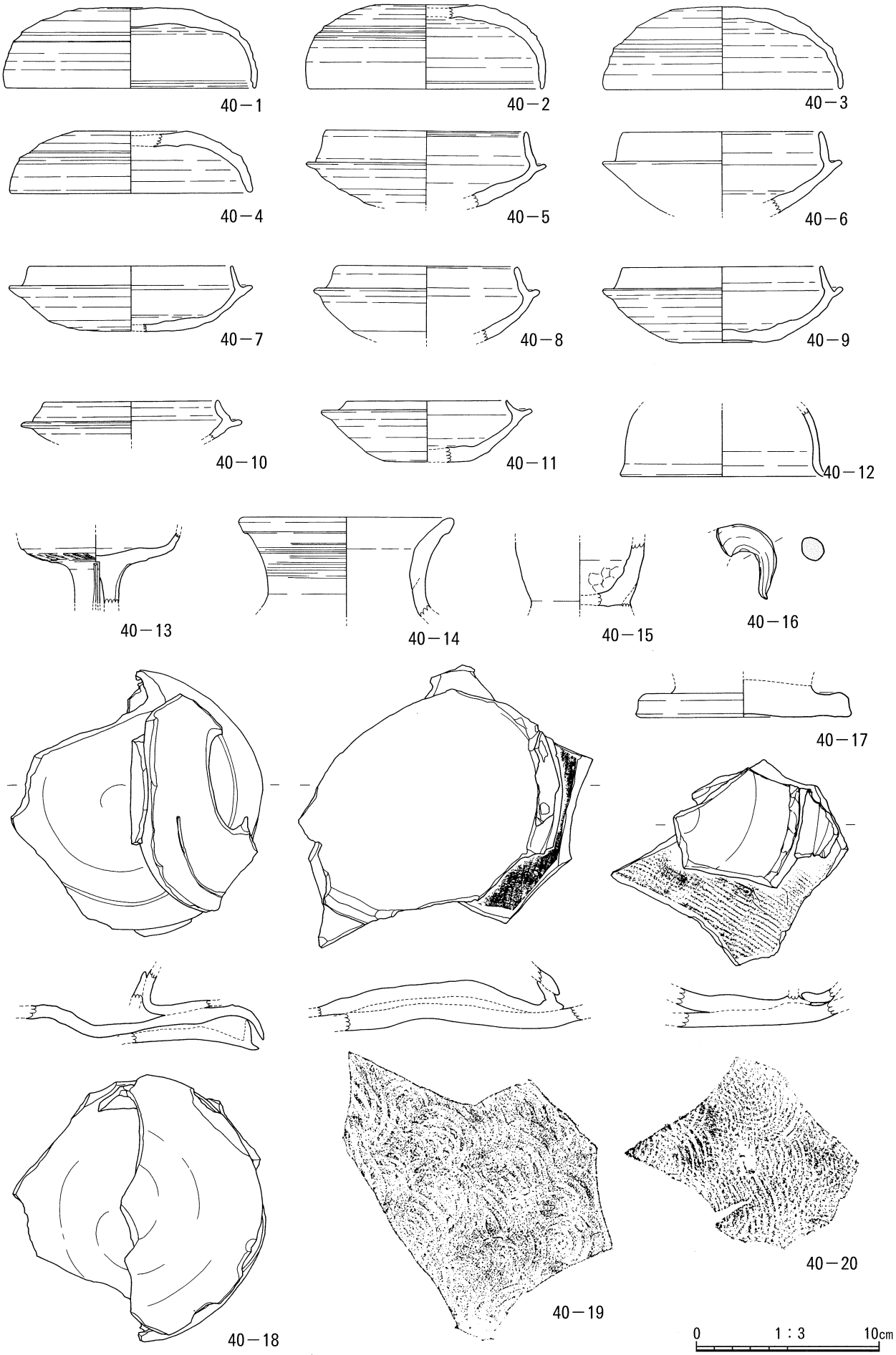
提瓶（第40図14・16）

40－14は口頸部片のみの残存で、その厚手の形状から提瓶と考える。口頸部は外反しながら開き、端部付近は丸みを帯びる。外面には粗く薄いカキ目調整を施すことから、出雲２～３期のものではないかと考える。

40－16は美しいカーブを描く形状の把手で、上部は接合、下部はわずかに貼り付けるものである。

子壺（第40図15）

40－15は子持壺の子壺で、胴部下方から底部にかけての残存片である。下方外面には粘土が付着し、内面には棒状のもので突いた痕跡が見られる。いずれも親壺との接合を行なった際に付くものである。底部は残存率が悪いため、穿孔の有無は確認出来なかった。



第40図　SX01Ⅱ暗茶褐色土出土遺物①

捏鉢（第40図17）

40－17は捏鉢の底部片で、上方に伸びる口縁部が剥離している。底径は12.0㎝、器壁は約1.3㎝を測り、28－８よりも厚手でしっかりした印象を受ける。口縁部は全て欠損しているが、付け根がわずかに残存し、上方に伸びる様が推測出来る。接地面は不定方向ナデ、側面は回転ナデで調整している。

［土器溶着資料］（第40図18～20・第41図１）

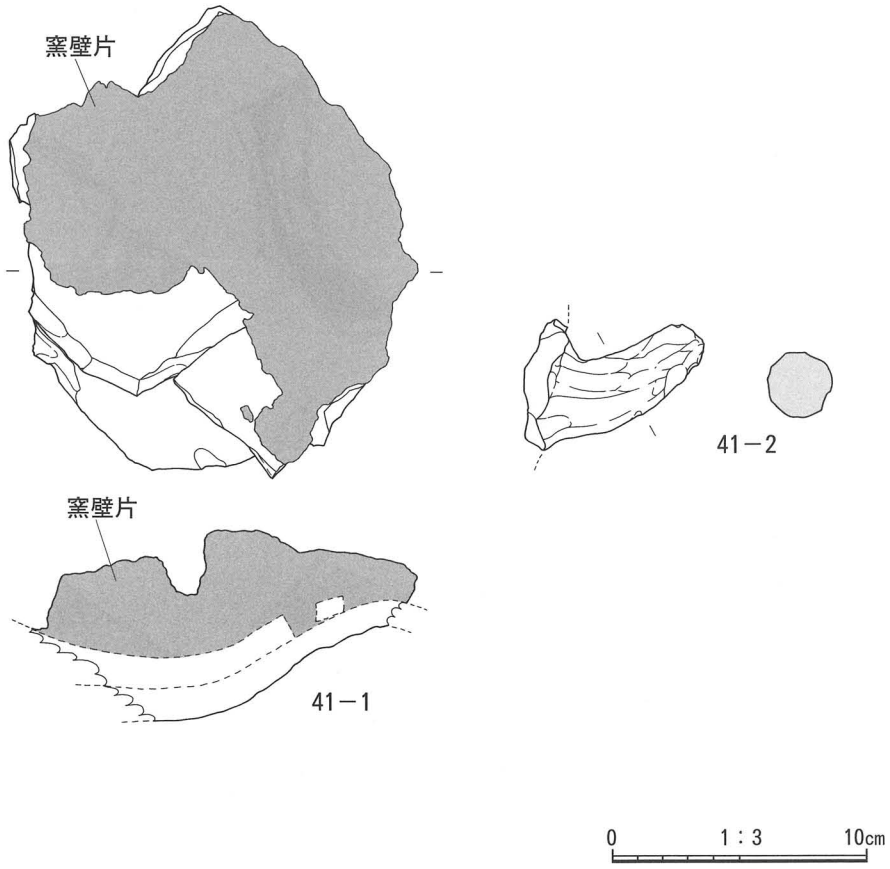
40－18は、蓋坏片３セットが互い違いに重なって焼成された様子が窺える溶着資料である。40－19・20は、甕の胴部外面片の上に蓋坏片セットが乗っているもので、蓋坏の形態から出雲４期のものと考える。

41－１は15㎝大の窯壁の塊りに、甕の胴部片が２枚重なって溶着している。どのような状況でこの結果になったのか、推測出来かねる資料である。

【土師器】

甑（第41図２）

41－２は、土師器の甑に付く把手である。



第41図　SX01Ⅱ暗茶褐色土出土遺物②

SX01Ⅲ黒褐色土 出土遺物（第42図）

【須恵器】

坏蓋（第42図１～４）

42－１の天井部は低く扁平形を呈し、肩部は強く直角に張る。口縁部はわずかに内湾気味で、端部内面に明確な段を付ける。回転ヘラ削りは丁寧で、削りの範囲も広く、出雲３期に該当すると考える。

42－２は天井部がやや高く膨らむが、肩部から口縁部までは短いという、アンバランスな形状を呈する。端部はわずかに内傾して先細り、内面に細い沈線を廻らす。回転ヘラ削りは丁寧だが、中央部に削り残しが見られるなど雑な様相に向かっており、出雲３～４期の間に入るものと考える。

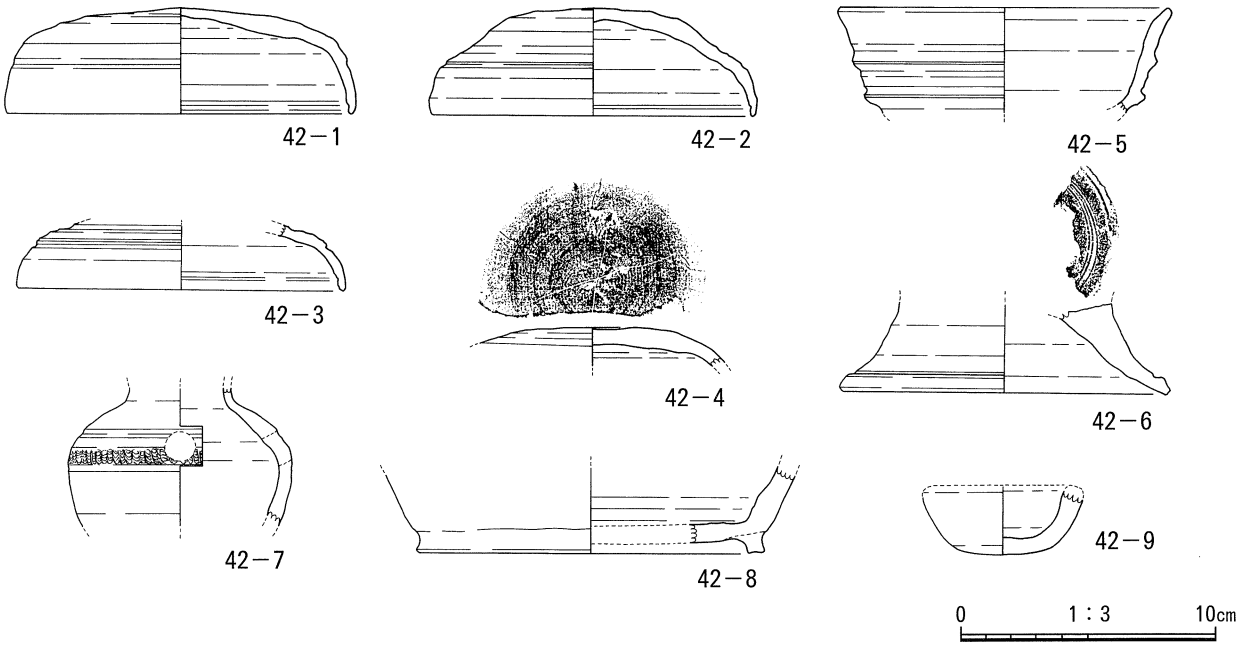
42－３は歪みがあり、器高が低く扁平な形状を呈する。端部内面には浅い段が付く。出雲４期に該当する。

42－４は天井部片のみの残存で、外面中央にヘラ記号「×」が見られる。回転ヘラ削りは丁寧に施していることから、出雲３期と考える。

高坏（第42図５・６）

42－５は無蓋高坏で、坏部片の残存である。強く突出する突帯を２条廻らし、全体的に稜線が強く、角張った印象を受ける。口縁端部は緩やかに外反するが、厚手で重量感がある。出雲編年の無蓋高坏Ａ３型、出雲３～４期のものと考える。

42－６は付け根から端部までの脚部片で、底径13.2㎝、器高3.6㎝と低く、上から押しつぶしたような脚部である。脚裾部に幅広の沈線を１条廻らし、端部は先細り、内傾する側面を持つ。坏部との接合部分に４重の溝が見えるが、これは脚部側に刻み付けたものではなく、坏部の方に付けたものが接合時に写ったものと考えている。また、壺の脚部の可能性も考えられる。



第42図　SX01Ⅲ黒褐色土出土遺物

瓹（第42図７）

42－７は頸部付け根から胴部下方の残存で、肩部は丸く張って球状を呈する。最大径付近に浅く幅広な沈線を２条廻らし、その間に全周する連続刺突文を施文する。出雲編年のＡ３型、出雲３～４期のものである。

高台付坏（第42図８）

42－８は高台付の底部片で、高台径は14.0㎝を測り、全面が接地する。高広Ⅳ Ｂ期のものに該当である。

［不明品］（第42図９）

42－９は焼成不良で橙色を呈し、口径6.4㎝、器高2.8㎝の小形品である。全体的に摩滅しており、口径部分が端部ではない可能性も考えられる。器種・用途ともに不明である。

SX01Ⅳ灰色粘質土 出土遺物（第43図）

【須恵器】

坏蓋（第43図１～４）

43－１～４は、いずれも天井部が低く扁平な形状を呈する。43－１・２は、肩部にややぼんやりとした沈線を１条廻らし、口縁部は端部付近で明確に折れ、内傾する。回転ヘラ削りに若干の雑さが見られることから、出雲３～４期の移行期のものと考える。

坏身（第43図５）

43－５は立ち上がりが1.1㎝と低く、直線的に内傾する。坏部は深めだが膨らまず、広い平底を呈する。出雲４期に当たると考える。

高坏（第43図６・７）

43－６は坏底部から脚端部の残存で、脚部は直線的に開き、端部付近で強く横に張り出す。内傾する端部側面を持ち、1段2方向の長方形透かしが入る。また、脚部内面で成形時の粘土紐積み上げの痕跡が観察出来る。脚部の短さ、端部の形状などから、出雲４期に該当するものと考える。

43－７は脚部のみの残存で、上方は細く筒状を呈する。緩やかに外反しながら開き、端部は丸みを帯びる。２段３方向透かしが入り、その間の沈線も明確である。出雲４～５期代と考える。

瓹（第43図８）

43－８は胴部最大径7.7㎝を測るやや小形の瓹で、肩部片のみの残存である。肩部は膨らまず直線的に下り、最大径付近で明確に折れる。幅広で明確な沈線を１条廻らし、その直下に全周する連続刺突文を施文する。出雲３～４期に当たる。

甕（第43図９）

43－９は口縁端部片の残存で、直線的に強く外傾し、端部は丸く収まる。上方に強めの沈線を３条廻らす様相は、あまり類例を見ないものである。

提瓶（第43図10）

43－10は提瓶の把手部分の残存である。把手は1.0㎝の細さでやや華奢な形状を呈する。上部は接合だが剥離しており、下部は貼り付けである。

子持壺（第43図11）

43－11は、子持壺の子壺が剥離した部分の破片である。丸みを持って張る形状と、外面の平行叩

き文、カキ目調整の明確さは、27－21・36－2と類似している。子壺底部から貫通する穿孔の有無は確認出来なかった。

［土器溶着資料］（第43図12～13）

43－12は、坏蓋か坏身の破片の上に坏蓋片が乗って溶着し、2枚重なって大きく湾曲しているものである。坏蓋の端部内面の形状から、出雲3期に該当すると考える。43－13は、坏蓋の天井部外面片に坏身端部片が溶着しており、坏蓋の回転ヘラ削りが丁寧であることから、出雲3～4期のものであろう。

［窯道具］（第43図14）

43－14は直径10cm、厚さ5cmを測る扁平な球状の窯壁塊に、甕の胴部片が溶着している。甕の胴部片は大きいものではなく約8cmの破片で、外内面、断面全てに自然釉がかかり、二次焼成を受けていることがわかる。窯壁がある程度正円形を保ち、また、上に何かを置きやすいような扁平形を成していることから、この窯壁は自然の産物ではなく、人為的に作られた可能性が高いと考える。そして、溶着している甕片が極度の二次焼成を受けていることは、窯道具として再利用されたことを示唆する。よって、この甕片は製品ではなく、割れた胴部片を転用した窯道具の一種であったことが推測出来る。窯壁片や石と、甕の胴部片を組み合わせて使用する置き台の一種ではないかと考える[15]。

SX01Ⅴ黒灰色土 出土遺物（第44図）

【須恵器】

坏蓋（第44図1～3）

44－1・2は、肩部と口縁部の境は明確だが、沈線は無く段が付くのみである。口縁部は内湾して下り、端部は先細って内面に幅広の段が付く。44－1は天井部が高く、44－2は扁平形を呈する。いずれも回転ヘラ削りが浅く、単位がやや不均一なことから、出雲3～4期のものと考える。

44－3は天井部片の残存で、大きく歪んでいるが若干の丸みを持つものである。厚手の天井部で、外面に特殊なヘラ記号「＃」が線刻されている。44－1・2よりも作りが雑であることから、出雲4期のものと考える。

坏身（第44図4～9）

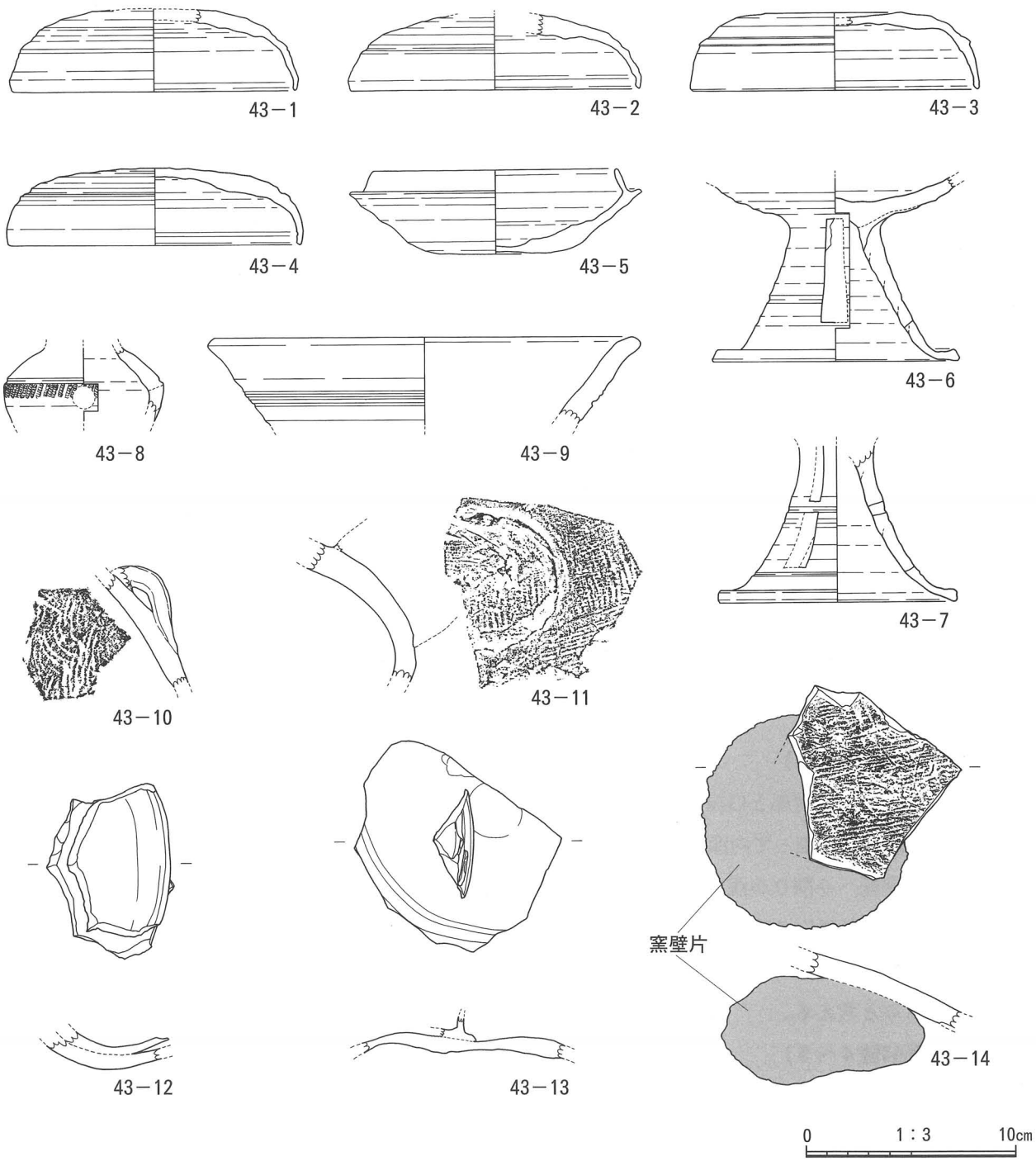
44－4は器高4cm未満で扁平な形状を呈し、坏部も張らないものである。また、底部の回転ヘラ削りは非常に丁寧で、単位も均一である。中央に、轆轤（ろくろ）（回転）台からヘラで起こす際の痕跡が残る。44－5の立ち上がりは低く、受部も長く湾曲して、斜め上方に突出する。坏部は深く丸みを持って膨らみ、回転ヘラ削りは中心から丁寧に施す。44－4・5はいずれも出雲3期のものと考える。

44－6の立ち上がりは低く、強めに内傾して端部は尖る。坏部は浅く扁平形で、口径が10cm未満のやや小形の坏身である。出雲3～4期のものと考える。

44－7～9は、立ち上がりが低く薄手で、坏部は扁平形を呈する典型的な出雲4期の坏身である。

壺（第44図10）

44－10は脚部下方の破片で、底径10.0cmで直線的に開く変則的な形状を呈する。下方に明確な沈線を1条施し、端部は肥厚して外傾する側面を持つ。焼成状態・残存状況ともに悪い。壺の脚部であろうと考える。



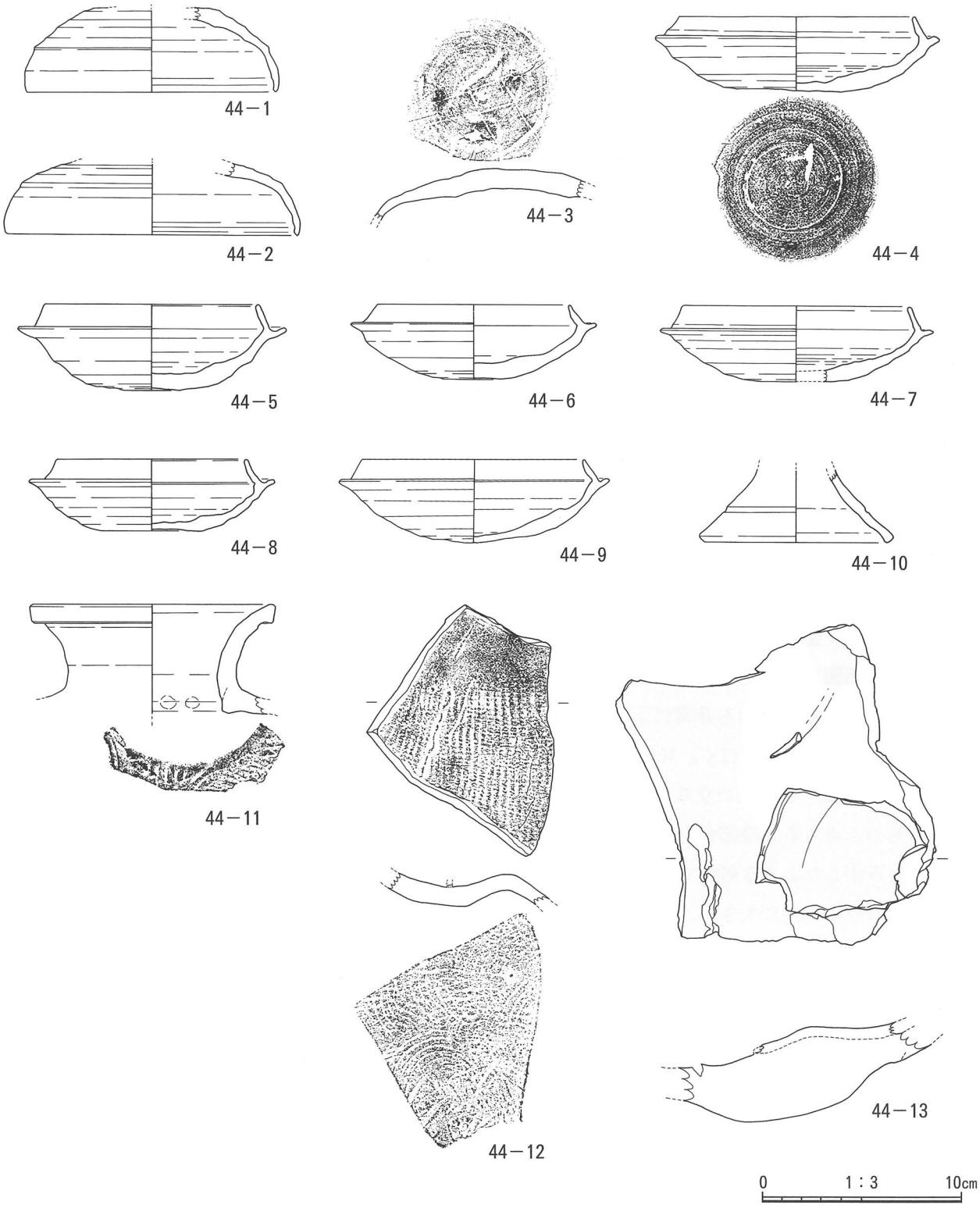
第43図　SX01Ⅳ灰色粘質土出土遺物

提瓶（第44図11）

44－11は口頸部から付け根の残存で、強く外反しながら開き、端部にはわずかに外傾する側面を持つ。接合部分は明確に折れ、指頭圧痕が顕著に見られる。角張った形状を成す、出雲３～４期の提瓶である。

［土器溶着資料］（第44図12・13）

44－12は、甕の胴部外面片に他の土器の端部片が溶着しているもので、波打つように大きく歪んでいる。



第44図　SX01Ⅴ黒灰色土出土遺物

は自然釉がかかる部分

44－13は、10cm以上の破片に、高坏の坏部片が溶着しているものである。全体的に自然釉がかかり、大きな破片は二次焼成を受けたために火膨れが生じ、3.0cmもの厚さを測る。また、長方形の透かしの痕跡が見られることから、子持壺の脚部であろうと考える。

SX01Ⅵ黒色土最下層 出土遺物（第45～51図）

【須恵器】

坏蓋（第45図１～８）

45－１は器高が4.9cmと高く、全体的に丸みの強い形状を呈する。肩部は角張らずに丸みを保ち、口縁部も内湾気味に下りる。口縁端部は肥厚して段を付けるもので、やや古めの様相を示している。45－２は、天井部外面に他の土器の溶着痕が多々見られることから、重ね焼きで歪んだことが推測される。肩部の沈線は強く引いてあり、端部内面の段は明確なものである。45－１・２は、いずれも回転ヘラ削りが丁寧なもので、形状と合わせて考えて、出雲３期に収まるものと考える。

45－３は口縁部がやや変わった形状を呈しており、肩部分が肥厚して端部付近で尖るものである。口縁部全体としては外傾して開く。出雲３～４期に該当すると考える。

45－４は器高がやや高く、全体的に薄手の作りである。回転ヘラ削りは簡略化されたもので、単位が小さく不均一で、削り残しも見られる。出雲４期に該当する。45－５・６は、ともに焼き歪みが顕著で、器高３cm未満の低さを測る。いずれも調整が雑気味で、回転ヘラ削り、端部内面の沈線なども出雲４期の範疇と考える。45－６は天井部外面にヘラ記号「×」が、45－７は長い１本線に短い３本線が直交するという珍しいヘラ記号が刻まれている。

45－８は、口径10.0cm、器高3.7cmを測る小形の坏蓋で、出雲６期の典型と言ってよいだろう。天井部は丸く盛り上がり未調整のままで、雑なものである。

坏身（第45図９～20）

45－９は、どの部分も非常に丁寧な作りを呈する。立ち上がりは1.8cmで垂直気味に立ち、端部内面に明確で強い段が付く。坏部は深く膨らみ、平底を呈する。全ての要素から、出雲２期に該当すると考える。45－10の立ち上がりも1.7cmと高く、垂直に上がることから、出雲２～３期に該当するものと考える。端部が先細って若干の内傾を見せている。45－９・10は、いずれも受部が小さくつまみ出したような形状で、これも出雲２期の特徴である。

45－11は全体的に大きく、立ち上がりはやや低いが、出雲３期のものと考える。立ち上がり・受部の内面が、強く屈曲せず緩いカーブを描いていることから、３期の中でも若干古いものと思われる。

45－12～14は、坏部が浅く扁平形で、立ち上がりも1.0cm前後と低いものである。回転ヘラ削りは丁寧なものが多いが、形状と合わせて考えると、出雲３～４期の間のものであろう。

45－15・16は、底部外面にヘラ記号のようなものが見られ、45－15は中央に工具の傷のような痕跡が付いている。45－16の底部は膨らみを持ち、合計13本の線が縦横無尽に刻まれる珍しいヘラ記号である。いずれも、回転ヘラ削りは簡略化が進んでおり、外周部分のみの調整となる。出雲4期に該当する。

45－17の立ち上がりは1.0cmを測り、強く外反しながら内傾する特徴的なものである。受部は0.8cmと長く、直線的で斜め上方に突出する。口径は9.2cmと小さいもので、出雲４～５期の間のものと考える。

45－18は変則的な形状を呈するものである。立ち上がりは0.8cmと低く、肥厚して丸く収め、受部の断面は三角形状を呈する。坏部は全体的に深く丸い形状となる。口径は9.8cmと小さく、小形

化を辿る途中段階の、出雲５期のものと考える。

45－19は、より小形化し、口径は8.8cmを測る。立ち上がりは0.5cmとかなり低く、受部の中に入り込むような形状を呈する。45－20は、大きく歪んではいるが立ち上がりの低さは明確で、底部外面にヘラ記号「×」が、やや不明瞭だが確認出来る。45－19・20ともに、出雲６期のものと考える。

高坏（第45図21～27・第46図１～12）

45－21・22は無蓋高坏で、ともに坏部片の残存である。45－21は口径18.0cmを測り、浅く強めに外反して開く。45－22は45－21とは異なり、深い坏部で、薄手で大きく開く。いずれも坏部に付く突帯、沈線などが顕著に見られ、メリハリのある形状は出雲３期の特徴である。

45－23は、坏部から脚部付け根まで残存する、無蓋高坏である。45－21・22とは様相が違い、坏部は丸く扁平形を成し、なだらかに開いていくものである。坏底部に同心円状のカキ目調整が入るが、形状を重視すれば出雲５～６期のものであろう。脚部の形態は長脚になると思われ、２段２方向の透かしが入っている。また、変色が顕著に見られ、特に坏底部内面には、直径6.5cmの正円形の変色が見られる。

45－24・25は長脚高坏の脚部片で、45－24は脚部径3.8cmという細さで、下方で大きく開くものである。上段は長三角形、下段は長方形の２段２方向透かしが入り、透かしの間に深く明瞭な沈線を２条引く。45－25は脚部上方の破片で、中央部にはやや雑な波状文を10条施文し、２段３方向の透かしが入る。いずれも出雲３期の要素を持っている。

45－26・27は、長脚無蓋高坏の脚部上方の破片で、脚部径が2.0cmという細さを保つ。いずれも２段３方向透かしで、上段は貫通しない切れ目である。45－27は、坏底部外面に全周する連続刺突文を施文する。出雲３～４期に該当するであろう。

46－１は脚高7.0cm、底径11.4cmを測るもので、１段２方向の三角形透かしが入り、その直下に１条の沈線が廻ることから、出雲編年のＡ３型、出雲３～４期に当てはまる。脚部内面は細かく波打ち、粘土紐積み上げの痕跡を残している。

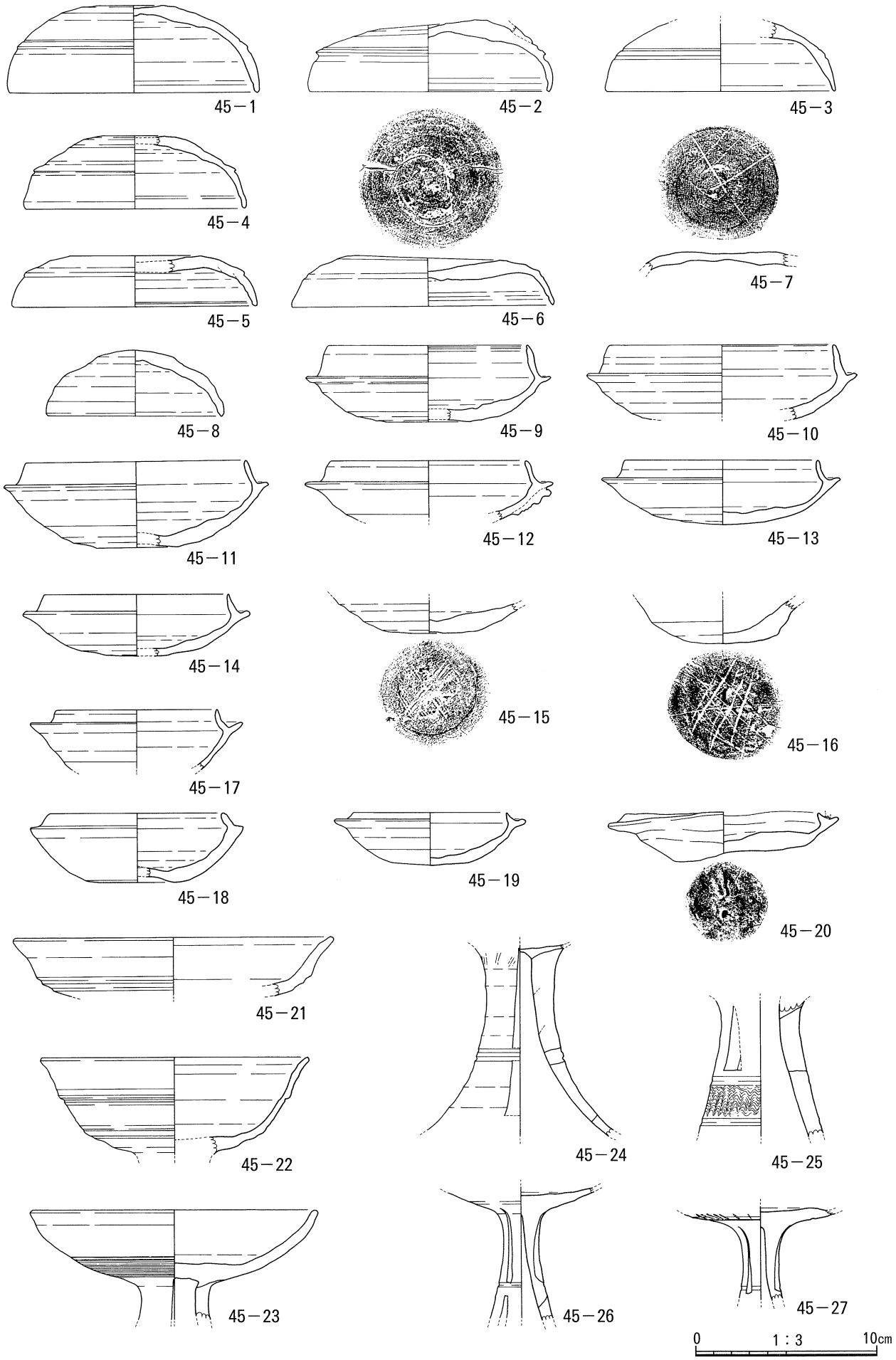
46－２は底径10.8cmを測り、２段３方向の透かしが入るが、下段の１方が三角形や長方形ではなく、上端が長く下端が短い「逆台形」の、非常に珍しい透かしを持つ。形状的には出雲編年のＡ４～Ａ６型にはまり、出雲３～５期内に収まる。

46－３は底径10.8cmで強めに外反し、端部に向かって大きく開き、横に張り出す。出雲編年の長脚無蓋高坏、Ａ３もしくはＡ４型にはまり、出雲４期のものと考える。

46－４は前述の高坏のように底面が強く開かず、直線的に下りる。焼成が悪く、不明瞭な点が多いが、出雲５期に相当するのではないだろうか。

46－５～８は、いずれも出雲５～７期の間のものである。脚部高は５cm未満で、短小化を辿る。46－５・６は端部が発達し、角張った側面を持つ。これは出雲編年のＡ５～Ａ７型に見られる形状である。46－６・７は円孔透かしが入り、46－６は下方に２方向、46－７は脚部の付け根直下に１方のみの透かしである。46－８は、端部が先細り気味で緩やかに下り、透かしが入らないタイプのものである。

46－９は脚端部に明確な面を持ち、垂直に立つものである。直線的に下り、脚裾部に強いカキ目調整が入る。他の器種の脚部である可能性も考えられ、出雲１期代のものと考える。



第45図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物①

46－10は脚部高3.0cmと非常に低く、上から押しつぶしたような形状を呈する。脚部径は5.6cmを測り、重心が低い。46－11は薄手で軽い印象の脚部片で、端部付近は強いナデによる稜線が際立つ。下方に、長方形透かしとカキ目調整が見られる。46－10・11は、いずれも他の器種の脚部の可能性も考えられ、その形状や調整から出雲２期に相当する。

46－12は底径6.0cmという小ささであるため、小形の器種と思いがちだが、出雲編年の長脚高坏のＡ４型もしくはＡ５型、出雲４期に当てはまる。２方向に透かしが入り、端部は肥厚した側面を持つ。

瓿（第46図13～18）

46－13は口縁部片の残存で、直線的に開いて伸びる様相は出雲編年Ａ５型、出雲４期に当てはまる。通常は口頸部に波状文を入れるが、これは口縁部に施文している。46－14は口頸部片で、頸部径3.8cmを測る。頸部中央に沈線を１条、その上に細かく雑な波状文を２段施文する。出雲４期に該当する。

46－15～18は胴部片の残存で、46－15は強く張り出し、最大径以下は張らない扁平形を呈する。肩部にはカキ目調整が顕著で、沈線、刺突文も明確であることから、出雲２～３期のものであろう。46－16は底部にかけての残存で、出雲編年Ａ４型、出雲３期のものである。46－17は頸部径が3.0cmと細く、出雲３～４期の典型的な瓿である。46－18は器壁1.5cmを測る非常に厚手のもので、調整や施文が雑である。最大径付近では強く張り出し、以下は張らずに下りるアンバランスな形状を呈している。出雲２～４期の範疇に収まるものとする。

子壺（第46図19）

46－19は子持壺の子壺で、肩部の張りはやや強めで丸みを持つ形状を呈する。36－１と形状は類似しているが、46－19は沈線等の施文はない。外面には他土器の小片などが溶着し、下方には親壺との接合時に貼り付けた粘土痕が若干目立つ。底部中央には直径0.8cmの穿孔が見られる。出雲４期のものと考える。

壺（第46図20～23・25・26）

46－20～22は直口壺で、それぞれ各部分の残存である。46－22は薄手の作りで丁寧に作られている直口壺で、口頸部は真っ直ぐ垂直に立ち上がる。外内面の自然釉のかかりが顕著で、逆さではなく、直立状態で焼成していたことが窺える。

46－23は丸みを保つ底部である。外面にヘラ記号「×」の線刻が見られる。

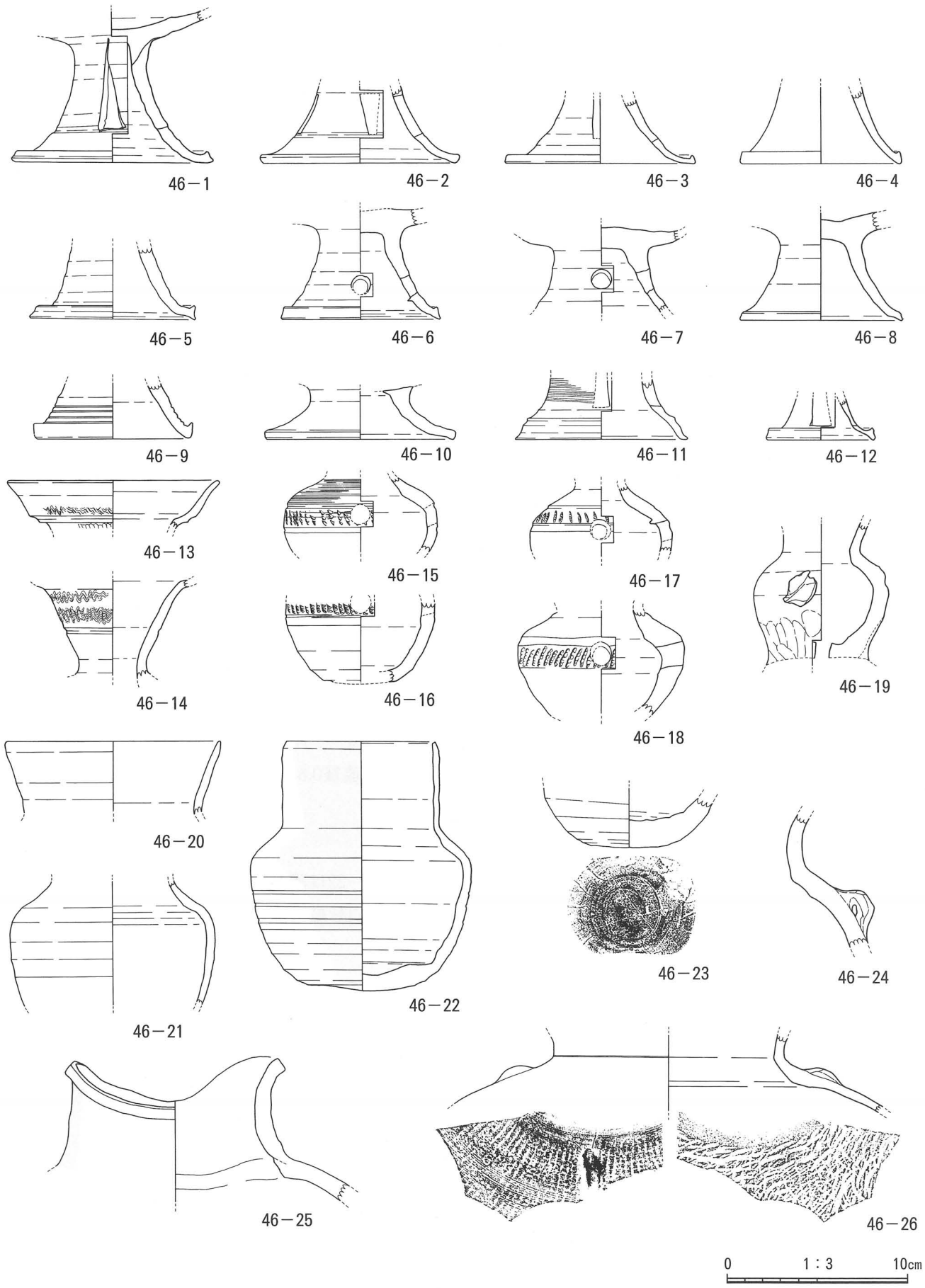
46－25は大きく歪み、原形が分かりにくいが、大形壺の口頸部と思われる。46－26は短頸壺で、頸部径13.0cmとそう大きくないが、肩部以下は大きく横に張り出し、大形品になると思われる。肩部に付く耳状の把手は完全な装飾的役割で、４方に付く可能性が高い。出雲３～４期のものである。提瓶の可能性も考えられる。

提瓶（第46図24）

46－24は頸部から肩部の破片で、把手部分も残存する。頸部は外反気味に立ち上がり、肩部に付属する把手は小さいもので、上部は接合、下部は貼り付けである。

甕（第47図１～６）

47－１・２は口縁部から肩部までの破片で、47－１は直線的に開き、若干の外反が見られる。47－



第46図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物②

は自然釉がかかる部分

2は強めに外反して開き、端部は面を持つ。47－3は口頸部の小さな破片だが、外面の連続刺突文が、長さ2.5cmを測る特異な施文である。

47－4～6は、大形の甕の口縁部から肩部までの残存片である。いずれも、口頸部と肩部以下との接合部分がよく観察でき、粘土紐を積み上げて伸ばしていった形跡が見て取れる。

器台形土器（第47図7）

47－7は20－27と同様の器種で、器台形土器である。これも上方部の破片で、上端面は直径8.8cmの平坦面を持ち、上端面に1.7×3.0cmの長方形透かしが貫通している。また、3.0cmの透かし面に直交するように、直径1.2cmの円孔が脚部上方から通る。先述した20－27は、わずか0.4×0.4cmの方形孔であったが、こちらは円孔である。外面の調整は20－27よりも精巧で、回転ヘラ削り後は全面にナデを施し、内面は回転ナデ、指ナデで丁寧に行なっている。上端面直下に深く強い沈線を2条廻らし、更に円孔と同じラインにも沈線を1条付けている。使用例、用途、年代等の詳細については、後述する第6章でまとめている。

高台付坏（第47図10・11）

47－10・11は高台付坏の底部片で、高台は低く三角形状の断面を呈する。いずれも、高広ⅣA期のものと考える。

坏（第47図12）

47－12は無高台の坏で、底径10.6cmを測る。底部は回転糸切りを施す。高広ⅣA期に当てはまる。

［蓋坏セット資料］（第47図8）

47－8は、坏蓋と坏身がセットの状態で焼成されたことを示す資料で、立ち上がりの高さや坏蓋の口縁部の形状などから、出雲3期のものと考える。

［不明品］（第47図9）

47－9は、窯道具の類か、土馬等の脚部かである。途中で歪み曲がっている様子は何かの脚部を想像させるが、切り屑等の可能性も考えられる。

【土師器】

甑（第47図13）

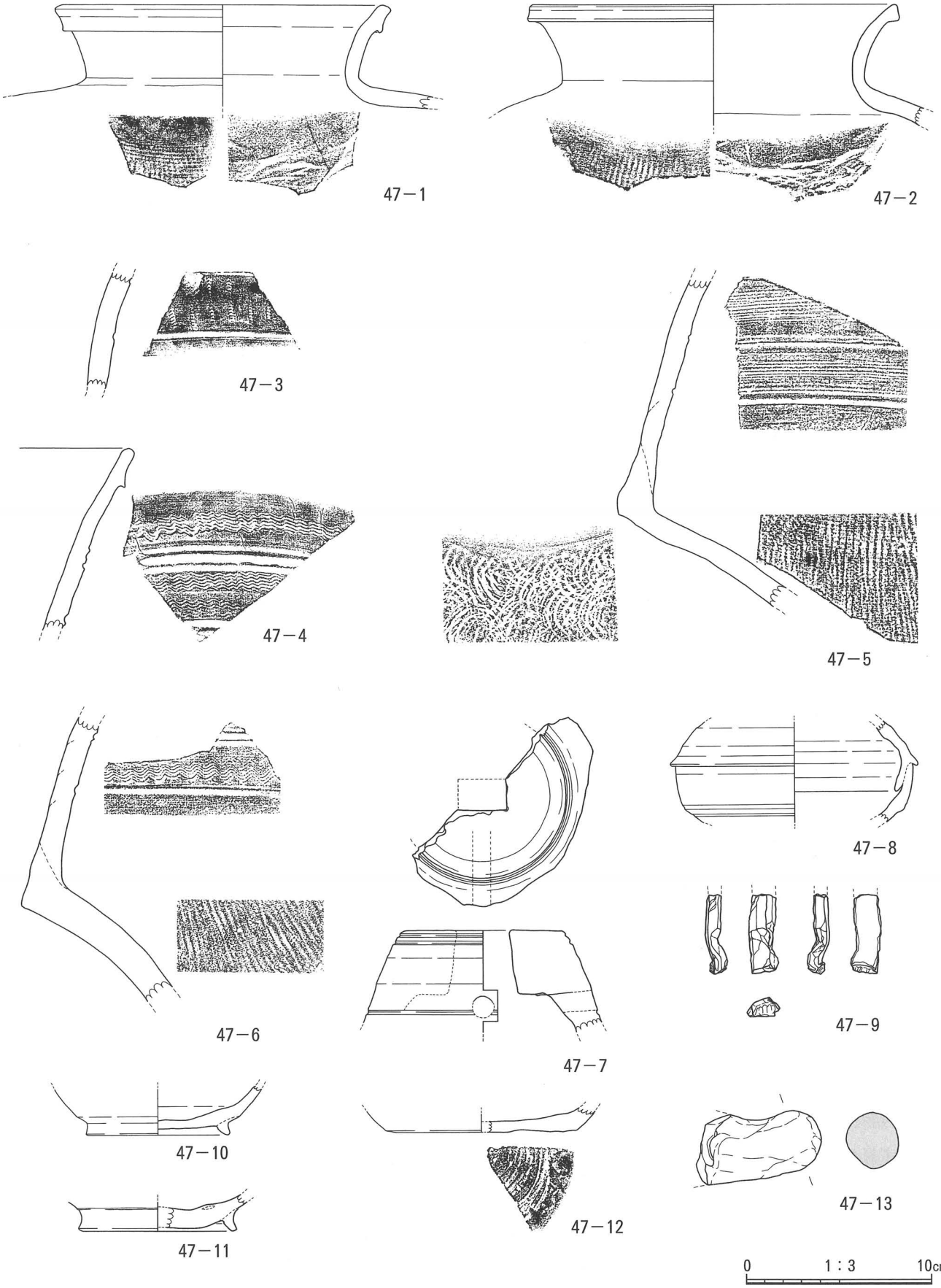
47－13は、土師器の甑に付く把手であろうと思われる。直径約3.0cmで先端に向かって尖らず、丸みを持つ形状である。

【須恵器】

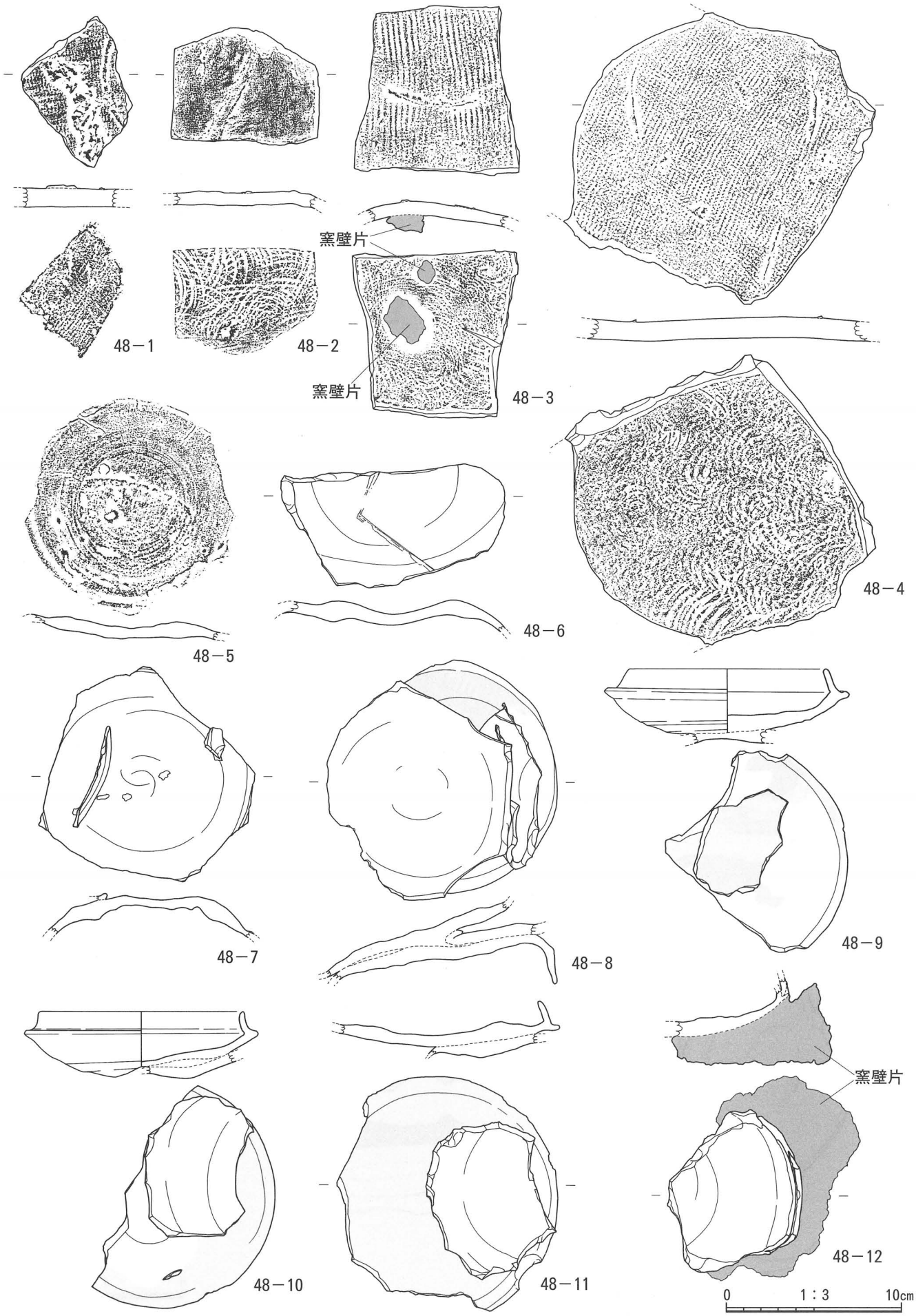
［土器溶着資料］（第48図1～12・第49図1～9・第50図1・2・第51図1・2）

48－1～4は、甕の胴部外面片に他の土器の溶着痕が残っているものである。48－3・4は、外内面、断面にも自然釉がかかり、二次焼成が行なわれたことが窺える。48－5は坏蓋に、48－6は坏蓋か坏身に、それぞれ天井部外面に他の土器が溶着している。

48－7・8は、坏蓋の天井部外面片に他の土器片が溶着しており、48－8は坏蓋片の上に坏蓋片が2個体乗って溶着している。48－9～11は、坏身片の底部外面に坏蓋天井部片が溶着している。いずれも自然釉のかかり具合が顕著で、そのほとんどが坏身の外面に受けていることから、坏身が逆さに置かれた状況が推定出来よう。48－5～11は、いずれも蓋坏類の溶着である。これらはただ重ねたのではなく、安定性の重視と、焼成を滞りなく行なうために、互い違いに重ねて窯に詰めた

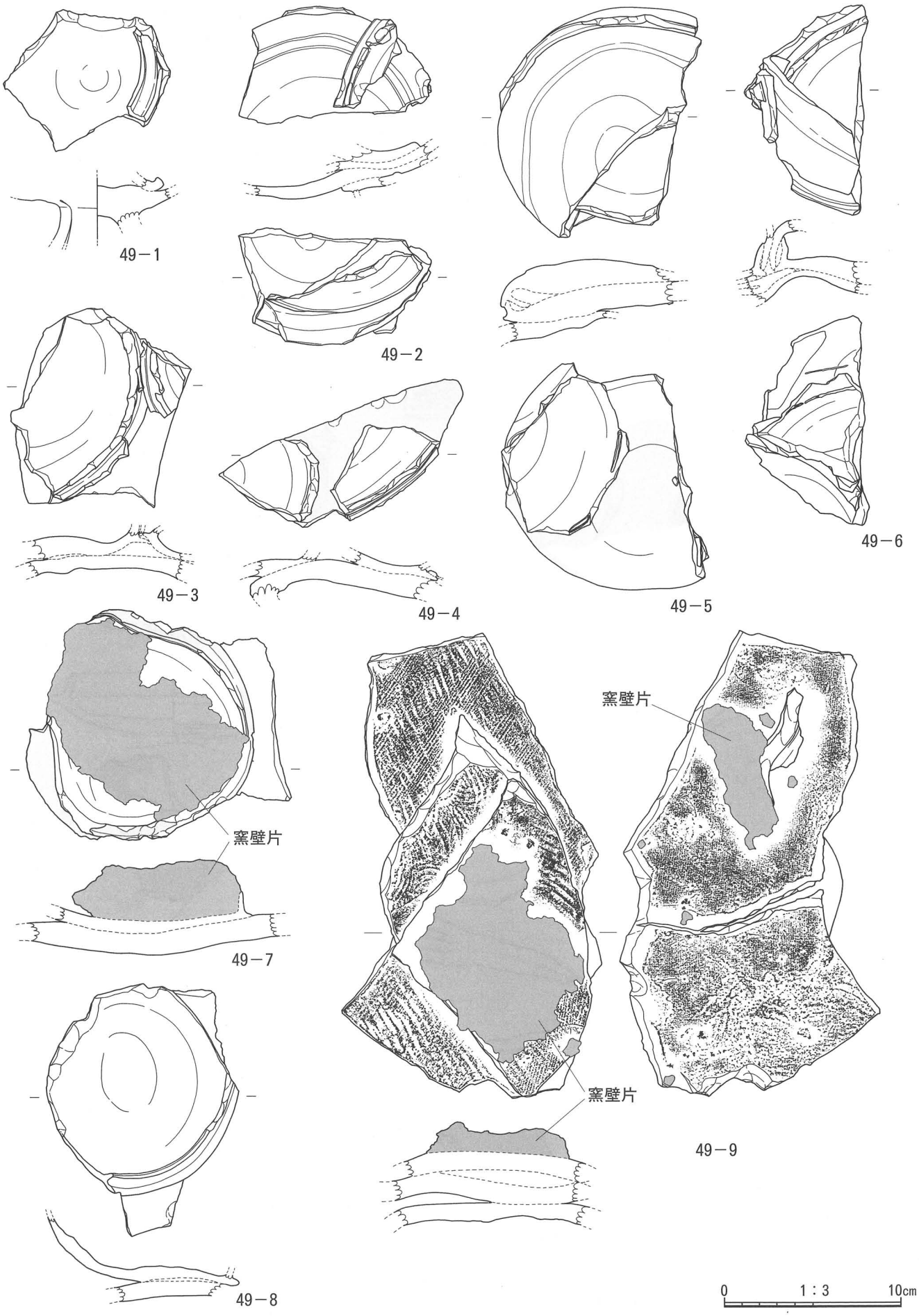


第47図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物③



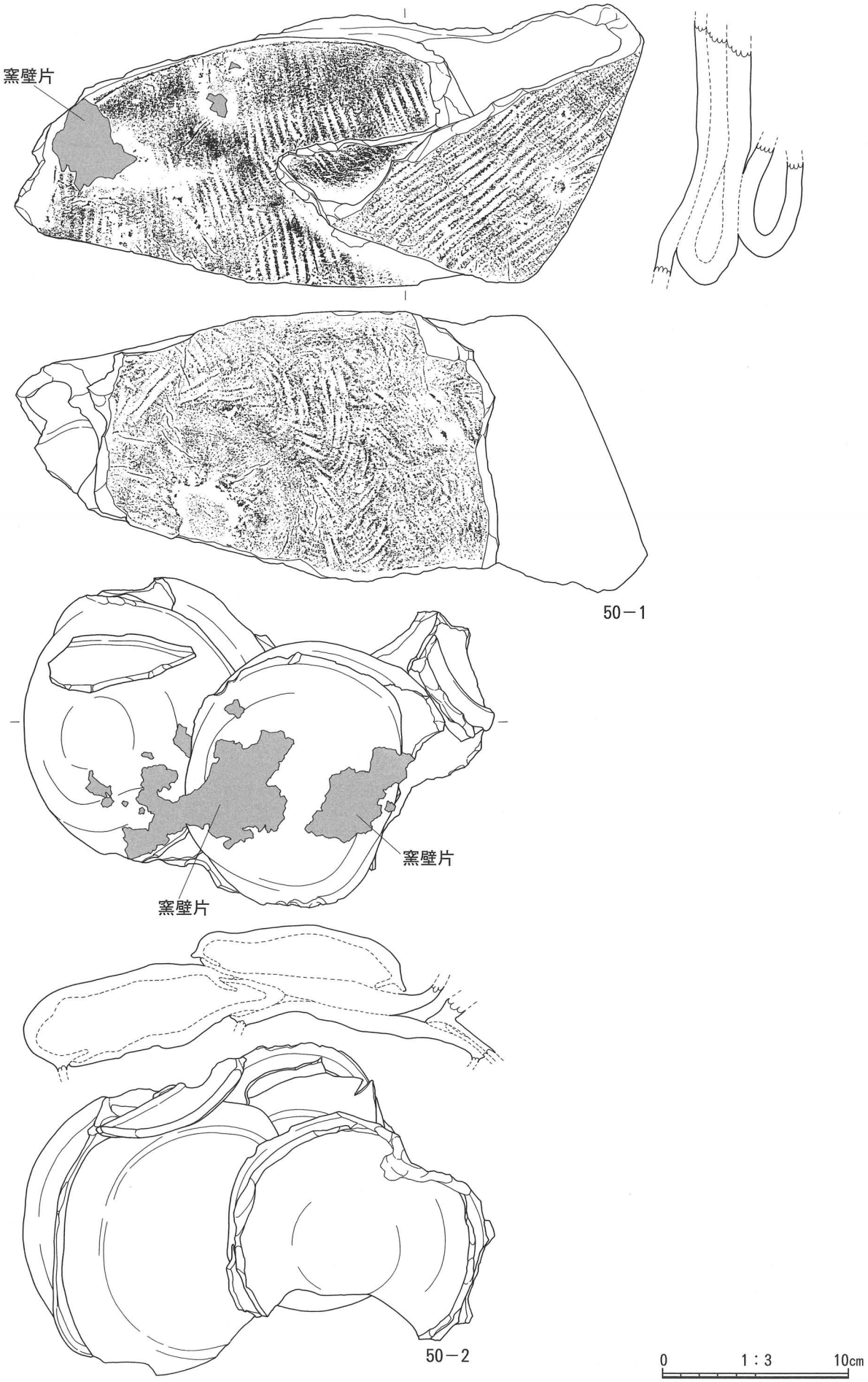
第48図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物④

は自然釉がかかる部分

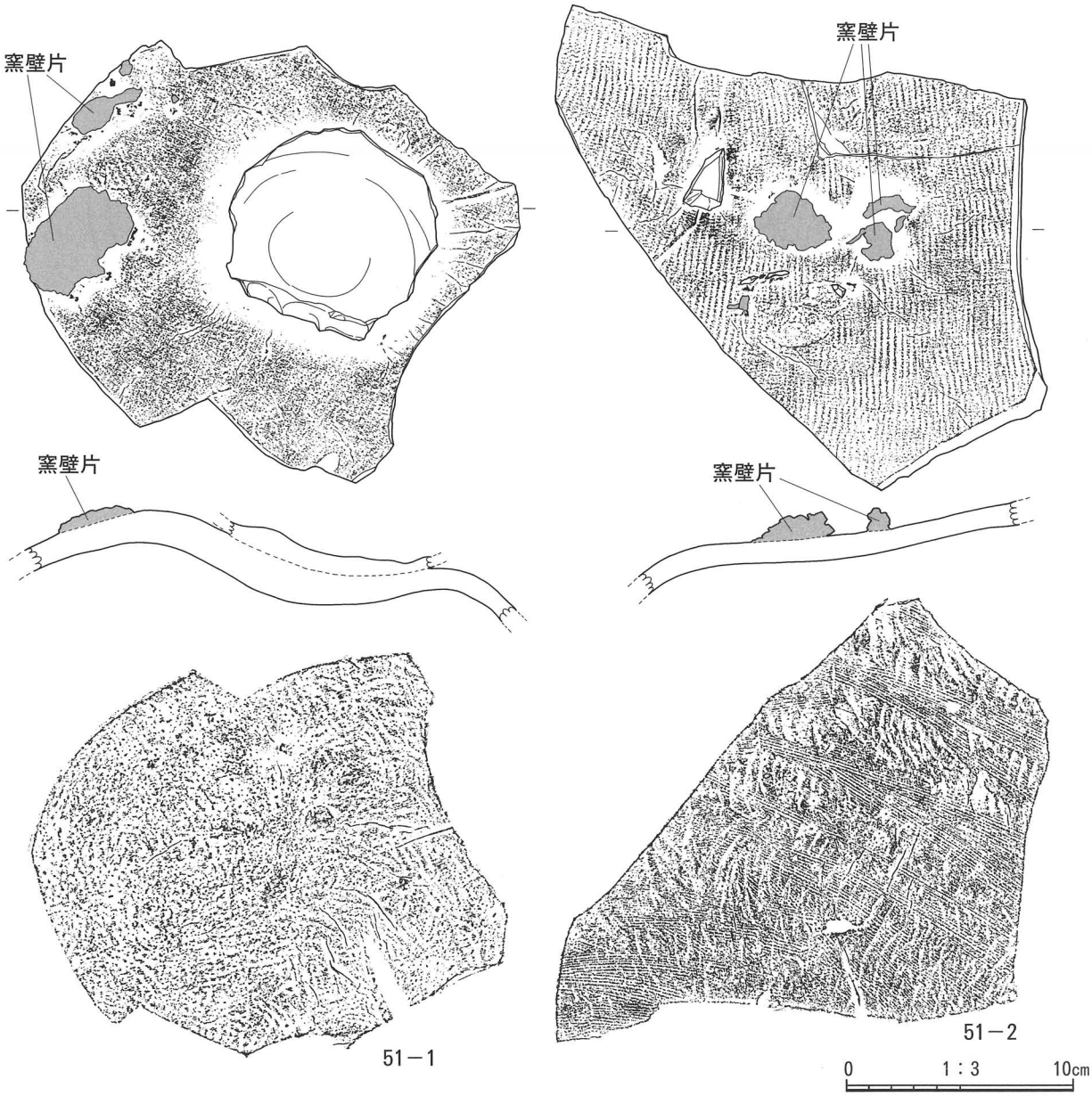


第49図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物⑤

は自然釉がかかる部分



第50図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物⑥



第51図　SX01Ⅵ黒色土最下層出土遺物⑦

もので、その一端が垣間見える資料と考える。いずれも出雲３～４期に収まるものである。

48－12は12×８㎝の窯壁塊の上に坏身片が乗るものである。

49－１～８は、様々な器種が溶着したものである。49－１は、高坏の坏部内に別の高坏脚端部片が溶着しており、高坏同士の重ね焼きであることが分かる。49－２は蓋坏片１セットに坏身片、高坏脚端部片が溶着している。49－３・４は、甕の胴部片の上に蓋坏片が２セットずつ乗っている。49－５は蓋坏片２セットが溶着しているが、断面が火膨れにより厚手になっている。49－６は蓋坏片のセットが４つ、８個体が溶着したものである。49－７は、甕の胴部片の上に完形に近い坏身が、更にその中に12×７㎝、厚み3.5㎝を測る窯壁の塊りが入り込む形で溶着している。49－８は甕の胴部片の上に坏身が溶着している。この坏身の様相から、出雲３期のものと考える。

49－９は、甕の胴部片が４枚折り重なるように溶着しているもので、いずれの甕も同一個体のような印象を受ける。20㎝以上を測る破片があり、かなり大形の甕であったと推測する。厚みも1.0㎝と同一で、一番上に窯壁の塊りが溶着している。また、断面にも自然釉がかかっていることから、二次焼成を受けていると思われる。

50－１も非常に特異な溶着資料で、１個の甕胴部片が、二度折りたたまれた状態で硬化している。そしてその裏には、提瓶の胴部片が溶着している。この甕の折れ曲がり様は独特なもので、焼成前の柔らかい状態の時に、意図的にたたんだものか、もしくは焼成中に自然に折れ曲がったものかは、断定が難しい部分である。

50－２は、今までに出てきた蓋坏のセットで溶着している資料が、本来ならばこのような形状で積まれていたことが分かる好資料である。残存状況が良く、計４セットが交互に重なるように溶着している様が見て取れる。自然釉がかかっている側には、窯壁小塊も付着している。いずれのセットも出雲３期の様相を示す。

51－１・２は、20㎝以上の大きさを持つ甕の胴部片に他の土器が溶着しているもので、51－１は坏身片と窯壁小塊、51－２は様々な小片が溶着している。

SX01　小結

SX01は、Ⅰ～Ⅶ層に大きく分層し、各土層について詳細な調査を行なったが、各土層出土遺物の年代に大きな差は見られなかった。須恵器の年代は、出雲２期～高広ⅣＡ期を示している。

ため池造成の折、水を溜めるために、内部を削平する工事が行なわれたと思われる。これ以前の付近の地形を想像すると、黄色地山上面の形状が、北側に向かって上がる傾斜を成すことから、岩汐１号窯の地山とSX01の黄色地山が繋がっていたのではないかということが考えられる。現在は消滅しているが、ため池として削平される前は、１・２号窯も断面のみの姿ではなく、その全景を留めていたはずである。また、１・２号窯の下部や南側には、他の須恵器窯が何基か存在していたことも十分推測出来る。

SX01という黒色灰原層の山は、古墳時代に造られた遺構ではなく、ため池削平時に破壊された須恵器窯や灰原の残骸が、何らかの意図を持って積まれたものとも考えられる。

第52図　SX02平面図

2．SX02（第６・52図）

SX01から西に約40m離れた、ため池の底面に位置する遺構である。周囲には、５㎝程度の小石から、人頭大の大きな石が散乱している状況である。

SX02は、立木・大形の石・円形状に並んだ小石列の３つの要素から成っている。４m四方の範囲の中で、北東側に円形状の小石列、中央に大形の石、南西側に木が立っており、東西方向を軸として、北東－南西の方向に斜めに配置されている。

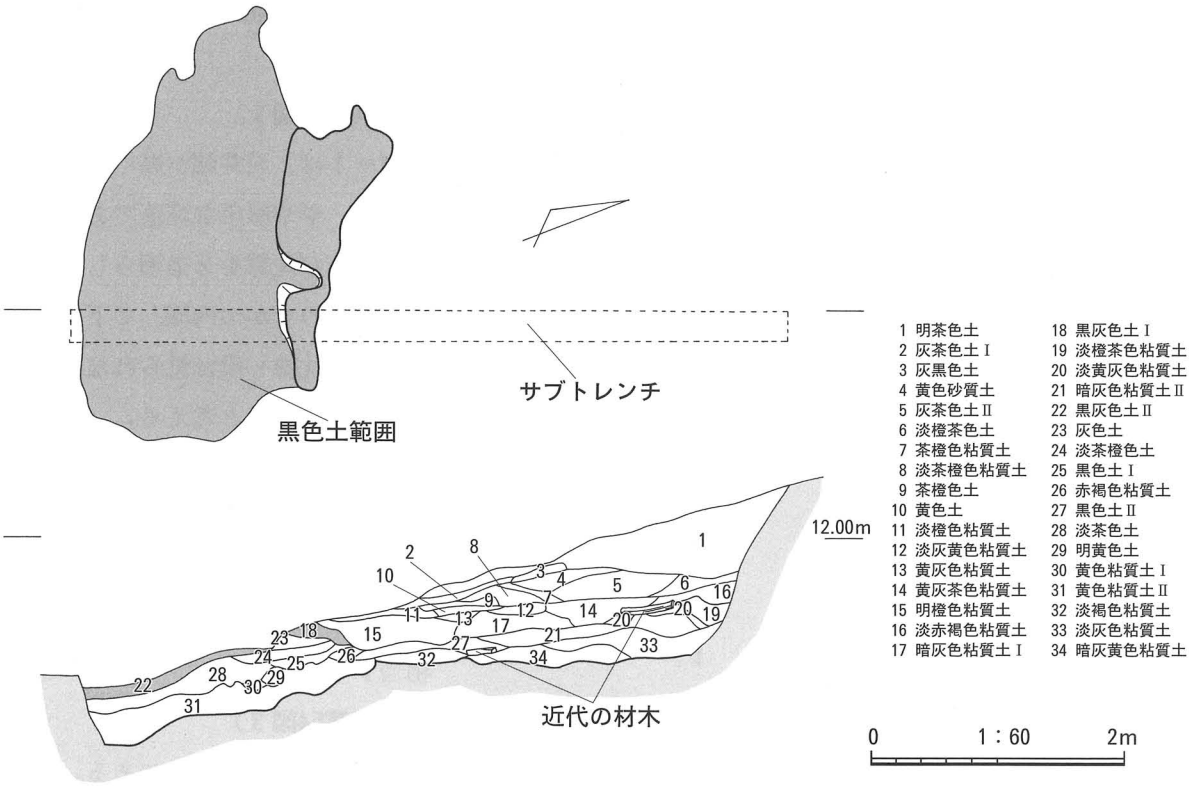
立木は、幹の太さが約0.3m、約1.2mの高さを残存して垂直に立つ。ため池の底面であるこの周囲には、同様の立木は一切なく、ため池造成の折に他に生えていた立木は伐採されたものと思われる。この立木１本だけ存在するその状況から、この木は宗教的な意図を持ってこの場所に残されたものと推測する。大形の石は2.04×1.5㎝という巨大なもので、東西方向に長い軸を持つ。この石は、周囲にこれほど大形の石は見られないこと等から、人為的に運んで来られたものと考えられる。円形状の小石列は直径1.5mを測り、20㎝前後の平らな小石が、円状に並んでいる。

遺構の性格、用途については明らかでないが、ため池造成前は谷地で、付近に水が流れていた可能性が推測出来ることから、水神などの思想的または信仰的な要素を持つものであったと考えられる。

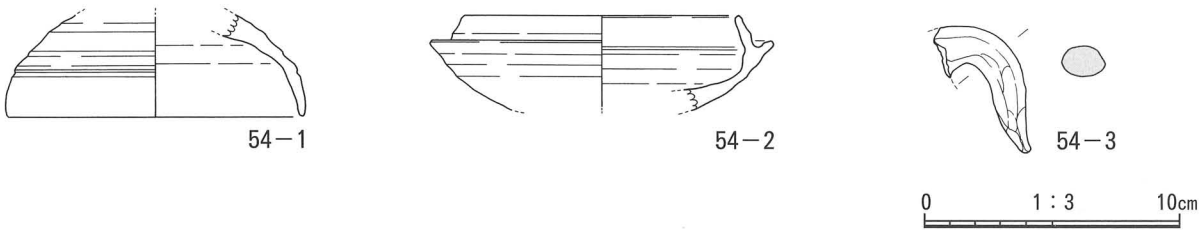
詳細な時期については、伴う遺物が出土していないため不明であるが、少なくとも古墳時代のものではないと考える。

3．SX03（第６・53図）

調査区東側のため池底面に位置する所から、須恵器窯の灰原層にも似た黒色土（18・22層）の範



第53図　SX03平面図・土層断面図



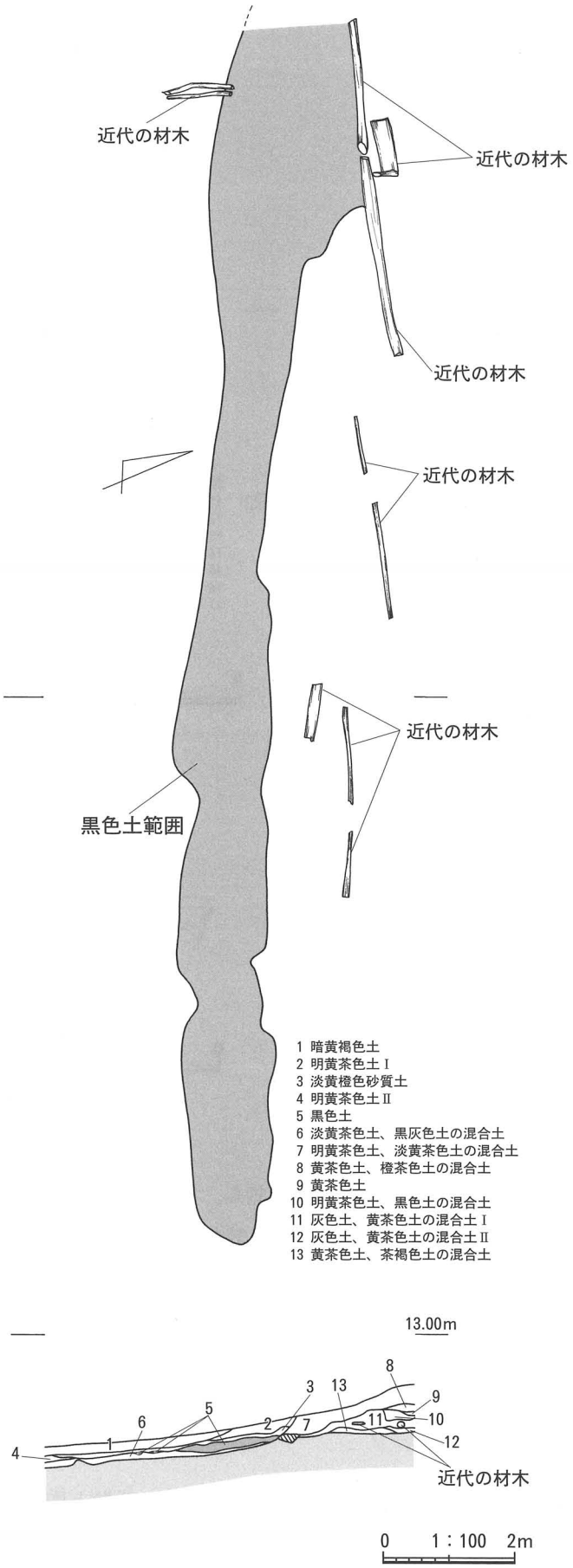
第54図　SX03出土遺物

囲を検出した。この黒色土の範囲は、南北方向約２ｍ、東西方向約４ｍを測る。ため池深部に向かって緩やかに下る斜面上に在るが、この辺りはため池造成の折に、相当の削平を受けていることが土層断面から見て取れた。また、至る部分に近代の材木が入り込んでいる状況も、合わせて確認している。なお、この材木と似通ったものは、後述するSX04でも検出している。

SX03と名付けた黒色土の範囲は、検出当初、部分的に灰原的な黒さを持つ層が現れたので、須恵器窯の灰原に関連する遺構とも考えたが、元来この位置にあったものではなく、二次的に動かされて堆積したものと判断した。

直接、須恵器窯に繋がる資料ではないが、SX01同様、壊された須恵器窯の灰原の残骸と取ることが出来よう。

遺物は黒色土範囲から、須恵器の出雲４期の蓋坏類、提瓶の把手等の須恵器片が、わずかながら出土している。



第55図　SX04平面図・土層断面図

SX03 出土遺物（第54図）

【須恵器】

坏蓋（第54図１）

54－１は、天井部が高く丸みを保つもので、やや厚手な坏蓋である。肩部には明確な沈線を２条廻らし、口縁部は短く、わずかに内湾して下りる。端部内面に沈線・段は見られない。出雲４期に該当すると考える。

坏身（第54図２）

54－２は、立ち上がりが低く直線的に肥厚する。坏部は若干の膨らみを持ち、扁平な形状を呈する。出雲４期に相当すると考える。

提瓶（第54図３）

54－３は提瓶の把手である。滑らかに調整してあり、上部は接合、下部は貼り付けである。

４．SX04（第６・55・57図）

SX01のほぼ真北で、東西方向に帯状を呈して伸びる黒色土範囲を検出した。黒色土の範囲は東西長約20m、南北幅１～２m、厚さ20cmを測る。黒色土はSX01の堆積土と類似しており、炭を多量に含んだ灰原的なものである。窯壁塊とともに多量の須恵器片を包含し、黒色土以外の土は一切入っていなかった。また、近代の道板、材木が黒色土範囲の一部とその周辺から見つかっている。

この帯形状が何を意味するのかは不明であるが、前述のSX01・03と同様、ため池造成時に壊された灰原層が、何らかの意図を持って一つにまとめられたものと思われる。池の形状に沿うように、東西方向に伸びる様相は、自然

発生的に起こった結果とは考えにくい。後世に、人為的に動かされたものと考えられる。

遺物は、SX01ほどの出土量は持たないが、黒色土範囲から須恵器片が多量に出土している。須恵器は、蓋坏類、瑕、薄手でやや小形の直口壺、蓋坏のセット溶着など、多種多様な器種が出土している。

SX04 出土遺物（第56図）

【須恵器】

坏蓋（第56図１～８）

56－１は、非常に丁寧な作りの坏蓋である。天井部は広い平坦面を持ち、回転ヘラ削りは中心から施し、大きな単位で削る。肩部は明確な沈線を２条伴って強く屈曲し、口縁部は内湾しながら先細る。端部内面には明確な段を付ける。これらの要素から、出雲２～３期に該当すると考える。

56－２も56－１と類似するが、肩部沈線がやや曖昧になっていること、また、端部内面の段が幅広のくぼみになっていることなどから、出雲３期のものであろうと考える。

56－３・４は、やや扁平形を成す出雲３～４期の典型であると考える。56－５の天井部は高く、ドーム状を呈する。丸みを保った状態で肩部に下り、口縁部にかけて直線的に伸びる。肩部に幅広で緩い沈線１条が見られ、全体的に丸みを帯びた形状をしている。いずれも回転ヘラ削りを中心から丁寧に施していることから、出雲３期に近いものと考える。

56－６・７は、56－３・４と比較して形状に大きな変化はないが、回転ヘラ削りの様相が相違する。56－６・７は削り自体が浅く、単位にばらつきが見られる。また、肩部には浅く幅広の沈線状の溝が１条、端部内面には高い位置に浅い段が付く。これらの形状から、56－６・７は出雲４期に該当すると考える。

56－８はやや変わった形状を呈するが、出雲４期の範疇に収まるものと考える。天井部は非常に高く明確な平坦面を持つ。肩部は全く張らずに直線的に口縁部まで下り、端部付近でわずかに内傾する。天井部外面に工具痕のようなものも見られ、調整が雑になってきている様子が見て取れる。

坏身（第56図９～15）

56－９～11は、いずれも立ち上がりが非常に高く、56－９は立ち上がり高が2.2㎝を測る。坏部も深くなると思われ、古手の坏身である。56－10・12は立ち上がりの端部内面に明確な段が付き、56－13・14は立ち上がりの形状が独特で、56－13は低く直線的に伸び、内傾斜はわずかである。56－14は内面が部分的に突出する変則的な形状を呈する。56－９～14は出雲２期の範疇に収まる。

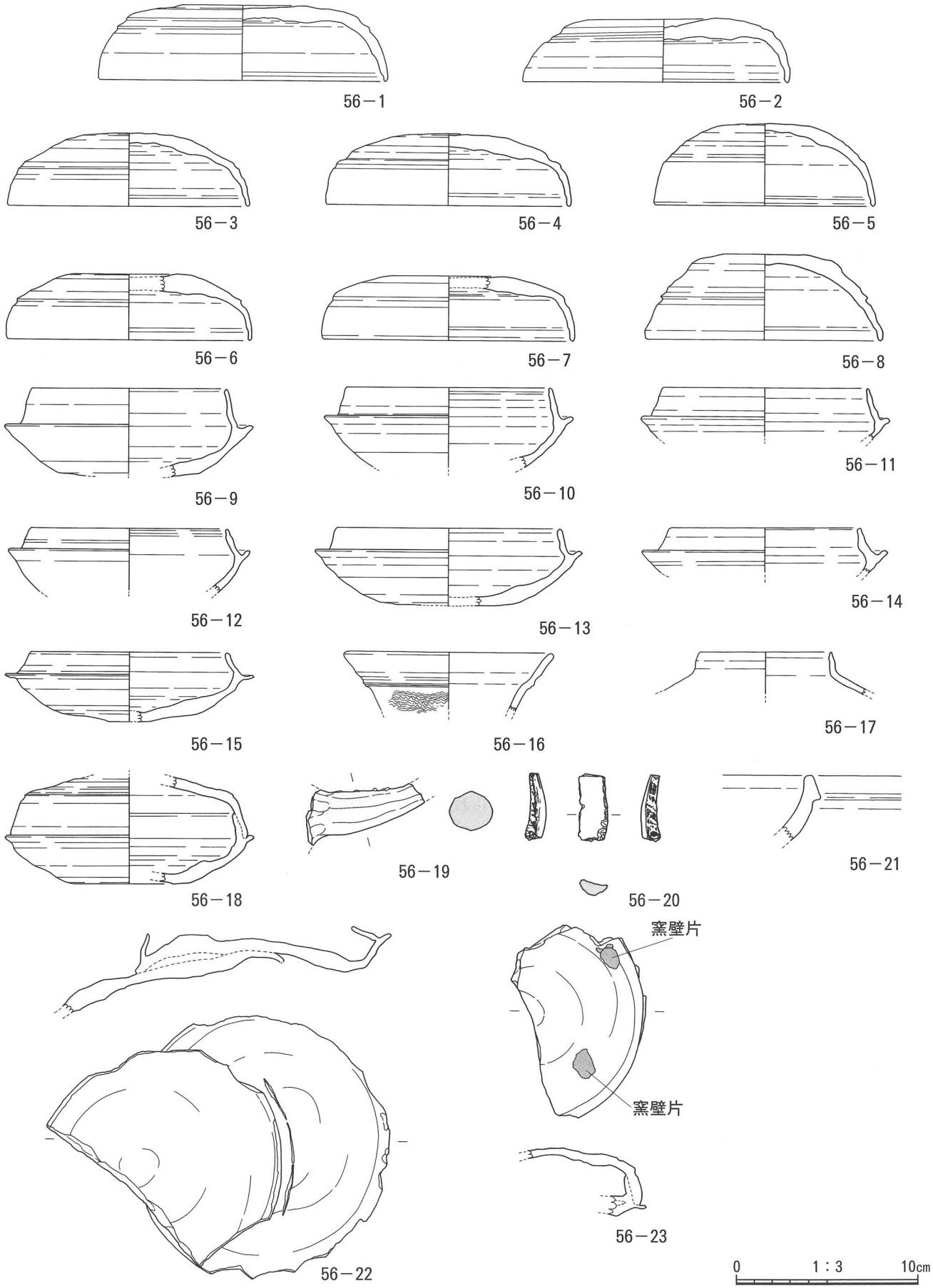
56－15は、立ち上がりが低く、強めに内傾する。また、受部は薄手で長く、水平気味に突出する。坏部は張らずに扁平形を呈し、回転ヘラ削りがやや雑になっている。出雲３～４期のものと考える。

瑕（第56図16）

56－16は口頸部片の残存で、大きく開く。頸部に細かい波状文を施文し、出雲編年Ａ４型、出雲３～４期に当てはまる。

壺（第56図17）

56－17は口頸部から肩部途中までの破片で、小形の短頸壺である。口径7.4㎝を測り、非常に薄手の作りである。



第56図　SX04出土遺物

は自然釉がかかる部分

甑（第56図19）

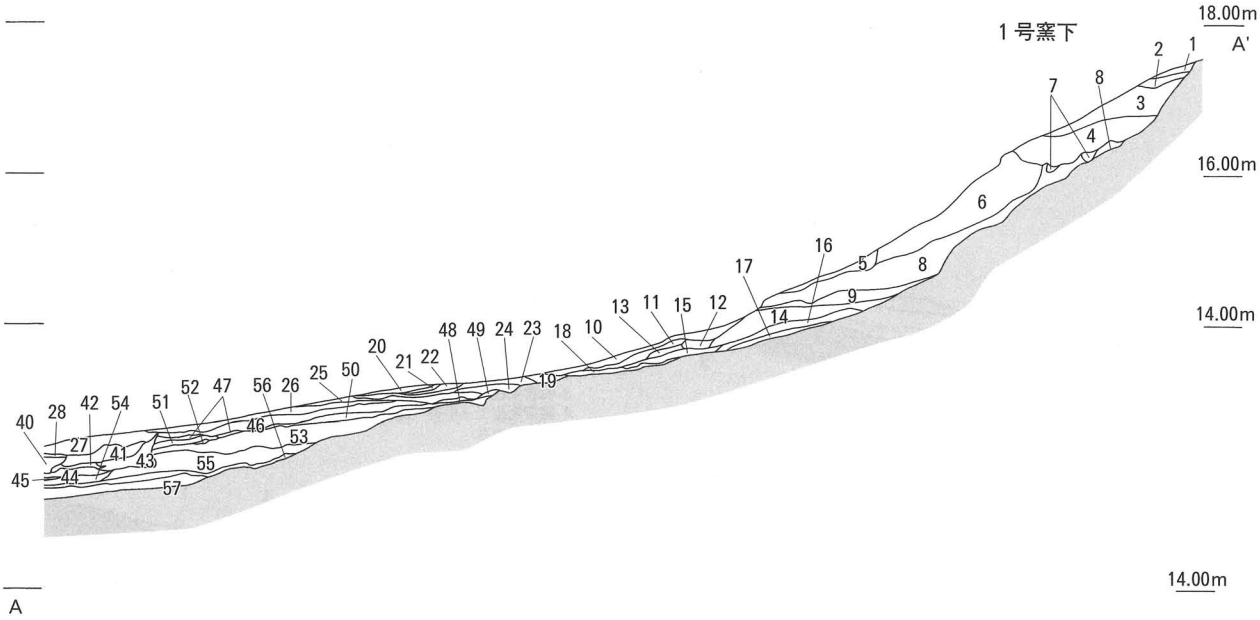
56－19は、甑の把手と考える。提瓶のそれとは明らかに形が異なり、また、椀のものにしては途中の膨らみが顕著で、直径2.4cmもの太さがあるものは甑であろうと考えた。

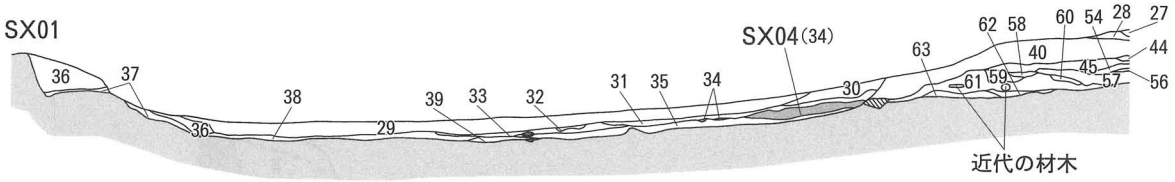
［蓋坏セット資料］（第56図18）

56－18は坏蓋と坏身がセットの状態で焼成されたもので、各々の形状から出雲４期に該当すると考える。56－18は坏蓋の方に自然釉がかかり、坏蓋が上になった状態で焼成されたようである。

［窯道具］（第56図20）

56－20は、先述した（22－18・28－12～16・36－14～16）と同系統のもので、甕や壺の口頸部と肩部以下の接合時に、削られて出る切り屑を転用したのではないかと考えられている。長さ3.8cm、幅1.6cm、厚み0.7cmを測る小形のもので、28－12～14・36－14らと同一形態のものである。





1 黒褐色土Ⅰ（黄橙色小石・須恵器片・窯壁片包含）
2 黒褐色土、黄色土の混合土
3 黒褐色土Ⅱ（黄橙色小石・須恵器片・窯壁片包含）
4 暗灰褐色土（１号窯崩落時の窯壁片か。多量包含）
5 明茶黄色土（無遺物層）
6 黄色土（無遺物層）
7 赤橙色土
8 淡黄橙色土（ブロック状）
9 明黄茶色土Ⅰ（須恵器片・焼け土包含）
10 黄茶色土、黒灰色土の混合土Ⅰ
11 黄茶色土Ⅰ（地山ブロック含）
12 明黄茶色砂質土Ⅰ
13 黒色土Ⅰ（炭多含）
14 明黄茶色土Ⅱ
15 黄茶色土Ⅱ
16 明黄茶色砂質土Ⅱ
17 明黄茶色砂質土Ⅲ
18 黄茶色土、黒灰色土の混合土Ⅱ（須恵器片包含）
19 灰褐色土
20 黄橙色土
21 明黄褐色土
22 黒灰色土
23 淡黄茶色土
24 黄茶色土、黒灰色土の混合土Ⅲ
25 黄茶色土、黒灰色土の混合土Ⅳ（炭多含）
26 茶褐色土、黄褐色土、橙色土の混合土Ⅰ
27 明黄茶色土Ⅲ
28 黒色土、黄茶色土の混合土Ⅰ
29 暗黄褐色土Ⅰ（池堆積土）
30 明黄茶色土Ⅳ
31 淡黄橙色砂質土
32 黒褐色土、黄茶色土の混合土
33 明黄茶色土Ⅴ
34 黒色土Ⅱ　SX04（須恵器片・炭多含）
35 淡黄茶色土、黒灰色土の混合土（須恵器片包含）
36 暗茶褐色土　SX01暗茶褐色土（須恵器片・窯壁片多含）
37 暗黄褐色土Ⅱ　SX01暗黄褐色土（石・礫多含）
38 淡黄茶色土、橙色土の混合土
39 淡黄茶色土、黒色土の混合土
40 明黄茶色土、淡黄茶色土の混合土（須恵器片包含）
41 黄茶色土、暗黄褐色土の混合土
42 黒色土、黄茶色土の混合土Ⅱ
43 黒色土、淡黄褐色土の混合土
44 黄茶色土Ⅲ
45 黄茶色土、橙茶色土の混合土
46 茶褐色土、黄褐色土、橙色土の混合土Ⅱ
47 黒色土Ⅲ（須恵器片・炭包含）
48 淡暗黄褐色土
49 明黄茶色土Ⅵ
50 黒色土Ⅳ（須恵器片・炭包含）
51 明黄茶色土Ⅶ
52 黒色土、茶褐色土、灰色土の混合土
53 明黄茶色土、暗褐色土の混合土
54 暗黄茶色土
55 明黄茶色土Ⅷ
56 黒色土、淡灰色土の混合土（須恵器片・炭包含）
57 明黄茶色土Ⅸ（炭多含）
58 黄茶色土Ⅳ
59 明黄茶色土、黒色土の混合土
60 橙茶色土、黄茶色土の混合土
61 灰色土、黄茶色土の混合土Ⅰ
62 灰色土、黄茶色土の混合土Ⅱ
63 黄茶色土、茶褐色土の混合土

0　1：100　4m

第57図　１号窯下～SX01間土層断面図

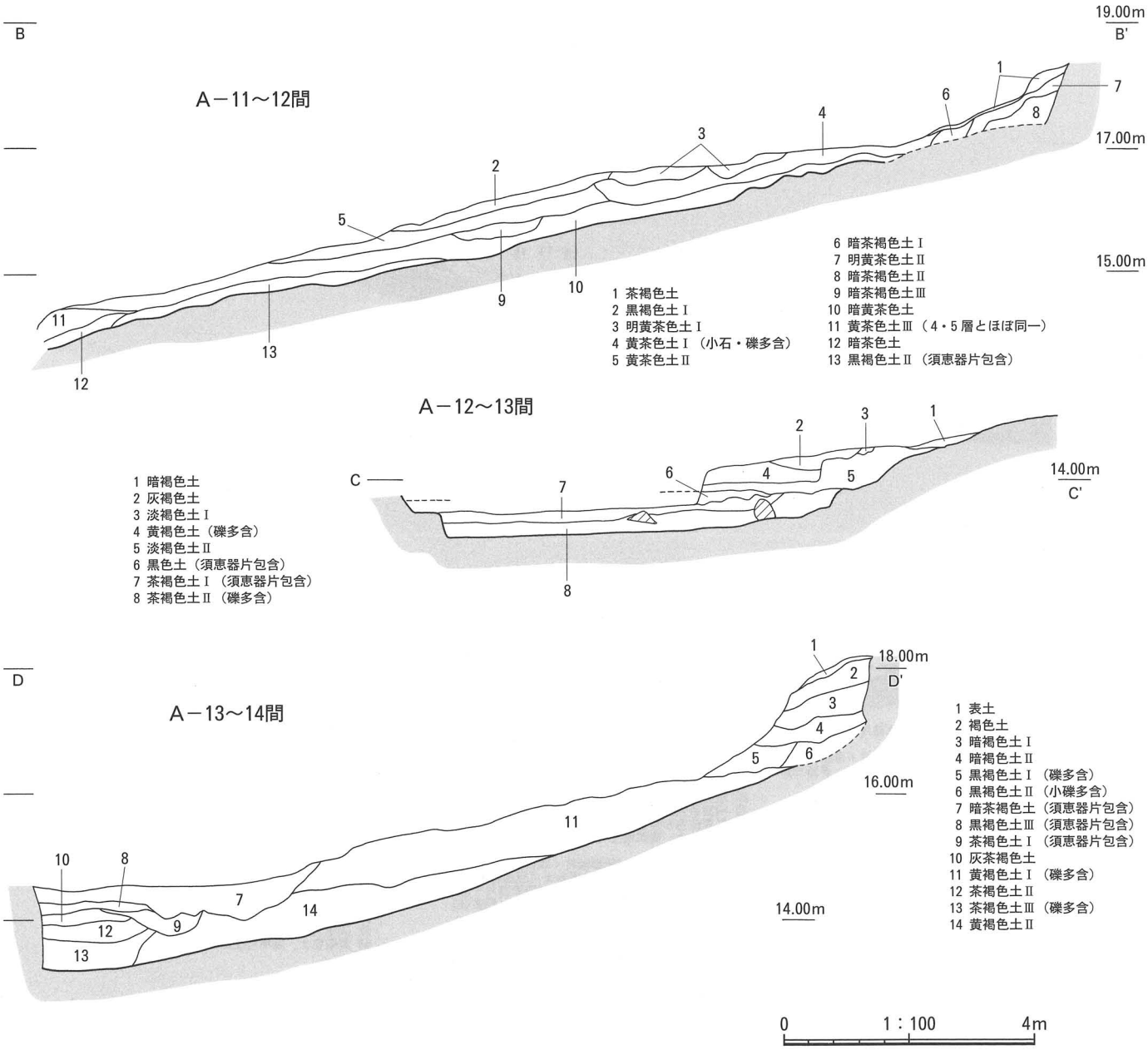
［土器溶着資料］（第56図22・23）

56－22は、坏蓋の上に坏身が乗った状態で溶着、及び歪んだものである。坏身の立ち上がりの高さ、回転ヘラ削りの丁寧さなどから、出雲２～３期に相当すると考える。56－23は、蓋坏がセットの状態で溶着したもので、坏蓋の外面に小さい窯壁の塊りが２個溶着している。これが自然の産物ではなく、窯道具的な使用をしていた痕跡かどうかは不明であるが、そのような可能性も考えられる。56－23は出雲４期に当たる。

【瓦質土器】

鉢（第56図21）

56－21は鉢の口縁部小片で、中世期の瓦質土器ではないかと考える。



第58図　A－11～14各土層断面図

5．A－11～14（第6・58図）

調査区西側の北側緩斜面である。調査は東から4区間（A－11・12・13・14）に分けて行なった。この部分は、北東から南西に向かって緩やかに下る傾斜を成しており、須恵器窯跡、または住居跡等の建物跡の存在が疑われたが、遺構らしきものは確認出来なかった。

ここでは、4区間をA－11～12（B－B'）、A－12～13（C－C'）、A－13～14（D－D'）の3本の土層断面で確認しながら調査を行なった。遺物は、D－D'の7層（暗茶褐色土Ⅰ）・8層（暗茶褐色土Ⅱ）・9層（茶褐色土）、C－C'の6層（黒色土）で確認しており、前者を褐色土、後者を黒色土として掲載している。

遺物は、須恵器の大きく歪むもの、溶着しているものなどが極端に少なく、出雲5期～高広ⅣA期のものが中心となっている。SX01を始めとする黒色灰原層から出土した遺物と比較して、新しい時期の遺物が多いことが窺える。使用痕が見られる蓋坏類、灯明皿の可能性が考えられる無高台の小形坏、甑の把手や竈の破片、円面硯などの出土から、この北側の調査区外の緩斜面に、窯業に携わった人間の作業工房、または住居等が存在する可能性も考えられる。明らかな遺構を確認出来ていないことから、特定の性格の遺構を示すことは出来ないが、少なくともこれら出土遺物の状況から、人々の生活の一端がこの辺り一帯に窺えよう。

A－11～14褐色土 出土遺物（第59・60図）

【須恵器】

坏身（第59図1）

59－1は、口径10.2cmを測る小形の坏身である。全体的に厚手で、立ち上がりは非常に低く、肥厚して丸く収まる。坏部は深く丸みを持ち、底部には外周のみを削る回転ヘラ削りを施す。小形であること、また、各部位の形状、そして回転ヘラ削りの雑さから、出雲5～6期のものと考える。

輪状つまみ蓋（第59図2・3）

59－2・3は輪状つまみを持つ坏蓋で、59－3は口縁端部が内傾気味に強く屈曲する。つまみは低く、非実用的な形状を呈しており、出雲7～8期の典型であろう。

かえりが付く蓋（第59図4・5）

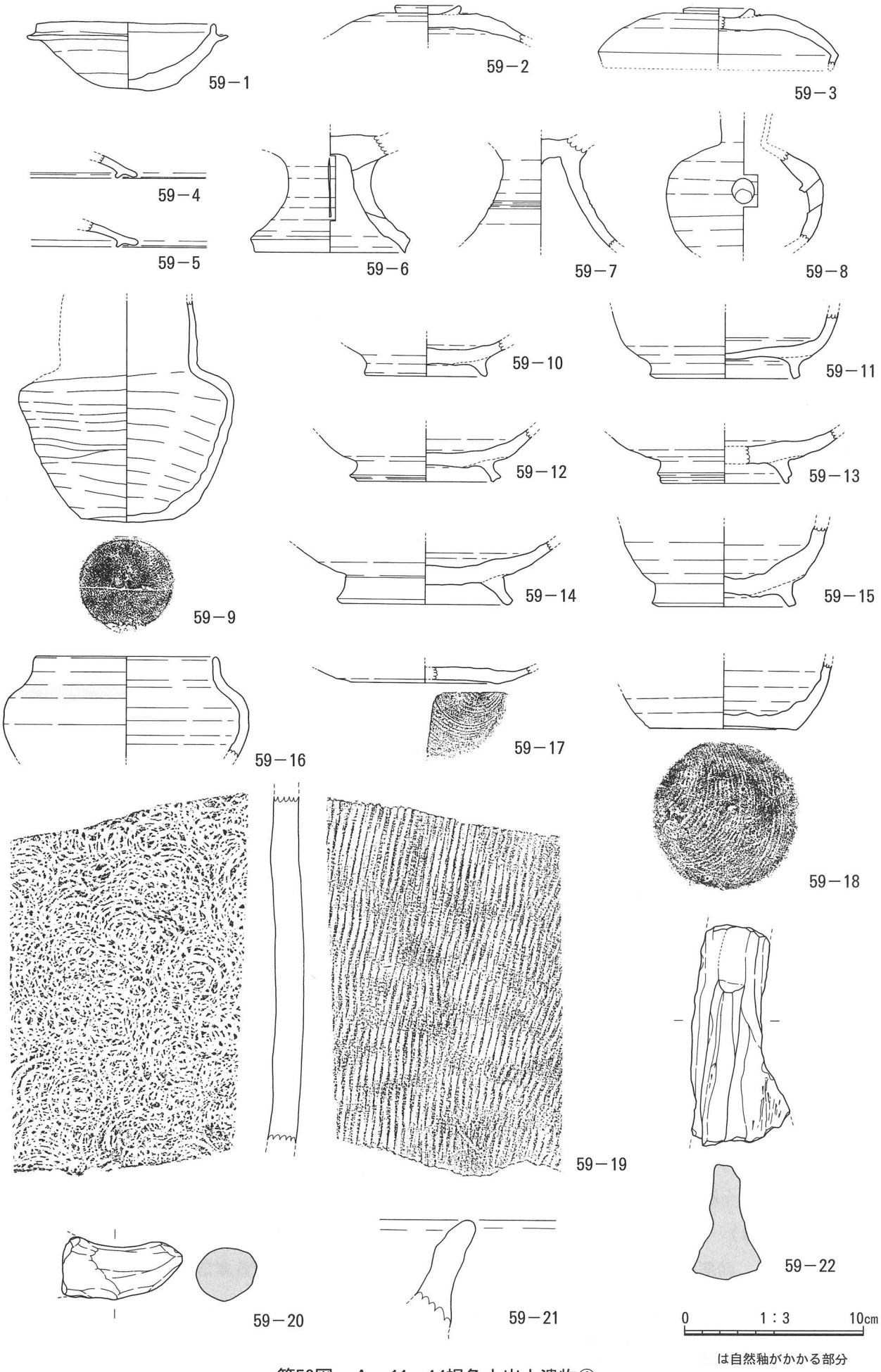
59－4・5は口縁端部の小片で、短く内傾するかえりが付く坏蓋である。いずれも出雲6期に該当する。

高坏（第59図6・7）

59－6は脚部のみの残存で、脚部高は約4cmを測り、平均的に厚手である。外反して開き、端部には外傾する面を持ち、接地面はわずかである。1段2方向の切れ目を入れている。出雲編年A5もしくはA6型、出雲5～6期に該当する。59－7は脚部上方の破片で、緩やかに外反して開き下りる。やや上方に明瞭な沈線を2条廻らし、透かしは見られない。丁寧な調整が行なわれており、脚部内面に粘土紐の痕跡などは見られない。

瑞（第59図8）

59－8は、頸部付け根から胴部下方までの残存で、推定で2.6cmを測る非常に細い頸部が特徴的である。最大径部分は強く横に張り出し、丸みを持って半球状を呈する。胴部に直径1.3cmの円孔が開いているが、沈線や刺突文などは施文されていない。これらの特徴から、出雲6～7期のもの



は自然釉がかかる部分

第59図　A－11～14褐色土出土遺物①

と考える。

壺（第59図９・15・16・18）

59－９は口頸部を部分的に欠損している直口壺で、大きく歪んでいる。口頸部は直線的に伸びていたと思われ、肩部は強く張る。胴部はなだらかに下り、明確な平底を呈する。底部外面には細いが明確に「一」と刻まれている。

59－15は高台が付く壺の底部で、胴部は張らずに立ち上がる。底部内面に円形状に自然釉がかかっていることから、長頸の口縁部から内部に落ち込んだものと考え、長頸壺と推測する。出雲７～８期のものと考える。

59－16は短頸壺で、口頸部から胴部下方までの破片である。口頸部は垂直に立ち、最大径付近にかけて丸く張り出す。肩部外面の自然釉の範囲は、有蓋であったことを示す可能性が高い。

59－18は無高台の壺の底部と思われる。底部は静止糸切りで、直線的に成形されている。

高台付坏（第59図10～14）

59－10の高台は低く外傾して開き、端部は丸く収まる。59－11の坏部は内湾気味に立ち上がり、高台はほぼ垂直に付いて、接地面はわずかである。59－12の坏部は開き気味に立ち上がり、高台は強く「ハ」字状に付き、端部側面は中央がくぼむ。59－10～12はいずれも出雲７～８期に該当する。

59－13は坏部が大きく横に張り出すことから、皿状のものではないかと推測する。高台の端部側面には明確な段が付いており、珍しい特徴を持つ。59－14の高台は1.5cmと高く、「ハ」字状に強く開く。59－13・14は出雲８期のものである。

坏（第59図17）

59－17は無高台の坏で、底部は回転糸切りを施す。高広ⅣＡ期に該当する。

甕（第59図19・第60図１）

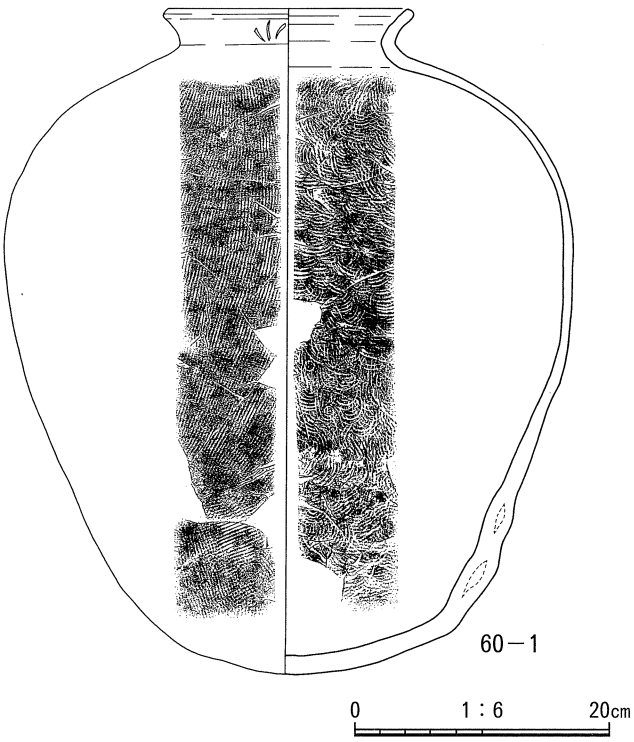
59－19は甕の胴部片で、厚さ1.7cmを測り、非常に大形の甕であったことを推測させる。

60－１は口径20.0cm、胴部最大径45.5cm、器高54cmを測る大形の甕で、完形に近いものである。下方にわずかな火膨れがあるが、大きく歪むこともなく、丁寧に作られた甕である。頸部外面に、３本の線が放射状に引かれ、上方に向かうようなヘラ記号が線刻され、何かの目印として刻まれたものと思われる。

【土師器】

甑（第59図20）

59－20は、長さ7.0cm、直径3.5cmを測る甑の把手である。指ナデで調整されている。



第60図　Ａ－11～14褐色土出土遺物②

竈（第59図21・22）

59－21・22は竈の破片である。59－21は竈の受け口部分、59－22はおそらく左側の鰭部分で、同一個体かどうかは不明である。

Ａ－11～14黒色土 出土遺物（第61図）

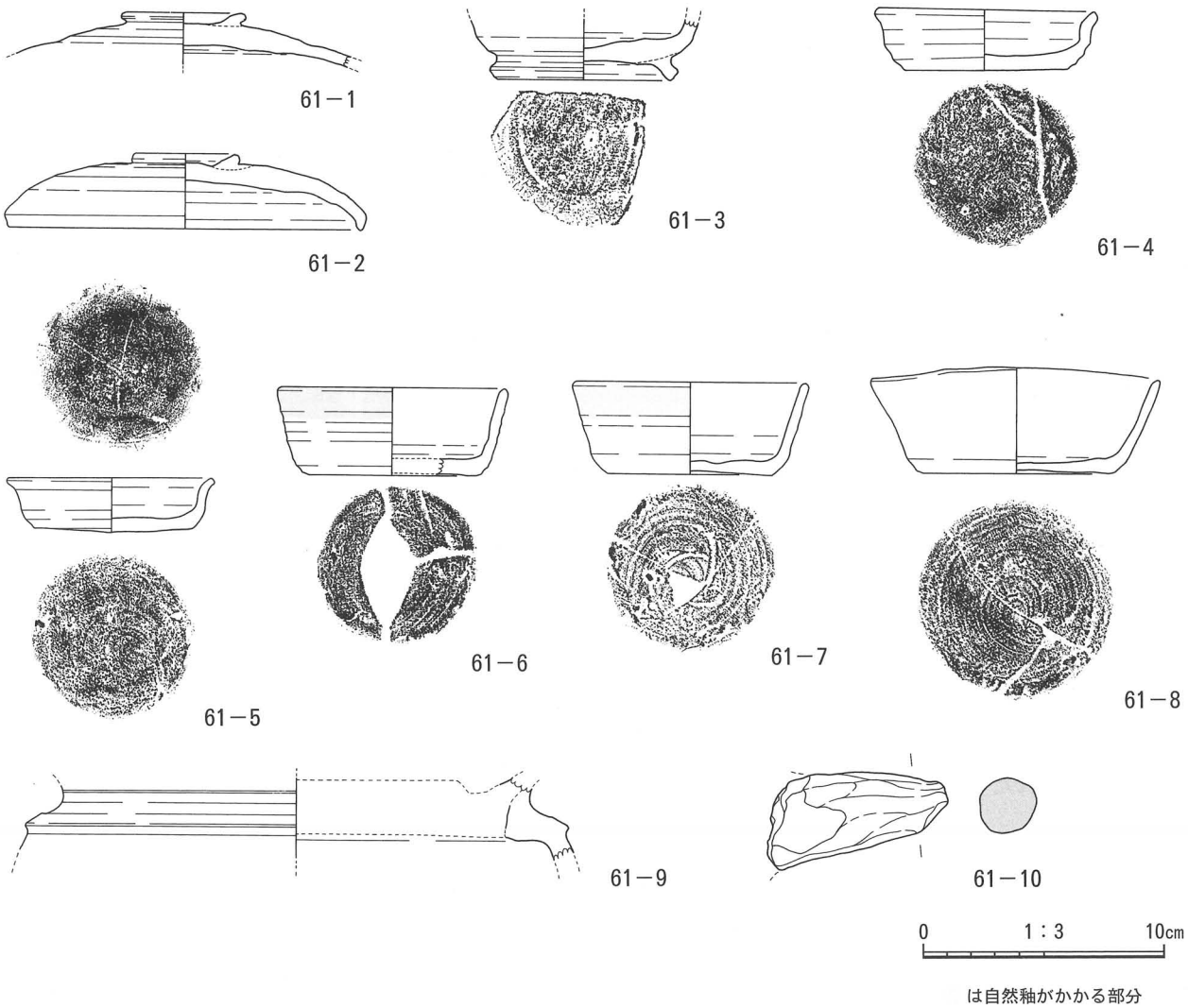
【須恵器】

輪状つまみ蓋（第61図１・２）

61－１・２は輪状つまみを持つ坏蓋で、どちらのつまみも低く、非実用的な作りである。61－１のつまみはやや径が大きく5.3cmを測る。61－２の口縁部は、端部付近で明確に折れ、端部は肥厚して尖る。いずれも出雲７～８期の典型であろう。

高台付坏（第61図３）

61－３の高台は低く、「ハ」字状に強く外傾する。底部外面は、静止糸切りを行なった後に高台を貼り付けている。出雲７～８期に当たる。なお、この底部は壺の可能性も考えられる。



第61図　Ａ－11～14黒色土出土遺物

坏（第61図４～８）

61－４・５は、口径９㎝前後、底径７㎝前後、器高2.5㎝の小形の坏で、口縁部が明確に外反し、底部は回転糸切りの後、ナデ調整を施す。61－５は、底部内面に大きくヘラ記号「×」が刻まれている。61－６～８はいずれも形状が類似しており、口径も12㎝以内に収まる。平底で、坏部は直線的に伸びる。61－４～８は高広ⅣＡ期内のものと考える。

円面硯（第61図９）

61－９は円面硯で、外縁以下の破片である。有堤式透脚硯に分類されるものである。外縁部分と台脚部分が欠損しているため器高は不明であるが、残存部の直径は推定で23.0㎝を測る。硯面の中心部分は残っていないが、おそらく陸の周縁に溝状の海（堤）を設けた形状の硯であろう。わずかに残存する内面の傾斜が海に続いていくという推定で、実測図においては破線で復元を行なった。台脚部分はほとんど残っていないが、透かしが入るものであったろうと推測する[16]。

【土師器】

甑（第61図10）

61－10は、長さ7.6㎝、直径2.4㎝を測る甑の把手で、直線的な形状を呈するものである。

６．その他の遺物採集区画（第６図）

これより掲載している遺物は、Ｔ－１～４、岩汐１・２・５号窯、SX01～04、Ａ－11～14以外の、ため池内で採集した遺物である。採集した遺物の周辺に明確な遺構は無かったが、北側斜面下から１・２号窯付近までのＣ・Ｄ区の黒色土層内（第62・63図）、ため池の最東部付近であるＥ区の斜面上（第64図）のこれら場所から、大量の須恵器片・窯壁片が見つかっている。

また、ため池改修工事と並行して行なった調査であったため、古い堤体を一旦崩して、新しく造り直す工事が同時期に行なわれた。この堤体を崩した際には、黒色灰原層の範囲が見られ、ここからも大量の須恵器片・窯壁片が確認された。その遺物も以下掲載している（第65図）。

改めて書き留めておくが、ここに掲載した遺物は、ため池内で採取した全遺物のほんの一部である。掲載していない須恵器、土器溶着資料、窯壁片を大量に収蔵していることを再度記す。

Ｃ・Ｄ区黒色土 出土遺物（第62・63図）

【須恵器】

坏蓋（第62図１～13）

62－１～４は平らな天井部で、肩部は丸みを持って張り出す形状を成す。肩部に沈線を２条廻らし、口縁部はやや内湾気味に下りる。端部内面にはわずかな段、または細い沈線を引くなど、バリエーションに富んでいるものである。62－５は全体的に厚手の作りで、特に天井部は厚み1.0㎝を測る。肩部はあまり張らず、途切れる沈線２条を廻らし、口縁部は外傾して下り、端部は先細る。62－６～９はいずれも天井部片の残存で、外面にヘラ記号または工具痕が見られる。62－６は、深く太く線刻されたヘラ記号「―」が見える。62－７・８は、いずれもはっきりした線刻で「×」が刻まれている。62－９は、ヘラ記号というよりも工具痕のような痕跡で、縦横無尽に途切れて走る線が数多く見られる。62－１～９は、いずれも天井部の回転ヘラ削りが丁寧で、単位も均一に施すことから、出雲３期に該当するものと考える。

62－10・11は、形状的に見ると上記のものとあまり変わらないが、回転ヘラ削りがやや雑になってきていることや、口縁端部内面の段の位置が高くなり、また段自体が薄いものになってきていることなどから、出雲４期に該当すると考える。

62－12は口径11.0㎝、器高3.6㎝の小形の坏蓋である。天井部から口縁部まで、屈曲せずなだらかに下り、沈線や強いナデは皆無である。天井部はヘラ切り後未調整であり、外周のみのヘラ削りは轆轤（ろくろ）回転が通常と逆で、左回転で施されている。形状・調整から、出雲６期のものと考える。

62－13は天井部片で、外面にヘラ記号「×」が線刻されている。この線刻は、やや太い道具などで刻み付けたものと思われる。出雲４期に該当する。

坏身（第62図14～19）

62－14の立ち上がりは1.7㎝と高く直線的で、端部内面に明確な段が付く。62－15の立ち上がりは1.5㎝だが、内傾斜が強いので実際はもっと高いものである。いずれも出雲２期に該当するものである。

62－16の立ち上がりは強い内傾で、先端は尖っている。坏部はやや深めで、回転ヘラ削りが雑であることから、出雲３～４期の４期寄りのものと考える。

62－17は口径8.6㎝、受部径10.8㎝、器高3.4㎝という小形の坏身で、立ち上がりは0.5㎝と低く尖る。坏部は丸みを保ち、底部はヘラ切り後未調整である。出雲５期のものである。

62－18・19も小形で、立ち上がりの形状にバリエーションが見られる。坏部は浅く扁平で、器高３㎝以内に収まる。底部はいずれもヘラ切り後未調整で、出雲６期の典型的な小形坏身である。

高坏（第62図20・21）

62－20は坏部片で、無蓋高坏である。坏部はわずかに湾曲しながら深めに下り、強く顕著に突出する突帯を２条廻らす。出雲３期のものと考える。

62－21は脚部下方の破片で、端部付近で一度強く外反し、外傾する。透かしが入っているが方向は不明である。出雲２期に当たる高坏の脚部と思われる。

䤈（第62図22）

62－22は頸部片で、頸部径は4.0㎝を測る。雑な波状文を施文し、その下に幅広で浅い沈線２条を廻らすもので、出雲３～４期の範疇のものである。

壺（第62図23・25）

62－23は口頸部高が0.3㎝と非常に短く、つまみ出しただけのような形状の短頸壺である。胴部は丸みを保って張り、施文等は見られない。

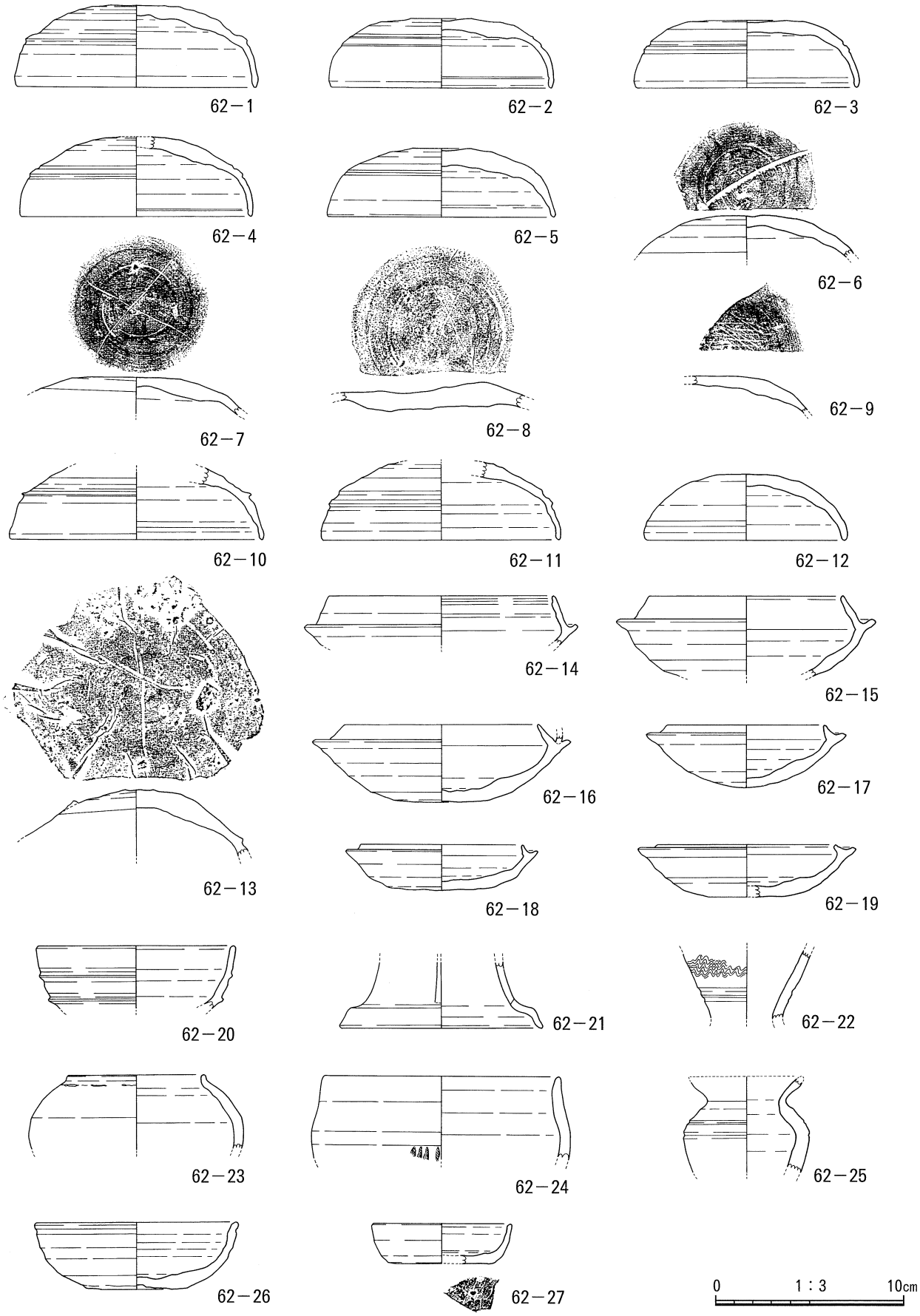
62－25は推定口径6.0㎝、胴部最大径6.8㎝を測る小形の壺である。口頸部は強く開き、肩部から最大径にかけて強く張り出し、最大径部分が突出するような形状を呈する。肩部と最大径部分に明確な沈線を施すが、円孔や刺突文は見られないことから、子持壺の子壺である可能性も考えられる。

椀（第62図24）

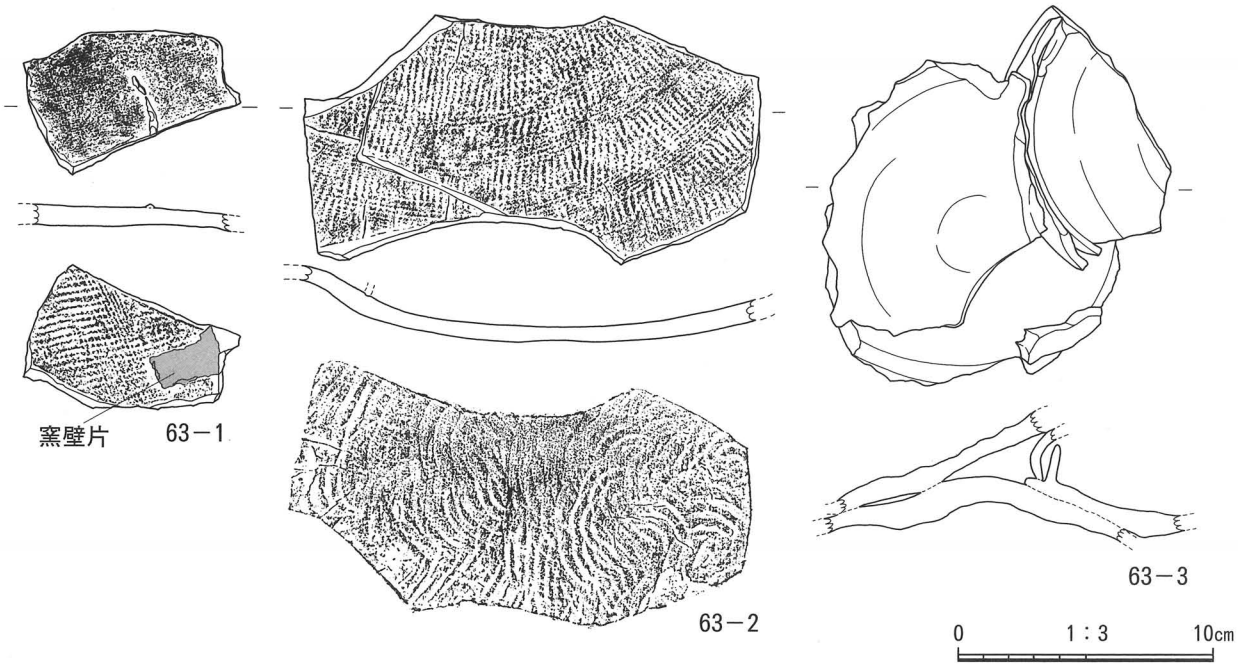
62－24は口径12.8㎝、口縁部が垂直気味に立つもので、端部は若干内傾する。また、最大径部分に連続刺突文を施文している。

坏（第62図26・27）

62－26は口縁端部が括れる坏で、底部はヘラ切り後未調整の高広ⅣＡ期のものである。62－27は



第62図　C・D区黒色土出土遺物①



第63図　C・D区黒色土出土遺物②

口径7.6cm、底径5.8cm、器高2.2cmという小形の坏で、底部は回転糸切りを施す。

［土器溶着資料］（第63図１～３）

63－１・２は、甕の胴部外面片に他の須恵器の痕跡を残すものである。63－３は、坏蓋片の上に蓋坏片２セットが乗って溶着しているもので、蓋坏のセットを交互に積んで焼成していた当時の様子が窺える資料である。出雲３～４期に該当する。

Ｅ区 出土遺物（第64図）

【須恵器】

坏蓋（第64図１・２）

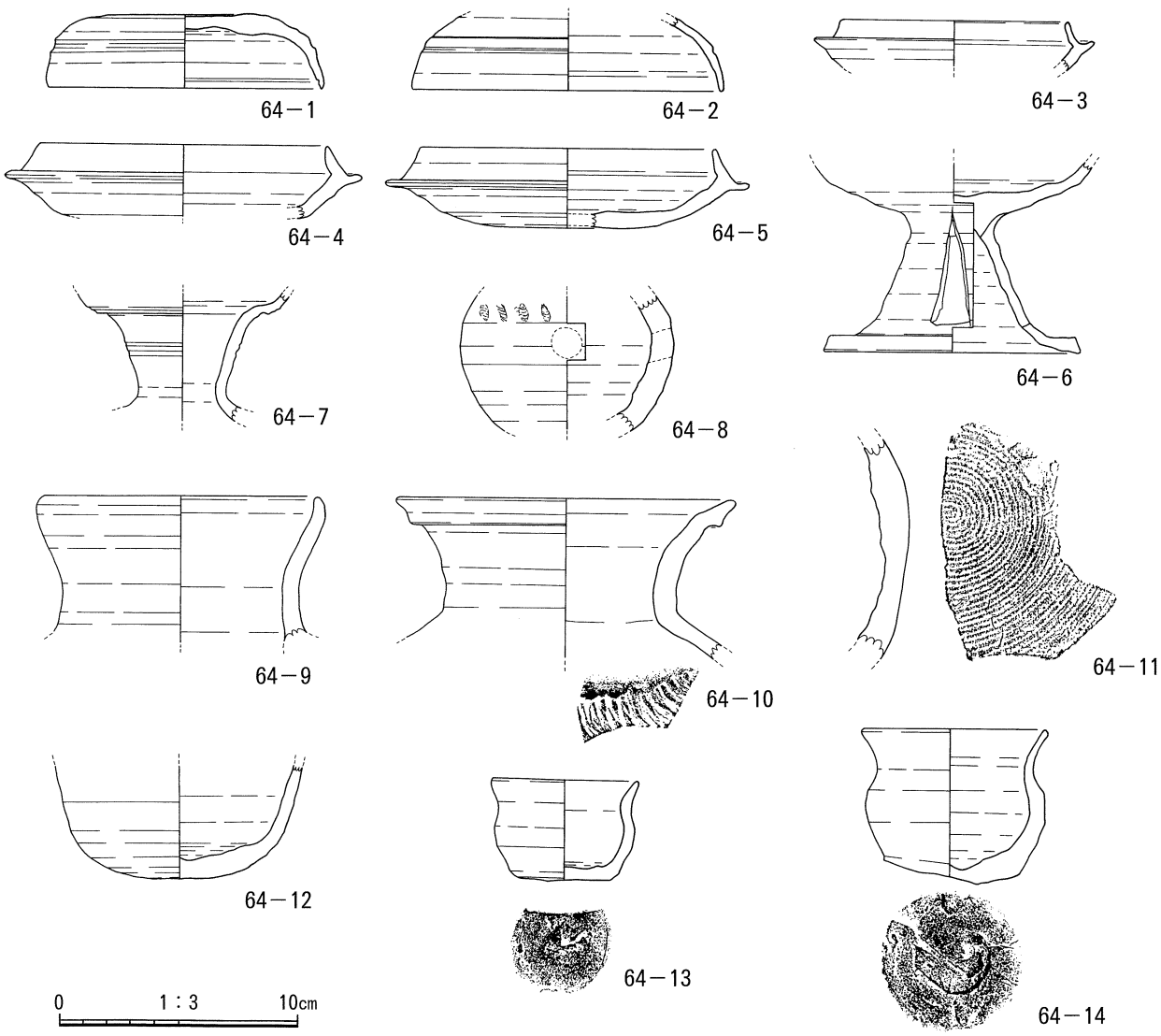
64－１は、口径11.8cmを測るやや小形の坏蓋で、天井部は低く平坦面を持つ。回転ヘラ削りは中心から施すが、途切れる部分や削りの浅い部分が目立つ。肩部に幅広で深い沈線を１条廻らし、口縁部は直線的で先細る。端部内面には細く深い明確な沈線を廻らす。64－２は肩部から口縁部の破片で、緩やかな肩部には細い沈線が２条廻り、口縁端部内面にはわずかに薄く段が付いている。64－１・２は、いずれも出雲４期ものと考える。

坏身（第64図３～５）

64－３の立ち上がりは0.9cmと低く、非常に薄手である。64－４・５も立ち上がりは低いが、厚手で強めに内傾する。受部は水平に突出している。坏部は扁平形で、押しつぶしたような形状を呈する。いずれも出雲4期に該当する。

高坏（第64図６）

64－６は坏底部から脚部の残存で、坏部は緩やかに開く。脚部は直線的に開いて下り、下方で更に大きく、外側に突出する。端部は肥厚し、内傾する側面を持つ。１段２方向の三角形透かしが入り、出雲編年Ａ４型、出雲４期のものと思われる。



第64図　E区出土遺物

瑕（第64図７・８）

64－７は頸部から付け根までの残存で、口縁部付近は大きく外傾する。頸部途中には明確な沈線を２条廻らす。波状文等は見られないことから、施文をしなくなる出雲5期以降のものと考える。

64－８は胴部片で、半球状で丸みを保つ。肩部に全周する連続刺突文を施文するが、雑なもので、その上下に沈線は引かれていない。

壺（第64図９・10）

64－９は変則的な口頸部片で、やや強めにカーブ状に外反しながら、端部付近で明確に内湾する。端部は若干先細り、波打つ形状を呈する。高坏の脚部の可能性も考えられる。

64－10の口頸部は強く外反して開き、端部は外傾する面を持つ。頸部付け根以下の流れがやや下がり気味なことから、提瓶の口頸部とも考えられる。

提瓶（第64図11）

64－11は厚み1.0cm以上を測る提瓶の胴部片で、外面に同心円状のカキ目調整を施す。

椀（第64図12）

64－12は、胴部下方から底部にかけての残存で、胴部が直線的に伸びると思われること、底部が丸みを帯びたものであることなどから、椀と推定した。出雲２～３期のものである。

小形壺（第64図13・14）

64－13は口径6.4cm、底径4.0cm、器高4.3cmを測る、小形の壺である。口頸部は緩く外反して先細り、胴部は張らずに下りる。明確な平底を呈し、底部はヘラ切り後未調整であることが窺える。64－14は64－13よりもやや大きく、口径8.0cm、底径5.8cm、器高6.6cmを測る。形状は64－13とよく似ているが、底部の粘土が斜めに変形している状況が見られる。これは仕上げ・調整が雑であった結果と捉えてよいと考える。

堤体掘削時黒色土 出土遺物（第65図）

【須恵器】

坏蓋（第65図１～４）

65－１は、器高が4.6cmと高く丸みを保ち、わずかな平坦面を持つものである。肩部は丸く張り、長い口縁部が特徴的である。肩部には強いナデによる幅広の段を廻らし、端部内面には明確な段を付ける。器高の高さと端部内面の段の様相が、出雲２期であることを示している。

65－２は、先述した23－２と非常によく似た形態の坏蓋である。同一個体ではないが、その形状・調整は全くと言っていいほど酷似している。天井部は丸みを持つ平坦面で、肩部までなだらかに下りる。肩部が張っていないことにより、扁平な形状に見えるのが特徴的である。肩部から口縁部までは短く、端部内面は肥厚しつつ段を付けるという形状を呈する。この端部が見られるものは出雲２期のものに限られることなどから、出雲２～３期内のものであると考える。

65－３・４は、いずれも器高3.4cmという低さで、肩部には明確な段を２条ずつ廻らすものである。回転ヘラ削りに若干の雑さが見られることから、出雲３～４期のものと考える。

坏身（第65図５～８）

65－５の立ち上がりは1.8cmの高さを測り、波打つように垂直気味に立ち上がる。端部内面に明確な段が付くことから、出雲２期と考える。

65－６は立ち上がり高1.5cmを測る。受部は水平に突出し、回転ヘラ削りは非常に丁寧で、単位も均一であることから、出雲３期に該当すると考える。

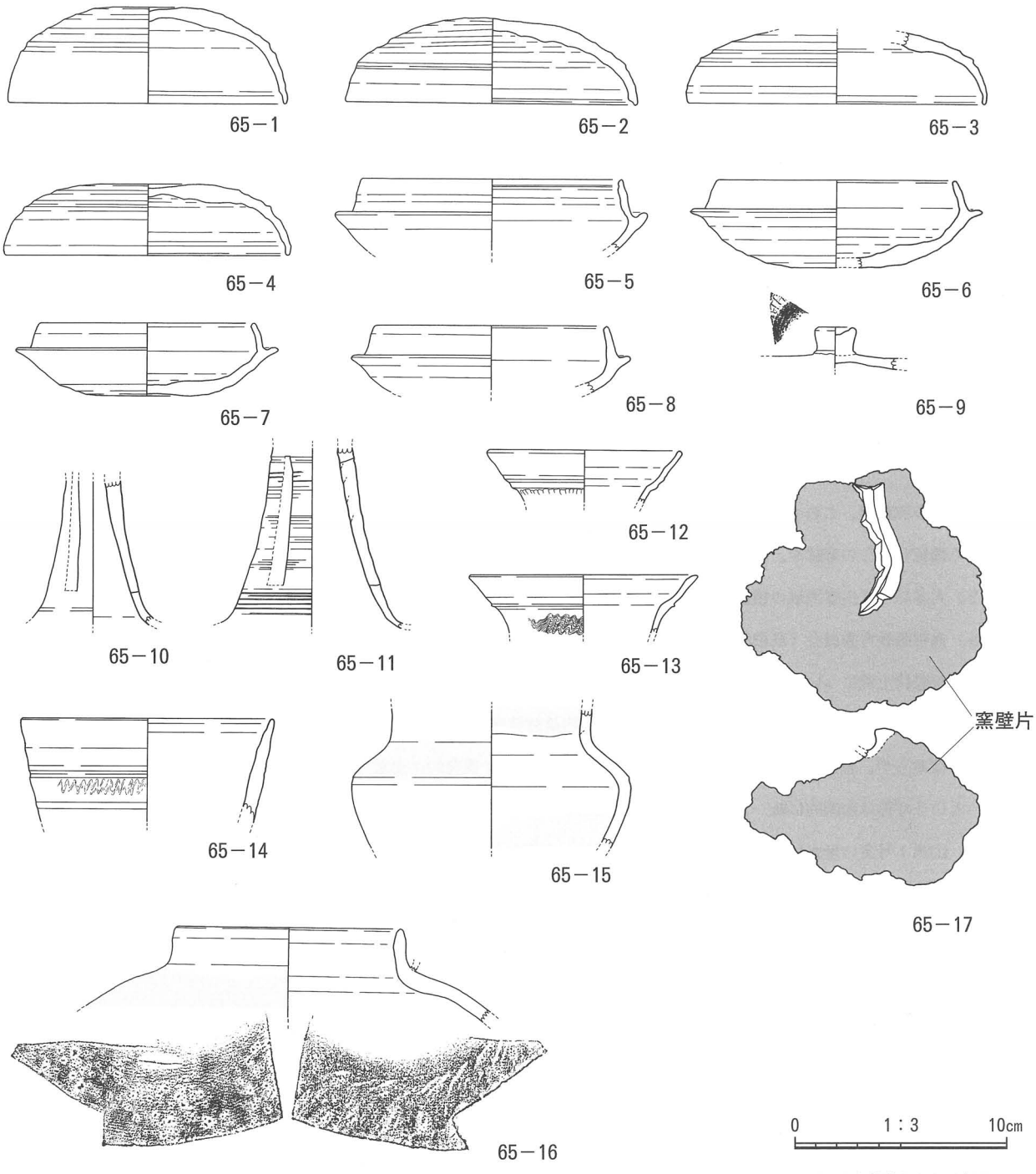
65－７・８は、立ち上がりに特徴が見られるものである。65－７は薄手で内湾して立ち、65－８は肥厚して垂直に立つ。いずれも出雲３～４期の間のものである。

高坏の蓋（第65図９）

65－９はつまみ付の蓋の天井部片で、つまみは径2.0cm、高さ1.3cmを測り、擬宝珠の形態を残しつつ、輪状にも近づいているような形状を呈する。天井部外面には連続刺突文が施文されており、有蓋高坏の蓋であろうと推測する。出雲２～４期の範疇のものである。

高坏（第65図10・11）

65－10・11は脚部下方の破片で、出雲編年の長脚高坏Ａ３型に当てはまる。いずれも２段３方向の透かしが入っている。65－10は脚部径が2.8cmと細く、65－11は外面にカキ目調整が施されるもので、内面には成形時の粘土紐積み上げの痕跡が顕著である。いずれも出雲３～４に該当する。



第65図　堤体掘削時黒色土出土遺物

瓹（第65図12・13）

65－12・13は口縁部片で、65－12は薄手で角張っている。65－13は口縁部が短く、頸部には瓹特有の細かい波状文を施文する。いずれも、出雲３～４期のものである。

椀（第65図14）

65－14は口径12.2cmの椀で、直線的に伸び、端部は先細り丸く収まる。坏部の途中には沈線と、細かく薄い波状文が施文されている。口縁部片のみの残存のため、全体像は不明なものである。

壺（第65図15・16）

65－15は直口壺で、頸部から胴部下方までの残存である。頸部は垂直気味に立ち上がり、最大径

は強めに張り出す。

65－16はやや大形のものであろうと推測する。口頸部は垂直に立ち、端部は尖るが全体的に肥厚する。肩部は大きく張り、外面には蓋が被せてあったであろう溶着痕が残っており、その外面には自然釉がかかる。16－17と類似することから、子持壺の可能性も考えられる。

［土器溶着資料］（第65図17）

65－17は、10×10㎝、厚み7.0㎝を測る窯壁の塊りに、高坏の脚端部片が溶着するものである。

註

（1）岩汐窯跡は、これまでの分布調査及び踏査から、窯跡が4期存在するとされている。これに基づき、本稿では、新しく確認したこの窯跡を、暫定的に5号窯と呼称しておく。

（2）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』（1994）

（3）島根県教育委員会『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ 窯業関係遺跡』（1985）

（4）舟底状土坑については、主に除湿機能を果たすものであるとの見解が、小松市教育委員会『戸津古窯跡群Ⅲ』（1993）、同市教育委員会「二ツ梨豆岡向山窯跡」『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（2005）で成されているが、これは確定されてはおらず、検出状況によっては窯の掻き出しによる痕跡で偶発的に出来た土坑である、ともされている。舟底状土坑という呼称は全国的に統一されていると考えてよいが、その性格については定まらないものとされている。

（5）山津1号窯の舟底状土坑は、焼成部の床面を抜いて掘り込まれ、長さ2.2m、幅1.0m、深さ18㎝を測る。

（6）島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』（1984）

（7）山代二子塚古墳で類似する子持壺が出土している。
島根県教育委員会『山代二子塚古墳整備事業報告書』（2001）

（8）岡崎雄二郎 島根県教育委員会「北小原横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書 第Ⅴ集』（1974）

（9）池淵俊一「出雲型子持壺の変遷とその背景」『川瀬正利先生退官記念考古論集』（2004）
なお、子持壺の詳細に関しては、池淵俊一氏にご教示して頂いた。

（10）小松市教育委員会『林タカヤマ窯跡』（1999）

（11）小松市教育委員会『林タカヤマ窯跡』（1999）によると、捏鉢は厚底鉢とも呼ばれているが、形態的特徴を器種名称としたものであり、用途から導き出されたものではない。なお、この土器の使用例の詳細は、現時点では解明されていない。

（12）松江市教育委員会『池ノ奥A遺跡・池ノ奥窯跡群』（1990）

（13）松江市教育委員会／財団法人松江市教育文化振興事業団『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』（2006）

（14）岡田山1号墳出土の子持壺に伴う蓋と類似している。

（15）小松市教育委員会『林タカヤマ窯跡』（1999）

（16）楢崎彰一「日本古代の陶硯－とくに分類について－」『考古学論考』平凡社（1982）

参考文献一覧

山本　清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』(1960)

前島己基「朝酌古窯址群と採集須恵器」『菅田考古 9 』(1966)

町田　章『出雲国庁跡発掘調査概報』(1971)

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 (1981)

岡崎雄二郎「須恵器の生産」『ふるさと文庫 9　さんいん古代史の周辺 (下)』山陰中央新報 (1980)

岡崎雄二郎「松江市法吉・長谷窯跡推定地について」『松江考古 第 7 号』(1989)

岡崎雄二郎「原始・古代」『朝酌郷土誌』朝酌郷土誌編集委員会 (2001)

松江考古学談話会事務局「松江・湯峠窯跡の再発見」『松江考古 第 9 号』(2001)

内田律雄「『出雲国風土記』大井浜の須恵器生産」『古代学研究 118・120号』(1988)

柳浦俊一「出雲地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』報光社 (1986)

柳浦俊一「大井産須恵器の流通について」『出雲古代史の諸問題』(1987)

柳浦俊一「出雲・大井古窯跡群の須恵器生産と流通」『島根考古学会誌 第 6 集』(1989)

柳浦俊一「出雲における須恵器の生産・流通と特質」『風土記の考古学③ 出雲国風土記の巻』同成社 (1995)

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11号』(1994)

瀬古諒子「松江・渋ヶ谷窯跡について」『松江考古 第 9 号』(2001)

菱田哲郎「須恵器生産の拡大と工人の動向」『考古学研究 第39巻 第 3 号』(1992)

菱田哲郎『須恵器の系譜 歴史発掘10』講談社 (1996)

望月精司「須恵器甕の製作痕跡と成形方法」『北陸古代土器研究 第 9 号』(2001)

佐藤竜馬「中国・四国の須恵器窯」『須恵器窯の技術と系譜』窯跡研究会 (1999)

丹羽野裕「出雲の須恵器窯」『須恵器窯跡構造資料集 2 』(2004)

池淵俊一「出雲型子持壺の変遷とその背景」『川瀬正利先生退官記念考古論集』(2004)

藤原　哲「古代出雲の須恵器生産と瓦生産－四反田窯跡の出土遺物とその評価－」『出雲古代史研究 14』(2004)

岡田裕之「大井窯跡群採集資料の紹介 (上) －ババタケ窯跡・岩汐窯跡・寺尾窯跡－」『古代文化研究 第16号』(2008)

島根大学法文学部考古学研究室『大井窯跡群表採資料の報告』(2008)

兵庫県竹野町教育委員会『鬼神谷窯跡発掘調査報告』(1990)

兵庫県教育委員会『汁谷窯跡群・汁谷遺跡』(2006)

大阪府立近つ飛鳥博物館『大阪府立近つ飛鳥博物館図録40 年代のものさし－陶邑の須恵器－』(2006)

小松市教育委員会『林タカヤマ窯跡』(1999)

石川県小松市教育委員会『戸津古窯跡群Ⅲ』(1993)

石川県小松市教育委員会「二ツ梨豆岡向山窯跡」『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』(2005)

益田市教育委員会『本片子遺跡・木原古墳』(1982)

宍道町教育委員会『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』(1983)

安来市教育委員会『高畑遺跡詳細分布調査報告書』(1984)

平田市教育委員会『木舟窯跡群』(2004)

島根県教育委員会『島根縣史蹟名勝天然紀念物調査報告 第六輯』(1933)

島根県教育委員会『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ 窯業関係遺跡』(1985)

島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』(1984)

島根県教育委員会『日脚遺跡』(1985)

島根県教育委員会『古曽志遺跡群発掘調査報告書』(1989)

島根県教育委員会『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡』(1994)

島根県教育委員会『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』(1997)

島根県教育委員会『渋山池古墳群』(1998)

島根県教育委員会『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡(門生山根1号窯・門生黒谷1号窯・五反田古墳群)』(1998)

島根県教育委員会『山代二子塚古墳整備事業報告書』(2001)

松江市教育委員会『池ノ奥A遺跡・池ノ奥窯跡群』(1990)

松江市教育委員会『向山古墳群発掘調査報告書』(1998)

松江市教育委員会『山津窯跡発掘調査報告書－2・3号窯跡－』(2003)

松江市教育委員会／財団法人松江市教育文化振興事業団『渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』(2006)

松江市教育委員会／財団法人松江市教育文化振興事業団『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』(2006)

第５章　自然科学分析

岩汐窯跡ほか出土須恵器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　白石　　純

１．分析目的

大井古窯跡群の1つとして知られている岩汐窯跡では、岩汐池整備事業の開発工事に伴い３基の須恵器窯が確認された[1]。この分析では、これまでに調査確認されている大井古窯跡群内の各窯跡（岩汐窯跡、ババタケ窯跡、寺尾窯跡、山津窯跡、池ノ奥４号窯、勝田谷窯跡、唐干窯跡、四反田窯跡）を自然科学的手法による胎土分析で各窯跡の胎土比較をおこない、胎土の差異や特徴を調べた。また松江市内の遺跡出土須恵器（消費地須恵器）がどの生産地に属するか、つまり、消費地出土須恵器の生産地推定を実施し、消費地および生産地の基礎データの蓄積を目的とした。

２．分析方法と試料

分析方法は、蛍光Ｘ線分析と実体顕微鏡による胎土観察の２つの方法で胎土を検討した。

蛍光Ｘ線分析法では、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から分析試料の違いについて調べた。測定した成分（元素）は、SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5の10成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計（セイコーインスツメンツ社製SEA2010L）を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成型機で約15ﾄﾝの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。従って、一部破壊分析である。

実体顕微鏡による胎土観察では、土器の胎土中に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、含有量について調べた。なお、砂粒の含有量は、やや曖昧な表現であるが、非常に多い・多い・少ない・まれに、の４段階であらわした。

今回分析試料は、第１・２表に示した127点である。内訳は窯跡資料として岩汐窯跡29点、ババタケ窯跡11点、寺尾窯跡７点、山津窯跡10点、池ノ奥４号窯９点、勝田谷窯跡２点、唐干窯跡10点、四反田窯跡10点である。なお、山津窯跡は以前分析した資料も加えて生産地資料とした[2]。次に消費地遺跡出土資料として岩汐遺跡５点、遅倉１・２号横穴墓５点、米坂遺跡１点、米坂古墳群４点、寺ノ脇遺跡６点、松江北東部遺跡５点、菅田14号・18号横穴墓４点、袋尻１・２号横穴墓４点、出雲国分寺跡５点である。器種としては、坏・高坏・壺・甕などである。

３．分析結果

(1) 蛍光Ｘ線分析結果について

この分析では測定した10成分のうち、分析試料に顕著な差がみられたのは、TiO_2、CaO、K_2Oの３成分であった。この３成分を用いて散布図を作成し、胎土の違いを検討した。

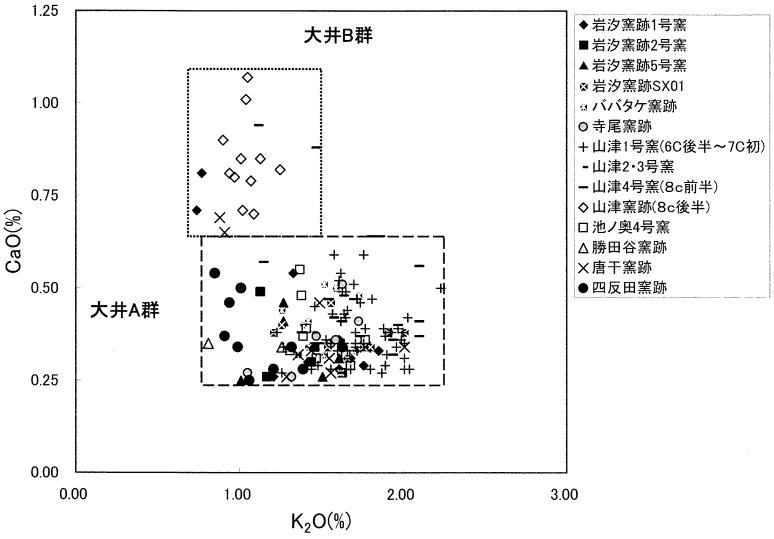
第67図K_2O－CaO、第68図TiO_2-CaOの両散布図では、各窯跡（岩汐窯跡、ババタケ窯跡、寺尾窯跡、山津窯跡、池ノ奥４号窯、勝田谷窯跡、唐干窯跡、四反田窯跡）の胎土を比較した。その結

1 岩汐窯跡
2 ババタケ窯跡
3 寺尾窯跡
4 山津窯跡
5 池ノ奥窯跡
6 勝田谷窯跡
7 唐干窯跡
8 四反田窯跡
9 岩汐遺跡
10 遅倉横穴墓
11 米坂遺跡
12 米坂古墳群
13 寺ノ脇遺跡
14 松江北東部遺跡
15 菅田横穴墓
16 袋尻遺跡群（横穴墓）
17 出雲国分寺跡

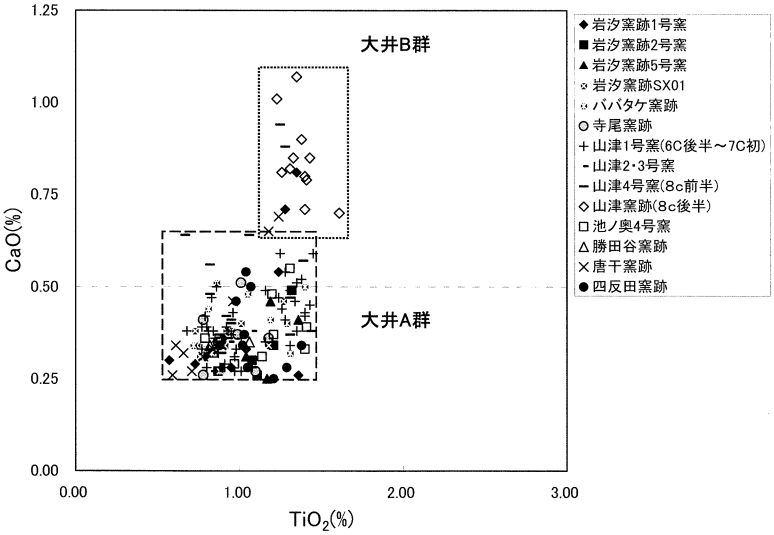
第66図　胎土分析試料遺跡位置図（S＝1：100,000）

果、両散布図に示しているように、大きく２つの胎土に分類が可能であった。それはK_2O量が約0.8％～約2.3％、CaO量が約0.25％～約0.64％の領域（以下大井Ａ群とよぶ）と、K_2O量が約0.74％～約1.1％、CaO量が約0.64％～約1.05％の領域（以下大井Ｂ群とよぶ）である。また第68図TiO_2－CaO散布図でも、TiO_2量が約0.57％～約1.45％、CaO量が約0.25％～約0.64％の領域の大井Ａ群とTiO_2量が約1.18％～約1.61％、CaO量が約0.64％～約1.05％の領域の大井Ｂ群に分類できた。つまり大井Ａ群には、岩汐窯跡、ババタケ窯跡、寺尾窯跡、山津窯跡、池ノ奥4号窯、勝田谷窯跡、唐干窯跡、四反田窯跡の８窯跡（６世紀後半～９世紀）が分布し、大井Ｂ群には岩汐窯跡、山津窯跡、唐干窯跡の８世紀前半～後半の須恵器が分布した。

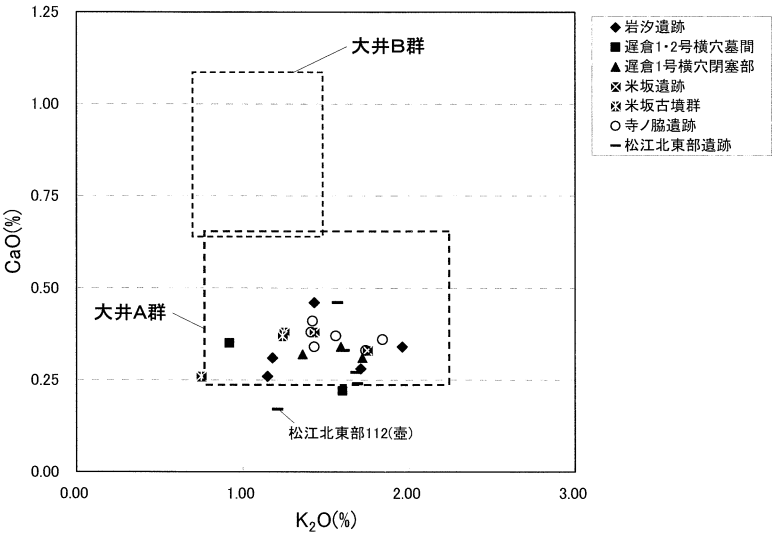
次に、消費地遺跡出土須恵器の生産推定を試みた。ここでは散布図を使用して、大井窯跡群の生産地推定領域（Ａ・Ｂ群）に消費地資料をプロットし、産地推定を実施した。その結果、第69図K_2O－CaO、第



第67図　窯跡別の胎土比較



第68図　窯跡別の胎土比較

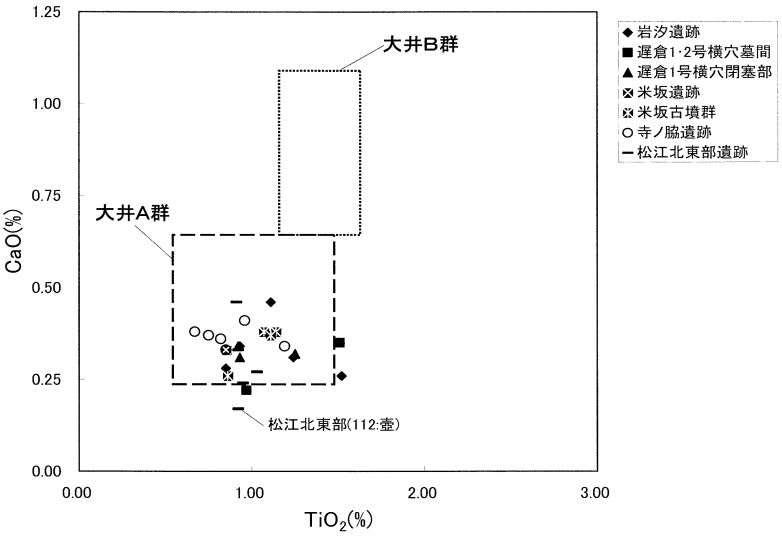


第69図　消費地遺跡出土須恵器の産地推定(1)

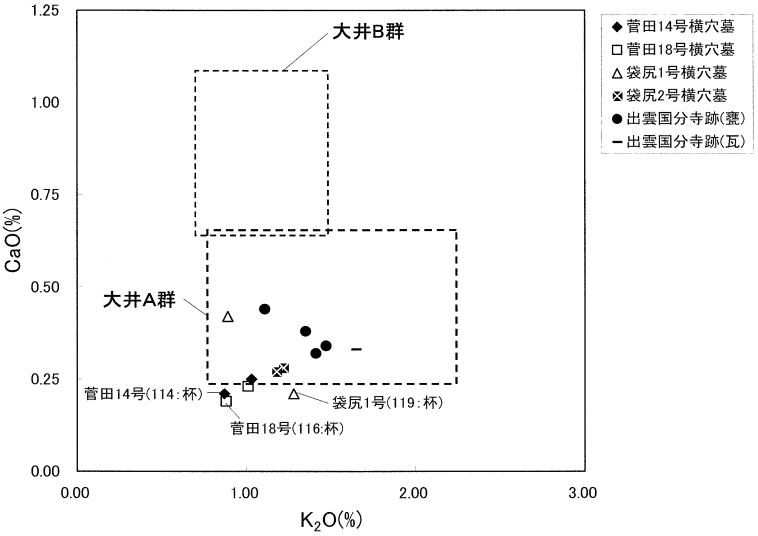
70図TiO_2－CaOの散布図は岩汐遺跡、遅倉１・２号横穴墓、米坂遺跡、米坂古墳群、寺ノ脇遺跡、松江北東部遺跡出土須恵器の産地推定を、第71図K_2O-CaO、第72図TiO_2-CaOの散布図は菅田14号・18号横穴墓、袋尻１・２号横穴墓、出雲国分寺跡出土須恵器の産地推定を実施した。すると、数点の試料をのぞき、すべて大井Ａ群の分布領域に入った。

(2) 実体顕微鏡観察結果について

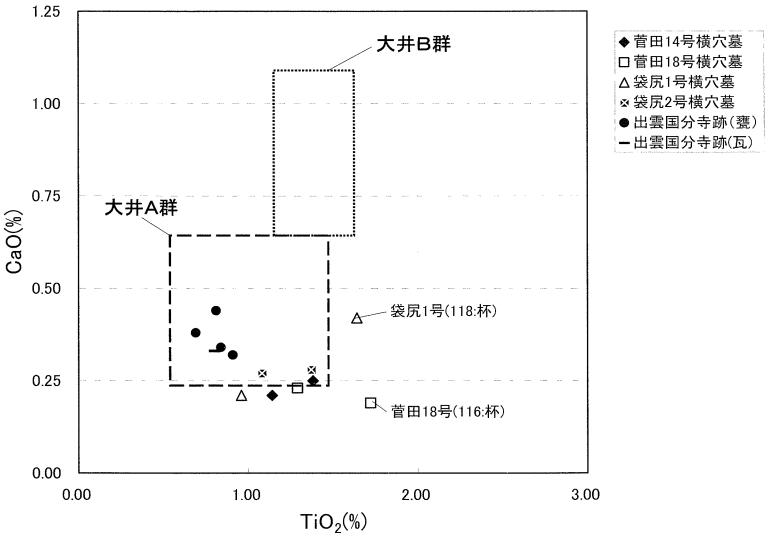
大井窯跡群および松江市内の遺跡出土須恵器の胎土観察を実施したところ以下のような結果となった。なお、須恵器に関しては、焼成温度が高く試料中の含有鉱物の中には融解し消失していることが考えられるため砂粒観察では、客観的かつ正確なデータを得られないと思われる。しかし、第73・74図に示しているように表面観察を実施してみたところ、白色および黒色の物質が観察されることから、これらの種類や大きさなどについて検討してみた。



第70図　消費地遺跡出土須恵器の産地推定(1)



第71図　消費地遺跡出土須恵器の産地推定(2)



第72図　消費地遺跡出土須恵器の産地推定(2)

写真１：岩汐窯跡１号窯跡（試料番号２、坏・６世紀末）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）を非常に多く含む。まれに黒色粒（0.5㎜以下）の融解物を含む。

写真２：岩汐窯跡１号窯下周辺（試料番号10、高台坏・６世紀末）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）を非常に多く含む。少しの黒色粒（0.5㎜以下）の融解物を含む。

写真３：山津１号窯（試料番号48、瓿・６世後半）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）を非常に多く含む。まれに黒色粒（0.5㎜以下）の融解物を含む。

写真４：山津４号窯（坏・８世後半）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）と長石（0.5㎜以下）多く含む。まれに茶褐色粒（0.5㎜以下）の融解物を含む。

写真５：池ノ奥４号窯（試料番号60、坏・６世末）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）を非常に多く含む。まれに長石（１㎜以下）と茶褐色粒（0.5㎜以下）の融解物を含む。

写真６：唐干窯跡（試料番号71、甕・８世後半）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）を非常に多く含む。まれに長石（１㎜以下）と茶褐色粒（0.5㎜以下）の融解物を含む。

写真７：岩汐遺跡（試料番号89、坏・７世紀前半）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）を非常に多く含む。まれに長石（１㎜以下）と茶褐色粒（0.5㎜以下）の融解物を含む。

写真８：米坂古墳（試料番号101、坏・６世紀中頃）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）を非常に多く含む。まれに長石（１㎜以下）と茶褐色粒（0.5㎜以下）の融解物を含む。

写真９：寺ノ脇遺跡（試料番号105、坏・７世紀前半）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）を非常に多く含む。まれに0.5㎜以下の融解物を含む。

写真10：菅田18号横穴墓（試料番号117、坏・６世紀末）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）を非常に多く含む。まれに長石（１㎜以下）を含む。

写真11：袋尻2横穴墓（試料番号121、壺・６世紀末）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）を非常に多く含む。まれに長石（１㎜以下）を含む。

写真12：出雲国分寺跡（試料番号123、甕・８世紀）

・石英（１㎜以下、ほとんどが0.5㎜以下である）を非常に多く含む。まれに長石（１㎜以下）を含む。

以上、おもな須恵器試料の砂粒観察結果について述べたが、すべての試料に石英の微細な砂粒（0.2㎜前後）が多量に観察され、まれに長石と黒色、茶褐色の融解した砂粒もみられることから基本的な砂粒構成は同じであると考えられる。

4．まとめ

蛍光X線分析と実体顕微鏡観察による大井窯跡群、松江市周辺部遺跡出土須恵器の胎土分析では、以下のことが推定された。

(1) 蛍光X線分析では、大井窯跡群出土須恵器が2つの胎土（A群・B群）に分類が可能であった。A群には今回分析した大井窯跡群のほとんどの窯出土須恵器が分布し、窯別に胎土が異なるような傾向はなかった。またB群には、8世紀代の須恵器試料（山津、岩汐、唐干）が分布した。8世紀代に操業する窯の中には、使用される粘土が一部異なることが推定される。次に、消費地遺跡出土須恵器の産地推定を行った。するとほぼすべての消費地出土須恵器がA群の分布域に分布し、どの窯跡で生産されたものなのか、明確に推測できなかったが、大井窯跡群内で生産されたことがわかった。また、一部の消費地試料が、A群の領域に入らなかった。これについては今後の課題であるが、大井窯跡群内には、未発見の窯跡が存在すると考えられ、窯跡データを蓄積することで、A群の領域が広がることが想定される。

(2) 実体顕微鏡による砂粒観察では、生産地試料が基本的に同じ砂粒構成であることがわかり、消費地遺跡出土須恵器も砂粒構成では、生産地と差はなく、砂粒観察でも消費地試料は大井窯跡群で生産されたことが推測された。また、生産地試料がA群、B群に分類されたことは、砂粒観察からみるとB群試料には長石と考えられる白色物がA群に比べ多く観察され、これがCaO量の差としてあらわれたと考えられる。

この分析では以下の方々、機関にお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

落合昭久、(財)松江市教育文化振興事業団、松江市教育委員会（敬称略）

註

(1) (財)松江市教育員文化振興事業団「埋蔵文化財課年報 XI」平成18年度　2008年

(2) 白石　純「古代須恵器の胎土分析」『平安時代前期の土器様相』第4回中世土器検討会　2005年

第１表　岩汐窯跡ほか出土須恵器の胎土分析一覧表

単位：SiO_2～P_2O_5（%）

試料番号	遺跡名	器種	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	各報告書掲載箇所	備考
1	岩汐窯跡１号窯	坏蓋	71.89	0.90	17.03	4.43	0.06	1.44	0.36	1.75	1.61	0.28		
2	岩汐窯跡１号窯	坏蓋	70.80	0.95	18.19	5.08	0.05	1.29	0.28	1.31	1.61	0.17		
3	岩汐窯跡１号窯	坏蓋	68.11	1.24	17.55	5.80	0.12	1.31	0.54	0.84	1.33	0.21		
4	岩汐窯跡１号窯	甕	71.84	0.57	17.80	3.47	0.04	2.72	0.30	1.27	1.42	0.18		
5	岩汐窯跡１号窯	甕	71.79	0.73	16.35	4.48	0.06	1.48	0.29	2.63	1.76	0.21		
6	岩汐窯跡１号窯下周辺	坏身	66.51	1.36	17.23	8.26	0.11	1.59	0.26	3.08	1.21	0.11		
7	岩汐窯跡１号窯下周辺	坏身	72.05	0.79	16.91	3.79	0.03	1.47	0.31	2.45	1.68	0.25		
8	岩汐窯跡１号窯下周辺	蓋	68.33	1.04	17.53	6.94	0.11	1.49	0.33	1.90	1.85	0.11		
9	岩汐窯跡１号窯下周辺	坏	63.84	1.28	17.91	11.66	0.24	1.36	0.71	1.47	0.74	0.52		
10	岩汐窯跡１号窯下周辺	高台坏	62.62	1.35	17.41	12.36	0.22	1.45	0.81	2.00	0.77	0.71		
11	岩汐窯跡２号窯	壺？	68.80	1.11	18.74	5.25	0.11	2.99	0.26	1.26	1.17	0.14		
12	岩汐窯跡２号窯下周辺	坏蓋	67.97	1.32	17.16	6.75	0.14	1.44	0.49	1.33	1.13	1.97		
13	岩汐窯跡２号窯下周辺	蓋	66.52	1.08	19.31	7.22	0.11	1.52	0.30	2.16	1.44	0.14		
14	岩汐窯跡２号窯下周辺	壺	67.48	1.21	18.21	6.26	0.09	1.63	0.34	2.97	1.46	0.14		
15	岩汐窯跡２号窯下周辺	甕	72.06	0.87	16.51	4.14	0.04	1.40	0.27	2.54	1.63	0.18		
16	岩汐窯跡５号窯灰原	坏蓋	68.45	1.17	17.90	6.88	0.08	2.86	0.25	1.07	1.01	0.16		
17	岩汐窯跡５号窯灰原	坏蓋	69.55	1.04	17.90	5.55	0.09	1.49	0.31	1.97	1.61	0.21		
18	岩汐窯跡５号窯灰原	坏蓋	67.68	1.36	17.47	7.87	0.14	1.51	0.41	1.87	1.27	0.16		
19	岩汐窯跡５号窯灰原	甕	68.89	1.19	16.50	7.57	0.11	1.59	0.46	2.01	1.27	0.15		
20	岩汐窯跡５号窯灰原	甕	69.43	0.78	18.84	4.10	0.07	2.77	0.26	1.94	1.51	0.14		
21	岩汐窯跡SX01	坏蓋	71.64	0.95	18.04	4.24	0.06	1.32	0.38	0.97	2.01	0.17		出雲3期(6c後)
22	岩汐窯跡SX01	坏身	70.18	0.91	18.16	4.17	0.05	1.46	0.34	2.49	1.76	0.31		出雲3～4期(6c後～末)
23	岩汐窯跡SX01	提瓶か壺	72.74	0.73	16.02	4.02	0.04	1.55	0.38	2.17	1.91	0.23		出雲3～4期(6c後～末)
24	岩汐窯跡SX01	直口壺	70.22	1.27	17.49	4.87	0.08	1.56	0.46	1.99	1.56	0.19		出雲3～4期(6c後～末)
25	岩汐窯跡SX01	高坏	69.74	1.01	18.31	5.98	0.11	1.32	0.40	1.42	1.26	0.13		
26	岩汐窯跡SX01	瓻	68.97	0.92	17.91	5.21	0.11	3.02	0.38	1.87	1.21	0.15		
27	岩汐窯跡SX01	提瓶	67.78	1.18	17.20	6.51	0.11	1.62	0.34	3.31	1.54	0.19		
28	岩汐窯跡SX01	甕	72.52	0.74	16.19	3.70	0.06	1.43	0.34	2.79	1.80	0.23		
29	岩汐窯跡SX01	甕(坏身溶着)	73.90	0.76	15.68	3.05	0.05	1.64	0.31	2.34	1.66	0.31		
30	ババタケ窯跡	高坏	70.91	1.05	17.57	5.28	0.08	1.19	0.48	1.26	1.73	0.18		出雲5～6期(7c)
31	ババタケ窯跡	坏蓋	71.59	0.88	16.77	4.39	0.05	1.45	0.27	2.41	1.62	0.23		出雲4～5期(6c末～7c前)
32	ババタケ窯跡	坏蓋	70.13	0.86	16.68	5.78	0.07	1.16	0.51	2.50	1.52	0.53		出雲6期(7c中)
33	ババタケ窯跡	坏蓋	67.04	1.31	17.59	7.67	0.12	1.74	0.32	2.42	1.36	0.20		
34	ババタケ窯跡	蓋	71.35	0.72	17.59	3.24	0.04	2.19	0.34	2.03	1.42	0.90		
35	ババタケ窯跡	高坏	69.63	1.19	18.31	6.11	0.09	1.38	0.41	1.00	1.42	0.19		
36	ババタケ窯跡	壺	68.30	1.29	17.04	7.52	0.13	1.41	0.40	2.05	1.39	0.21		
37	ババタケ窯跡	壺	68.25	0.81	18.23	5.05	0.10	3.05	0.44	2.56	1.26	0.10		
38-1	ババタケ窯跡	甕	69.24	1.40	16.44	6.91	0.11	1.35	0.50	2.03	1.59	0.19		
38-2	ババタケ窯跡	甕	74.05	0.79	16.55	3.92	0.02	1.35	0.33	0.76	1.71	0.26		
39	ババタケ窯跡	甑	69.61	0.83	18.67	3.81	0.05	1.90	0.32	2.84	1.52	0.22	279図	
40	寺尾窯跡	壺か甕	67.58	1.10	17.48	7.03	0.08	2.92	0.27	2.15	1.05	0.11	278図	出雲4期
41	寺尾窯跡	坏蓋	68.25	0.99	17.01	5.69	0.08	1.82	0.37	3.76	1.47	0.22		
42	寺尾窯跡	蓋(つまみ付)	72.53	0.87	17.58	3.50	0.04	1.26	0.35	1.44	1.56	0.65	278図	高広ⅣA(8c後)
43	寺尾窯跡	坏身	71.67	0.78	16.69	3.76	0.06	2.65	0.26	2.45	1.32	0.19	278図	出雲5期(7c前)
44	寺尾窯跡	壺	70.29	1.18	17.63	5.76	0.07	1.50	0.36	1.07	1.59	0.20	278図	
45	寺尾窯跡	甕(溶着)	71.70	0.78	17.95	4.08	0.06	1.47	0.41	1.36	1.73	0.19		
46	寺尾窯跡	甕	69.68	1.01	17.51	5.67	0.09	1.21	0.51	1.49	1.63	0.93	278図	
47	山津１号窯	坏蓋	68.19	0.97	18.88	5.29	0.07	1.59	0.27	3.00	1.26	0.22		出雲4期(6c末)
48	山津１号窯	瓻	73.41	1.01	16.54	4.62	0.07	1.38	0.36	0.70	1.53	0.19		出雲3～4期(6c後～末)
49	山津１号窯埋土	甕	74.00	0.77	15.63	3.86	0.04	1.37	0.33	1.80	1.66	0.28		
50	山津１号窯埋土	坏蓋	70.69	0.81	17.10	4.52	0.05	1.52	0.33	2.93	1.60	0.23		出雲4期(6c末)
51	山津１号窯埋土	坏蓋	68.33	1.31	17.21	6.91	0.09	1.89	0.34	2.13	1.27	0.11		
52	山津１号窯埋土	坏蓋	67.73	1.35	17.47	7.11	0.09	1.83	0.38	2.42	1.23	0.17		
53	山津１号窯埋土	甕	71.37	0.89	17.53	4.05	0.06	1.58	0.28	2.34	1.56	0.20		
54	山津２・３号窯	坏身	73.17	0.94	14.97	5.11	0.07	1.30	0.35	2.05	1.49	0.31		出雲6期(7c中)
55	山津２・３号窯	坏身	73.06	0.83	17.09	3.90	0.05	1.44	0.27	1.25	1.61	0.21		出雲5～6期(7c前～中)
56	山津２・３号窯	坏身	67.10	1.08	19.23	5.92	0.07	1.66	0.38	2.50	1.45	0.24		
57	池ノ奥４号窯	坏蓋	71.55	0.97	17.65	4.22	0.06	1.50	0.29	1.65	1.68	0.21		出雲3期(6c後)
58	池ノ奥４号窯	坏蓋	69.81	1.31	17.30	5.39	0.09	1.30	0.55	2.00	1.37	0.64		出雲4期(6c末)
59	池ノ奥４号窯	坏身	68.37	1.41	18.27	6.81	0.11	1.40	0.39	1.37	1.41	0.23		
60	池ノ奥４号窯	蓋	66.61	1.40	17.84	7.47	0.10	1.63	0.33	2.65	1.31	0.40		
61	池ノ奥４号窯	坏蓋	66.59	1.20	18.05	7.02	0.09	1.68	0.48	2.96	1.38	0.29		
62	池ノ奥４号窯	高坏	69.18	1.14	17.54	5.31	0.10	1.71	0.31	2.85	1.47	0.17		
63	池ノ奥４号窯	坏蓋	67.68	1.21	18.49	6.30	0.08	1.68	0.37	2.39	1.39	0.19		
64	池ノ奥４号窯	甕	71.50	0.84	17.43	3.82	0.04	1.33	0.32	2.53	1.65	0.30		
65	池ノ奥４号窯	甕	68.81	0.79	17.81	5.34	0.06	1.52	0.36	3.14	1.77	0.19		
66	勝田谷窯跡	坏	62.62	1.06	18.43	9.92	0.16	2.93	0.35	2.36	0.81	0.15	278図	高広ⅣB(9c前)
67	勝田谷窯跡	高台壺	69.17	0.82	18.61	4.74	0.08	2.91	0.34	1.74	1.26	0.18	278図	高広ⅣB(9c前)
68	唐干窯跡	高台坏	64.23	1.24	18.57	10.45	0.21	1.56	0.69	1.84	0.88	0.10		高広ⅣA(8c後)
69	唐干窯跡	高台坏	73.19	0.61	15.94	3.56	0.05	1.36	0.34	2.54	1.77	0.29		高広ⅣA(8c後)
70	唐干窯跡	甕	73.43	0.71	15.94	4.02	0.05	1.45	0.27	2.03	1.56	0.27		
71	唐干窯跡	甕	72.89	0.78	16.87	3.91	0.05	1.33	0.31	1.92	1.55	0.23		

第２表　岩汐窯跡ほか出土須恵器の胎土分析一覧表

単位：SiO_2～P_2O_5（%）

試料番号	遺跡名	器種	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	各報告書掲載箇所	備考
72	唐干窯跡	甕	69.10	0.96	18.69	5.41	0.11	1.77	0.46	1.60	1.49	0.13		
73	唐干窯跡	甕	71.80	0.59	17.71	2.96	0.03	2.93	0.26	1.95	1.29	0.18		
74	唐干窯跡	甕	65.26	1.18	18.69	8.11	0.14	1.61	0.65	2.95	0.91	0.21		
75	唐干窯跡	甕	71.82	0.84	16.86	2.87	0.03	2.93	0.33	2.44	1.44	0.24		
76	唐干窯跡	甕	70.85	0.66	17.82	3.07	0.05	2.96	0.32	2.52	1.36	0.21		
77	唐干窯跡	甕	70.33	0.89	17.78	4.93	0.08	1.38	0.34	1.74	2.01	0.29		
78	四反田窯跡	坏	69.79	1.05	18.42	4.19	0.06	1.75	0.28	2.54	1.39	0.24		出雲5～6期(7c前～後)
79	四反田窯跡	坏	68.40	1.21	18.24	8.01	0.11	1.31	0.25	1.04	1.06	0.17		高広ⅣA(8c後)
80	四反田窯跡	蓋(つまみ付)	67.14	1.04	19.15	6.80	0.14	1.56	0.54	2.29	0.85	0.24		出雲7期(7c後)
81	四反田窯跡	高台坏	66.58	1.03	21.19	6.57	0.12	1.56	0.37	1.27	0.91	0.12		出雲5～6期(7c前～中)
82	四反田窯跡	高台壺	68.59	1.02	19.62	4.85	0.05	1.69	0.34	2.41	0.99	0.23		
83	四反田窯跡	高坏	67.47	1.07	18.89	6.75	0.12	1.48	0.50	2.31	1.01	0.19		
84	四反田窯跡	高台坏	68.03	1.29	18.25	6.60	0.15	1.48	0.28	2.23	1.21	0.17		
85	四反田窯跡	蓋(つまみ付)	68.11	0.98	20.38	6.61	0.09	1.41	0.46	0.61	0.94	0.14		
86	四反田窯跡	蓋(つまみ付)	70.40	0.88	17.39	4.73	0.07	1.39	0.34	2.84	1.63	0.15		
87	四反田窯跡	蓋	68.59	1.38	16.83	8.17	0.22	1.41	0.34	1.33	1.32	0.12		
88	岩汐遺跡	坏蓋	67.09	1.52	17.18	8.85	0.15	1.49	0.26	1.81	1.15	0.13	179図4	出雲3期(6c後)
89	岩汐遺跡	坏蓋	67.07	1.24	18.13	7.42	0.14	1.60	0.31	2.48	1.18	0.15	176図1	出雲5期(7c前)
90	岩汐遺跡	甕	70.37	0.93	17.92	4.61	0.06	1.55	0.34	1.84	1.96	0.22		
91	岩汐遺跡	甕	74.31	0.85	16.01	3.01	0.01	1.34	0.28	2.14	1.71	0.16		
92	岩汐遺跡	提瓶	72.75	1.11	17.52	4.35	0.06	1.09	0.46	0.86	1.43	0.18		
93	遅倉1・2号横穴墓間	坏身	68.28	0.97	19.12	5.24	0.05	1.61	0.22	2.51	1.60	0.17	28図1	出雲4期(6c末)
94	遅倉1・2号横穴周辺	坏蓋	65.37	1.51	19.46	9.27	0.15	1.53	0.35	1.01	0.92	0.13	29図4	出雲4期(6c末)
95	遅倉1号横穴閉塞部	甕	66.13	1.25	18.95	7.94	0.11	1.60	0.32	2.01	1.36	0.11		
96	遅倉1号横穴閉塞部	甕	71.66	0.92	18.11	4.07	0.05	1.48	0.34	1.32	1.59	0.18		
97	遅倉1号横穴閉塞部	甕	70.60	0.93	18.86	3.84	0.05	1.31	0.31	1.88	1.72	0.27		
98	米坂遺跡	坏蓋	70.47	0.85	17.60	4.48	0.06	1.48	0.33	2.63	1.75	0.12	83図2	出雲2～3期(6c前～後)
99	米坂古墳群	坏蓋	69.75	1.07	17.91	5.33	0.08	1.48	0.38	2.12	1.43	0.21	146図3	出雲2期(6c前～中)
100	米坂古墳群	坏蓋	67.78	1.14	18.86	5.69	0.08	1.47	0.38	2.98	1.25	0.18	146図4	出雲2期(6c前～中)
101	米坂古墳群	坏蓋	66.86	1.11	19.96	5.74	0.09	1.62	0.37	2.65	1.24	0.17	146図7	出雲2期(6c前～中)
102	米坂古墳群		64.83	0.86	21.76	7.23	0.10	2.49	0.26	1.51	0.75	0.06	148図12	出雲4期(6c末)
103	寺ノ脇遺跡	坏蓋	72.21	0.85	17.39	3.89	0.05	1.50	0.33	1.59	1.74	0.17		出雲5期(7c前)
104	寺ノ脇遺跡	甕	69.64	0.82	17.79	4.55	0.07	1.54	0.36	2.91	1.84	0.27		
105	寺ノ脇遺跡	坏身	71.57	0.96	16.97	5.01	0.08	1.32	0.41	1.82	1.42	0.27		
106	寺ノ脇遺跡	甕	71.12	0.67	15.86	3.62	0.03	1.47	0.38	3.20	1.41	2.02		
107	寺ノ脇遺跡	甕	76.26	0.75	15.43	3.44	0.04	1.24	0.37	0.20	1.56	0.54		
108	寺ノ脇遺跡	高坏	67.90	1.19	18.24	6.09	0.12	1.57	0.34	2.57	1.43	0.19		
109	松江北東部遺跡	高坏	70.77	1.03	17.57	4.68	0.06	1.51	0.27	2.10	1.68	0.11		出雲3期(6c後)
110	松江北東部遺跡	坏蓋	69.46	0.95	18.15	4.55	0.04	1.65	0.24	2.92	1.69	0.19		出雲5期(7c前)
111	松江北東部遺跡	甕	70.57	0.91	17.59	4.44	0.08	1.53	0.46	2.32	1.57	0.23		
112	松江北東部遺跡	壺	70.08	0.92	16.43	6.44	0.09	1.84	0.17	2.43	1.21	0.19		
113	松江北東部遺跡	甕	69.82	0.92	18.11	4.25	0.06	1.64	0.33	2.86	1.61	0.21		
114	菅田14号横穴墓	坏身	67.34	1.14	20.17	6.13	0.08	2.74	0.21	1.02	0.87	0.11	46図15	出雲4期(6c末)
115	菅田14号横穴墓	坏身	65.38	1.38	20.11	7.93	0.09	1.67	0.25	1.88	1.03	0.11	46図11	出雲4期(6c末)
116	菅田18号横穴墓	坏蓋	65.48	1.72	19.41	7.78	0.11	1.45	0.19	2.68	0.88	0.11	59図6	出雲4期(6c末)
117	菅田18号横穴墓	坏身	65.95	1.29	21.36	6.82	0.10	1.57	0.23	1.40	1.01	0.12	59図7	出雲4期(6c末)
118	袋尻１号横穴墓	坏蓋	65.59	1.64	19.21	8.46	0.13	1.25	0.42	1.68	0.89	0.51	137図9	出雲4期(6c末)
119	袋尻１号横穴墓	坏蓋	70.72	0.96	18.75	4.37	0.06	1.47	0.21	1.75	1.28	0.25		出雲4期(6c末)
120	袋尻２号横穴墓	坏蓋	68.33	1.37	18.36	6.58	0.08	1.59	0.28	1.91	1.22	0.08	145図11	出雲4期(6c末)
121	袋尻２号横穴墓	壺	70.23	1.08	17.88	4.64	0.06	2.79	0.27	1.57	1.18	0.14		出雲4期(6c末)
122	出雲国分寺跡（T-36）	甕	72.54	0.69	17.14	3.20	0.04	2.81	0.38	1.45	1.35	0.16		8c代か
123	出雲国分寺跡（T－36）	甕	68.71	0.81	18.86	5.38	0.11	3.14	0.44	1.10	1.11	0.13		8c代か
124	出雲国分寺跡（T－36）	蓋	73.53	0.91	16.13	4.61	0.06	1.46	0.32	1.12	1.41	0.29		8c代か
125	出雲国分寺跡（T－36）	瓦	68.91	0.80	19.30	4.76	0.07	1.57	0.33	2.16	1.65	0.22		8c代か
126	出雲国分寺跡（T－37）	甕	75.03	0.84	15.15	4.50	0.07	1.33	0.34	0.90	1.47	0.21		8c代か

※分析試料土器掲載報告書

ババタケ窯跡、勝田谷窯跡、唐干窯跡：島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ窯業関係遺跡　1985.3　島根県教育委員会

山津１、２、３号窯跡：大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書　2006　松江市教育委員会　財団法人松江市教育文化振興事業団

池ノ奥４号窯：池ノ奥Ａ遺跡・池ノ奥窯跡群　1990.3　松江市教育委員会

岩汐遺跡、遅倉１．２号横穴、米坂遺跡、米坂古墳群：西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　1999.3　松江市教育委員会　財団法人松江市教育文化振興事業団

松江北東部遺跡：本庄地区県営圃場整備事業に伴う松江北東部遺跡発掘調査報告書　1996.3

菅田横穴墓群：菅田横穴墓群 薦沢砦跡　2005.3　松江市教育委員会　財団法人松江市教育文化振興事業団

袋尻１号、２号横穴墓：袋尻遺跡群発掘調査報告書　1998.3　松江市教育委員会　財団法人松江市教育文化振興事業団

出雲国分寺跡：出雲国分寺跡発掘調査報告書　2004.3　松江市教育委員会

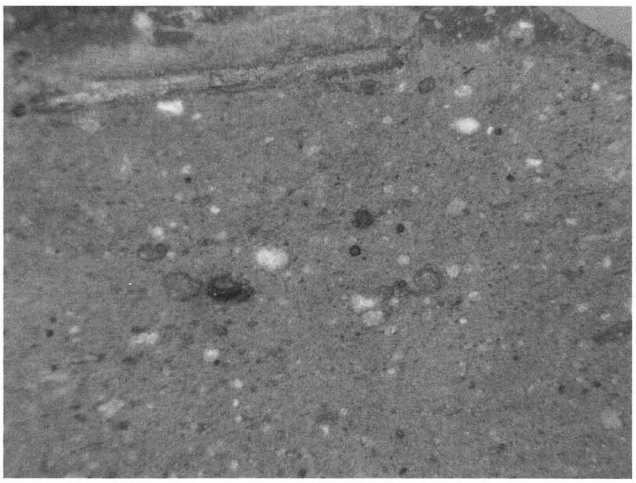


写真１　岩汐１号窯（試料No.2）坏（６c末）

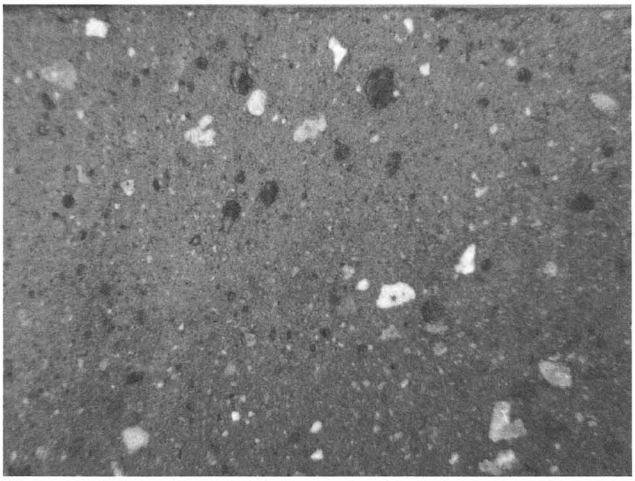


写真２　岩汐１号窯下周辺（試料No.10）高台坏（６c末）

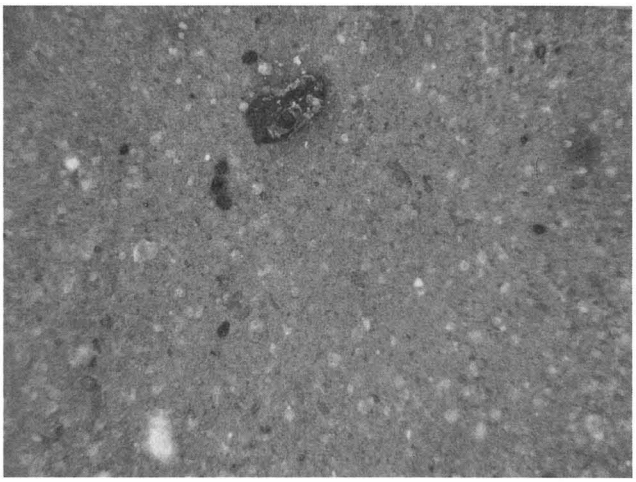


写真３　山津１号窯（試料No.48）瓶（６c後半）

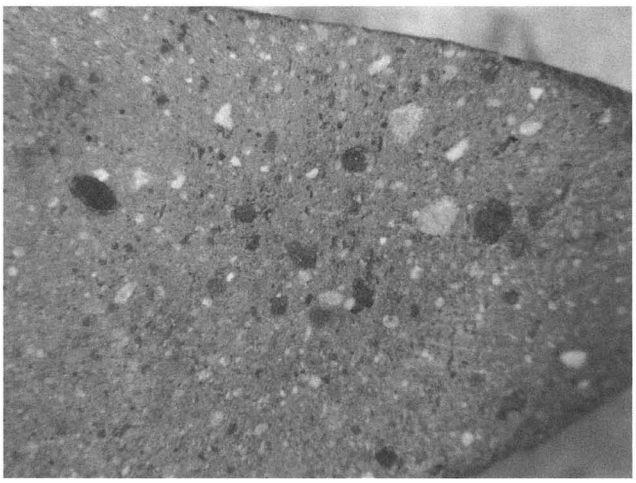


写真４　山津４号窯　坏（８c前半）

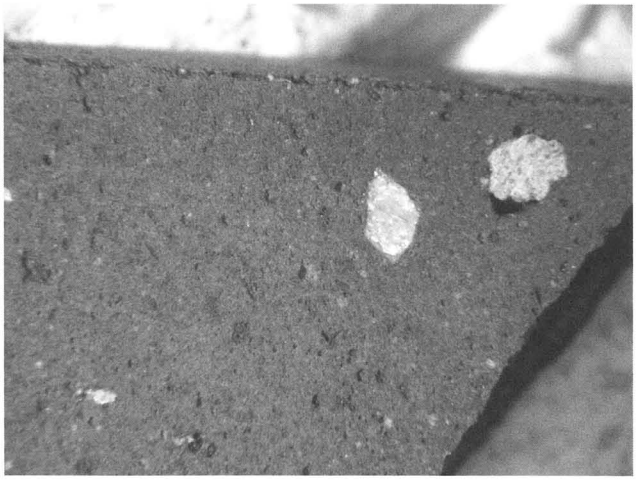


写真５　池ノ奥４号窯（試料No.60）坏（６c末）

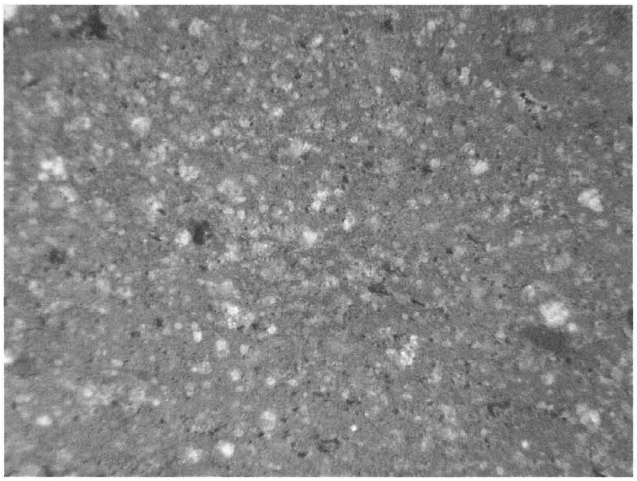


写真6. 唐干窯（試料No.71）甕（8c後半）

0　2 mm

第73図　実体顕微鏡写真(1)

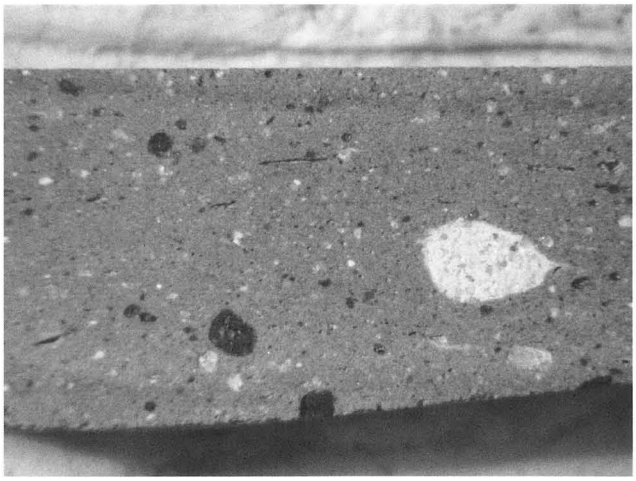


写真７　岩汐遺跡（試料No.89）坏（７c前半）

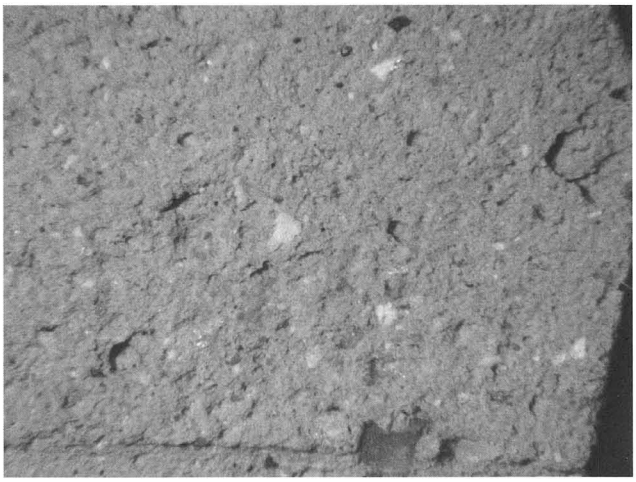


写真８　米坂古墳（試料No.101）坏（６c前半）

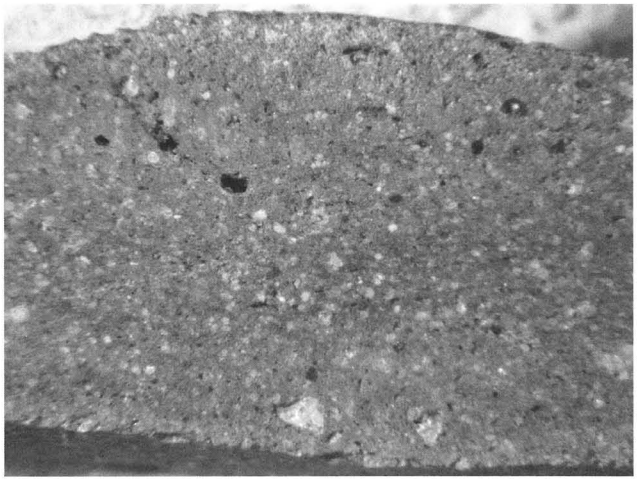


写真９　寺ノ脇遺跡（試料No.105）坏（７c前半）

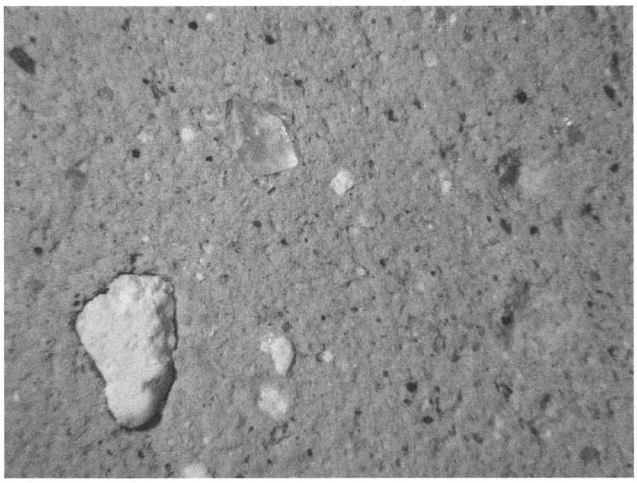


写真10　菅田18号横穴墓（試料No.117）坏（６c末）

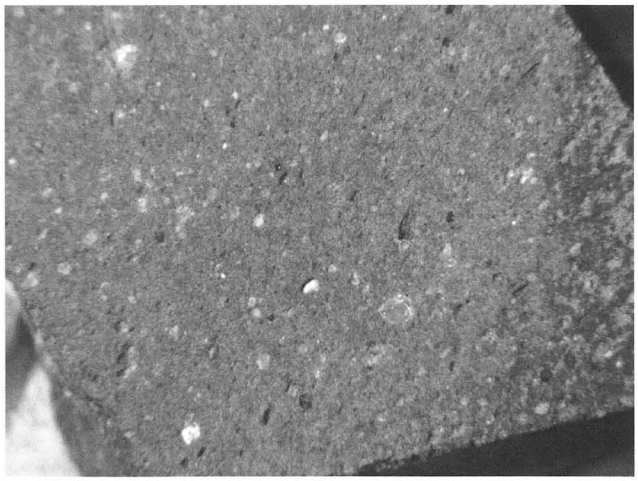


写真11　袋尻２号横穴墓（試料No.121）壺（６c末）

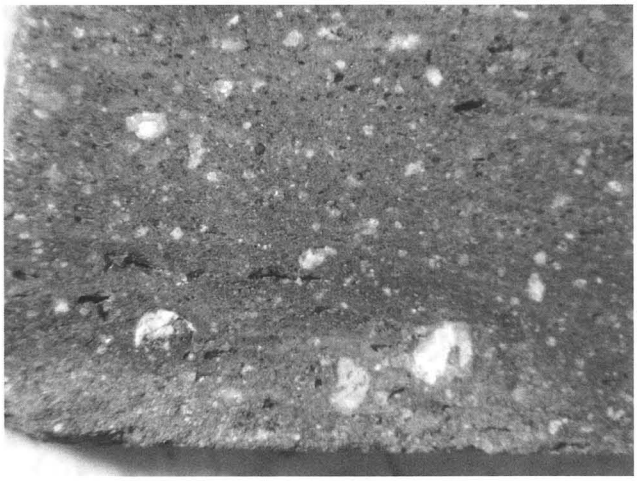
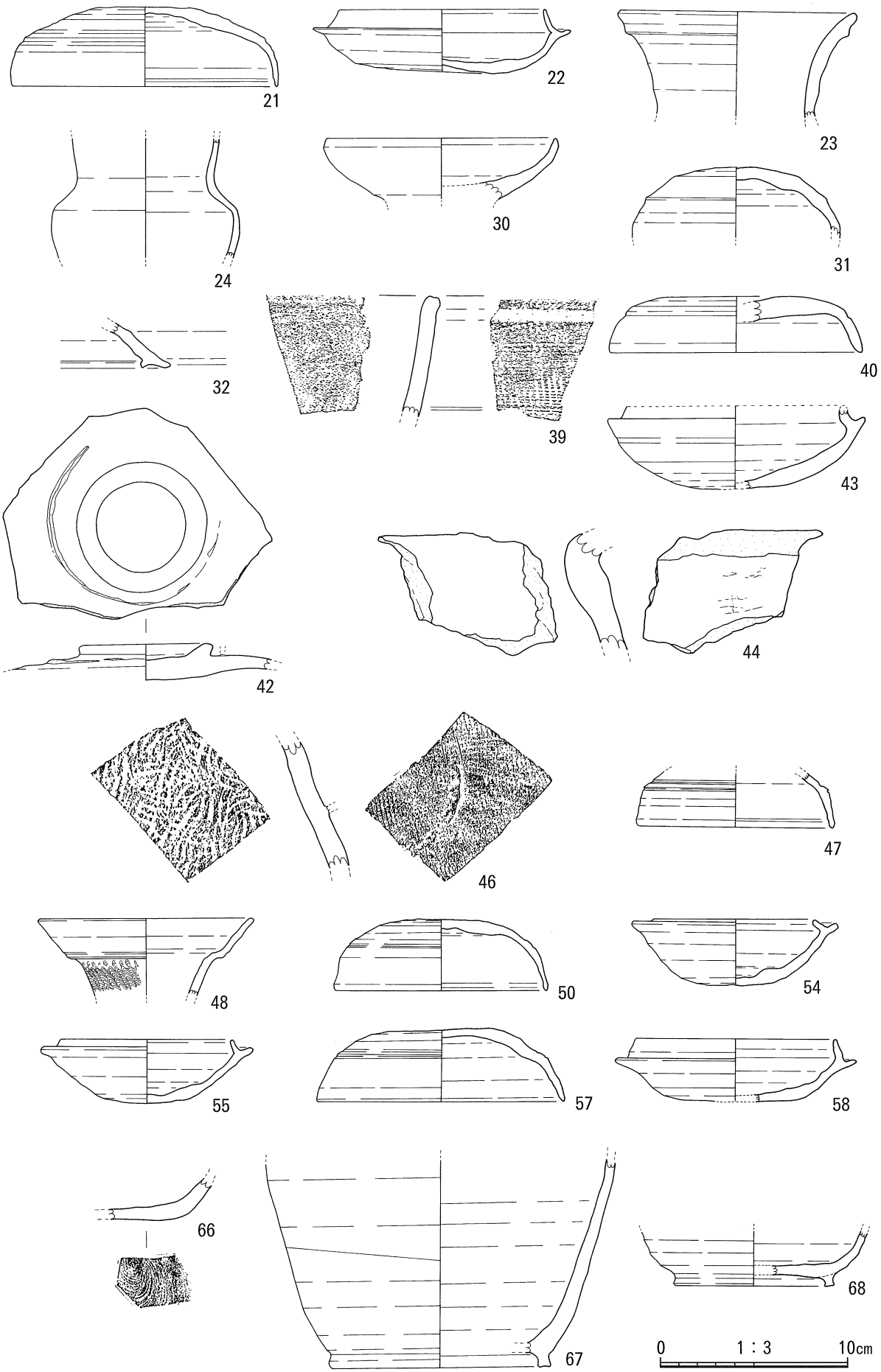


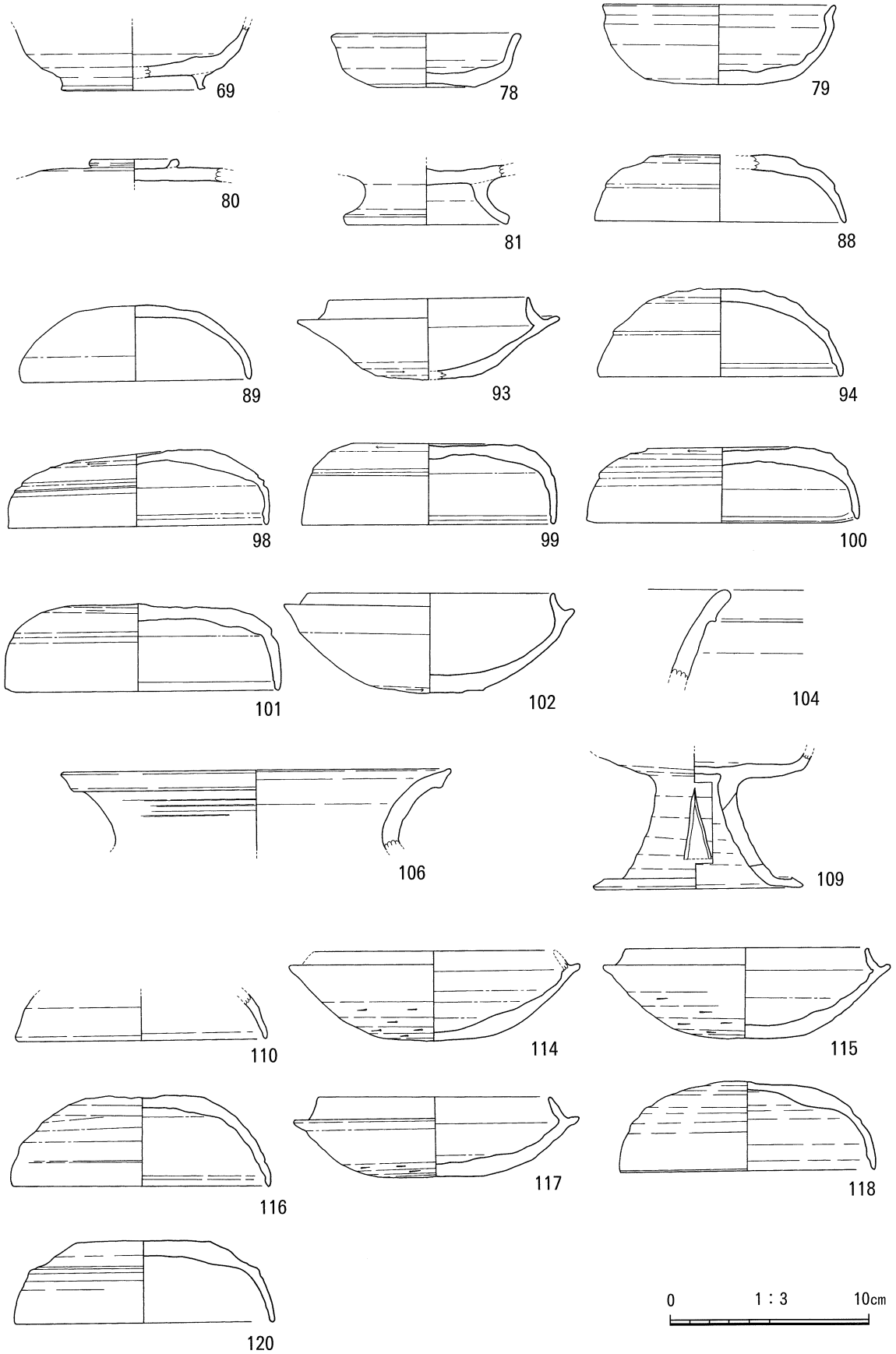
写真12　出雲国分寺跡（試料No.123）甕（８c）

0　2 mm

第74図　実体顕微鏡写真(2)



第75図　胎土分析試料遺物（1）



第76図　胎土分析試料遺物（２）

第6章　まとめ

今回の調査では、周知の遺跡である岩汐1号窯・2号窯を確認し、断面実測を行なった。また、新たな須恵器窯の可能性が高い窯体の一部（岩汐5号窯）を発見することが出来た。ため池の底面からは、部分的に残存する黒色灰原層（SX01・03・04）を検出したが、底面はため池造成時の工事で大幅な撹乱を受けており、二次遺構として考えざるを得ないと判断した。この黒色灰原層には、須恵器片と窯壁片が大量に包含されていた。

今回出土した須恵器片は、約5万2千点を数える。器種別で見ると、坏蓋片が3割、坏身片が2割と蓋坏類が半数を占める。次いで甕または壺片が3割、高坏・瑳が合わせて1割の割合である。その他、椀・提瓶・坏類・子持壺・窯道具・土馬などは、全てを合わせても1割に満たないものであった。これら以外で、器種、用途が不明なものや、出土が非常に珍しい遺物などが数点出土しているが、その中で特筆すべきものとして、器台形土器が挙げられる。

器台形土器の出雲地方での出土例は、これまで、北小原横穴[1]出土の1点しか知られていない。また、須恵器窯跡での出土は、この岩汐窯跡が本地域では初のことである。今回の調査で出土した2点と合わせ、わずか3点の出土という希少性から、特殊なものであったことが窺える。

本章では、この特殊品である器台形土器について第1節で述べ、第2節では、出雲2期代を示すと思われる須恵器の形状や特徴に触れ、出土須恵器の年代観を述べる。その上で第3節では、大井窯跡群内の岩汐窯跡の位置付けについて述べるものとする。

第1節　器台形土器（第79図）

器台形土器は、截頭円錐形（せつとうえんすいけい）という形状を呈する。円錐状の上方部を水平に切り取ったような形状で、真横から見ると台形状を成す。この特殊須恵器は、前述の通り、北小原横穴において出土例があり、(40) は実測図を再トレースし、転載したものである。(40) は完形で出土しており、その法量などが明確に分かるものである。上端径11.0㎝、下端径25.3㎝、器高15.6㎝を測り、脚部は開きながら下りて、下端部には肥厚した接地面が見られる。外面には、間隔が均等な沈線を3条廻らす。上面中央に1.6×3.8㎝の細長い長方形孔が開いている。この長方形孔の3.8㎝透かし面と直交する形で、脚部上方に直径0.8㎝の円孔が貫通している。

今回、岩汐窯跡で出土した (38)・(39) は上方部の破片であり、上面の形状、長方形孔、これに直交して穿たれた小さな孔（円孔、もしくは方形孔）などの様相を見ても、北小原横穴出土品と同一器種で間違いないと思われる。

器台形土器の使用例は明らかになっていない。北小原横穴の報告では、まず、中央の長方形孔に木（枝、もしくは棒状のもの）を立てる。そして、横に穿たれている小さな孔から細く棒状のものを差し込むことによって、中央の木を支える、もしくは固定するもので、供献専用の特殊なものではないか、との推察がなされている。

北小原から注文を受け、岩汐窯で生産した可能性も考えられることから、大井窯跡群の製品供給範囲を考慮する上でも、貴重な発見となり得よう。今後、この土器の出土例が増えることを期待し

た上で、出土地点や民俗例等も視野に入れた検討を行なっていく必要があると考える。

第2節　出土須恵器の年代観について（第77・78図）

出土須恵器の年代は、出雲3～4期の間のものが大半を占める。その中には、明らかに年代が古くなると思われる須恵器も出土している。ここではそれらを掲載遺物中から抜粋し、若干の考察を行なってみる。

(1)～(9)は坏蓋である。(1)～(7)は、器高が5㎝近くを測るもので、口縁部の形状がほぼ垂直に下りるもの(1)・(5)・(6)と、わずかに内湾することで、全体の形状が丸みを帯びるように見えるもの(2)～(4)・(7)に分けることが出来る。いずれも、肥厚させた端部に強く明確な段を付けるものである。(8)と(9)は同一個体ではないが、形状、調整ともに非常に酷似した坏蓋である。器高は4.0㎝で、(1)～(7)よりも若干低く、扁平形を呈する。形状から判断すると、出雲4期代に収まるであろう坏蓋だが、端部内面の段は、明らかに出雲2期の形状を示している。全体を通して均一な厚さを呈し、端部には先細る傾向が見られず、深い段が廻っている。

(1)～(9)の坏蓋に共通して言えることは、①口径が大きく、13～14㎝近くを測る。②器高が高い。③厚手の作り。④天井部の丁寧な回転ヘラ削り。ということである。これらは出雲2期の条件を十分に満たすものと考えられる。

(10)～(21)は坏身である。立ち上がりは高く、いずれも1.8～2.0㎝を測る。端部内面に明らかな段が付くもの(10)～(13)と、直立気味に立ち上がり、端部が先細るもの(14)～(21)が見られる。坏部が深くなり、器高は5㎝近くを測る。これらもまた出雲2期に相当すると考えてよいだろう。

(22)・(23)は有蓋高坏、(24)～(29)は多種多様な形状を呈する脚部片である。(24)～(29)は全てが高坏の脚部ではなく、他の器種の脚部も含まれ、いずれも出雲2期代のものである[(2)]。

(30)～(34)は、椀の口縁部から胴部の残存片である。復元口径は10㎝前後を測り、いずれも薄手に作られている。胴部は張らない形状で、細かく丁寧な波状文が施文されている。

これらの胴部と直角気味に接合されるものが、(35)～(37)の把手と思われる。長さ約7㎝、太さ1.8㎝を測り、外面は9～10面の面取りが施されている。直線に近い形状で、角のように尖る。(30)～(37)は出雲2期に存在するものと考えている。

なお、蓋坏類は、有蓋高坏の可能性も考えられる。有蓋高坏に付随する蓋には、つまみが付かないものがあり、通常の坏蓋と比較してもあまり変化が見られないものである。坏身も、底部から脚部へと続く部分が残存していない限り、有蓋高坏かは判断し難い[(3)]。

本節で挙げた須恵器は、いずれも出雲2期を示す可能性が高いものである。窯跡は現存しないが、当時存在した岩汐窯は、少なくとも出雲2期代の頃、既に操業が行なわれていた可能性が考えられる。

第3節　大井窯跡群内における岩汐窯跡の位置付け

岩汐窯跡の周辺には、多くの須恵器窯跡が存在する。これらは大井窯跡群と呼称され、廻谷・寺

尾・岩汐・池ノ奥・ババタケ・山津・唐干・明曽・勝田谷の9地区で須恵器窯跡が確認されている。岩汐窯跡においては、過去に、分布調査や踏査などによって、周辺遺物が多数採集され、様々な文献で報告されている。そこで提示される岩汐窯跡の年代は、概ね出雲3～4期と言われている。

今回の調査においては、出雲3～4期のものが最多であることに変わりはないが、出雲2期代の須恵器も出土していることを、第2節で述べた。また、岩汐1号窯の最終操業時の還元層直上からは、出雲5～6期代の須恵器片が出土し、1号窯下の崩落土内から出土したものは、出雲5期～高広Ⅳ期であることが分かっている。

上記のことを踏まえると、岩汐窯跡の操業年代は、出雲2期～高広ⅣB期（6世紀前半～9世紀前半）の間であったと思われる。大井窯跡群内の他の窯跡の操業開始年代は、出雲1期代は廻谷窯跡、寺尾窯跡、出雲3期頃から池ノ奥窯跡、ババタケ窯跡、山津窯跡、出雲4期代には唐干窯跡、明曽窯跡、高広ⅣB期には勝田谷窯跡が操業を始めると考えられている[4]。また、操業期間が最も長いとされている山津窯跡は、出雲3期～高広Ⅴ期以降まで続いていくとされている[5]。

大井地域では、出雲1期～高広Ⅴ期以降という長期間に渡って、須恵器窯が操業されていた。その中で岩汐窯跡は、廻谷・寺尾窯跡の後に操業を開始し、勝田谷窯跡と併行する時期まで継続し、山津に次ぐ操業期間の長さを持つ窯跡であったと思われる。

今回行なった胎土分析においては、生産地である須恵器窯の他に、消費地の遺跡の分析も合わせて行なっている。分析資料からは、大井窯跡群内に存在する出雲3期～高広Ⅳ期までの窯跡（寺尾・岩汐・池ノ奥・ババタケ・山津・唐干・勝田谷・四反田窯跡）出土資料のほぼ全てが、同じ粘土を使用していたという結果が出ている（大井A群）[6]。これに対して、出雲7期以降の岩汐・山津・唐干窯跡の一部だけは、違う粘土を使用していたことも分かっている（大井B群）。これらの分析結果から、大井窯跡群内の全ての窯跡は、基本的に同一の粘土を使用していたが、出雲7期以降において、岩汐・山津・唐干の三窯跡で、異なった場所から粘土を採掘していた背景が浮かび上がる。このことから、出雲7期以降、大井窯跡群内には、少なくとも2ヶ所の粘土採掘場が存在していたということが導き出せよう。

松江市内の消費地遺跡（岩汐遺跡・遅倉1・2号横穴墓・米坂遺跡・米坂古墳群[7]・寺ノ脇遺跡・松江北東部遺跡[8]・菅田14・18号横穴墓[9]・袋尻1・2号横穴墓[10]・出雲国分寺跡[11]）から出土した、出雲2～8期の須恵器片の分析については、大半が大井窯跡群内で生産されたことが分かり、広い範囲に大井窯跡群の須恵器が供給されていたことが判明した。また、大井窯跡群の胎土に当てはまらない遺物（菅田18号横穴墓坏蓋1点、袋尻1号横穴墓坏蓋1点）も見つかっている。これらは、大井窯跡群の中に未だ発見されていない窯跡が存在し、その窯で生産された製品である可能性を示している。加えて、大井窯跡群以外の須恵器窯から流通したものとも考えることが出来る。

以上、胎土分析の結果からは、大井窯跡群の須恵器生産の一端と供給範囲、また、大井窯跡群以外の須恵器窯の存在を示唆する資料が得られ、非常に意義深いものになったと考える。

出雲地方の須恵器窯は、出雲1期の門生山根1号窯[12]、渋ヶ谷1・2号窯[13]、高畑1号窯[14]などが知られており、出雲8期以降には門生黒谷1号窯[12]、渋山池1号窯[15]、古曽志平廻田3号窯[16]、木舟1～8号窯[17]、湯峠窯[18]などの存在が明らかになっている。しかし、出雲2～8期までの須恵器窯は、今のところ大井地域以外では発見されていない。この時期を独占する形で、大井窯跡群は

存在していたのである。出雲２～８期代に、大井窯跡群がいかに大規模な須恵器生産地であったかは、須恵器が最も盛んに流通していたこれらの時期を独占し、生産してきたこの様子から計り知れよう。

今回の調査では、周知の遺跡である岩汐１号窯・２号窯を間近で観察出来た上、大量の須恵器片を採集することが可能であった。この須恵器から、大まかではあるが岩汐窯跡の操業年代を示せたのは、大きな成果となったものである。これは岩汐窯跡のみに留まらず、大井窯跡群全体の様相を垣間見ることが出来たものと考える。

大井窯跡群内には、未調査の窯跡が未だ多く存在する。今後、それらの窯跡が調査されることによって、大井窯跡群の全容が見えてくることを期待する。

註

（１）岡崎雄二郎 島根県教育委員会「北小原横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書 第Ⅴ集』(1974)

（２）須恵器の年代に関しては、大谷晃二氏にご教示して頂いた。

（３）出雲市教育委員会「上島古墳出土遺物」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書 第17集』(2007)

上島古墳の有蓋高坏に付随する蓋は、高坏とセットの状態で出土しており、判別が可能である。単独個体で見れば、坏蓋との大きな差異は見出せないものであるが、天井部と体部の間の凹線などで見分けているとされている。

（４）岡崎雄二郎「原始・古代」『朝酌郷土誌』朝酌郷土誌編集委員会(2001)

（５）松江市教育委員会／財団法人松江市教育文化振興事業団『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』(2006)

（６）本稿の第５章、自然科学分析「岩汐窯跡ほか出土須恵器の胎土分析」白石 純氏の分析結果による。

（７）松江市教育委員会／財団法人松江市教育文化振興事業団『埋蔵文化財発掘調査報告書 遅倉横穴墓群・米坂古墳他』(1999)

（８）松江市教育委員会／財団法人松江市教育文化振興事業団『松江北東部遺跡発掘調査報告書』(1996)

（９）松江市教育委員会／財団法人松江市教育文化振興事業団『菅田横穴墓群 薦沢砦跡』(2005)

(10) 松江市教育委員会／財団法人松江市教育文化振興事業団『袋尻遺跡群発掘調査報告書』(1998)

(11) 松江市教育委員会『出雲国分寺跡発掘調査報告書』(2004)

(12) 島根県教育委員会『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡（門生山根１号窯・門生黒谷１号窯・五反田古墳群)』(1998)

(13) 瀬古諒子「松江・渋ヶ谷窯跡について」『松江考古 第９号』(2001)

松江市教育委員会／財団法人松江市教育文化振興事業団『渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』(2006)

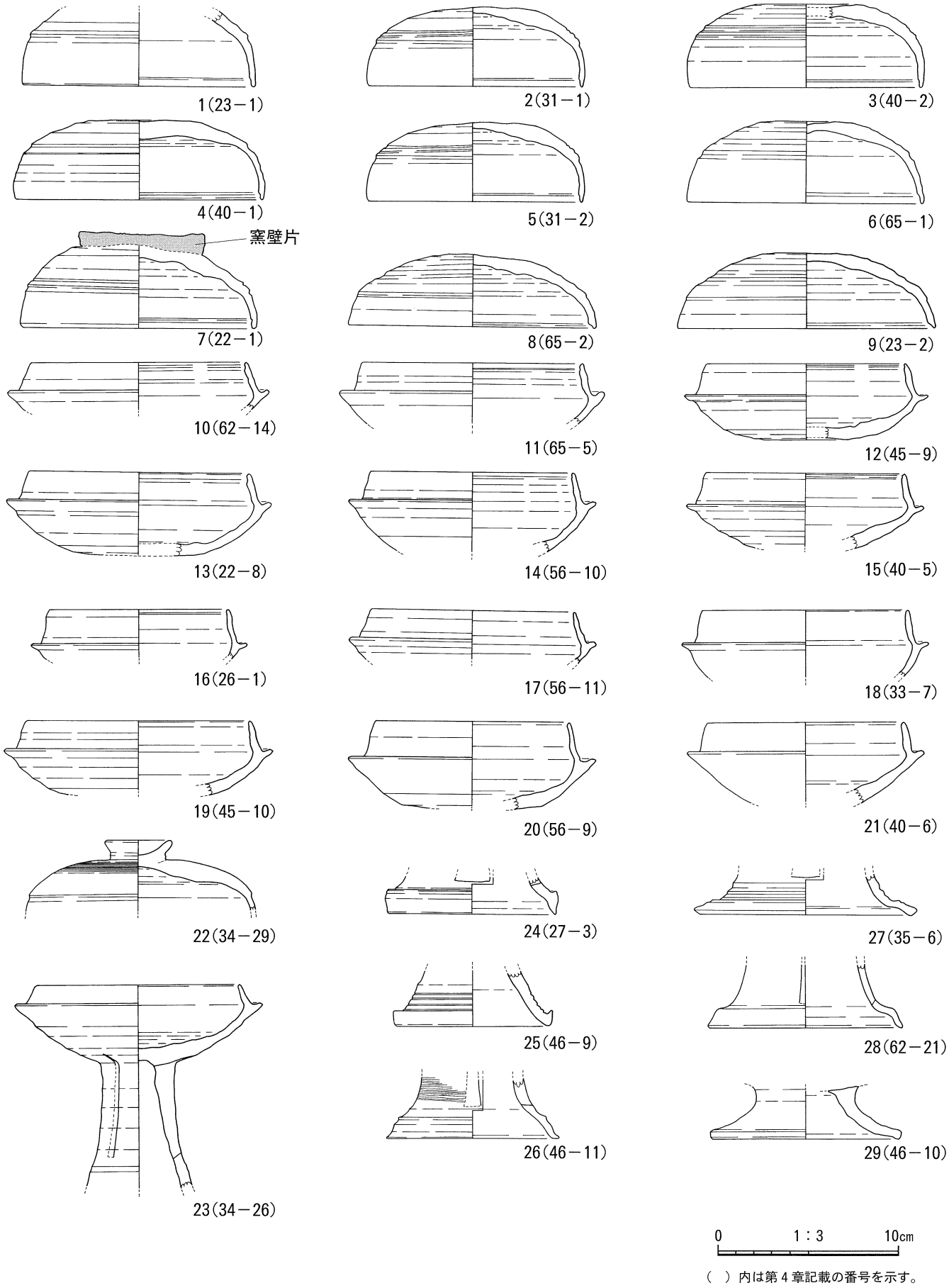
(14) 安来市教育委員会『高畑遺跡詳細分布調査報告書』(1984)

(15) 島根県教育委員会『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』(1997)

(16) 島根県教育委員会『古曽志遺跡群発掘調査報告書』(1989)

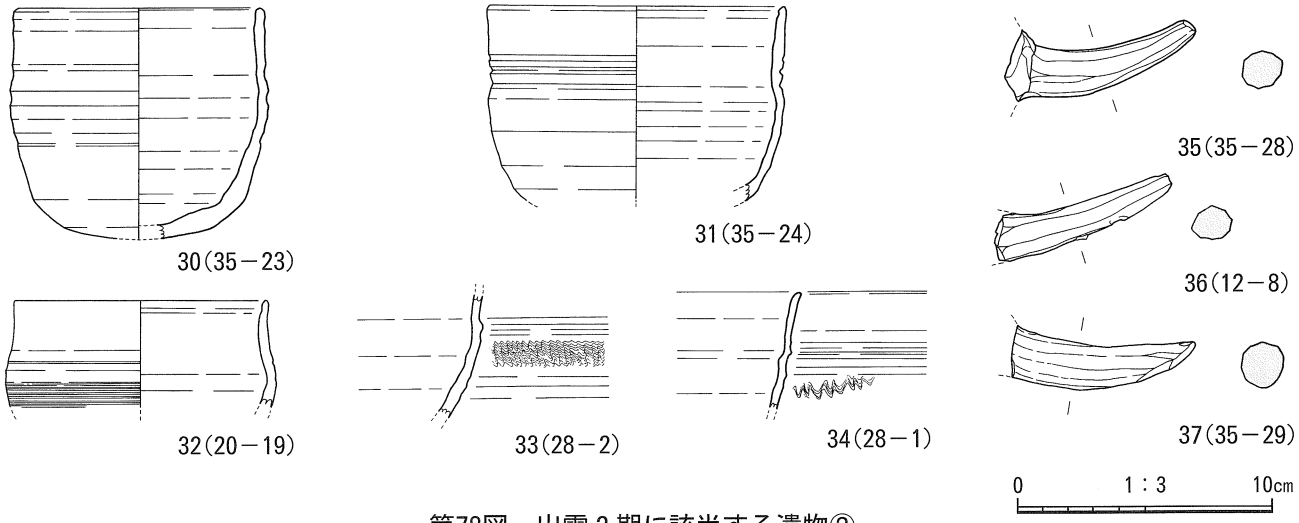
(17) 平田市教育委員会『木舟窯跡群』(2004)

(18) 松江考古学談話会事務局「松江・湯峠窯跡の再発見」『松江考古 第９号』(2001)



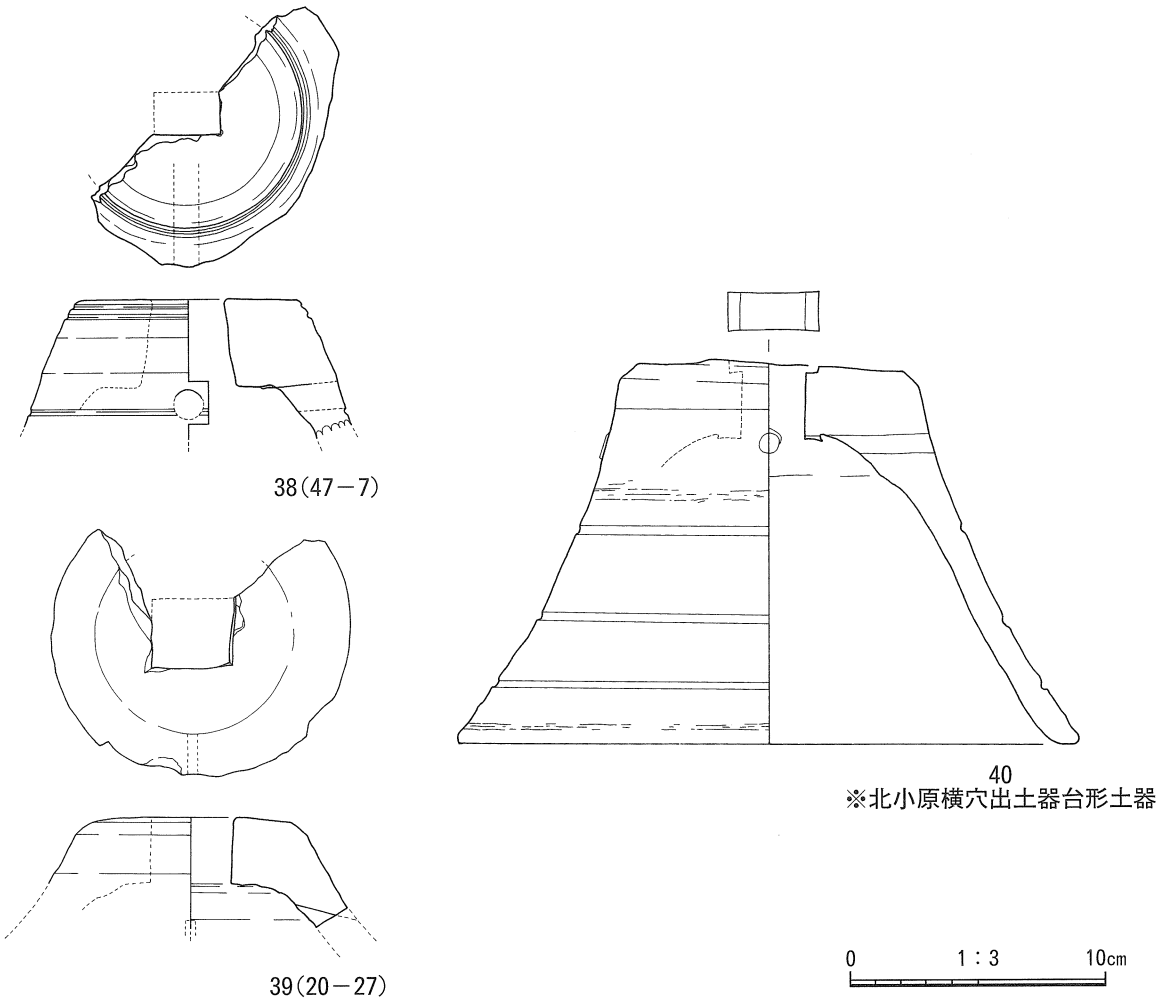
（　）内は第４章記載の番号を示す。

第77図　出雲２期に該当する遺物①



第78図　出雲２期に該当する遺物②

（　）内は第４章記載の番号を示す。



第79図　器台形土器

（　）内は第４章記載の番号を示す。

遺物観察表

出土土器観察表　T－1

（器種欄に注釈がないものは須恵器を示す）

番号	器種(種別)	法量　cm　(　)内は復元法量	残存率	調整	色調	備考
8－1	坏蓋	口径：14.0 器高：3.5	70%	(外) 回転ヘラ削り、回転ナデ (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 暗青灰 (内) 淡青灰	
8－2	坏身	受部径：(12.8)	10%	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 暗灰 (内) 暗灰	
8－3	坏身	口径：(10.6)　器高：4.3 受部径：(13.2)	30%	(外) 回転ナデ、回転ヘラ削り (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 暗青灰 (内) 淡青灰	

出土土器観察表　T－2

（器種欄に注釈がないものは須恵器を示す）

番号	器種(種別)	法量　cm　(　)内は復元法量	残存率	調整	色調	備考
10－1	坏蓋		5%	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 灰 (内) 灰	
10－2	甕		5%	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 灰白 (内) 灰白	

出土土器観察表　T－4 池堆積土

（器種欄に注釈がないものは須恵器を示す）

番号	器種(種別)	法量　cm　(　)内は復元法量	残存率	調整	色調	備考
12－1	坏蓋	口径：(13.4) 器高：4.0	20%	(外) 回転ヘラ削り、回転ナデ (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 暗灰 (内) 灰	
12－2	坏蓋	口径：(13.8) 器高：3.9	20%	(外) 回転ヘラ削り、回転ナデ (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 黒 (内) 緑灰	
12－3	坏蓋	口径：(13.0) 器高：4.7	30%	(外) 回転ヘラ削り、回転ナデ (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 灰 (内) 灰	
12－4	坏蓋	縦：4.0 横：7.0	10%	(外) 回転ヘラ削り、回転ナデ (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 淡青灰 (内) 灰	天井部外面：ヘラ記号「＝」
12－5	坏身	受部径：(15.0)	50%	(外) 回転ナデ、回転ヘラ削り (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 灰白 (内) 灰白	
12－6	輪状つまみ蓋	つまみ径：4.0	20%	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 灰黄 (内) 淡灰	
12－7	高台付坏	高台径：(7.4)	20%	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 暗青灰 (内) 暗青灰	
12－8	椀の把手	把手長：7.5 太さ：1.6	10%	(外) 面取り	(外) 灰 (内) 灰	把手部分のみ残存
12－9	土馬	縦：5.6 横：5.0 厚さ：1.5	30%	(外) 指頭圧痕、ナデ	(外) 淡赤橙	頭部部分のみ残存
12－10	土器溶着資料	縦：8.4 横：12.0				坏蓋の中に坏身片
12－11	土器溶着資料	縦：20.0 横：13.6				石・甕胴部片・蓋坏片3セット
12－12	土製支脚 (土師器)	縦：14.0 横：7.3	50%	(外) 指ナデ、指頭圧痕	(外) 灰黄	

出土土器観察表　1号窯断面

（器種欄に注釈がないものは須恵器を示す）

番号	器種(種別)	法量　cm　(　)内は復元法量	残存率	調整	色調	備考
14－1	坏身	口径：(9.2) 受部径：(11.2)	20%	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 暗青灰 (内) 灰	
14－2	坏身	口径：(9.6) 受部径：(11.6)	20%	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 暗灰 (内) 暗青灰	坏蓋の可能性あり
14－3	坏	口径：(11.2)　底径：(8.2) 器高：3.6	20%	(外) 回転ナデ、回転糸切り (内) 回転ナデ	(外) 黒 (内) 灰黒	外面：重ね焼きの痕跡

出土土器観察表　1号窯下崩落土内

（器種欄に注釈がないものは須恵器を示す）

番号	器種(種別)	法量　cm　(　)内は復元法量	残存率	調整	色調	備考
16－1	坏蓋	縦：8.0 横：12.4	40%	(外) 回転ヘラ削り、回転ナデ (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 暗灰 (内) 灰	天井部外面：ヘラ記号「一」
16－2	坏蓋	口径：(10.8) 器高：3.4	30%	(外) ヘラ切り後未調整、回転ナデ (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 暗灰 (内) 灰	
16－3	坏蓋	口径：(11.2) 器高：3.7	30%	(外) ヘラ切り後未調整、回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 灰黄 (内) 灰黄	天井部：粘土貼り付け、工具痕
16－4	坏蓋	口径：(11.6) 器高：4.4	30%	(外) 回転ヘラ削り、回転ナデ (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 暗青灰・灰 (内) 灰	
16－5	坏蓋	口径：(10.8) かえり径：(8.4)	10%	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 淡灰 (内) 淡灰	
16－6	坏身	口径：(10.0)　器高：3.9 受部径：(12.4)	30%	(外) 回転ナデ、回転ヘラ削り (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 暗灰緑 (内) 暗灰緑	
16－7	坏身	口径：(11.6) 受部径：(14.0)	30%	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 淡灰 (内) 淡灰緑	
16－8	坏身	口径：(11.8)　器高：4.9 受部径：(15.0)	50%	(外) 回転ナデ、回転ヘラ削り (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 暗灰・淡灰 (内) 淡灰黄	
16－9	坏身	口径：(12.4) 受部径：(14.6)	10%	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 暗灰 (内) 灰	
16－10	坏身	口径：(9.8)　器高：3.5 受部径：(12.4)	30%	(外) 回転ナデ、ヘラ切り後未調整 (内) 回転ナデ、仕上げナデ	(外) 灰 (内) 灰	